北條早雲

早乙女貢

北條早雲

一

北條早雲　一　早乙女貢

早乙女貢

文藝春秋

北條早雲

文藝春秋
¥950
0093－361650－7384

北條早雲一　早乙女貢

文藝春秋

早乙女貢

北條早雲一

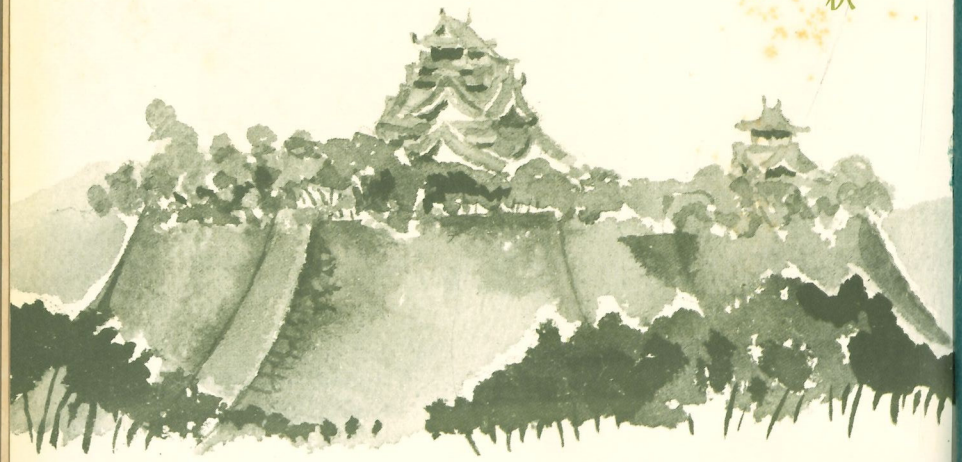
文藝春秋

北條早雲

早乙女貢

吉鋼藏書

文藝春秋



北條早雲

装幀　粟屋　充

旭光の中に

陽がのぼりかけていた。

伊勢の海である。空には朝雲がまだ夜の名残りを刷いて、長くたなびき、夜明けを待ちかねたように鳶が舞っていた。

海面に微茫のいろをのせて、顔をだそうとする太陽を、波うちぎわに立って見まもっている男がいる。

褌一つの裸であった。隆々たる筋骨を朝風にさらして、仁王立ちに東の方を睨んでいる。

（まだか？　……）

脱いだ着衣は木の枝にひっかけ、三振の刀も岩に立てかけてある。

刀三振とはおかしいようだが、戦国時代もまだトバロのこのころは、さして珍しくはない。刀槍が法律といっていい乱世であった。大小をさし、もっとも長い三尺余の打ち刀は背に負うのである。

この男が睨んでいる水平線は、このあたりで、夫婦岩と呼ばれるものの間仲であった。

大小の岩が突兀として崖下に浮び、大きいほうを男岩、小さいほうを女岩と呼び、いつごろからか、太い注連縄を張って、夫婦岩と呼びならわされている。

その両岩の真中、注連縄の垂れたあたりに、かッと、赤光がにじんだ。

「御来光だ！」

男は叫んだ。ざぶざぶと、汀から入っていった。

夏の朝とはいえ、暁の水は冷たい。その冷たさも一向、気にしないように、入ってゆく。

松の根瘤のように肩や腕の肉塊が盛り上り、筋金を入れたような血管がうねって見える。肩幅は広く、胸板も岩をたたんだように厚い。そのからだ中に夥しい刀傷がある。

いずれ、あちこちの戦場で傷ついたものであろう。年齢もそれにふさわしく三十歳は越していよう。

逞しい軀と、覇気は男の年齢を不確かにするが、壮年であることは間違いない。

ぎょろりと剝いた眼にも、分厚い唇や、坐りのいい鼻や、顎骨の張り工合にも、苦難の青少年時代を経てきた者の持つ自信と落着きが見える。

男は、首まで水につかると、ざぶざぶと顔を洗い、耳穴を洗った。禊のつもりらしい。

その間に日輪は真っ赤な姿を浮き上らせてき、黒雲をキ

リ裂いて幾条かの日脚を中天に吹きあげた。
小鳥の囀りがやかましくなったなかで、男は、ぱんぱんとかしわ手を打ち、日輪を拝んだ。
「八百万神に申す、この新九郎を何卒して男に為し給え、男の仕事を為させ給え」
新九郎と自ら称った男は祈念し終って、振りかえった。
「あっ、これ、何をする」
かれが祈願している最中に、岩陰に忍び寄った影があったのである。
新九郎が見とめた影は、かれの着衣に手をかけていた。
「盗ッ人か、おい」
雲を破った旭光が、かッと岩陰を明るくした。着物に手をのばしたのは、胴巻など捜ろうとしていたのであろうか、盗ッ人は、身をひるがえした。
が、もののついでと思ったのか刀を摑んだ。三振ともである。がばと小脇に抱えると、走りだそうとした。
「こやつ！　やらぬぞ」
相手は鼠のように敏捷な感じであった。
新九郎は髪に手をやったかと思うと、むっと含み気合とともに手を振った。一閃――キラリと旭光を反射して、飛んだものが、走りだそうとした盗人の、大腿部に吸いこまれた。
男は悲鳴をあげてもんどり打った。
「馬鹿めが、さむらいの腰の物を盗もうなどと、愚かなことを考えるものだ」
新九郎はゆっくりとあがってきた。
飛ばしたのは、小柄であった。裸身となっても、万一を慮って、髷にさしていたのだ。
小柄は、膝のうらに刺さっていた。筋をやられたらしく、起きあがろうとしながら、もがいているだけだった。
新九郎は、そばまで行ったが、痛みで歪んだ顔をちらりと一瞥しただけである。
「か、かんにんしてくれ、わ、悪気があったわけじゃねい」
恐怖で、おどおどしている。まず、こんな場合は、すっぱり斬られるか、役人に引き渡されるのを覚悟しなければならない。
「た、頼む……かんにん」
「かんにんか、さて、どうするかな」
新九郎はろくに肌を拭いもせずに奈良半晒の襦袢を着、着物を肩にひっかけてから、下帯をとりかえた。
帯をしめて、袴を穿く。べつに急いでいるふうはないが、早い。
乱世の武士は、自ら、着衣や起居の動作が素早くなっている。愚図々々していれば、いつやられるかわからないからだ。

袴を穿くと、二刀を腰におとしてから、打ち刀をななめに背負った。
それで支度はできたのだ。
その次に抜刀――盗人の成敗ということになるかと、恐怖の眼を瞠いている前で、新九郎はそこにそんな男がもがいているのすら忘れたように、歩きだしていた。
「もしッ、待っておくんなさい」
這いずりながら、呼びかけるのを、新九郎は振りかえった。
「用か」
「へえ、悪うございました、実はその出来心で……」
「もう済んだことだ」
新九郎にしてみれば、金も刀も奪られなかったから、それ以上、咎めてもしかたがない、というのであろう。
「恐れ入りました。なんとも、御寛仁な……あわわ、この首が素ッ飛ぶかと思って、へえ、肝が冷えましたので」
「きたないその首など、斬っても海が汚れるだけだ」
そのとき多勢のざわめきが聞えてきた。腕まくりしたり、鉢巻しめたりもののものしい恰好の男たちが十数人、刀や槍や、鎌、鍬など手にして、
「あ、いた！」「あそこだ」「逃がすな」「やっつけろ」
わっと喚声をあげて、走り寄ってきた。中の一人が、石を拾って投げた。
新九郎は何が起ったかと眉をひそめて見まもっていたのだ。まさか自分に向って来ようとは思いがけなかった。
飛来した石を一つはよけたが二つ目はよけるひまがない。咄嗟に鉄扇で打ち払った。
「何をする」と、大喝した。「おれは新九郎と申す者だ。人に怨まれるおぼえはないぞ、愚かしき真似をして後悔するな」
雷に打たれたように、一同はひるんだ。
石を投げようとした者は、その手をとめ、刀を振り上げた者は振り上げたまま、槍をひねり出そうとした者は腰だめにしたまま出端を挫かれて蹈鞴を踏んだ。
「気を落着けい、何ゆえに多勢して騒いでいるのだ」
その自信に満ちた態度が、激昂に水をかけた。みんな瞠目し、それから、首をひねり、顔を見合わせた。
「はての、なんじゃら、他人違いのようだの」「そういや、ちょこっと違うの」「こない大きゅはなかったのう」「あえじゃのう、武家じゃのうて何じゃら……おい、うつぼ屋、ちょっと来て見い」
その群集の中から、鼠のような目をした小狡そうな男が出てきた。
「どうじゃい、よっく見ろやい、お福を連れ出そうしたんは、この男じゃないのけ」
「へえ、へえ……違うた」うつぼ屋と呼ばれた男は眼をぱ

ちぱちさせて「ずうっと、背の低いんじゃッたんさ」
他人違いとわかると、みんな恐縮した。意気ごんでいただけに、引っ込みがつかない。
が、そのうつぼ屋が素っ頓狂な声をあげたのである。
「いた！　あいつや」
うつぼ屋が指さしたのは、岩陰にへばりついた男だった。新九郎の刀を持ち去ろうとした盗人だった。
「あいつや、あの餓鬼がお福をさらおうとしたんじゃ」
うつぼ屋は鉢のひらいた頭をふりたてて、嗄れ声で喚きたてた。咽喉を冒されたような嗄れ声である。女郎屋の楼主によくある悪い病気で潰れたのかもしれない。
盗人は、逃げようとした。
「待て！」と、大喝したのは、新九郎である。
その鋭い気合いに、さながら釘付けにされたように、盗人は身を泳がしたまま、足が動けなくなった。
それを見ると、「とっ捕まえろやい」わっと、追手が駈け寄る。
新九郎の大喝が、ふたたび、この連中の足を止めさせた。
「どこへ行く」
「へ？　……どこって、あ、あの女さらいを」「さいで、とっ捕めいて、ぶん殴って」「半殺しにしてから、街の辻で晒して」「ほんで、地獄谷で狼の餌食にするちゅう段取りやね」
男たちは口々に言いつのる。いずれも、盗人に憎しみを抱いているのだ。
「ほう、よく並べたてたな」新九郎は呆れ顔になって、「ところで、この男が何をしたのだ」
「な、なんやて、聞いちょらんのかい、そやつはうつぼ屋のお福ちゅう女をひっさらうと……」
「さらって逃げたか」
「いんにゃ、その、さらうつもりで、企みおったのや」
「ふむ、それだけか」
「そ、それだけ?!　遊女の足抜きは死罪と、大昔から決っているわな」
「企んだだけでか」新九郎は、にやりとして、「企んだだけなら、まだ罪ではあるまい」
「そやちゅうて……」
「あやつは、おれの刀を盗んだ」
「……」
「つまり、罪はそのほうが重い。あやつを断罪するのは、このおれだ」
うつぼ屋は啞然としてロがふさがらない。出端を挫かれて、みんなも気を呑まれ、痴呆のように顔を見合わせるだけだ。
「わかったようだな。それでは、文句はないな」
「あ、あの……」

「この男は、おれが貰った。さあこっちに来い」
盗人のえりがみをつかんで、追いたてるようにして歩きだした。
槍や刀を持っていながら、男たちは、それを阻む気力はないのである。
すぐれて上背のある新九郎と、小柄すぎる盗人の取り合わせは、おかしみを誘うものだったが、笑うどころではなく、気圧されたように見守っているだけだった。
「名は何という」
「へ？」
にたりと盗人は笑った。上眼づかいに見上げた。媚びるような眼である。
「権平」
「どこの生れだ」
「さあね、おぼえてへん」
「ははは、おぼえてへんか、ははは、さア、行こう」
新九郎の笑い声は、少し間をおいてうしろからぞろぞろ戻ってくる連中にも聞えたはずである。
「どこへ行きゃええので」
「うつぼ屋だ」
「そ、そらあかん、もう、あそこへは」きょろっと、眼が動いた。ひょいとうしろを見た。うつぼ屋の楼主はじめ、みんな、威嚇するような眼だ。あわてて、首を振った。
「もう二度と、うつぼ屋には、行けへんわいな」
「お福とか称ったな、お前がひっさらおうとした女。よほど美い女と見える」
「へえ、そらもう……ぷっくりと小肥りで、愛嬌があって、優しい細い眼をしていて、おっぱいがでかくて」
女の話になると、さも嬉しくてたまらないように、元気づいている。単純で、存外、人が善い。小狡くて手癖が悪いが、どこか憎めないものがある。
「ほう、それほどの美女ならば、逢うてみたい」
「そやけど、今度は……」
「案じるな、登楼くらいの銭はある」
と、新九郎は、また、豪快な笑いを噴き上げた。
二見ヶ浦からは五十鈴川を遡ってくると、宇治まで二里ほどだ。
宇治の町は、いまでは宇治山田といって細長く、五十鈴川の左岸から宮川の右岸まで里余の長さで湾曲してつながっているが、昔は、宇治と山田は別だった。
宇治の方が神領として知られた所で、いうまでもなく、伊勢神宮の内宮の門前町として発達した。
この時代――いわゆる戦国時代と呼ばれる乱世に入ったばかりで京では後に応仁ノ乱と称される兵燹がつづき、その余波が六十余州をも戦乱に巻きこんで、人心は荒んでい

たが、そうした時代であればこそ、人々は神仏にすがろうとする。

弱い人々にしてみれば、この血風から逃れるすべは、それしかなかった。

伊勢神宮への参詣人は多く、広大な神領を守るために、神人たちも武器を持ち、私兵を擁して、勢力を誇示していた。

そのうつぼ屋というのは、宇治の街にある遊女屋であった。

因みに、そのころ、まだ古市のそれはなかった。当時古市は山の中で、杣道が通っているにすぎない。

「うつぼ屋はどこだ」

「へえ、あの……五軒目で」

今日も暑くなりそうな朝日の中に、柿色の暖簾がゆるく動いていた。

長くだらりと下って、脛しか見せない入口の暖簾には、大きく白抜きで紋が抜いてある。桔梗だとか、四ツ目だとか、丸に二つ引きだとか、割合に簡単な紋様が多い。つばくろの紋もあるし、菊水もあった。

うつぼ屋は、その名の如く、靫の絵を紋様化したものであった。

靫とは、矢が雨に濡れるのをふせぐために、中空の太い筒に盛って背に負う道具である。そのかたちが稲穂に似ていて中が空なので、空穂とも書く。この筒の外側にも皮をつけたのを細空穂、又は騎馬空穂ともいうのだが、紋様は明らかに毛皮のそれだ。

「ああ、あそこだな」

新九郎は頷いた。

「あそこは大きな見世だ、なるほど美い女がいそうだ」

「お福は一番の売れっ妓やね」

「その女をさらってゆこうとしたんじゃあ、町衆に追われるのも道理だ」

いつもなら、遊女屋がもっとも静かな時刻である。

昨夜の歓楽のあとで女たちは化粧の剝げたむくんだ顔で男たちをおくり出し、これから一眠りするところだ。

それがとんだ騒動で、みんな叩き起される結果になっていたから、掃除をしたり、寝たりない顔が粗い格子からのぞいたりしていた。

「あれえ、あの男だよ」「お福さんのアレかえ」「好い男だねえ、背が高くて、がっしりしていて、頼母しそうな男だねえ、あんな男なら、あたしゃ苦労していいよ」「ばかだね、あっちじゃない、小男のほうさ」「へ、あいつかえ。あんなのがお福さんと？　阿呆らしい」

好奇の眼が集まったが、新九郎は平気で、うつぼ屋の暖簾をくぐった。

「あがりたい」

女たちが権平を見て何か言おうとする前に、新九郎は、ばらりと丁銀を投げ出した。切り遣いの銀銭である。

「揚げ代さえ払えば、文句はあるまいが」

「――へえ、そらもう……」

「お福という女だ」

二人前払って二人登楼したのだから、苦情の言い出しようがない。

このころ、こんな娼家には二階などない。平屋造りで、したがって奥が深い。後のいわゆる〝局〟の形式で小部屋が幾つもある。その奥に通された。裏は五十鈴川の清冽な流れで川のかなたに、豊かな翠巒が盛りあがって見えた。伊勢へ参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参宮、の唄で知られる朝熊山であった。

お福は、ふっくらと、顔がまるく、眼が細い、引目鉤鼻のお多福顔というが、まさしく、大和絵の結構な女の顔であった。唐紙をあけた手の指のつけねに、赤児のようなくぼみがあり、その肌の白さは、糊粉を塗ったようであった。

「なるほどな」

大きく合点して、新九郎は、権平を振りかえった。

「お前が熱に浮されるのも無理はない」

お福の方は、権平をどのように思っているのか、感情を顔に出そうとしない。黙って、にこにこしながら、部屋の隅に坐った。

それをとろりとした眼で見やって権平は、

「新九郎どのも、この女と寝て見りゃわかるがな、そら、もう何ちゅうか、ねずみ千匹、いんにゃ、みみず千匹で、うはうは、もうこたえられん、味良しや」

「止しておこう」

新九郎は、あっさり言った。

驚いたように、お福は目をあげた。ほそい眼が、このときは丸くなった。

「いや、わしとて、興味はあるが、お前のような気狂い惚れした奴がいると思うと、手を出さんほうがよかろう」

「ああ、助かった」と、権平は大仰に息を吐いて、「新九郎どのが惚れたら、それこそ、わっちの出る幕がなくなるがな。なアお福」

「あたしは、抱かれたい」いやにはっきりと、お福は言った。「お前さまよりも、こっちのお方の方が強そうだもの」

「ちえッちえッ、阿呆いいな、男の精はな、からだの大小で決るもんやない、情だわな、わっちなりゃこそ舐めもするが、どだい好い男は、女に薄情なもんや」

そう言いながら、もう、待てないように権平はお福の方へにじり寄っている。

「権平、それほど惚れているなら昼も夜も、一日中ぶっ通しで、お福と遊べ。精のありったけな。おれの分と二人前揚げ代は払ってあるゆえ、抜かず三発どころではなく、五

発でも十発でも」
「そ、そないにやりよったら、死んでしまうがな」
「死ぬまでやれ、いっそさっぱりするだろう。女を連れて逃げようなどと考えなくなる」
新九郎が立ち上ったとき、どこかで、多勢の女の嬌声がした。

河原には朝日がきらめいていた。
清冽な五十鈴川の流れである。まだ昼までに一刻ばかり間があるというのに、もう烈日は、河原石を灼き、清流を温めて、いたずらに油蟬を騒がせている。
その河原に多勢の女たちが集まっていた。
嬌声はそこから起っているのだ。女ばかりではなかったが、女が多い。子供もいる。犬が走ってゆく。男たちも、鍬をかついだ農夫や、鍛冶屋も、桶屋も、お伊勢詣りの旅人も、みんな何事かと好奇の目を輝かして走ってゆく。
新九郎も大股に近づいた。
中洲になったところに、一本の棒杭が立てられている。いま、その棒杭は打ちこまれたばかりだった。大掛矢でもって、半裸の男が叩きこんでいる。
別の男が、御幣を持ってきてその棒杭の上に穴をあけて、突きさした。
これが神事とは違うことは、二人ともザンバラ髪の、いわゆるササラ者であることだった。この近くの地獄谷に住み、特殊な仕事にたずさわる者たちである。
神人は河原に床を置き、邪気除けの御二本竹に注連縄を張った下で、何かと指図しているのである。
「あ、これこれ、もっと低く打ちこむがよい」
「もっとでございますか」
「そうじゃ、あやつの背丈を計って合わせねばならんぞよ」
「巫女の背丈ですか」
「ええい、もはや神に仕える資格のない者、巫女などと呼んではならぬ」
この神領伊勢にあっては、神人の権威は絶対であった。乱世に入って、守護も国司も力を失い、大名小名が覇を競って、領地の奪い合いに山河を血で染めている。
が、この伊勢の神宮は古くから、崇敬されていただけに、常に近隣の保護を受け、神域を犯す者は少なかった。神罰を恐れたのであろう。したがって、門前町はもとより神領の者は安心して、農耕や漁が出来た。他領にくらべて、生活は楽だった。他国から参詣人だけでも多く、それらが金を落してゆく。
神人にしてみれば、「わしらのおかげで、安穏にして居られるのではないか」と、神社の権威をかさにきて、横暴だった。

神領にあるかぎり、宮司禰宜らは、生殺与奪の権を握っていたといっていい。それだけに、掟がきびしかったのである。
「さあ、火焙りの用意がととのったら咎人めを、縛りつけよ」
その命令に応じて、ササラ者たちは、一人の巫女をひき立てた。
その巫女はうしろ手に縛され、引き据えられていた。白衣に緋の袴すがたで、からだつきも細っそりとして、いかにも清純で、神に仕えるにふさわしい。
細おもての整った目鼻だちである。巫女は氏素姓が吟味されるから、この女も、しかるべき筋の者であろう。その顔が真っ蒼だった。
「立て」と、縄を引かれて、よろめいた。
それを見て群集の中からざわめきが起った。
「――なんとの、可哀想に」「どがなことをしたのかいの」
「さあ、知らんけど、何ぞ悪いことをしたのやろ」「悪いことをしたら罰を受けるのは当り前やねん」「悪いことちゅうとても、どがいに悪いことか」「そう、宮司さまがお決めになることだわいの」「そやそや、わしらは、ただ見物や」「面白ければいいわな」
群集という者は、常に無責任なのだ。
「この暑いさかりに見物するのや、面白うなければ、どむならんが」「やれやれ、今日も暑うなりそうなこっちゃな、むさくって」「この暑いさなかに、火焙りとは、また、さぞ、熱いこって……」
人々は、笠をかぶりなおしたり扇子をかざしたり、手拭いで頬被りしたりした。
市女笠の女や、被衣した女たちも、同情と憐愍と、それから火焙り刑という残忍なものへの好奇で眼を輝かせているのだった。
「さあ、咎人を裸にせいよ」
神人は得意満面で、命令する。その言葉で群集が揺れざわめくことも予想している。
「神に仕える浄衣であるぞ、咎人の身につけて、業火で焼いてはならぬ。されど、すでに不浄なれば、別々に焼くことじゃ」
ササラ者たちは、待っていたとばかり、巫女に近寄ると、ぐいと襟をひき剝いだ。
「あれっ」本能的に女は逃れようとした。
が、ササラ者の嗜虐的な手つきは馴れていた。
泣き叫ぶのに耳をかさず、ぐいぐいひき剝いでしまった。
玉の肌とでも形容したいような無垢の肌が陽光の中であ

らわにされ、群集は、美しさにどよめいた。
人間の感情には、残酷な一面がある。そうした虐げられる女が、若いほど、美しいほど、陶酔は深まるのだ。
「憐れな……」と、言いながら、みんなその情景を楽しんでいるのだ。
おとめの乳房の美しさが、新九郎を惹きつけ、思わず前へ出た。
ササラ者はさらに、緋の袴に手をかけた。わっ、とまた群集がどよめいた。
神人は床几から立ち上って叫んだ。
「早く剝ぎとれ、裸にして火焙りじゃ」
巫女が悲鳴をあげて悶えるたびに、白い肌の乳房がおどって陽光をはねかえした。
群集は固唾をのんでいる。まるで、裸女の舞いでも見ているような、好奇の目つきだった。
ササラ者は、それらの視線を充分意識していた。舞台で、神楽でも舞っているような、いい気持になっているらしいのは、その表情や、大仰な動きでわかった。
「さあ、最後の一枚や。ゆっくりと引っ剝いで見せるでえ」
一人が足を持った。うしろから腕をつかんでいる男は、片手抱きに抱きすくめて、緋の袴を脱がそうとしている。
「神罰や、神罰を受けるのや、温和しゅうせいや」
袴の紐がほどけた。足を持っている奴が、袴をひきずりおろそうとしたとき、突然、ひゅっと礫が飛んだ。
白昼である。礫は、ササラ者の後頭部に当るのが見えた。
「痛てっ」手を放した。頭を圧えてひっくり返る。
つづいて、また一つ。二つ目は、女体を背後から抱きかかえるようにした奴の額に命中している。
「げえっ」のけぞって、たたっとよろめいて、河原石に足をとられて、倒れた。礫は小石だった。
「な、なんということを」
神人は立ち上って、どじょう髭をふるわせ、細い両腕をふりまわした。
「誰じゃ、いまの礫は」床几から離れて、巫女の方へ駈け出しながら、「こやつは、罪を犯したによって神罰を蒙るのじゃ、それを邪魔するなど、とんでもないこと、いま礫を投げた奴は、神罰蒙って血へどを吐いて狂い死するであろうわい」
こうなったら、自分が巫女を火焙りにするつもりらしい。緋の袴をつかんだ。
そこへ新九郎が、のっそりと出ていったのである。
「これこれ、いい加減にせぬかい」
「なに！」
「止せというのだ。白昼、女に何をしようというのだ」
「こ、こ、こやつが、何をだと、か、神を恐れぬ、けがらわしいやつに、罰を与えるのじゃ」
「ふうむ」新九郎は、頭と顔をおさえて、河原石の上で、もがいているササラ者たちを見て、「こいつらも、その神罰とやらを蒙ったらしいな」
「な、なにを吐かす、いま……礫を投げたのは」
「その、神であろう」
「こやつ、抜け抜けと」
「とにかく、火焙りなどはよくないな。ましてや、かように若い女人を、勿体ないではないか」
新九郎は軽々と神人をひきはなすと、巫女に白衣を投げてやった。
神人は、起きあがろうとしていたが、河原石に腰を打ったのか、立ち上れない。
「うぬは、神を恐れぬか！」
「恐れるとも、神さまは恐いな」けろりとして新九郎は肯いた。「だが、おぬしなぞは神ではない」
「か、神に仕えるものじゃ、神と同じようなものじゃ」
「阿呆が」逆に新九郎は怒鳴りつけている。「神の威光をかさに着た悪人だな、神と同じとは、たわけたことを申すな。かような若い女を辱しめ、さらに火焙りにしようなどと」
「か、神の思召しであるぞよ」
神人などという奴は、何でも神の思召しにしてしまう。
「第一、この巫女が、何をしたというのだ」
「……」
「どうせ、淫らな心をおこして、言い寄ったのではないか」
「う！」
「はねつけられたので、憎さが百倍、神罰などと称して、いたぶり殺そうというのであろう」
神人は、眼を白黒させて、どじょう髭をふるわせているだけだった。
「叡山でもそのようなことがあったぞ」
「ぼ、坊主は、悪い」
「同じことだ。稚児が尻を貸さぬとて、肛門に真魚箸を突っこんで殺した例があったわ」
「う！」神人は蒼くなった。そんな話だけで蒼くなるくらいだから、もともと小心者なのであろう。
「きさまにこそ神罰が当るぞ」
「さ、左様な…」
「それそれ、顔が蒼くなってきた。その眼玉が色が変ってきた、だんだん痛くなってくるぞ」
凝っと睨みつけられて、ほんとうに両眼が絞られるように痛くなってきた。
「な、なんと……の、呪いをかけるつもりか……あ痛う」
神人は、河原石に尻をつけたまま、じりじりと退りながら、

小笛

「よ、止せ、止せ」
「それ、痛いぞ、痛いぞ、神罰だぞ」
新九郎の声には、さからい難い、強さがある。落着いた言葉なのだが、一言一言、しみいるように、聞えた。
神人はほんとうに両眼がとびだすような激痛で、わっと、顔をおさえて河原を転がると、ばしゃっと、水の中へ飛びこんだ。
「お宥し給え、この眼を助け給え」
泣くような声で、顔をざぶざぶ洗っている。
「馬鹿めが」新九郎は苦笑して、女を助け起した。「さ、まいろう」
「え、あの…」
「神罰は、あいつに当ったわさ。さあ、行こう」
白衣をいそいで着、緋の袴の紐を結びなおしながら、少女は新九郎を見上げた。
「あの、何処へ？」
「もはや、巫女をやめねばなりません」
いのちを助けられた礼を言いながらも少女は、ふと当惑げに見えた。
すでに処刑される覚悟をしていたところを、突然、生き永らえて、途惑っているという感じだった。
「そうだの、あのような、神の力を利用して、悪事をはたらくやつなどのところでは、安心して巫女づかえもなるまい」新九郎も頷いた。「たしかに、そうだ。ところで、頼るべきところはないのか」
「志摩の安乗というところに、父母が」
「それならば、帰るがよかろう」
「ええ……でも」
何か事情があるらしい。少女は、口を噤んだ。
この乱世である。人々は、おのれの口を糊するだけで、生きるのに精一杯であった。それぞれ深い事情があるにちがいなかった。

家庭の事情に立ち入るのは、余分なことであった。
（一介の牢人だからのう、おれは）自嘲したい気持だ。
虎の牙から少女を助けても、あとのことまで、心配してやれる自分ではない。
と、いって、このまま突き放すのも無責任すぎるようであった。
迷っていると、少女は、にこりとして、
「あの、申しおくれました。あたくし、小笛と申します」
きちんと、大人びた挨拶をする。
「小笛か、いい名だ。おれは」
「新九郎さま」
小さく言って、ちょっと舌を出し、首をすくめた。
まるで童女のようであった。あのみごとな乳房が嘘のように感じられる。きちんと白衣の襟を合わせると胸のふくらみも目立たない。着こなしがいいのか、まだ蕾の肌だからであろう。
「呆れたな、これは」と、新九郎は実際、おどろいた。
「どうして知っている？」
「さっき、誰かが、言っていましたもの」
群集の中に、あの二見ヶ浦で一喝を喰った者がいたのであろう。どじょう髭の神人をやりこめているのに、喝采をおくった者が多い。一人が囃けば、次から次へと伝わるのは早い。
火焙りになるかどうかという際なのに、小笛は耳にとめていたらしい。
「恩人ですもの」
すがるように見上げる眼に、玉の涙が光った。
新九郎は、そんな少女に、ふと愛しさを感じた。抱きしめたい思いを、急いで払いのけた。
（いかん、おれは、すぐ女を好きになる。いかんぞ、新九郎）
あのかたちのいい蕾の乳房が瞼の裡にちらちらした。
「この宇治には知り人はいないのか、小笛」
この宇治に薬草を商っている叔母がいるという。
「それは好都合だ。一時そこへ身を寄せるがいい」
「はい……」
「その叔母御とやらは、そちが火焙りになるというのに、何をしていたのだ」
「あの河原に」
「なに、来ていたのか」
小笛は、こっくりと頷いた。
いよいよ複雑な家らしい。あの場にいたならば、小笛が助けられたのを見て、喜んでとんでくるはずだ。それとも、処刑を見ていられないので、帰ったのか。

宇治山田ばかりでなく、二見、鳥羽へかけても神領はひろがっている。神領の者なら、神人のすることに絶対服従しなければ、ならない。放逐されるか、ひどい目にあうかするのだ。姪が火焙りにされても抗議一つできなかったのだろう。

少女、小笛は、叔母の話が出ても、晴れやかな顔をしなかった。

「叔母御の家へ行きかねるようだな」

「いえ……あの」

「都合が悪いようだったら、おれの家へ来てもよいぞ」

「……」

少女は眼をあげ、声を詰らせた。嬉しさのあまり、言葉が急に出ないようだった。

「男一人の、やもめ暮しだ。それでもよければだ」

「私のほうは」

澄んだ眼であった。声にも迷いや疑いがなかった。

壮年の男というものを知らないのだろうか。なんの疑いも抱いていない。その一抹のためらいは、迷惑がかかっては悪い、という慎みから発したものであった。

あの神人が、あのままではひっこむはずがない。なんらかの手段にでてくるにちがいない。

小笛が、この牢人新九郎の厄介になっていれば、よけいに、かれへの憎しみが、増すのではないか。そのとまどいだったようである。

「案じることはない」洞察して、新九郎は言った。「こちらは気楽な牢人の身だ」

そんないたわりが、少女には嬉しかったようである。思いを含めて、こっくりした。

新九郎は微笑した。

(可愛い子だ。しかし、おれとは齢が違いすぎる……それを忘れてはいかん……)

それさえ忘れなければいい。意志は強いほうだと自分では思っている。

新九郎は自分の家へ少女小笛をともなった。

自分の家、といっても、借家だ。門前町からはずれて、五十鈴川を少し遡ったあたりに、宇治ノ社がある。小さな社だが、その社家の離れ家だった。

「ここだ、きたないところだが、まあ、上るがいい」

小笛はためらわなかった。はじめから新九郎を信頼しきっている様子だ。

「驚いたろう」と、新九郎は闊達に笑った。「何もない」

呆れたような顔で家の中を見まわして、ひと事のように言った。

「人間の暮しというものは、ごちゃごちゃと何かあるものだ」

「……」

「これほど、何もないというのは珍しいだろう」

「ええ、さっぱりしています」

「ははは、その通り、至極さっぱりしている」

新九郎は、小笛の偽りのない返事が気に入ったようである。無一物の境地を楽しんでいるようであった。

「かような世の中ではな、何も家財を持たぬほうが気楽でな」

「はい」

「屁理屈か、負け惜しみのように聞えるかしれんが、男というものは、重い荷物を背負っていては、為すある時に、為すことが出来ぬ」

「……」

「わかるか」

「はい」

「わからなくともよい。男が男の仕事を為す、為しとげる。それには、身軽でなくてはならん」

小笛は、黒曜石の瞳をまっすぐに新九郎にむけて、まばたき一つしない。

「たとえばの話だ。そなたを助けたことも。……いやいや、誤解してはいけんぞ、恩に被せるのではない。ただ、わしの思うたまでを言うだけのことじゃが。もしも、わしに家族や財産などがあれば、黙って、見殺しにしたかもしれぬ」

「いいえ、あなたさまは」

「いや、そうなのだ。人間というものは、弱い。あの他の見物どもとてそうだ」

「……」

「あやつらを意気地なしの冷酷な男女と思うのは、そう思うのも当然だが、ただ弱いだけよ。家族や、家や生業や、そして、いのち惜しさよ。人間は同胞をほしがり、財産をほしがる。それらは、人間が作ったものでありながら、ひとたび、その生活に馴れると、今度は、そのモノに足を引っ張られる」

一気に饒舌ってしまってから、いつになく饒舌になったおのれにふと気がついて、

「ははは、女性のそなたにはつまらぬ。男の無用の生き方であったな」

「いいえ、わかります」

「そうか。男はな、小さいことは考えぬということさ。ところで、咽喉がかわいたろう」

「あの、水なら、わたくし、汲んで来ます」

「いや、ここの井戸は一寸汲みにくい。そなたは、ゆっくりしておれ」

気軽く新九郎は立って、外へ出た。

松林の間に車井戸がある。がらがらっと汲みあげたとき、笛の音のように、かん高い声が聞えた。

ぴぃィー、ぴぃーッ……悲鳴のようでもあり、鳥の声のようでもあった。
「鹿だな」鹿の鳴き声にちがいない。
それも追われているようであった。
新九郎は車井戸から離れて、五十鈴川の方を眺めた。
ここは河原から少し高くなった松林の中で、五十鈴川越しにお伊勢さまの森が鬱蒼と見える。
右手に小川が流れこんでいる。鼓ヶ岳の麓になるのである。鹿はいた。みごとな角の牡鹿が、走ってくる。
河原の上を、鳴きながら走ってくる鹿の姿が、白昼の明るい陽光の中で、幻夢のように美しく見えた。鹿は河原から、ぱっぱっと飛沫を蹴立てて流れの中に入ると、中洲を横切って、また飛沫をあげ、森の中へ駈け込んでいった。
伸びやかな、美しい肢体であった。
気がついてみると、小笛も、板都の窓から身をのりだすようにして、見まもっていた。
その横顔が、憂いを含んではいるが、整った目鼻だちで、新九郎は目を瞠るような気持だった。
(美い女だ)
美しいし、気質がいい。
素直で、淑やかで、そのくせ、はきはきしている。
お饒舌りでないのも気に入った。それに他人の悪口を言わないことだ。父母のことも、薬種屋の叔母のことも、あまりいい人間ではなさそうだが、悪口は言わない。
自分が殺されそうになったのにあのどじょう髭の神人のことも、言いたてようとしないのは、もう済んだことだし、殊更、不愉快な気持になりたくないからだろう。
冷たい水をおいしそうに飲んでいる。
新九郎は目のやり場に困った。小笛に惹かれるものを感じたのである。
(いかんなあ、どうも、だらしないぞ)
男も中年になれば、女の何人かが、過去に投影している。年齢もまちまちだし、交渉の深浅もそれぞれ違う。
深く惚れこんだ女もいるし、二、三度交渉があっただけで、なんとなく別れたのもいる。からだの交りがないままに、一時期、想いこんだ女もいる。
それらの女たちもあとになって考えてみると、深く惚れるようになった女とは、何か、予感めいたものがあったような気がする。
この小笛にそれを感じたのだ。
(若すぎる。惚れてはいかん)第一、今の身分は、明日の糧にも困る牢人の境遇なのだ。(いまのおれは、女に惚れるべきではないな……さて、腹も減ってきたが、飯を食わねばならん)
権平のために気前よく女郎屋に払った金が、実は今日の飯代だったのである。

新九郎は立ち上った。
「一寸、行ってくる」
「どちらへ?」
と、小笛がすがるようにふり仰いだのへ、
「すぐ戻る」と、新九郎は笑顔をむけた。「気がねなく、昼寝でもして待っているがよい」
「でも……」
はじめての家だし、主の留守一人でいるのは、心細かったのだろう。もっとも真っ昼間である。
「案じることはない。何もない家だから、盗人も狙わぬ」
「……」
「それに、この新九郎の家と知って、乗り込んでくる奴はいないからな」
いったん脱いでいた袴をまた穿いた。
着替えというものがない。肌につく奈良半晒の襦袢や下帯は、そのつど洗えばいい、という気持なのだ。
もっとも、乾くあいだ、どうしているのか。
誰にも拘束されない自由の身だから、その間は膝小僧でも抱えて、つくねんとしているのかもしれない。
いわゆる行灯袴で、裾がすぼまったやつである。
小笛がいるから、長い打ち刀は置いてきた。
してみると、早朝のみそぎといい外出するときは、この男は全財産を身につけていることになる。
そうしていないと、こんなあばら家、小屋といった方がいい家だから、なんでも盗まれてしまう。
大小二刀だけを帯して、新九郎は家を出ると、破れ笠をかぶりながら、斜面を下った。
油蝉が鳴いて、松林の中の陰は風が涼しい。五十鈴川で多少は風も冷やされてくるのであろう。もっとも、その清流は生温くなっているにちがいない。陽ざしは暑く、川水と河原の照りかえしが、むっと面を打った。
(さて、どこへゆくか)昼飯の調達である。
こんなに切羽詰っても、この男には、屈託がない。大きくて意志の強い顔だが、どこか楽天的なところがある。眉が濃く、目が大きくて鼻も高い。笑うと歯並びの白さが人柄のよさを感じさせるのである。
この男には、どういう青春があったのだろう。乱世の中で、生き抜いてきた男の顔であった。
救いは、苦難を苦難とせずに快活さを残していることである。それは、希望によって支えられているのであろう。中年になって無一物の身で、なお、人世に希望を持っていた。あるものは、天与の肉体と強靭な精神だった。楽天性もまた、失意を救うのである。
「貸金をとり立てねばならんな」
やっと、思いついた。大金ではない。丁銀二十五匁ほどだ。人に頼まれればいやとはいえない性質なのだが、こっ

ちが干乾しになりそうになって思いだしたのだ。

五十鈴川の流れは美しい。お伊勢さまでは、これを〝神の宿る川〟と、称っているが、その名に恥じない清流である。上流へゆくほど両側の樹木が鬱蒼として油蝉の声が夏日をかき乱していた。

巨木が重なりあって、日陰をなしている河原に、男が三人いた。

食事をしているらしい。河原に浅く穴を掘り、乾いた石で囲って、支柱を立て、横に渡した木に、何やら、けものが四肢をくくってあり、肉の焼ける匂いが流れていた。

けものは首を落してある。が、脚を見ると、どうやら鹿らしい。

「おう、揃っているな」

と、新九郎は声をかけた。

三人はこちらを見た。

酒を飲んでいた奴は、盃の口のはたで止め、肉を喰っていた奴は口中に頬張ったまま、焼肉を削ぎとりかけていた奴は、そのまま、小刀を突き刺したままぎょっとしたように、眼を見合わした。

「はははは、悪いところへ来たようだな」

新九郎は意に介さない。河原石を踏んで近づいた。

「だいたい、飯どきの客という者は、あまり歓迎されぬようだが、借銀とりというのも、好まれぬようだの」

「――はあ」口いっぱいに鹿肉を頬張っていた男が、「お、おぬし今日来るとは、言わざったゆえ」

「そうだ、そうだ、借銀とりにくるには、ちゃんと申してくれぬと」

酒を飲んでいた方も、あわてて口を添えた。

鹿肉を頬張っていたのが荒木兵庫、酒の方は大道寺太郎、いずれもこの時代の武士らしい、荒々しい風貌の男である。もう一人の方は名前を知らぬ。

荒木兵庫はこのすぐ上の支流の畔に僧庵が廃屋になっていたのにいつごろからか住みついていたのだ。

別に交遊があったわけではない。博奕場で、この男が負けて、身ぐるみ剝がれそうになったとき、泣きつかれて貸したのである。

それきり忘れていた。今日のように必要に迫られねば思い出さない。

「なるほど、理屈だな」と、新九郎は頷いて、「したが、たしか、きさまはあのとき、明日返す、と言うたが、明日、必ず、とな」

「う、それは……」

「それから、こうも申した。もし返せなんだら、首をやる、とな」

「うむ……」

「あれから、大凡、三ヶ月以上だ、百日にも垂んとするぞ。百日間も、その首をつないでやったのだ。それを感謝もせずに、左様な屁理屈をこねるとあれば、許せぬ」

新九郎は目を怒らせて、抜刀した。

「ま、待ってくれ」

兵庫は、仰天した。鹿の肉をほうり出して、たたっと、あとずさりした。

それを見ると、焼肉を削ぎかけていた奴が、「何をする」と、手にした小刀を投げた。手裏剣打ちだ。新九郎はこれをはっと刀の鍔で受けた。

実戦用の大角鍔である。刀は肉の厚い業物粟田口らしい。小刀は、火花を散らして、はね飛んだ。

「たわけ」新九郎は片足をあげて蹴倒すやぴたりと刀を兵庫につけた。「どうだ、首を貰おうか」

「ま、待て」

「すでに、百日、待ったぞ」

「許してくれ、返す、か、返したいが、いまは、無い」

「そうか」あっさりと頷いて、新九郎は刀をおさめた。

あまりに、あっさりと刀をおさめたことで、牢人者三人は驚き、拍子抜けした。

呆然とした顔を見わたして、

「無いなら無いと、素直に言えばいいのだ。生意気に屁理屈こねようとするから、ろくなことはない。一つ間違えば、そっ首、ほんとうに貰うつもりだったぞ」

「わかった。許してくれ」

「そうだ。そう詫びればそれでいいのだ」豪快に笑って、新九郎は、どっかと、石の上に尻をおろした。「おれもな、一度貸した金のことを、返してくれなどと、言うのは好かん」

「はあ」

「が、切羽詰っているのだ。腹と背がくっついておる。飯を食わねばならん」

「そのためか」と、大道寺と荒木は顔を見合わせて、「飯代か」

「そうだ」

「それなら、この鹿肉を啖ってくれ、腹いっぱいな」

「いいか」

「いいとも、おぬしのためだ」

「そうとも」と、荒木兵庫も瓢箪を取り上げて「酒もある、まあ、一杯やってくれ」

「馳走になろう」

さされた盃、といっても木ぐりの粗末なものだが、新九郎は水でも飲むように、ぐいとあけて、それから、鹿の肉をむしゃむしゃと喰いはじめた。

「美味いな」

「そのはずさ、若鹿だからな」

「丁銀二十五匁の鹿肉だと思うと一層美味い」
「新九郎どの、その皮肉はきつかろう」
「なあに、本当のことだからだ。ところで、腹いっぱい食ったが、もう一人前貰いたい」
「いいとも」兵庫がざくりと股肉を切りとって、「晩飯の分かね」
「阿呆ぬかすな、もう一人いるのだ」
新九郎は鹿肉を細枝に突き刺すと、腰をあげた。
河岸をもどってきた新九郎は家の近くで笛の音を聞いている。

笛の音は、はじめ松林の中から聞えてくるかと思われた。松籟の音にも似て非なるその妙なる音色は、嫋々として女の悲しみを奏でているようであった。
新九郎は思わず、立ち止っている。
笛の音いろに耳を傾けたのは、この男、ただの無骨な牢人者ではない。草を踏む足音にも、笛の微妙な音色を邪魔されたくはないという気持なのであろう。
「千鳥だ……」
千鳥の曲であった。
親に離れ、ひとり波間に餌をもとめる離れ千鳥の悲しさが胸に迫るしらべであった。
その笛の音は松林から聞えてくる。かれの家から洩れてくる。
（――小笛か。小笛が吹いているのか）
意外だったが、そうとわかると一層、嬉しくなった。あの楚々とした風情と横笛の取り合わせは、その姿を想うだけで男の心を豊かにした。
笛の音が止むのを待って、新九郎は家へ入っていった。
「聞いたぞ」
「え？」
「その笛だ。巧みだのう、そなたが、左様に笛を吹けるとは思わなんだ」
「おはずかしゅうございます」頬を赫らめて、小笛は目を伏せた。「お留守の間と思って、つい手すさびを」
「いや、大したものだぞ。わしも笛が好きで、京に居るころ、幾らか吹いたことがあるが」
「まあ、新九郎さまも」
「いや、真似ごとじゃ」
「京にいたことがおありですの」
「うむ……」その話はあまりしたくなかったようである。
「その笛はどうしたのだ」
「社家よりお借りしました」
「左様か、失くさぬうちに返していた方がいいな」
「はい」
「いずれ……」わしが購うてやる、と咽喉まででかけたが、

そのアテはない。アテにならぬことは、口にしない男である。口にする以上、成算がなければならぬ。空しい大言壮語をするくらいなら、ものを言わぬ。新九郎はそういう男だった。
「さ、飯にするぞ」と、かれは鹿肉を見せた。「たっぷりとある」
「ほんとうに」
「そなた一人で食べていいのだ」
「こんなに沢山！　新九郎さまはお食べには」
「おれは食ってきた」
小刀を抜いてサクリと削いだ。満ち足りた江戸時代と違って、当時の人は仏教のきびしい戒律よりは生きることに真剣だった。神経も小さくないのである。
「肉を見ると、おなかが急に空いてきました」
と、小笛は目を輝かした。
四足と称して動物を食物の対象からはずして忌避するようになったのは仏教の力が政治を動かし、貴族から民衆へと浸透してからである。
神道の方は、そういうことはないが、一般の獣肉の問題とは違って、これが、
〝神鹿〟
ということだった。
が、小笛は、そんなことにこだわらない。ほどよく焼けた鹿肉は、人間さまの食べるために、いい匂いを放っている。調味料は、塩と味噌である。社家から小鉢に貰ってくると、楽しい食事になった。
「女人には、食事のあと、茶ノ葉の湯が欲しいだろうが、茶ノ葉は高価なので、手が出ぬ」
「水でよろしゅうございます」
「酒なら、少し残っているぞ」
と、新九郎は、壁にぶら下げた瓢箪をとりおろした。
「飲むか」
「ええ、頂きます」にこりとする。
木刳の蓋に注いでやると、お神酒でも頂くような恰好で飲んだ。
「――おいしい」
「もう一つ、飲むか」
「いいえ」
もの怯じしない。好きは好きとはっきり言い、見栄を張ったり、調子づいたり、衒いがない。
慎しくてそのくせ、明るい笑顔である。悲しさを秘めて、他人に押しつけないところも、この年齢の少女としては、聡明な感じだった。
（こんないい娘が、寄るべき縁者もないなど、どうかしている）
新九郎は、ひとごとではない気がした。おせっかいなこ

とは嫌いな男だが、小笛のように倖せであるべき少女が不幸な境遇というのが、我慢ならなくなってきた。
自分の一人口さえ満足に糊できないくせに、妙に正義感に駈りたてられる。
「さて、またちょっと出かけてくる」新九郎は、また立ち上った。「夕方までには戻る」
「はい、お留守居をしています」
人懐こい黒瞳がちの眼が、爽やかで、新九郎はぐっと抱きしめて、頬ずりしたいような気持にかられた。
新九郎はあとふりむかず、松林を出ていった。宇治の街へ入ると薬種屋にやってきた。買物はしたことがないが、ここに薬種屋があることは知っていた。
往来まで、異様な臭いが漂っている。草根木皮ばかりでなく、獣の皮や、薬酒なども売っている。
(ここが、小笛の叔母御の家だといったな)
と見まわしていると、向うから、白衣の男がひょこひょこやってくるのが見えた。あの神人である。
せかせかと歩いてくる。どじょう髭をいじりながらである。きょときょとと、あたりを見まわし、肩をゆすり、なんとも落着きのない神人だ。
(あいつ……)ただの落着きなさではない。
泥棒猫が魚を盗む前に、人の眼を憚かるのと同じ様子だ。
新九郎は何気なく弓師の小路に入ってやり過した。

金壺眼のくせによく見えないのか、どじょう髭は、気がつかずに通り過ぎて、意外にも、その薬種屋に入っていったのである。
「お丹どのはいるかな」
あい、と待っていたような返事があった。
これが小笛の叔母だろうか、まだ二十代も半ばと思える色っぽい女である。こってりと化粧している。唐土から〝白粉〟というものが入ってきたのは、随分古いころだから、珍しくはないが、粉黛で装うなどというのは、京や府中などでのことで、この伊勢宇治ではまだ珍しい。米の粉をはたいたようで、唇だけがいやに紅い。
「宇部どのかえ、待っていましたえ」お丹はにっと笑って、「ちゃんと出来ているゆえ」
「ささ、左様か」
宇部と呼ばれた神人は、また外を見た。それから奥へ入っていった。
薬種屋の見世棚は、狐やいたちの皮がぶら下っていたり、壺が並んでいる。蓋をした壺である。
薬草を区分けして並べた棚、薬研でひいて粉末にしたのは、薬篁笥にそれぞれ入っている。
この時代はまだ一般商売は、見世棚を持ったところは少ない。職人衆は往来から見えるところで仕事をしているが、商いというのは、屋敷をまわったり、立売りの辻で、往来の者を相手の触れ売りなどが多かった。この薬種屋は、鈴鹿や伊賀の山中で採れる薬草を商っているという。
神人宇部はお丹に招じられて、見世棚の奥に入ってゆくと、裏の部屋に一人の男が茶をすすりながら外を眺めていた。
朝熊山が見える。蔀窓のすぐ外に夾竹桃の茂みがあって、赤い花をしたたるばかりにつけている。
「暑いこっちゃ、伊勢は暑うてかなわんがな」
その男はひとりごちるように汗を拭いている。
「ほほほほ、暑いによって、冷酒で、暑気はらいなされと言うのに」
「いんにゃ、酒はいかん」
奇妙な男だった。小男である。
一見、子供のようにしか見えない。が、顔は皺が多く、凋んだようで、老猿を思わせた。腕が長く、手は大きいのである。
「お客ですよ、太郎どの」
お丹は、目で知らせた。
じろりと、太郎は宇部を見て懐中から小さな素焼きの壺をだした。
その壺を神人宇部の前に置くと、
「銀十匁」
と、掌を出した。大きな掌である。指が長く太い。
「十匁……そら高い」
宇部は鼻に皺寄せた。
「高いことはない」
「高い高い」と言いながら壺を素早く懐中に入れてしまって、
「半値がええとこや」
と、値切りにかかった。
「阿呆くさ。十匁いうたら、十匁やがな」
「半値や。五匁なら、貰うた」
「さよか」
あっさり頷いたと思うと、太郎は、すっと部屋を出ようとした。
「あ、待て、銀五匁……」
あわてて、財布をとり出そうとして、宇部は、あっと、言った。どじょう髭が、一瞬逆立ったようだ。
「な、無い!!」
いま懐中にしたばかりの壺が消えていた。
「薬かね」
と、太郎は、暖簾のところで振りかえった。
「ここにあるがな」と、突き出した。
いつの間にか、太郎の手に、その薬の小壺は移っていた。
「な、なんちゅうことを。それは、わしが買うたものを」
「銀十匁なら、売ってやるで」

「ちえっちえっ、しょない。よっしゃ。銀十匁……あっ」
と、また宇部は仰天した。財布も失くなっていた。
「ひっひひ、吝いこと言うとると尻子玉まで抜かれるで」
太郎は、皮財布をとりだした。
「あ、それは、わしの……」
「さ、戻すで」ぽんと、膝前に投げて、「銀粒十匁、ちゃっと貰うたでの」
「ちえっちえっ、仕方がないわい。ほなら、薬壺を」
それに答えようともせず、太郎は出てゆこうとする。
「やい、銀子だけ奪って、品物渡さへんのか」
「この暑いのに、大声出すなて。阿呆たれ、もう受けとってるやないか」
「こ、この財布だけ……あれ」
またどじょう髭がはねあがった。ぴったりと蓋をした小壺は、また宇部の懐中に戻っていた。
狐につままれたように、唖然とした顔を一瞥して、太郎は、するりと、見世へ出た。薬草を手にとって匂いを嗅いでいた新九郎と顔を合わせた。
お互いにはじめて見る顔だった。
(妙な奴だな)と、新九郎は思っただけだった。
太郎の方でも、ぎろりと、眼玉が動いた。この男、顔は動かさない。眼玉だけが、上下左右に素早く動く。
お互いに見ただけである。言葉は交さなかったが、これが奇縁になろうとは、露知らぬ。

銀十匁で何やら薬壺を買ったどじょう髭の神人宇部は、蓋をあけると、臭くて、顔をしかめた。
「毒薬たらいうものは、臭いものやな」
「それだけあれば、百人がとこ殺せましょうぞ」
お丹はにこりとした。
この女は恐ろしいことを口にしているくせに、楽しそうに話す。
宇部はそれを聞くと、どじょう髭をふるわせて、
「これこれ、人殺しに使うのではないぞ、けだものを参らすのじゃ、けだものを、な」
「あれ、人間だと聞いたけど」
「けだものじゃ。わしは毒薬とは頼まざったぞ、痺れ薬、と申したはずじゃ」
「ええ、痺れ薬、舐めて御覧じ」
小指でちょっと掬って舌の先にのせた宇部は、目を白黒させて、あああ、と幼児のように口をあけたまま、タラタラと、涎を流した。
「それ、言わぬことじゃない」お丹はあわてて、水を汲んできた。「さ、さ、これを飲まずに舌の先を洗いなされ」
言われた通りに、湯呑に舌を突っ込んで、薬をつけたあたりをびちゃびちゃと洗った。

「――あ、あ、ひどい目に、おうたわいの」
「それ、よく利くことがおわかりか」
「ま、全く……」
と、まだ、舌の知覚が戻らぬらしい。
それでも、どうやら、ものが言えるようになって、宇部は薬壺を大事に懐中にして出た。
いったん、外へ出て様子を見まもっていた新九郎は首をひねった。暖簾一つだから、会話は聞いたのである。
(痺れ薬とは……)
神に仕える者が、人畜を痺れさせる劇薬を大金を出して購うとは解せなかった。
(あやつ、どうも、おかしなところがあると思っていたが)
それにしても、この薬種屋のお丹も相当なものだ。
(あれが、叔母だとすると、小笛が厄介になりたがらぬのも無理はない)
叔母といっても、まだ、二十代の半ばだろう。ぽってりと熟れた肉体は色香がしたたらんばかりだ。
(亭主はどんなやつか)
とにかく、興味をそそられる女であった。新九郎はぶつかってみることにした。
「ごめん」
と、薬種屋に入ってゆくと、お丹が出てきた。
「何を差し上げましょ。まあ、あなたさまのような立派な体格では、薬など、御不要でしょうに」
「いや、薬ではない」新九郎は、あわてて言った。「薬をもとめに来たのではない」
「そうやろなア、ええ体してはる」
お丹は、ほれぼれと眺めた。
どじょう髭の宇部はきりぎりすのように痩せているし、太郎は小作りで、腕が長く手が大きく、見るからに異様である。
この二人に比べれば、いや常人の中でも、新九郎の体軀は偉大で見栄えがする。お丹の目がしだいに潤んでくるようであった。
白粉と紅と眉墨で化粧したお丹の顔は、このあたりでは派手すぎる。もともと派手な顔立ちなのだ。眼が大きく、唇が大きい。やや受け口でぽってりした下唇のふくらみが、いつも欲情しているように見えた。
「お前さま、この見世棚の前をお通りになるのを、先だってから、いつも見ていたけど」と、お丹は媚をあらわに、
「宇治にお住いかえ」
「うむ」
「いつか、お話しできると思うていましたえ、いつか、こうやってお話ししたいと」
「……」

「私の思いが通じたのかしら」
お丹は、胸を抱えるようにして、しなを作った。
「これこれ、左様なことではないぞ、誤解して貰っては困る」
「ほほほほ、ええの、どない理由でも、あなたさまと、こうして話が出来ただけで倖せ」ぬけぬけと言うのだ。「色好き女と思召すやろけど、それでもええの、好きな殿御はん好きやよってに」
若い男だったら、美しい女に、こう持ちかけられたら、いい加減おかしくなる。
熟れた女盛りの肌に、木綿の小袖を着ていた。
木綿というと現代の感覚では庶民着の感じだが、当時は貴重で高価なものだった。
当時、まだ本朝では栽培されていない。ルソンあたりからの輸入品で、応仁二年には大和国新市の布座と小物座が木綿商売の権利を争っているほどだ。
従来の絹物は見た目には綺麗で光沢があり、色彩もあざやかに出るが、湿度の多いこの国では、殊に夏場など、木綿の肌ざわりの爽やかさはこたえられない。
上下とも渇望したもので、したがって値段も高い。よほどの身分のある者か、富豪しか着なかったものだ。
このお丹が着ている木綿小袖はすすきと萩を描いた飛模様で、涼しげであった。なかなかのしゃれ者である。
(この女、大した金持ちのようだな)
女の妖しさは男を惹きつける。
「まだ陽は高いのだぞ、色気は夜のことにしたらどうだ」
と、新九郎はたしなめたが、お丹は、これも、嬌笑でふわりとそらしてしまい、
「色ごとに昼も夜もあらへんわいな、奥で話しまひょ。おあがりなされませ」
入った方がいいか、ちょっと迷った。
お丹の色香に惹かれたのではない。それをはねのけることはできる。どじょう髭の神人宇部の面妖な態度の秘密をさぐりたい、と思ったのだ。だが、(深入りすることはないのだ)という自制の思いもある。
あまり内情に立ち入ってしまっては、小笛のことに没入してしまうおそれを、新九郎は意識していた。
「そなたの店は、繁昌しているようだな」入るとも入らぬとも言わずに、新九郎は言った。「さっきから、いろんな男たちが出入りしているが」
「……」
「みんな、そなたの色香に惹かれてのことか」
「ほほほほ、そうかしら……でも想うお方は振りむいてもくれはらへん」
お丹は怨じるような流し目をむけた。
「さっきの男な」

「だれ?」
「白衣の、神人だ。好色そうな面をしていたが、そなたの、おとこか」
「あらいやだ」けらけらと、お丹は笑いころげるように、身をくねらして、「あないな男に惚れるくらいなら首くくって、地獄谷から身を投げたがマシや」
「すると、その前の小男か」
「阿呆くさ」
その否定のしかたの微妙な違いが興をそそったのである。
「あの男、子供か大人かわからんな」
「伊賀の人やさかい」
つられてこう言ってしまって、はっとしたようだった。
「伊賀の? ……伊賀から出てきたのか」
「ええ」
伊賀のくにといえば、この伊勢の隣ではあるが、山岳重畳として、奥深い。あの男の身なりは、そんな山中から来たとは思えないものだった。そこから、気軽に来た感じであった。
(伊賀者か?)
まず、新九郎が感じたのは、〝忍びノ者〟である。
近江の甲賀と伊賀のくにには、細作乱波を生業とする忍びノ者がいる。新九郎は応仁以来の兵燹の京でそうした〝化性ノ者〟の仕業を多く見聞きしてきている。
かれらのワザは超人的であり、常識の裏をかく。その連中の中には、鍛練による飛翔跳躍疾走出没の巧みさのみならず、〝幻術〟を用いる者がある。めくらまし、である。その異様なワザのように、その術者もまた異様であった。新九郎があの男に感じたのは、その人相骨格だけではなく身辺に漂っている奇怪な雰囲気だった。
「伊賀の人」
と、言ったきり、お丹は、かれの話をしたくないようだった。
伊賀者と言ってしまったことも失言だったようである。
忍びノ者が、素姓をあらわにすることは、滅多にない。まず、人目に隠れる。かれらのやつし(変装)は、それが常態であった。
むろん、伊賀の人——必ずしも忍びノ者ではない。伊賀のくににも、忍びとは無関係な者は多い。だが、あの〝太郎〟の風丰骨柄と、身辺に漂う人外人の妖しい雰囲気は、新九郎の目に〝忍びノ者〟と映ったのである。
新九郎の意図がどこにあるのかと、お丹は凝っと見つめて、
「あんな男どものことなど、どうでもかまへんやないかえ」と、さぐるように笑いかけた。「伊賀の人は、薬草なんど、ちょいちょい持って来ますの」
なるほど、忍びノ者は、医術の心得もあり木根草皮の人

体に及ぼす害も益も、知悉している。仕事の片手間に薬草採りもするのかもしれない。

新九郎は頷いた。

「なるほど」と、大仰に言った。「すると、さしずめ、あのどじょう髭は腎虚の薬でも貰いにきたというわけか」

「ほほほほ、ほほほほ、腎虚なんて、ほほほほ」

「いや、邪魔をした」

お丹が笑いやまぬうちに、するりと、新九郎は見世から出ようとした。

「あ、待って」

何やら、手のうちから逃げられたようで、思わず、お丹は腰を浮して、

「待って」

切なく呼びかけている。

「用か、な」

「はい、あの……」

どう言っていいか、お丹は胸がどきどきした。このまま、新九郎を帰してしまいたくない気持だけが、つい呼び止めてしまったにすぎない。

「あなたさまは」

「新九郎だ」

「は、新九郎さまは、あの……お強そうでございますね」

へたなことを言ってしまって、はっとなった。

「強い？　ははは、弱い弱い、女に弱い」

「御冗談を。お強い方を探していたのでございます」と、お丹は真剣だった。「こんな御時勢ですよって、強力のお武家がいなければ、生業も難しゅうございますゆえ」

「ふん、用心棒に雇いたいと申すのか」

「ま、そない風に仰有ったら、身も蓋もあらしまへんえ」

「用心棒で悪ければ、女御を護る北面の武士か」

「――あきまへん？　御苦労賃はたっぷりとあげられますけど」

お丹は流し目に見た。自信のある眼である。

どんな男でも、この流し目にとらえられぬものはない、という自信が、あふれている。

媚笑と、そのからだから放散する色香は、たしかに、男にとっては魅力的だ。

ほどよく小肥りのからだが、男の腕の中で揉みしごかれるのを待って、息づいているようであった。

木綿のその着物の着方も、腰のあたり、きゅっと京帯がしまってはいるが、白い肌が、悩ましく熟れ肌の甘い香を漂わせて、呼吸のたびに、ゆたかな両乳が、動いている。

両の乳房の谷間はもとより、誰でも手を出したくなるふくらみがのぞけるのだ。

この時代、ずっと後まで、女の帯は男と同じく腰骨で締めている。人間のからだのうちで、着物をとめるのに、もっとも締まりがいいのが腰骨である。したがって、どうしても胸のあたりは、ゆるやかになる。

江戸時代に入って、中期くらいから、女の帯の位置が段段上ってきて、胸の辺まで来てしまった。

単なる流行で、腰の長さを見せるようになったのが流行のもとだ。もともと、五尺そこそこが日本人の体型だったから、腰のあたりに締めるのが、おかしいはずはない。

むしろ、乳房のふくらみのよさを誇示した。女として当然の誇れる部分である。

したがって、この時代の女の乳房は、後世のように潰されていない。

乳房を潰してまで、下半身を長く見せようとしたあたりから、中身よりも、外見ばかり気にする泰平の世の欠点が出てきたわけだ。

乱世にあっては、女は女らしく男は男らしいのが、好まれた。

人間の生活は、あまり豊かで平和になってくると、男と女の区別がつかなくなってくる。

男が男であることを必要とした乱世では、女がかった男は、男色の対象としての存在価値があったにちがいないが、その他では必要がない。

必要というより、生きてゆけない。

そうした弱い変性男子は、戦乱の中で淘汰されてゆくしかない。

そういう時代だけに、女の乳房は、立派に乳房本来の豊かさを持ち、それを寛やかな着物の間からちらちら見せることも、女の誇りですらあったのだ。

その肉体の特徴が、隠されて、作られた美である清長や歌麿の世界になるのは、ずっと後のことであった。

新九郎は、この豊かで白い、蜜の匂いのする肌に、遠慮のない視線を投げたが、

「おれの武辺の腕を雇いたいというならば、それだけの働きはしよう。だが、そなたの肌に溺れることは好まんなあ」

むきつけにこう言われて、お丹はむっとした。

「まあ、ひどい！」侮辱と受けとった。「あたしの肌……きれいじゃないかしら」

柳眉が逆立った。お丹は、ただでさえ寛やかで、ふくらみがのぞく襟を、ひき剝がんばかりにぐいとひらいて、

「よく見て、新九郎さま」

真っ白な肌だ。いや、乳色といったほうがいい。その肌は生きていた。女のいのちがあふれている感じだった。

ただ健やかなだけではない。男の手を待っている肌の呼吸が、直接に伝わってくるようであった。

「――きれいだ」

圧倒されそうであった。新九郎は半ば呆れながら、「き

れいなことは、たしかだ」と、丁寧にくりかえした。
それを聞くと、お丹は、嬉しそうに、にこりとして、
「ね、きれいどっしゃろ」
「……」
「新九郎さまは、この肌を抱きたいと思わへんの？」
「思うだろうな、並の男ならば、抱きたがるであろう」
「あれ、いけすかない」また、眼が睨めた。睨める眼まで、艶めいているのである。「ほかの男のことなど、聞いてやへんえ。お前さま、新九郎さまはこの肌を……」
「くどいぞ、お丹」
うるさくなった。思わず、強く言ったのへ、
「うれしい、名前を、おぼえて下はって。ねえ、新九郎さま、もう一ぺん、呼んで」
どうしようもないのだ。なるほど、こんな女を面白がる男は多いにちがいない。
「お丹」
「ああ、うれしい」
手で胸を抱えるようにして、お丹は眼をほそめる。
「お丹、はっきり申しておくが、そなたは色っぽい」
「女どすよって」
「女にしてもだ。色っぽすぎる。そういう女に惚れたら、男は駄目になる。じゃによって、おれは惚れん。わかったか」
「ええ、ええ、わかりますえ、でも、惚れてくれはらへんでもこっちで惚れる分には、かまへんどすやろ」
人の心まで、差図は出来ない。
「どうとでも勝手にせい」
「うれしい！」
「さっきの用心棒の話だが、暫く保留にしておこう」
こういう艶めいた女と接触していたら、身がもたない。とにかく、いまは女郎蜘蛛の巣から出ることだった。
新九郎は、そう言い捨てると、表に飛びだした。どうも大変な女だ。あんな叔母の傍に小笛を置いておけない。小笛自身も、悧口だから、そのことを充分承知していたのだろう。
（さて、あそこへ帰せぬとなると、今夜どうするかだ）
「――もし、お武家さま」
黄色い声に呼ばれた。
小笛のことを考えて歩いていたので、遊女町を通り抜けようとしていたのに、気がつかなかった。
「もしッ、新九郎さま」
女が走り出てきた。
あのうつぼ屋だ。いつか陽は黄ばみかけていた。この時代は、女郎あそびもたいてい、陽のあるうちである。
灯油が高いせいもあるが、なんといっても、性におおらかな時代、昼間は働いて、夜セックスをするものという、体制に都合のいい人倫訓蒙書など出来上っていない。
女を抱きたければ、真っ昼間でも抱く。
飯が食えないとなれば死ねばいいのだから、好きなように生きている。
だいたい、働いたり、飯を貰ったり、女を抱いたり、そんな人間の行動が、他人の差図や命令のままにならなければならないのがおかしいのだ。食うのも死ぬのも本人の勝手ではないか。
食べるのが先か、働くのが先か。働いて銀を貯めても、兵燹があれば、家は焼かれ、女房は犯され、伜は足軽に徴発され、役に立たぬ赤児は殺され――という塩梅では、せめて、呼吸をしているうちに楽しまねば嘘になる。
したがって、人目を気にすることはない。
女郎屋の夏は、だから、のぞこうと思えば、裸で戯れあっているのも、見えるほどだ。
屏風を引きまわしたり、蚊帳を吊った中で、さかんに快楽の呻き声をあげている奴もいる。
「ちょっと、待って」
と、女は追いすがって袖をつかんだ。化粧の濃い女だ。が、あのお福ではない。
「なんだ、遊ぶひまはないぞ」
ひまではなく、銀がないのだ。
女はしかし、客の袖をひいたのではなかった。
「あれさ、お福さんのお客さ、困っているんですよ」
「どうした、遊び代は、ちゃっと払ったはずだぞ」
「ええ、そりゃア……でもねえ、遊べるとわかったら、あのひと、お福さんを放さないんですよ」
朝から、ずっと、抱きっ放しというのだ。
それも、小用にゆくときだけ離れるが、そのあとは、裸で、抱いたり舐めたり、そのすさまじさときたら、屏風のこっちにいる客も赤くなるほど、あられもなく大声を出して、それが、壁を通して隣家にも聞えるほどだという。
「あきれたな。朝から、ずっとか」
好きな奴もいるものだ。そんなにお福のからだがいいのか。
「もう、お福さんの悲鳴が、ええ、殺されそうに泣いて……ええ、ヨガリ泣きなんでよう、あれじゃア、ほかのお客が来やしない」
「――しかたがない。おれが引き離すわけにもいかん、男衆が注意すればいい」
「でも、男衆は、みんな、宇部さまが連れていってしまったんです」
「宇部が！」
これは意外だった。
「連れていってしまったというのか」

「ええ……」
「あの、どじょう髭が、そのような権力を持っているのか」
どじょう髭という称いかたがおかしかったのか、女はころころと笑い、
「あのひと……ええ、宮のお人ゆえ」
「連れていったというのは、何か悪いことをしたのか」
「いいえ、ここは神領やよってに御用があると、お手伝いせにゃなりまへんの」
「宇部が……」
あの痺れ薬といい、男衆を集めていることといい、尋常ではない。
（何かあるぞ、これは）
神人といっても、神様に仕えているだけで、荘園や大名の執事などと変りはない。この伊勢神宮の神領内に生活する者たちが、神人の命令に従わざるを得ないのは、理解できることだった。
「権平とか称ったな、あやつ、迷惑ではあろうが、金を払っているのだ、あきらめろ」
「でも……」
「そのうちには、精も涸れようほどに」
「ほほほほ、あたしも涸れるまで抱かれてみたい」
「いい男を見つけるさ」
「こなたさま」
ふいに、女は抱きついてきた。
「おい、よせ」
蛭でもひき離すように、女をつまみのけて、「明朝は、おれが権平を迎えに来てやる」
言い捨てて、遊女屋街を駈け抜けた。
こんなところに、いつまでいては、どうにもならぬ。何かが起っているのだ。
その何かは、五十鈴川の河岸に出ると、いやでも目に飛びこんできた。
男たちが、ぞろぞろと、歩いてゆくところだった。みんな、袴の裾をくくったり、尻からげしたり、布子の者は脛に布を巻いたり、神人は水干の袖をたくして、襷掛けしていた。槍をかいこみ、弓を持ち肩にかけた矢箱には、矢が沢山入っている。
（こりゃア大変だぞ）新九郎は目勘定した。（三、四十人はいるな……）
ものものしいその連中の恰好は神領といっても武家や野伏や僧兵らの狂気の姿と変りない。人間であれば、この乱世に生きるからにどんな立場も、同じだというのか。
かれらの半数くらいは、うしろ帯に炬火をさしている。日が暮れたら、点火するのであろう。そのものものしさが、目を放せなかった。

（まさか……おれを討ちとりにゆくつもりではあるまいな）
新九郎は、しかし、すぐにその考えを打ち消した。
宇部とは顔を合わさなかったが、かれの姿を見た者は多いはずである。
町中にいるのがわかっているのに、宇治ノ社の仮宿へ向うはずはない。
それに、小笛の口から聞いたところによると、好色な宇部の理不尽な仕打ちに反抗したにすぎない。ことが大きくなったら、困るのは、宇部のはずだった。
（あの馬鹿め、同じ馬鹿でも、そこまで愚かではあるまい）
曲りなりにも、禰宜の職にあるとすれば、その辺の見通しは利くはずであった。
朝がたの、あの、〝小笛処刑〟にしても、実は、狂言だったかもしれないのだ。
ああやって、ササラ者を使って火を放つばかりに威し、小笛の気持を恐怖と不安につきおとしたあとで、（心を入れ代えれば、助けてやるから）などと恩に被せて、自分のものにする予定だったのかもしれない。
その寸前に、新九郎が飛び出したのではないか。
宇部を白状させてみないと、その辺のところははっきりしないが、ともあれ、宇部や、その同輩の神人たちに率いられてゆく男たちの武装は、少なくとも、新九郎に向けられたものではないようである。
「とすると？……」
小笛を取り戻しにゆくのでもない。
見ているうちに、河原から川岸にのぼった連中は、小橋を渡って、上流の方へゆく。弓矢の支度は、一見、けもの狩り。
宇部も、痺れ薬は、けものを獲るためだと、お丹に言っていた。
五十鈴川は皇大神宮から上流へゆくと、渓谷になる。左岸が神路山、右岸が島路山と名づけられている。
五十鈴川は遡るに従い、左へ曲っているから、前方に鷲ヶ嶺が泰然と見える。袴腰山ともいう。
夏の陽は、すでに、その肩にかかっている。落ちるのは、すぐであろう。遡ってどこまで行くのか知らないが、山中へ入れば、山犬や兎や、鹿がいる。
五十鈴川流域は、磯部の方まで神領である。神領に棲息するものは、栗鼠から山鳩にいたるまで、神宮家のものだ。氏子はもとより、誰も手を出すことはできない。もっとも、宮司などに権限はあるのだろうから、その意図があればいい。
神人宇部に率いられた男たちの弓矢が向けられるのは、鳥か獣か。それとも——。

鹿を喰う

陽が落ちた。夏日に灼かれた河原石は、急には冷えてこない。五十鈴川の水も、生温い。蜩（ひぐらし）が鳴きしきり、残りの暑気をひっかきまわしていた。

鷲ヶ嶺のかなたに落ちた太陽の余光が頭上の空を明るい水色で満たしていて、綿を千切ったような白雲が流れてゆく。

「さあ、みんな矢をつがえるがええぞな」

神人宇部が、采配のように、御幣を振った。

御幣をこんな場合に利用するなど、神様に対する冒瀆だろうが、宇部も他の者も昂奮しているからそんなことは気にしない。

「ええか、相手は、大変な奴らじゃ、気イつけて射らんと」

「む（も）っと毒液は濃い方がええやないか」

そういう者があった。

「そら濃い方がええ、だが、無駄につけるなや」

山犬か、兎か。

ぞろぞろと河原を遡ってゆく連中のあとから、新九郎もつけていった。何がなし、気にかかる。あの宇部という奴の嫌な性質を考えると、何をやらかすか、見届けないではおれない気持だった。

河原をゆくうちに、あの焚火のあとへ出た。

あっと、そのときはじめて気がついた。

（あいつらを捕えに来たのか！）

三人連れの牢人者。大道寺太郎と荒木兵庫、それにもう一人。

あの三人は、宇治の街でも、あまり好かれていない。食いつめた流れ者だし、日ごろの行状も、傍若無人だ。たとえば、鹿を殺して、肉を喰うなどのことも、神人たちにしてみれば、とんでもないことというわけだ。

神の威光を無視するにもほどがある。神鹿を捕えるさえ許せないのにその肉を喰うなどもってのほかだった。

〃神領を荒す者〃ということになるのだろう。

大道寺太郎らの小屋は、五十鈴川沿いに山中を通って五ヶ所湾へ出る。いわゆる五ヶ所街道の途中、雲出橋から、少し渓流を上ったあたりに、一庵がある。僧庵の立ち崩れしかけたものだ。

一行は渓流を遡りはじめた。

（いよいよそうだ）

新九郎は合点した。

合点しただけである。あの三人には何の恩義もない。貸しこそあれ、借りはない。宇部は嫌なやつだが、だからといって、三人に力を貸す理由はない。

「みんな、あしこに三匹の獣がおるでの、矢攻めに入るんにゃな」

宇部はみんなを鼓舞して、じりじりと接近していった。

この攻撃にまず気がついたのは大道寺太郎である。

かれは弓を作っていた。

この時代、おのれの手に合う物は、手製でなければとする者が多い。

弓ばかりは、身長や膂力（りょりょく）に比例して手に合わなければ、思うように飛ばない。したがって、正確を期すには、弓によって矢を制すといって、矢束の長短もそれに合うようにするのである。

因みに日置流では身長一尺につき弓長一尺三寸八分五厘、とこまかく規定しているほどだ。

幾筋もの割竹が転がっているのは、大道寺が切り出してきたのであろう。このあたりに竹林が多い。

そのなかで性のいいもの、狂いの少ないものを選び、中にヒゴと称する木の芯をはさみ、これを膠（にべ）で付けて作る。

握りの上の、いわゆる矢摺籐を巻いているところであった。

「ややっ、なんだ、あいつらは」

大道寺は、ふと一行を見つけて、立ち上った。

それを見ると、わーっと、喚声をあげた。

「いた！」「あいつじゃ」「神鹿喰いの牢人ぞ」「やっつけろ」

弓に矢をつがえて、わらわらと駈け上ってくる。

大道寺は、ちょっと、わけがわからなかったらしい。弓を手にしたまま、啞然としていた。

その姿が、しかし、昂奮した連中には、いかにも敵対するものに見えたのである。

「射よ、射よ」

宇部が、狂ったように叫んだ。叫びながら、御幣を振った。

それに勢いを得て、数人が弓をひきしぼり、きって放した。ばらばらっと下枝が音を立てて、矢が飛んできた。

「なんちゅうこった」大道寺は仰天して「才四、才四、大変じゃ」

と、僧庵の中に駈け込んだ。

「才四、兵庫、敵だッ」

その山中才四郎は、うたた寝をしていたし、荒木兵庫は無器用に、罠をこしらえていた。兎罠である。

外の喚声と、大道寺の叫びに驚いて、罠を手にしたまま立ち上った。

「どうした、なんだ、あの騒ぎは」
「敵だ、神人どもだ、刀をとれ、斬りまくるのだ」
弓が完成したあとだったら、と思うと、大道寺は口惜しく、「多勢だぞ」と、山中才四郎の枕を蹴った。
これは細竹を網代籠にしたものに、手拭いを巻きつけただけで、夏むきの枕にしていたのである。
「何だえ、地震か」
と、才四郎ははね起きて、枕を抱えるのを、
「ばかっ、刀はこっちだ」
「おう、何だ、いったい火事か」
「敵だ」
はげしい弦音がし、わーっと喚声がすぐ近くで聞えた。
だだだッと、破れ庵に矢が突っ立った。

宇部の手にも弓がある。
御幣をうしろ襟にさすと、弓に矢をつがえた。弓は伊勢大神の御弓、と今日呼ばれる赤漆塗黒弭の御弓だ。この弓をひきしぼった。むろん矢先には痺れ薬が塗られている。
「神領を荒す牢人者を、やっつけるのじゃ」と、涸れた声で、「よいか、われらには、神がついておるぞよ。不埒者をこらしめるわれらは正しいのじゃぞ」
知能の足りない連中にとっては〝神がかり〟という言葉もあるように、神の力というアジがもっとも効果がある。
宇部の職業が神人というだけで、即、神に近い人、と短絡してしまう。
教育の機関などない乱世だから権威が絶対だった。批判も思考も生活からしかでない。
村のためにならない者は村八分にしたり、叩き殺す。神社という権威を犯す者は不逞だといわれれば、殺しの手伝いもする。神領に住んでいる以上、その権力支配を疑う前に、現実が、御幣の指示に盲従させてしまうのである。その、弱い人々も、不埒者誅戮の、刀や弓矢を与えられると、日ごろ抑圧されていただけに、残忍な血が騒ぎ立つ。
「やったれ」「射殺したれ」
争って射かけるのだ。槍刀のほかに大掛矢を担いでいる者もいる。
この三十人ばかりの群集の攻撃に、牢人たちは狼狽した。
「やい、おれたちが何をしたというのだ」
山中才四郎は、まだ寝呆け眼でこの恐ろしい光景が、悪夢のように感じられた。
まるで血に狂ったような連中であった。神示を号して狂気した連中くらい始末に悪いものはない。
(呆れたことだな)
新九郎は河べりの大岩の上に腰を据えて、見物している。
(三人も、これでおしまいか)
乱暴なところはあるに違いないが、新九郎の見たところ

悪事というほどのことはしていない。たかが鹿を食べただけではないか。
神宮を恐れぬのが罪ならば、しかたがない。権力への抵抗が、悪事というのならば、甘んじるしかない。が、人間として、ひどいことをしたとは思えないのだ。
(人間としての悪事ならば、あのどじょう髭だ。宇部こそ、神罰を受けるべきだなあ)
恥ずべきは宇部である。そのどじょう髭をふるわせて、領民たちを叱咤督励して、おのれも神弓をひきしぼり、「神罰をこそ喰え」ひょう! と放った。
文字通り蓬庵である。隙間だらけのところへもってきて、矢が雨のように飛びこんでくる。
三人は、着のみ着のまま、裏手へ飛び出した。
「やめろ、やめろ」
「弓矢は卑怯だぞ」
三人は意外にあっけなく、次々に倒れている。
抜刀して、矢を払っていた大道寺太郎は、左腕に突き刺さり、山中才四郎は、身を翻したところを、足を射られた。
荒木兵庫は、蹴躓いて、つんのめったところを流れ矢が肩を掠めた。
「やったぞう」「三人ともや、打ち殺せ」
わっと喚声をあげて、一行は走り寄っている。
宇部も、どじょう髭をふるわせて、「ほれみい、神罰神罰」神弓を振りまわして、「効いたぞ、効いたぞ」と、本音を洩らした。
あの伊賀者太郎から銀十匁で買った秘薬が効果を発揮したようであった。
昂奮した連中は、大掛矢を持った者、錆刀を担いだ者、竹槍をふりまわす者、いずれも、血に飢えた野獣のように、三人に殺到した。
「打ち殺せ」「神鹿を殺したやつらじゃ、神罰を知らせてやれ」「そうじゃ、ぶち殺して、皮を剝いだれ」「鹿の肉のかわりに、喰ってやれ、おらはふとももの肉がええ」
日ごろは善良な農民町人も、昂奮の渦に巻きこまれると、殺人狂になる。
ところが、三人は倒れたまま動かない。延びきっているのだ。
そこへ殺到した連中を、宇部が息せききって駈けよると、「待て待て、殺したらあかん」神弓で、みんなの尻や背中をひっぱたいて、「これ、離れろ、離れろ、殺したらあかんのや」「ふん縛ってしまえ」
せっかく、殺戮の楽しみに浸ろうとしていたのに、これでは、興味が半減する。子供が、お菓子をとりあげられたような顔で、みんなは、三人の手足を縛った。
驚いたことに、傷は擦り傷だったにもかかわらず、三人ともからだがしびれてしまっていたのだ。ただ、目を白黒

させ、わなわなと唇を動かしているだけだった。
さらに、非情なことに、三人は手足を〝けもの縛り〟にされた。手足を、一つまとめに縛られてそこらの太枝を切りとって、屈強の者が二人で担いだ。こうやって、丘をおりてゆくのだ。
遠くから見ると、まるで子馬か鹿か狐でも生け捕ってゆくような様子に見えた。
すでに日は暮れている。炬火の火と白い煙が流れて、この異様な行列は宇治へ向った。
「へえ、まるっきり、四ツ足だあな」「神鹿を捕えるだけでも神罰を蒙るちゅうのに、喰いよったのや、こうなるのは天罰てきめんや」「なんと他愛ないことかいな、見い、矢が掠っただけちゅうのに、正体あらへんわい」
まるで遠征のあとの凱陣であった。意気揚々と引き揚げてくる。
声高に喚きながら、宇治へ戻ってくると、
「こいつら、捕えよったけども、どないしょう」「檻へ入れたら、ええぞな」「木イ吊したら面白いわい」
わいわい言っているのを、宇部は鹿爪らしい顔をして、「キマリがある」と、言った。「大神宮の古くからの掟があっての……」
かれらが三人をおろしたのは、あの、小笛を処刑しようとした広い河原である。
「ここへ穴を掘ったれ。三つ」
「へえ、穴を？」
「五尺がほどの穴じゃ。三人を突き落すのや。首だけ出して生埋めにするがええ」
「こら面白い」
わっと、連中は歓喜の声をあげた。群集心理は残酷なものである。みんな、子供のようにはしゃぎ廻って、穴を掘りはじめた。
河原である。河原石がごろごろしている。その石をとり除き、掘ってゆく。石の層は厚いから一メートルくらいは、手でとり除くだけでいい。それから砂を掘る。
そうしたことを差図している宇部の痩せた顔は、篝火と炬火の火で赭々と輝き、冷酷で残忍な性格があらわれていた。
一メートル間隔くらいで三つの穴が掘られた。まだ正体なく、涎を垂らしている三人を、すぽりすぽりと落すと、首だけ出して、砂と石で埋めこんだ。
「やれやれ、手間なこったが、これでええ」
その上で、三人に川の水を浴びせかけた。
痺れ薬は、漸く、消えかけている。水を浴びせられ、三人は、とろりとした眼をあけた。
「はははは、これで夜明けを待つこっちゃ。誰か立札を削ってこいや」

宇治の街には、宮大工も多い。二十年ごとに社殿を新築して遷宮するきまりがある。その宮大工に高札を削らせて宇部は筆をふるった。
意外に達筆だった。
――この者共、御神鹿を殺傷し剰え肉を喰い候事不埒至極に付、神罰此の如き者也。
宇部のような男には、その外見とはうらはらなサジスティックな面がある。日ごろ小心で、下痢ばかりしているようだと、かえって、残忍になれるものか。
「水をどんどんぶっかけたれ、石と砂が塩梅よう締るもんや」
三人の首にむかって、毒吐いて高札を立てると、「さあ、明朝が楽しみや」へらへらと笑った。
よほど、こうした処刑が好きらしい。
小笛を裸に剝いて火焙りにしようとしたり、人の弱みにつけこんでは、こういうことをするのが好きなのだろう。
小心者ほど、衆の力をたのむものだ。衆目に囚人を曝すことによって、おのれがその支配者になれる。対等では何も出来ない男なのだ。
篝火を燃やし、見張りを立て、用のある者は帰して、お神酒で酒盛りをはじめた。宇部は真っ赤になって盃をあけている。一晩中、こうやって飲み食うらしい。
肴はどんどん運ばれた。魚や貝や季節の野菜類である。
何かといえば飲み食いする。こんな時代だけに、飲む機会、食う機会がありさえすれば、他のことは考えないのであろう。
悪者を成敗しての、神人の振舞いだから、かれらには抵抗がない。飲むほどに、酔うほどに、唄い出すやつ、踊り出すやつ――。
土器の盃を河原石に叩きつけて、ひょろりと立ち上って、
〽ざざんざ　ざざんざ
浜松の音は
ざざんざ……
片肌脱ぎになって、次の奴がおかしな恰好で、腰をひょこつかせて、
〽堅田の網は
夜こそ引きよけれ
エイさらエイさらと
網を引く……
わあ、と、みんなはやしたてる。
この騒ぎに、三人は漸く正気にかえっていた。きょときょとと眼をあけて見ている。
火が燃えているし、酒に酔って、唄ったり踊ったり――まるで地獄火のようであった。火焔地獄の入口で、赤鬼青鬼が狂い酔っての乱舞と見えた。
「お、おい……ここは地獄かあ」

山中才四郎が泣き声を出した。
「た、助けてくれ」
荒木兵庫は怒鳴ったが、怒鳴る声がかすれて、誰の耳にも入らないようであった。
大道寺太郎は低く呻いた。矢の傷が痛い。石が丁度その傷口に当っているのだ。深い傷とも思えなかったが、からだが痺れて、自由が利かなかったことが思い出された。
(くそ、毒矢だったのだな)
全身が痺れたのだ。そうでなければ、こんな目にはあわない。だが、痛みを感じるのはそれだけ、毒がうすれたということだ。
(重い……)
石が重い。一つ二つの石ころは掌に乗るものでも、これが百も二百も、砂を加えて、全身を圧している。この五十鈴川の河原石ぜんたいの重みのようであった。三人の眼はしだいに絶望的になってきた。
酔いしれた男たちが、乱舞しているのが地獄の鬼のように見えた。救いはなかった。
それにひきかえ、宇部は大満悦だった。
「さあ、飲めや、お神酒を飲めや、肴を喰えや」
とろんとなってきた宇部は、焚火でうまそうな臭いをたてている肉をとって、むしゃむしゃとやりだした。
「こら、うまい」
「うまいじゃろ」
と、誰かが言った。
「うむ、うまい」宇部はまた手を伸ばした。痩せの大喰いである。「こない、うまいもの、はじめてや」
「もっと喰うか」
傍の男が言った。
「ああ、いくらなっと喰いたい」
「うまいからな」
「そいじゃ、もう一串」宇部は、そばの男が誰であるかなど、気にかけなかった。「もっとあるか」
「あるぞ」
「ほほ、悪人ばらを捕えるのに、腹へったこっちゃさかいに、みんな喰え」
男たちは、もう宇部にそんなにいわれなくても、どんどん食べ且つ飲んでいるのだ。
「いくらでも、あるさかいに」とろんとした眼が、その肉を見た。「うまいが、こら、何の肉じゃ」
「知っとるくせに」
と、その男が言った。
「はて、のう」
「そこにある」
宇部は足もとを見た。
鹿の首が見えた。みごとな角を持った鹿である。鹿の皮

をそのままに、中の肉をえぐりとって、串焼きしていたのだ。
「――鹿じゃの……」
何気なく言った。かなり酔っているのだ。
「そうだ鹿だ」
「鹿の肉……」
「御神鹿のな」
あっと宇部は仰天した。あわてて、あたりを見まわした。肉を喰っていた連中も、はじめて気がついたように、喰いかけたまま、手をとめた。
「し、鹿肉か……」
「そうだ」と、その男はゆっくりと、嚙んで含めるように言った。「御神鹿の肉だ。お禁(いま)めの鹿肉を喰ったやつは、お仕置きせねばならんのう」
これは新九郎だったのである。いつの間にかまぎれこんでいたのである。鹿肉とともに。
「さあ、みんな、穴を掘れ」新九郎は宇部の首ねっこをおさえて叫んだ。「こやつを生埋めにする」
宇部は仰天した。
「ま、待ってくれ」鹿の肉を喰ってしまったのは事実だから、喚いても、とりかえしがつかない。「ま、間違いだ、わしゃ鹿肉とは知らざったのだ」
「いまさら、つべこべ申すな。ここに鹿の首がある」
新九郎は首を蹴って、
「これが目に入らぬわけはあるまい。これだけの角は一寸ないぞ。みごとであろうが」
「み、みごとじゃ……」
「鹿肉を喰った者は生埋めにするのが掟とあれば、そうせにゃならんて。さあ、みんな穴を掘れ、早く掘れ」
こうなると主客転倒であった。
宇部の首ねっこを押えた新九郎の偉容は毅然として、男たちは、その命令にしたがうしかなかった、もう踊りもやめてしまって、男たちは、ぶつくさ言いながら、穴を掘りはじめた。
宇部だけではなく、まわりの数人も食べているが、新九郎は宇部のことしか問題にしていない。穴を掘らないと、自分も宇部と同じ立場になってしまうのだ。多勢の手だから、たちまち、大きな穴があいた。
「よせ、わしは神人だぞ」宇部はもがいて、喚きつづけた。
「神人じゃぞ、神人は神鹿の肉を喰うたかて……」
段々、声が小さくなる。
「偉そうな口をきくな。神人だから喰うてよいという法があるものか」
新九郎は大喝した。
「庶人に禁じるならば、一層、うぬらが手本を示さにゃなるまい。その道理ではないか」

「う、う……鹿とは知らんさかいに」
「いまさら、言いわけ無用。さあ穴だ。入って貰おう」
両手を縛ることもない。新九郎は宇部の襟がみつかんで、弱腰を蹴り上げ、すとんと、穴の中に落した。
「わあ、助けてくれ」
「喚くな、神人は偉いのであろう、偉ぶるなら、喚くな」
「そ、そいでも」
「さあ、観念せい」
山と積みあげられた石を蹴込んだ。まわりの男たちも、どんどん石を投げ入れる。宇部の痩せたからだは、石の中に埋没していった。
「助けてくれ、こ、こら間違いやさかいに」
「なんの間違いだ」
「ま、間違いや、そ、そら、間違いや、御神鹿を……」
「肉を喰うのが間違いか」
「いんにゃ、御神鹿くらい、いや鹿の肉くらい……」
「喰うたとて、どうということあるまい」
「そ、そうや」
「御神鹿もくそもない、鹿を人間さまが喰うのはかまわんというのだな」
「そうや、だから、助けてくれえ」
「命だけは助けてやろう」笑いながら、新九郎は言った。
「だが、きさまは嘘吐きだからな、暫く、そこで苦しんで貰わねばなるまい」
「そら、ひどいで」
「黙れ、喚くな、神人が泣くとはみっともないぞ」
石に埋められたままもがいている宇部を尻目に、新九郎は、
「三人を助け出せ」
と、命じた。もう、こうなると新九郎が主人であった。かれらにとっては、絶対であった神人の宇部が、主客転倒で石子責めで泣訴しているのだからこれは抵抗しても無駄だった。また、抵抗する気持もない。神領に住んでいるというだけの理由で、宇部の命令に従っているのだから、立場が変ると、さっさと、尻を向けてしまう。
「早くせい。三人は死にかけているぞ」
三人とも、矢傷を受けている。そこから、伊賀忍者の調合した痺れ薬が入って悶絶したのだ。
その傷に何の手当もほどこさずに、石子責めにしたのだからこれはたまらない。
石をとりのぞいていって、腹のあたりまで解放されると、やっと大きく吐息した。
「やれやれ、助かった」と、山中才四郎は、「恩にきますぞ、新九郎どの」
と、叫んだ。よほど、嬉しかったのだろう。
「新九郎どの、命の恩人じゃ」大道寺太郎も、大きなからだでもがいて、「おぬしが、来てくれなんだら、いまごろは死んでいよう」
「なあに、きさまが死ぬものか」
「いや、この石では」
「明日の朝くらいだろうな、死ぬのは。いまごろ死ぬような弱さでは、助けはせぬ。おれは弱い男は好かぬでの」
一緒に石をとり除いてやり、引き上げる。
大道寺はそれでも這い上ってきたが、荒木兵庫の方は、気息えんえんとしていて、
「か、忝(かたじ)けない」と、礼を述べる言葉も、細い。
三人がともかく河原石の上に全身を見せてきてから、新九郎は、宇部の方をふりかえった。
「こやつ、改心したと申すゆえ、殺すのは許してやるが」
「や、約束だぞよ……」
「殺しはせぬが、かような処刑をこれまで何人にした？」
「……」
「神の名をかりた不埒な行為、許しておけぬの」
「そ、それでは約束が……」
と、泣き声になる宇部にくらべて三人は、やっと勢いづいてきた。
「そうだ、鹿の肉を喰ったくらい、何だというのだ。神宮もくそもあるか」
「とんでもねい奴じゃ、ざまア見ろ」
「新九郎どの、こらしめてくれい」
激昂する三人をおさえて、新九郎は、
「二度と、かようなことをして庶人を苦しめぬために、こやつに、石の重さを知って貰うとしよう」
むろん高札はとっくにひき抜かれていた。
叩き割って焚火にくべようとする者を圧えて、削り直させると、新九郎が、さらさらと筆を走らした。
――此者、神職に名を藉(か)り、横暴之振舞、不可許者也。依って懲罰、如件(くだんのごとし)斯
〃新九郎〃と、署名したが、その上に、
〃伊勢〃
と書き添えた。
「伊勢新九郎さまか」「伊勢新九郎さま……」
みんな口々に言い合った。
驚きと畏れと敬慕で、見守った中で、新九郎は、
「これを立てよ。それから一日、この者を埋めておけ」
「へえ、へえ、合点いたしましてござります」
「明日一日中だぞ、見せしめになる」
「へえ、だが、喚(おめ)きだすじゃろ」「ほうじゃ、おめきだすじゃが」
それが心配だと、みんな顔を見合わした。
「喚いたところで、耳をかすな。びくびくすることはない」

新九郎は勇気づけるのだが、何しろ、御神領ということで、箸のあげおろしにも、威かされて生れ育っているから、どうしても、弱気になる。

「それかて……」そうは言っても、と、眉を曇らせて、

「なんせ、大宮司はじめ、神人らが、煩うての」

「かまわん、文句があれば、新九郎が、相手になってやる」

「へえ」

「おれの庵は、宇治ノ社の……」と、言いかけたが、そうだ、あそこでは、小笛に迷惑がかかる、と、思い直した。

「おれは、お丹のところにいる」

「お丹さアの？」声の調子が変った。顔見合わせて、また、お丹さアの？　と、問いかえしたのは、意外すぎたからであろう。「もぐさ屋の男やったかい」

もぐさ屋というのは、あとからわかったことだが、お丹の薬種屋が以前は、もぐさだけを扱っていた小さなものだったことによるらしい。

〝男〟というのは、情夫という意味なのであろう。新九郎は打ち消した。

「あいにくと、違った」

それから、三人の牢人者に顎をしゃくった。

「引き上げようぞ」

「参ろう、兄貴の行くところならどこへでも参るぞ、なあ」大道寺太郎は才四郎と兵庫を促して、「傷の手当をせぬと」

「ははは、ついてこい」新九郎は面白そうに笑った。

「傷の手当をしてくれる女がいるぞ」

お丹はすでに寝ていたが、新九郎の声を聞くと、飛び起きた。

「まあ、来て下さったのねえ」

お丹は寝酒を飲んでいたらしい。まだ酔いの残った顔だった。

「うれしい」

抱きついてきたのを、新九郎は違うのだ、と手を振って、

「傷薬がほしいのだ」

「まあ、どこぞに傷を」

「いや、おれではない、この連中だ」

三人は、ばつの悪そうな顔をして、済まんこっちゃ、と言った。

「寝(やす)んでいるところを起してしもうてな」

「知らん人なら、断わるんやけど。新九郎さまのお友達なら」

「友達ではないぞ、舎弟だわな」

兵庫がいい、二人とも頷いた。

「そうじゃ、われらは、伊勢ノ新九郎兄貴の舎弟じゃで」

「ほほほほ、それなら、尚更……早よ、まあ、はいらしゃれま」

お丹は甲斐々々しく、湯を沸かしたり、三人の傷口を洗ってやったりした。

こういうことには馴れているらしい。大道寺太郎は左腕に、矢が刺さり、才四郎は足を、兵庫は、肩を掠めていた。兵庫がもっとも軽いわけだが、痺れ薬が、余計塗ってあったやつなのだろう、一番、弱っていた。

洗ってやりながら、お丹は、傷口の匂いを嗅いで、眉をしかめた。痺れ薬だということに気がついたのだ。

「わかったか」と、新九郎は、その表情を見て言った。

「あれだ」

「ええ……」

「獣ではないぞ、人間様に用いおった」

「あたし、まさかと思うて」

その会話からは、三人には、何のことかわからなかったようである。

傷口を何度も、よく洗ってやったのも、お丹は、気が咎めるものがあったのだろう。

「いいお薬がありますよ」

お丹は金創を出してきて、たっぷりと傷口に塗りこんだ。

「うひひ、こそばゆいの」大道寺太郎は身をすくめて、

「おりゃ、美い女の指先でさわられると、ぞくぞくする」

「ほほほほ、そんなことを言っていると治りませぬ」

繃帯を巻いてやってから、酒になった。傷に悪いだろうというと、いいえ薬草を混ぜたから大丈夫という。

安心したせいだろうか、三人は幾らも飲まないうちに、崩れて、眠りはじめた。

三人が相前後してこれだから新九郎はぎょっとして、

「おい、お丹、またやったな」

けらけら、お丹は笑った。この女は、笑うときは、さもおかしくてたえられないように、上半身をくねらせ、白いのどをそらして、笑う。

「ええ、眠って貰ったの」と、三人を見わたして、「好え子や。他愛ない顔して」

「こやつ！　なんということを。痺れ薬を売ったり、眠り薬を飲ましたり」

「ほいでも、新九郎さまには、何も入れてまへん」けろりとしているのだ。「ね、そうでしょ。このひとたち邪魔だもの」

「邪魔だと?!」

「ええ。せっかく、真夜中に新九郎さまが、お出でになったのに」

「阿呆を申すな。こやつらを助けるためだ」

「ほいでも、新九郎さまが、来て下さったのは、ほんとだから」

にじり寄って、膝に手を置く。
寝酒を飲んで一眠りしたあとなのであろう。お丹の肌は白く艶めいて、甘い肌の香が、胸もとから匂いたった。
「よせよせ、こんなときに、左様な色めいたことは」
「大丈夫、朝までは、眼をさまさない」
「――困ったやつだ」
こうなれば、飲むしかない。新九郎はぐいぐいあけた。その膝に手をおいて、お丹は、濡れたような眼で見上げている。
「ふふふ……」
「何がおかしい」
「いま飲んだお酒」
「なに！」
妖しい女の眼にぎょっとした。
「な、なにを入れた？」
「惚れ薬……」
「……」
「いまに効いてくるよ。ほら、ほら、あたしを好きになる」
「ばかなことを」
そうは言ったが、何やら、からだが熱っぽく、妙に昂りを感じてきたのは事実だ。
「ふふふふ、どう、そろそろ効いてきた？」
「何を申す。おれは、左様なものは受けつけぬぞ」
「強がっても駄目」
と、言いながら、お丹は、肩をくねらして、しなだれかかってきた。
襟がひらいて、乳房のふくらみが、いやでも眼に入る。女の手は、ふとももを触っている。その指先が、微妙に動いているのだ。少しずつ、少しずつ、新九郎の気をそそりながら、内腿へ入ってくる。
それとともに、女の呼吸があらくなってき、乳房がうねりを見せてきた。情感が盛りあがってくると、その乳色の肌から、甘やかで、酸っぱいような情欲の匂いが、抗い難い魅惑で、かれをとりこめようとする。
お丹の黒い眸は燃え、朱唇が熱く、喘いでいた。惚れ薬が効いたのは、お丹の方ではないかと思った。むろん新九郎の方も冷静とはいえないのである。
（惚れ薬なぞ、効くものか）
新九郎は、肚裡で嗤っている。薬などは半分は気のせいだとの信念を変えない男なのである。
お丹の方では、すっかり効いたつもりで大胆にすり寄ってきて、胸をはだけ、豊かな乳房を押しつけてくる。
「ねえ……好きさ」
鼻にかかった甘い声で囁き、手を、新九郎のふとももから、奥の方へと、じわじわと進めてくる。

男が、惚れ薬で、とろりとなっていると思っている様子だ。惚れ薬などというのは、たしかに、その気になれば、効いたような気がしてくる。
だが、新九郎は意志が強い。
（こんな女には、そう軽々にはひっかからんぞ）
おのれを強く持っていて、
「駄目だな、お丹」と、女のからだをおしのけた。「おれには効かんようだ」
「え?!　そんなはずは……」
「鈍いのだ、おれは。よくよく色事には向かぬようにできているらしい」
「そんな！　新九郎さま。ねえお丹も、あんまり男には惚れない女ですよ」
「じゃア、よせ」
「冷たい方。その惚れっぽくないお丹が、あなたさまには惚れたと言うのんやないか」
新九郎は、大きく、伸びをした。
「いささか、迷惑」
「したくないの、あたしと」
言い難いことを、ずばりと口にする女だ。
「したくなるだろうな、他の男たちは」
「あれっ、新九郎さまだけ違うのか」
「おれも、……したいさ」
「ほれなら、早く、抱いたらええやんか」
「いまは、したくない」
こんなふうに迫られるのは、好みではない。それに、小笛のような美少女に、心が動いているのだ。
お丹を濃厚な緋牡丹とすれば、小笛は、芍薬か、野菊である。巨軀からいえば、いかにもぽってりしたお丹の方が、好みに見えるかもしれないが、男らしい新九郎だけに、逞しい女は抱く気になれない。
むしろ、この種の女は、線の細い男を、逆に抱いて、奉仕させる方が、愉悦するのではないか。もっとも、そんな男なら、ザラにいるだろうから、飽きが来ているだろう。
新九郎のような、逞しくて快活で、度胸があって、さらりとしている、そのくせ、笑顔の底には大志を秘めて、おもてにあらわさず、悠々と風雲の去来するのを遠望しているような、その大きさに、お丹の心は妖しく揺れ動いたのだ。
「新九郎さま、そない冷たい。そら、お丹が可哀想やないの」
「可哀想な顔はしとらんぞ。ところで、お丹、話がある……」
「話って？　……」
ふっと、お丹は、あどけない顔になる。
もともと愛らしい顔をしているのだ。

こういう女には、この乱世でどういう少女時代があったのか。何が図太くさせたのか。多勢の男が、この女の肌の上を通り過ぎたことだろう。

女の大半は、悪い男に弄ばれ、利用されて、その花の美しさ、清さを蹂躙され色香を失くしてぼろ屑のようになってしまうのだが、中には、逆に、男によって強くなる者がいる。

男というものの奥行きを知ってしまうと、逆手にとることをおぼえる。そういうしたたかさが、お丹にはある。

ただ、色っぽいのは、生れつきなのだろうから、その色香が、この女には、救いになっている。むせるような濃艶さを持ちつづけておれるのだろう。

天性の色香が、お丹の表情にもからだつきにも、手足の先にまで感じられた。肌の色、キメの粗さ滑らかさは化粧で蔽っても、所詮、一時のものだ。それだけでも、色の白い、すべっこい皮膚をしている女は、得な生れつきというしかない。

「なにさ、あらたまって、話がある、なんて」

惚れ薬は、ほんとうに効かなかった様子だ。お丹は、わざとすねたような顔をしてみせた。

そんな顔も、男には可愛く見えることを充分知っている。

「昼間のことさ、おれを雇うといったな」

「ええ……」

「雇われよう」

「え！　ほんまに？」

「ああ、ほんとだ。但し、この三人の舎弟もコミでだ」

その三人は、まだだらしなく眠り呆けている。

「そうね、こんなボロ屑の三人なんか、要らへんけど……」と、一寸、考えるような眼をして、「ええわ、犬の威しくらいにはなるやろ」

「ははは、なあに、人間、何か、取柄があるものだ」

「ほうかしら」

「ただ、時に不運、伯楽を見つけることが出来ぬだけだ。世の中というものは、まま、駿馬の悩みと同じく、見出されるということが少ない」

「……」

「それに、馬は、人間の言葉が話せんしの」

「ほほほほ」

「それと同じだ。たとえ、おのれに、何ほどの腕があったとしても、伯楽がザラには居らん」

淡々と話しているようだが、新九郎の言葉には、豊かな経験の重みがある。

「まア、そない風に考えたら、あてが伯楽やんか。新九郎さまを見つけた伯楽」

「阿呆、おれは今夜だけ、雇われてやると申すのだ。一日、幾らだせる？」

「一日だけ雇うなんて」と、お丹は鼻に皺を寄せた。「そんなことは出来ません」

「明日になれば、また気が変るかもしれん」

のんびりとそういう新九郎を、お丹はうっとりと眺めて、

「では、雇いましょう」

皮の財布を持って来た。丁銀を摑み出した。

丁銀とは、切り遣いの銀銭である。何匁と刻印が捺してある。そのままでも、むろん遣えるし、これを切って、必要に応じた額にする。そういう方便が多かった。したがって、代銀の支払い受け取りには、ハカリを用いることが普通になっている。

万事に、現代のような忙しさがなかった時代だけに、そうしたことが、面倒がられずに行われたのだ。もっとも、小粒銀にもそれぞれ刻印が打ってある。贋物が横行したのはいうまでもない。

お丹が出したのは、大きなゆずり葉銀だった。ゆずり葉のかたちをしたものでそう呼ばれている。石見の白銀刻印が打ってあり、二十五匁と、はっきり読める。

「こんなにか?!」

「ほほほほ、一日分やない。そんなにあげたら破産しますよってに」

「そうだろうな、何日分だ」

「五日……」

と、お丹は媚を含んで、新九郎の顔色を窺うように見上げた。

「どうかしら」

「五日では一日、五匁ではないか」

「安い？　……なら、三日」

さすがに、そこらは、お丹も商売人だ。惚れているのと、賃銀とは、話は別だという気がある。

「三日では割り切れんな。二十五匁を四人分の三日で割ると、日割り二匁ずつで、一匁余る」

「あれ、お前さまが一日五匁とったらええのに。あとの雑魚は一匁でええ」

「それでも、一匁余る」

「ほんまに……」お丹はけらけらと笑いだした。「どないしよ、一匁」

「酒代にでもしてくれ」

二十五匁ゆずり葉銀を小粒に換えて貰ったのは、みんなに分けてしまうつもりだからだ。

「小粒二十五匁はここにはありませぬ。こっちゃに来て下さんせ」

お丹は先に立った。

民家だから三間か四間しかないが、突き当りの部屋に入って、壁の一部を軽くおすと、どんでん返しになって、壁が動き、二人を吸いこんだ。

「――呆れたな。かようなものを作っているのか」
「ほほほほ、面白いやろ」
「用心のためか？」
「それもあるけど、便利やさかい」
便利という意味は、その奥へ入ってわかった。
奥というのは、実は隣家だったのである。
「ここも、お前の家か」

秘密の扉――どんでん返しの壁を持った家というだけでも奇怪なのに、お丹の態度は、ますます異様だった。
（どういう女だ、この者は？）
新九郎も、これまでに多くの女を知っている。
諸国を放浪して、変った土地、珍しい風物にも接したし、それだけに、興味をそそられる女も知っている。
京の上臈姫君たちが、表面は取り澄まして、お淑やかで気品を売り物にしていながら、実体は、町の女以上に、淫らで、慎みがなく、嫉妬深く、金銭にきたないのも知ったし、山深い谷の、鄙びた女の中にも、目を瞠るような美女がいることも知った。
いろんな女を知っているが、このお丹のように、驚かされることははじめてだ。
意識せずに、人の意表をつくということは、それだけ、お丹が、常人とは変っているということだろう。

考えかたも、行動も。
女一人で薬種屋をやっていて、そこに伊賀の忍者が、毒薬を運んで来たり、用心棒を雇いたいと言いだしたり、どう見ても尋常ではない。
それも、こぼれるばかりの色気の多い女なのだ。
性格が勝気で、激しいのは、誰の目にもわかるが、触れれば男をとろかす色気が発散する魅力の肉体を持っているだけに、男にとっては、なんとも気になる女なのだ。
その上、この秘密の通路と、隣家。
薬種屋の左隣は、両替の銭屋のはずだ。
金、銀、銅銭――この三種類が貨幣の基本をなしていることは、周知のことだが、銭にも、ふた通りある。永楽銭と鐚銭だ。
鐚銭は文字通り、悪貨で良銭に比べて、粗悪だ。欠け銭、潰れ銭など多い。いずれも中国などから入ってきた銭貨である。筆者も何枚か持っているが、全く、鐚銭の名に恥じない。
ところで、これらの三貨は、物を買い、あるいは報酬としての支払いなどで、両替しなければならない。
両替には手数料が要る。時代によって手数料も変化があるが、だいたい、一％から五％くらいのものだ。
これは、両替の頻度によって儲けが違ってくるが、宇治は神宮の門前町だから、人の往来も多く、銀や銭の動きも

はげしい。
旅には、重くてかさばる銭貨よりも、砂金や、銀貨がいいにきまっている。
宇治に来て、その銀貨を換える。銭に換える。一匁や二匁の小粒銀、小玉ともいう小さな銀粒は小指の先ほどの小ささでも銭六十文にもなる。
その両替屋も、お丹がやっていたとは、驚きだったのである。
「呆れた女だのう、お前は」
新九郎はつくづくお丹を見た。
「こっちにお出でなさんせ」
お丹は奥の一間に案内すると、板戸を開けた。
その板戸も、一見、板壁と見えたものである。隠し戸だった。巧みに作られた木釘をはずすと、するすると開いた。
そこに大きな唐櫃が納まっていた。取手を把んで手前にひき出そうとする。見るからに重そうな唐櫃なのである。
「そいつを出すのか」
「はい」
「手を貸そう」
と、近よる新九郎を、にこりと振りかえって、
「御親切ねえ、そないところが女の気持を惑わすのえ」
「……」
「これ、軽いの」

ほら、と、するりと手前に引いた。唐櫃には車がついていたのである。女の手で軽く引き出せるのだ。お丹が考案したのであろう。
大きな錠前がついている。お丹は鍵ではずした。蓋をひらくと、中には、ぎょっとするくらい、金銀がうなっていた。
砂金の包みがある。銀子の宮がある。銀は緡になって、ぎっしり詰っていた。百文、五百文、それから一貫など、それぞれきっちりと作られている。
銀子の宮をあけて、お丹は小粒銀を数えた。
「新九郎さまが、頭領なら、何も、一人一人わけることはないのに」
「頭領か、ははは、なに、なんとなく、なかまになっただけだ。はっきりと、おれが頭というわけではない」
「こんな深夜に、銀粒の勘定しているところ、なんや、欲張り女に見えるやろなア」
「欲張りには違いなかろう」
「ひどい、新九郎さま」一匁銀粒を二十五枚、ちゃんと数えて、前に置くと、その中から一匁だけを、スッと引いて、
「はい、これは両替賃」
「抜け目がない」
「ほほほほ、ほほほほ、これでなくちゃ、こんだけの見世はやれやれしない」

お丹は、美しい顔に、したたかな色を見せた。
「なるほどな」新九郎は、納得した。「これだけの財を築くのは、容易ではない」
「あら、これ……あたしのお金じゃないのえ」
「お前のではない？」
「そう、預り金」
嘘を吐いている様子はない。もっとも、この女のことだから、信用はできない。その美しい皮膚の下に、どんな顔があるか。ともかく、端倪すべからざる女なのだ。
「お前の金ではないのか。すると誰の？」
「誰でもええやないの、それより、ねえ、新九郎さま……」
「ねえ……」お丹はにじり寄った。
唐櫃の金箱の蓋はひらいたままである。それだけ、新九郎を信頼しているのであろう。
（とんだことになったな）
新九郎は、その金銀を見ると、眉をしかめた。
こんな両替の銭屋と知っていたら、用心棒などになるのではなかった。たんに薬種屋と思ったから、用心棒といっても、お丹の色香にひかれた、好色な男たちのユスリタカリくらいだろうと、たかをくくっていたのだ。
こんなに莫大な金銀があると知ったら、用心棒にはならない。金銀強奪の野伏りが、目をつけているにちがいない。
それはかまわないが、今夜、ここに来た意味がない。
（やつらが仕返しにくるかもしれない）
神人宇部や、その朋輩手先が襲ってくることを、懸念したのだ。
（宇治のおれの小屋に来たら、小笛の身が危ない）
そのためだった。
お丹だったら、どうということはない。第一、宇部は痺れ薬について、お丹に頭が上らない。そうした思いからの用心棒請負いだったのである。
「お丹」と、あらたまって、新九郎は言った。「おれは、薬種屋の用心棒にはなったが、この銭屋のことは知らぬぞ」
「あら、そんな……」
「銭屋が、お前の見世とは知らなかった」
「どっちだって同じじゃないの、どっちも、お丹の見世だもの」
語尾を笑顔にくるめて、お丹は身を預けるように、ゆらりと上体を崩してきた。
「しかし……」
「ええやないの、ねえ、お丹を助けると思って」
「ここが狙われているのか」
「ええ……」
「……」

「薬屋も銭屋もない、お丹を助けて下さるのは、新九郎さま」
「おい、そんな仲ではないぞ」
「そんな仲になりまひょ」
お丹の手は、素早く、狡猾な蛇のように、男の股間にすべりこんでいる。それは、狎れていた。
白くて、ぷっくりした指の、つけねにえくぼができる。その柔らかい指が、男のものをつかんだのだ。ふいにすべりこんだにしては、あまりにも的確だった。
ぎゅっと、恥しげもなくつかんで、「ほしい……」と、眼を潤ませた。
「よせ、放せ」
「いやよ」
「放せ。ばかな」
お丹の顔に、ぱっと紅葉が散った。
「あたし……食べたい」
男のものを、袴の上からではあるが、強くつかんだままである。そして、まっすぐに、眼を見つめ、唇を浮せた。ぽってりと肉厚の唇が半びらきになり、白く光る歯が小さく音を立てていた。眼は情念のしずくのように濡れて、いまにも涙があふれそうであった。
「ねえ、好き、新九郎さま」
「お丹……」
「好きで好きで、たまらない」
ぐいぐい胸を捺しつけてくる。その豊かな乳房が、熱く男の着物を透してしみてくる。たっぷりと量感のある乳房であり、からだであった。
これだけ惚れてこられたら、新九郎も抱かなくてはならなくなる。それを阻む身分や、思想があるわけではない。ストイックな考えを持っているわけではない。情欲は、こみあげたときに、適宜、霽らしてきた。男の大志にとって、それは排泄作用にすぎないのだ。
思わず、新九郎は、ぐいと女体を抱きよせ、唇を吸った。が、女の柔らかい唇の感触と、甘い唾液がなめらかで分厚い舌とともに、流れこんできたとき、はっと、新九郎は顔を離していた。
「いかん！」
「え？　……」
「いかん、もう少しで」
「――どうしなさったのえ」
「その……今夜は、やめておく」
と、新九郎は袖で口を拭った。こんな仕草は、ひどく女のプライドを傷つけるものだ。
「まあ、なんや汚ならしそうに」
「いや、そういうつもりではないが」
「ひどい」と、怨めしそうな眼になったがその手は、男の

腿から離れない。
新九郎の腿は大きく厚く、木の根のように固い。若年時の鍛錬と戦場往来を思わせる脚であった。
「あたしが、こんなに、わるわると惚れているのに」
わるわる、とはこの地方に来て聞いた言葉だった。めちゃくちゃに強い、とか、どうにもならぬほど寒い、とか、感情の大仰な表現だった。
「お丹がな」と、軽く、新九郎はそらした。「男に惚れる女ではあるまい」
「まあ！　そんな……そこらの男は、でくの棒か虫ケラさ。でも新九郎さまだけは」
と、また股間に手をすべりこませようとしたとき、さっと、新九郎は巨軀にも似合わず、身軽く立ち上った。
「あれ、新九郎さま、逃げるのは卑怯……」
「叱ッ」と、口を押えて、「誰か……くるぞ」
「え？」
「野伏りか、奴らか、だ」
お丹が見た新九郎は、動きをはやめていたがその表情は、恐れや不安はなくむしろ、微笑すら浮べていたことである。
「蔵うのだ、速く」
手で示して、新九郎は、窓の傍へ寄った。粗格子のはまった板部に耳をつけて外の様子を窺っている間に、お丹はてきぱきと、唐櫃の蓋をし、錠をおろし、奥へ押しこんだ。
板戸を閉じて、隠し釘をはめれば、誰が見ても、そこは板壁だった。
「蔵ったか」新九郎はもどってくると、囁いた。「連中を起してくるんだ」
「はい」
「多勢だぞ、奴らは」
「大丈夫」気丈に、お丹は頷いた。「あたしには、新九郎さまがついている」
「そうだな、おれは、雇われていたのだな、三日間」
「なんだ、忘れていたのかえ、うれしい」
また抱きすがろうとする。
「早く！」
追いたてるように、突き放して新九郎は刀をとりなおした。
屋外に忍びよった者たちが、ひそひそ話している。板部に耳をつけたが、よく聞きとれない。
新九郎は裏口にいって固く閂がおりているのをたしかめると、二階に上った。
ここの屋根は板屋根で、コケラを葺いて格子状に押えの角材を打って、石を乗せてある。このころ、二階造りは珍しい。二階といっても屋根裏で、吹抜けの物置きである。足台を探してきて、新九郎は、明りとりから、屋根へ出た。
いる。いる。黒い影がうごめいている。目勘定したとこ

ろ、ざっと二十人ばかりだ。
いずれも顔を包んで、目ばかり出している、忍び装束である。これは意外だった。
（あいつらではないのか？）
宇部に使嗾された連中がくるとばかり思っていたのだが、あてはずれだった。
もっとも、考えてみれば、三人を摑えたのは、街の者だ。宇部に唆され、あるいは威されてのことだから、主客転倒で宇部のみっともない姿を見た以上、従来のようには、言いなりにはなるまい。
（とすると、彼奴らは？　……）
誰だ？　きわめて、組織だった連中のようであった。
（容易ならぬ敵だぞ、これは）
新九郎は、ひとり頷いた。神人宇部の姿はない。いかに奸物でも、神人であればそこに自ら、行動に制限がある。神示をたてまえにしなければならぬだけ、弱い。
もっとも、火焙りだとか生埋めだとか、神のお告げだと言い張れば、始末に悪いわけだが、〝神〟の名を出さなければ、何もできぬわけだ。
そこにゆくと、はじめから野伏り強盗などの連中は、顔を隠していることだし、目的のために手段を選ばなくなる道理だ。頭巾に面を隠し、筒袖軽衫ようの動き易い服装は、どう見ても、
〝忍び装束〟
強盗専門集団の感じであった。
咄嗟に、新九郎が思いだしたのは、〝伊賀ノ人〟という、忍者太郎のことである。
（こやつら、伊賀者か）
あの男が、昼間、出入りして、様子を調べて、夜にこの連中が襲う。ありそうなことだった。だが、伊賀ノ太郎は、ずいぶん以前から出入りしているという。薬草や毒など、永年の習いになっているようであった。とすれば、お丹を襲うことはまずあるまい。たんに銭屋の商売に目をつけてきた野盗、そう見て間違いなさそうであった。
屋根から見られているとは知らず、ひそひそと話しあっている。
「人数は？」
「昼間は五、六人いる。女あるじの下にな、銭勘定しておる」
「というと、いまは」
「夜は、女一人じゃそうな」
「まさか」
「いや、何せ、色っぽい女ゆえ、とかく男の噂が絶えぬ。見世の者ども、誰ぞ残れば、妙なことになろう」
「ふふ、その女、頂戴するか」
「阿呆め、銭が先じゃ、野盗ではないのだぞ、野盗と見せ

かけるのが……」
そのあとは聞きとれなかった。新九郎をはっとさせた言葉だったのである。
（野盗と見せかけて？）
見せかけるとは、真意は別にあるのか。
音がした。戸をこじあけようとしているらしい。戸の隙間に、タガネか何か突っこんでいる様子。あまり物音を立てると、街中だから、分が悪くなるのだ。
新九郎は屋根の上の石に手をかけた。風で屋根が吹っ飛ばぬように置いてある石だ。
（こいつで叩きつぶしてやる）
新九郎は、石を抱えあげた。大小あるが、だいたい人間の頭ぐらいの大きさだ。コケラ屋根の、押えには丁度よい。
その一つを抱えあげると、表に群れている連中の中へ、
「くたばれ！」と、投げつけた。
突然、大石が降ってきたのである。「わあっ」仰天した。数人が崩れたり、けし飛んだ。
それも、一箇ではない。次から次と叩きつけてくるのだ。
野盗たちは、逃げ廻りながら、
「あいつだ」
「殺れ！」
何か飛んできた。これは石ではなかった。いわゆる手裏剣である。十字のかたちで、するどく尖っている。これが、びゅんびゅん飛んでくる。かなり的確なのである。
一つは、新九郎の袖を破り、一つは袴腰に突き刺さり、一つは小鬢を掠めた。石を投げたのは、七つか八つ。
反撃は早かった。こうしたことに馴れた連中たち。〝野盗に見せかけて〟というからには、本来、野盗ではない、という誇りを持っているわけだ。
（何者か）
まだ、それが判然としない。新九郎は屋根に伏せた。
いかに脅力があっても、片手では摑み上げることは難しい大きさだから、両手で抱えると手裏剣の方がどうしても早い。隙だらけになる。これでは分が悪い。
（何人、倒したかな）
あれだけ投げたが、倒れているのは五人くらい。打ちどころが悪くて動かなくなったのが二人。あとは、呻き声をあげながら、もがき廻っている。
（すると、残りは、十四、五人というわけか）
お丹は、三人を叩き起したろうか。いずれも不敵な牢人どもだから怯れて逃げることはあるまいが、悪いことに、お丹が眠らせてしまったのだ。薬を酒に混ぜた。
はたして、すぐに起き上れるものかどうか。眠り薬があるくらいだから、気付けの薬もあるだろうが。お丹は機転が利く。なんとか三人を起したにちがいない。問題は三人が飛び出す機をどこで待っているかだ。

とにかく、見世の中へ、襲撃者に踏みこまれてはならぬ。
そのためには、闘いの場を屋外にかぎることだった。新九郎は決意すると、立ち上った。
ぴゅッぴゅ！　と、また手裏剣が飛んでくる。その中を新九郎はたたっと走りながら、石を蹴った。屋根の斜面だ。押えの格子状のワクはあったが、蹴られて石はごろごろと、転がって、屋根廂から、地上へ落ちる。
接近していた野盗たちが、ぱっと四散する。そのあとへ新九郎は抜刀して飛び降りた。
抜いたのは二刀である。あの長大な打ち刀は宇治の小屋に置いてきたので、大小があるだけ。
新九郎はさっと、二刀を抜き放つと、
「汝ら！」
喚きざまに、屋根から飛び降りたのだ。
まず、大石を次々に蹴落しておいて、下からの掬い斬りをさけたのは、新九郎の馴れた戦略である。
十四、五人の敵の真っ只中に飛びおりたのは、むろん、それだけの自信があるからにはちがいないが、常識的には無謀きわまることだった。
〈彼奴！〉〈何者だ？〉
その疑いは、逆に、新九郎に意外な感を抱かせた。
かれが、もぐさ屋に、仮宿することを知らない證左である。
（すると？　……）
使嗾者は、神人宇部ではない。ただの野盗だろうか。
〈かまわぬ、やれ！〉〈たった一人だぞ〉
石を蹴落しているときは、ほかにもいるような気がしたのか、一人だとわかると、人数を恃んで、どっと殺到した。
最初に飛びこんできた奴は、功を焦ったのであろう。踏み込みに目測を誤った、鍔先が流れ、新九郎の胸を掠った。これを一刀に斬り伏せるや、左側から斬りかかったのへ、二合と刃を交えず、胸を撫いで、一間を飛んで、三人目を、大刀が唐竹割りにした。
巨軀なのに身軽い。あっと思ったときは、疾風のように迫っているのである。刃風に血が臭った。殆ど一呼吸の間に三人を倒して、
「来い！」
新九郎は、血ぶるいした。
背後から、二人、同時にかかってきたのは、身をひらいて、左右の剣で受け、片方を、蹴倒して一人を斬り逃れた。正面から双手突きできたのを、がっと、鍔近くで払いのける。相手は小兵であった。その勢いで、吹っ飛んだ。
こうして斬り合ってみて、意外だったのは、いずれも、大兵肥満の男がいないことである。
小兵ばかり、ということは何を意味するのか。熾烈な剣をさばきながら、次々と仆してゆく新九郎には、そうした

ことを考えるだけの余裕があった。
この一人の剣尖に斬りまくられて、野盗たちは、ひるんでいたところに、
「おっ、やっているぞ」
「あいつら、一人も帰すまい」
三人の影が飛びだしてきた。
三人とも、喧嘩馴れているし、新九郎の働きで、すでに死体が転がっていたから、気が強くなる。それぞれ、傷を負っている上に眠り薬を飲まされていたのだ。醒めるまでに、時間がかかったのである。この三人、一つ間違うと、野盗にもなりかねない、戦国牢人だから、恐れを知らぬ。
「悪いところへ来たな。われらがいるとは知らざったか」
鏘然と、刃が刃を噛んで、金属音をひびかせる。
この時ならぬ剣戟に、寝鎮まった街も、漸く目ざめて、あちこちの家で灯がちらつき、がたがたと起きだしてきた。
宇治の町のどまんなかなのである。
こうした場合は、野盗たちに分がない。深夜を選んだ襲撃は、人目をさけるためなのだから、町の者が起きだしてきたら、もう、どうにもならない。
〈ひけ、みんな、ひけ〉
首領格の男が、命令した。
この男だけは、軒下に佇み、両腕をこまぬいて、斬り合いのさまを見まもっていたのである。

四人と斬り結んでいた生き残りたちは、この命令を受けるや、待っていたように、さっと、身を翻して逃げだした。
逃げ損った者もいた。斬り合いの最中で、身を転じるのは分が悪い。山中才四郎と斬り合っていた男はさっと刀を引いて、身を転じた際背後に一太刀喰った。たたっと、突んのめるところをさらに一太刀。もろに背中を袈裟に斬られている。
普通、斬り合いから転じるには、踏みこんで攻勢に出ると見せて、身を転じる。横に飛び、あるいは、一転して走る。巧みな奴は、猛然と斬り込んで、相手が、受けかねて、身をひらいたところを、そのまま突き抜けて走る。
しかし、首領の命令に応じることは、すでに相手がその動きを察知するから、どちらにしても不利は免れなかった。こうして逃れることの出来たのは、四、五人にすぎなかったのである。
地上には、死体が転がり、重傷のやつは、凄まじい呻き声をあげ、軽傷のやつは、なんとかして、這いずり逃げようとしていた。
血ぶるいして、ふりかえった新九郎は、
「息のあるやつは何人だ」
「はあ、五人……」と、数えたが、「いや、二人は、もう断末魔じゃ、ものがいえるのは三人」
「よし、そやつらを、糾明するのだ。ただの野盗にしては

面妖なことがある」
近所隣から人々が起きだしてきた。
こうしたことには馴れているのか、刀をひっさげた者や、槍をつかんできた者もいる。
「強盗かいの」
「そやつら、どこへ行った？」
もう、逃げてしまったあとだと知って、男たちは、残念がった。
「そら、惜しいことをした」
「二人や三人、やっつけてやるのにのう」
屋根の大石で潰された者、斬られた者。惨憺たる有様だった。
これだけの死体を残して、野盗たちは逃げ去っている。逃げ去ったと知って、男衆たちは強がっているのだ。
そんな連中の稚気を新九郎は笑って、
「さあ、もはや済んだのだ、みんな引き取ってくれい」と、町衆たちに手を振って、「騒ぐことはない。さあ戻るがよい」
弥次馬がいては、何かとうるさい。第一、この野盗たちを取り調べなければならないのだ。
町衆たちを追い帰してから糾明にかかった。
〝もぐさ屋〟に襲撃してきたのなら、理由がわかる。が、かれらは、この銭屋の方に来た。屋根から見おろしても、銭屋の表と裏に忍びよっていたのである。
「死んだやつは仕方がない。息のあるやつを土間に入れろ」
新九郎の命令で、山中才四郎や荒木兵庫は、逃げ出すことも出来ずもがいているやつの襟がみをつかんで、もぐさ屋の土間に引きずりこんだ。
「水をくれてやれ」
と、新九郎が言うと、
「こやつどもにでござるか」大道寺太郎が、不服顔で、「こんな犬畜生どもに情けをかけてやることはござらん。なあ、才四」
「そ、そうじゃとも、一丁間違えば、われらが寝首を掻かれるところであった。兄貴がいたればこそ助かったのに」
「水の代りに」と、兵庫は前をまくって、「小便をくれてやろうわえ」
本気で小便をひっかけようとするのだ。
「よせよせ、これから糾明するのに、きたなくていかん」
新九郎は止めた。三人の牢人者たちは、一々することが荒っぽい。糾明するといっても、この連中にまかせておいたら、責め殺してしまうにちがいなかった。
一番、傷の浅い、腿をざくりとやられて、歩けないやつを引き据えて、
「頭巾を剝いでやれ、苦しいだろう」

新九郎は凝っと眼を見た。
頭巾をひき剝ぐと、小さな顔があらわれた。
浅黒く、乾いた褒のような顔だ。奥眼で血走っているのは、恐怖と痛みのせいであろう。その眼が、ときどき、凄まじく光る、かと思うと、悄然と翳ったりした。動揺がはげしいのだ。新九郎たちの手並みを目のあたりしているだけに、とうてい、逃げ出せるとは思っていない。
「おい。もはや、こうなったら観念した方がいい。ありていに白状するのだな」
新九郎は、静かに訓すように言った。
だが、まるで、その言葉が聞えないように、その男は黙りこんでいる。
「おい！」兵庫が、肩を小突いた。「口がきけねえわけじゃあんめいが」
「……」
「饒舌った方がいいぜ。どうせ、いつまで、ダンマリでいるわけにもゆくめい」
「……」
「こ、この野郎、しぶとい」
気早に兵庫は刀の柄に手をかけた。
「よせ、斬るのはまだ早い」と、新九郎はおしとめて、ぐいと、男の顎を鉄扇で持ち上げた。「うぬも、なかまの掟があっては容易に口を割れまい……が、おれの方は、是が非でも聞かねばならぬ」
「……」
「その口をひき裂いても、だ」
男は口を動かした。が、依然として、黙したままであった。
「ふむ、おれの言葉を嘘と思うたようだな」
新九郎の語気は、静かであったが、その表情といい、自信に満ちた眼は、軽々に威しをするとも思えない。
だが、男はすっかり覚悟を決めているのか、動揺を必死に押えているのだ。
「よかろう、信じ難いとみゆる」
新九郎は微笑して、「あれを持ってこい」と、顎をしゃくった。
「は？　あれとは」
山中才四郎が、けげんな顔をする。
「お丹、鹿の角が、あったな。あいつを持って来い」
銭屋の見世棚に、鹿の角の銭掛けがあった。巨大な、鹿の角に、銭が百文つなぎずつ、ぶら下げてあったのをおぼえている。理由がわからぬながら、お丹は言われた通りに、銭屋の方に行って、鹿の角を抱えてきた。
「よしよし、見事なものだ。ちと惜しいが」
と、角の肌を掌で撫で、さすって、舌打ちしていたが、男の方へ向きなおると、

「よいか、よっくその眼をあけて見ていよ」
「……」
「そのロを、かようにしてくれる」
鹿の角と角をむずと両手でつかんだ。
鹿の角は固い。普通の樹の股の比ではない。もともと、攻撃用である。新九郎は、両手で、鹿の角を握るや、
「よく見ておれ」
と言って、さっと、両腕に力を入れた。ばりっと、音がした。
野盗らばかりではなく、大道寺太郎たち、腕にはおぼえのある連中も、ぎょっとなった。
一瞬——あり得べからざることが起った。かれらは見た。鹿の角が、あざやかに裂けるのを。
「どうじゃ」
尚も、ずずっと、裂いてから、ぽんと、野盗の膝の上にほうった。
野盗の顔色は変っていた。土色になった。
「見たか」
「……」
「そのロを、かくの如くに、裂いてくれようか」
「……」
「おれは、ただの威しはせぬ。よいな。白状せねば、うぬのロは、この鹿角のようになる」
激さないだけ、新九郎の言葉には重みがあった。
野盗は、顔をあげ、唇を顫わした。
「どうだの、話せ」
「は、はい……」
漸く、ロを利いた。
山中才四郎がおどけて、
「ほ、ロがきける。おりゃ啞かと思うたぜ」
「おぬしは黙っていろ」
と、大道寺太郎が怒鳴った。
せっかく、ロを利いたところに、邪魔を入れると、また黙りこんでしまうのではないかと恐れたのだ。
「おれを殺しに来たのだな」
ずばりと新九郎は聞いた。
「いや……」
「違う？」
「はあ……」
「おれを殺りに来たのではないのか」
「はあ」
「正直に申せ。いまさら、おれを殺りに来たことを誤魔化してもしかたはあるまい」
「……」
「うぬは、誰ぞに命令されて来たのであろう。されば、うぬを憎みはせぬ。申せ。命じたのは誰だ？　そやつの名を

申せば、いのちは助けてやってもよい」
「申しまする。おてまえを狙うたのではおざない」はっきりと、その男は言った。「目的が違いまする。おてまえほどの豪ノ者が居ると知れば、かような拙い侵入はせぬ」
黙っていたが、しゃべりだすと、意外に、饒舌だった。
新九郎が錯覚していると知ったことで、元気づいたようであった。
「ほう、おれが目的ではないとすると……」あの神人宇部が元凶と見たのは思い過ぎか。「すると、目的は、何だ。金銀か？」
ただの野盗だったのか。そのとき、もう一人の左腕を肘から切り離されて虫の息と思われた男が、ぎろりと眼をひらいた。
鹿の角をひき裂いた新九郎の膂力は、完全に、その男を威嚇したのである。
野盗にまぎらせて、希みは何があったのか。
屋根の上から、かれらの私語を新九郎は聞いている。
（――阿呆め、銭が先じゃ）と、かれらは言った。（野盗ではないのだぞ、野盗と見せかけるのが……）
そのあとは聞きとれなかったがそう言ったのだ。ただの野盗なら問題はなかった。
何者なのか？　目的は何なのか？
それを突き止めねば、安心できなかったのだ。淡白な新九郎は、いつもなら、こんなに執拗には、責めたりはしない。
「白状するか」
「……」
「どうやら、白状する気になったらしいな」
「は、はい」顔をあげた。決心したらしい。「実は、この銭屋に盗み入ろうとしましたのは……」
言いかけたときだ。突然、もう一人の男が呻いて身を起した。隠し持った小さな刃がキラリと燭の光を吸った。
「あっ」山中才四郎が、気がついて、飛びかかった。
時おそく、その小さな刃は、ぶっすりと、なかまの脇腹を刺し貫いていたのである。
「うう……ッ」
もがいて、前にのめった。
「こやつ！　何をする」
才四郎が、飛びついたときは、小さな刃物は――小さいといっても、五寸はあろう刃渡り。深々と肋骨の間から肺臓へ通っている。
「おい！」助けおこして、その鎧通しをひき抜いた。が、もう、男は、口を利く力がなかった。わなわなと、唇は動いていたが声は出ない。
「おい、何か言え、言いかけたことを言え」
「あ……」

「おい！　しっかりするんだ」
「……」
「なに、何と言った？」
唇の動きが、誰かの名を伝えたようであった。が、それはあきらかではない。そして、それが精一杯で、男はがっくりとなった。
「くそ！　もう一歩のところで」大道寺太郎が地団駄踏んで、「こうなりゃ、うぬから聞くしかないぞ、やい」
と、胸ぐらつかんで睨みつけたが、そのなかまの口を封じた男はこれに、恐れ気もなく、じろりと死魚のような眼をあげて、
「ふふふふ、何も言わぬ」
「言わしてやる」
「責めるか？　……責めるがよいわさ、どうせ、わしは、死ぬ」
左腕を肘から落されているのだ。おびただしい血があふれて、その顔はすでに死相に変じていた。

地獄谷

篝火が燃えている。神宮の森をのぞむ五十鈴河原である。
「――誰か、早よう掘り出してくれい」もう、声がかすれてしまっているが、神人宇部は必死だった。「こ、こんなざまを、町衆に見られては」
あえいで、なんとか出ようとするのだが、重い河原石に埋められているのだ。もともと宇部は痩せている。剛力ではない。とても、石をはね飛ばして飛び出す力はない。そんな苦悶の宇部の顔は汗が流れ、篝火に赤く照り映えて、ぎらぎらしている。
町衆たちは、まわりにあぐらをかいたり、尻をおろして、膝を抱えたり、頬杖ついたり、まるで、罠にかかった狐のもがくさまを見ているような目つきだった。
「助けてくれち言うてもな」
「ほうや、助けたら、あとが恐いよってなあ」「宇部はんも、やりすぎたでな。ま、しかたがあんめい」

みんな、のんびりした顔だ。
どうせ、人殺しも、石子責めもすべて、命令でやったのだから、良心はいたまない。宇部が伊勢神宮の権禰宜という権力を行使してのことだから、かれらには責任がない。
「神鹿の肉を喰うたんやでなあ」「うまいうまい言うて食いよったでなあ」「権禰宜が、罪を認めたんでなあ、この石子責めも一日でええのや、こら、楽なお仕置きやで」
「ほんま。地獄谷から突き落される……と考えたら、こない楽なお仕置きはないで」
他人のことだから、町衆たちは痛痒を感じないのだ。
新九郎の力の前に、宇部がいかにも弱く見え、これまで、こんな男に顎で使われていたことに対する反撥も作用しているかもしれない。新九郎は、この男を翌日一日だけ埋めておけ、と言った。
白昼になれば、宇治ばかりではなく山田からも町衆たちが見物にくるだろう。ほかに農民たちも、それから鳥羽の漁師たちも、ぞろぞろと見にくるだろう。
いうまでもなく、宇部の権威はいっぺんで下ってしまう。新九郎の狙いもそれだった。
宇部にしてみればたまらない。早く夜の色が消えないうちに、河原から脱出しなければならないのだ。
「こ、これ、早く石をどけてくれぬか」
もう、声も出なくなっている。水一ぱい貰えぬのである。

「あかん」と、一人が首を振って、「わしゃ、命が惜しい」
「よ、よし、それなら、お前は助けてくれぬでもよい。あれを呼んでくれ」
「誰やね」
「又次だ、又次を呼んでくれい」
又次？　と聞いて、顔を見合わしたが、その中の一人が、
「あ、あの、おんなおとこかいな」
と、合点した。それで、みんな頷いた。
「あの女男を、どないするのかいな」
「なんでもいい、知らせろ、わしが、死にかけていると」
宇部は、最後の力をふり絞って言った。もう唇は乾いて、かさかさになり、声もちょっと離れると聞えない。
「夜の明けんうちじゃで。社家町の、夾竹桃が門口にある家じゃ、すぐわかる」
一人が走り出そうとするうしろから、
「家にいなんだら、女郎屋のとこじゃ」と、叫んだ。
銭屋が襲われたのは、時間にして、そのすぐあとのことである。
この野盗騒ぎは河原にも伝わってきた。
「な、なんじゃと?!」
宇部は目を白黒して焦った。
もう居ても立ってもいられない気持になっていた。ただ白昼、醜態をさらしたくないという気持とは違っていた。

その動揺と不安が、町衆たちには、呑みこめず、
「もう野盗どもは、逃げよったらしいで」「こっちに来やせぬで、のう」「権禰宜が泣くことはないで」
そんなことを言いながら、やはり石を取り除いてくれるわけではないのだ。
「早く、又次は来ぬか」
「うるさいのう、又次、又次と、あない青いやつが、何のたしになるのかいな」
又次は、神宮の帳付けをやっている。
神宮の帳付けというのはおかしいが、神人でも領地を持っている領主さまには違いない。したがって、年貢米がある。農民だけではない。町衆は冥加金や軒別銭といって一種の税金を徴発されるし、漁師は網別代といって、一網いくら一舟いくらという税金を巻き上げられているのだ。
それらの莫大な穀物収入は、すべて神さまのものになる。神さまに仕えている神人たちの懐へ入るのだ。むろん社の改築費用もあるだろうが、それは武家でも城を改築したりするから同じことだ。
何とか理由をつけても、要するにお布施は坊主の収入、お賽銭は神人の儲け。伊勢神宮の神領は広大で、収入は莫大だ。
神人の数もまた多いから、収入が、お賽銭だけでは賄えないだろうが、神領が広いと、物や銭の収益は莫大で、したがって、算勘の道に明るい者がいる。
又次というのは、堺の商人の子で、どうやら唐人の血がまじっているらしいが、算盤が巧みだ。
算盤といっても、現在日本で使っているものではない。唐土で使われているという、上の玉が二つあるやつ。
これを細く長い指で、器用にぱちぱちやって、ザラっと、御破算にする手つきが、
「まるで、魔法を見ているような」
と、人々は呆れたり感心したりする。
それだけではなく、筆が立つ。むろん計算は、筆記をともなうから、筆も巧者になるのだろうが、そんな計算やら筆記やらで、したがって、健康にはあまりよくないのか、すらりと痩せていて、蒼白い顔をしている。
若い。まだ二十歳そこそこだろう。
宇部がこの男を指示したのは、日ごろ弟分のように、顎で使っている権禰宜だからというほかに、何か理由があるようであった。
社家町の夾竹桃のある家——そこに走っていった男は、しかし、幾ら怒鳴っても、戸を叩いても、返事がなかった。
「居らへんわい。あ、居らへんやったら、おなご屋に行けと言いよったんさ」
思いだした。男は合点して身を翻した。走りだした。来たときよりも、速力があったのは、行先が女郎屋だからだ。

女郎屋といっても、ずらりと軒を並べている。どうやって探すつもりか。

そのころ——

うつぼ屋の裏部屋で、ぱちぱち算盤を弾いている男がいた。

この男、女郎屋に来ているのか社務所にいるのか、区別がつかないような顔だ。

「ええか、私が隠している銀が二貫と三百。おまえに預けてあるのが七百四十匁」

「あれ、あのおしまいに持ってきたのは、揚げ代じゃないかえ」

女は、頬をふくらました。

掻巻を背中にかけたまま、半身を出して、草紙を読んでいるのである。草紙は、いうまでもなく、写本であり、いかがわしい男女のからみ合いの絵が描いてある。むろん肉筆だ。御丁寧に、色まで塗ってあるから、安いものではあるまい。

「そうだったかな」と、あっさりと若者はうなずいて、「すると、二十五匁をひいて……とそれから、禰宜のところに、砂金の包みがな、五百匁の包みが三つはあったけども、大分、重くなるな、やっぱ……」

「同じ重いのなら、砂金の方がええやないの、又さん」

と、女は言った。

この男、権禰宜の宇部が指名した又次か。

女郎屋で算盤を弾いている図など、まるっきり商人という感じである。

「——しめて、銀が三貫と十五匁に、砂金が一貫五百。うん、これだけあれば、堺へ戻って、商いの資本になるなあ」

「堺って……」

「知らんのかえ、和泉のくにだ」

「ああ、大和の向うにあるんだってね」

「南蛮や唐土からも船がくる」

「へえ、その船に乗ってくるのは人間かえ」

女は目を輝かせた。又次は呆れたように、算盤をがちゃっと音を立てて、

「当り前やないか。唐土の人間は一寸見には、私たちと変らんわいな」

「だって南蛮人といえば、その、南蛮やないの」

「わからんやつやな。まあ好え、ここで説明したかて、わからんやろ。そらそうと、私と行くやろうな」

「ああ」と、女はけだるそうに頷いて、「でもさあ、銀を払わないと、足が抜けないのさ」

「前借か。なんぼあるのかいな」

又次は嫌な顔をした。

若いくせに、こんなときは、眉根に皺寄せして、急に四十男になる。笑っていると十代後半のような無邪気さがあるから、童顔のせいだろうが、妙な男である。

「六百匁」

「高い」

「高くてもしかたがないやないの、それだけないと、親が」

「まあいい、払うたる」

「うれしい」

女は、はねおきて、又次にしがみつき、唇に吸いついた。全裸だと見えたが、腰のものだけはしていた。痩せがたで、乳房だけはよく発達している。

「おい、なんや、現金なやつやな。前借を払うたる言うと、そない急に……」

「あら、好きかどうかは、銭しだいじゃないか」

「そらそうやけど」

又次は女を抱きしめると、夜具に倒し、乳房に唇を這わせた。

そのとき、「もし……」と、声がした。

とんとん、と壁を叩いている。隣室からである。又次は、女の乳房を吸いかけた顔をあげた。

「なんやあれ」

「お隣さ」と、女は、情感が動きだしたところだから、面倒くさそうに、「お福さんのお客さ」

「お福。あ、今朝がた、駈け落ちそこなったそうやな」

とんとん、とまた音がした。

「もし……ちょっと話が」

又次は舌打ちした。

「しゃアない」

せっかく情念が盛り上ったところに訪問者とは。

又次は女の乳房にちょっと唇をつけた。乳首を舌の先でちょろりと舐めてから、起き上った。

「何用でござるか」

と、あらたまった口調で、衣紋をただした。

「入ってよろしいかいな」

「どうぞ」と、いうしかない。

板戸が重く軋んであいた。こういう家での板戸は、わざと厚く重くしてあったという。板戸には、花鳥が描いてあるが、煤けて黒ずんでいる。

「さあござれ」

女はふてくされたように、夜具に入ったままだ。ここは女郎屋なのである。女は〝ねる〟のが商売だ。木賃宿と間違われては困るのだ。

入ってきたのは、権平である。

「御免仕る」

きょときょとと、部屋の中を見まわして、又次を見、女を見、それから算盤を見た。その視線が何かを捜したが、

見つからなかったのか、へへへ、と権平はばつの悪そうな顔をして、小鬢をかいた。
「ええ部屋で」
「そんなことはありますまい。同じや」
「へ……ま、そうでんな」
「御用は？」
「へへっ、言い難い」
そのちょろりとした金壺眼を見て又次はいかにも頭の廻りの早そうな怜悧な眼を笑わせた。
「――金か」
「え、へへ……ま、その辺のところじゃわいな」
相手が口をきってくれたので、それから先は用意された言葉のように、べらべらと饒舌りはじめた。
「さ、左様、なんと申しても、かようなところは、金しだい。銀しだいじゃほどに。お聞き及びと思うが、てまえは、今朝がた死ぬつもりでござったは。お福となあ、想うた女と肌をぴたりと合わせ、ごくらくに旅立つほど、この世の倖せはないゆえ」
「なるほどな、人の考えはいろいろだ」
「……」
「私なら心中を止めぬな」
「ははあ、左様か」勝手が違った。権平は坐りなおした。
「ところで、わしゃ、飯も酒も食わんでも、女だけはほしい」
「そうか」
「そ、それで、今日、もう一日だけ、その、いや、半日分でもよい、その揚げ代を貸して貰えまいか」
もう恥も外聞もなかった。
新九郎が払ってくれた銀子は夜明けでおしまいである。一日中お福とからみあっていて、昼前から夜まで、いや夜中そうやっていて、まだ、明日も半日、というのだから、これは、
（色きちがいやないか）
又次は呆れて、また権平の顔を凝っと見た。
色きちがい。
どう見ても、そうとしか考えられない。又次も、若い身空で、女と駈け落ちするつもりだから、あまり、立派な顔もできないが、又次には自負がある。
（こっちは、ちゃんと算盤で弾いてんのや。計算ができてるねん、この女かて、大坂へ連れていって、イザとなったら叩き売っても、銀の三百や四百にはなる）
へたな行動ではない。前々から充分、考え抜いた上でのことだ。
その目的があったから、宇部のようないやな奴のもとでも我慢して算盤を弾いてきた。
かれの計算は、横領金銀とこの女だけではない。もっと

大きなものも含まれていた。
それは、二見ヶ浦に繋留されている船だった。神宮の船である。鳥羽、志摩にかけての、漁師たちから真珠、あわび取りの海女へも、強い支配権がある。代々のものなのであろう。それらの収獲などを、浦々をまわってかき集め、売りさばくのにも使う。神さまといっても、どうして商売は上手なのである。
（あの船を、ちゃんと、わいのもんにして……）と、又次の計画は、とてつもなく拡がっている。
とても、こう蒼白く、ひょろりとして、笑うと人好きのする童顔で、そんな大それたことを考えるとは思えない。賢そうではあるが、大盗とか姦悪とか不逞とかいう表現にはどうもそぐわないのである。権平の見た又次は、だから、ただの算勘に明るく、安手の女に惚れられ易い若者というだけだった。それも、甘いところのある男。つまり、泣きつけば、どうにかなるだろうと思った。
「如何なもんじゃろ、半日の揚げ代でええのや」
「貸してもよろしい」と、若者らしくもない、勿体ぶった口調で、「なんぼ利息つける」
「へ？」
「利息」
まさか、そんなことを言いだすとは思ってもいなかったので、権平は、目をぱちぱちさせた。若者の表情は変らない。激してもいないし、じくじたるところもない。
「ははあ、利息ねえ……」
「銭を貸し借りするには当然のこと」すらすらと言う。なるほど、とこれに反撥もできないのだ。利子なんてつけなくってもええやないか、というのは、甘え、にすぎない。
「見ず知らずの男に、利息なしで銭を貸す者はおらん」
「はあん……いや、いるぞ」
新九郎のことを思い出した。二見ヶ浦で助けられた上に、一日分のお福の揚げ代を貰った。気前よく出してくれたのだ。それも、なけなしの金を。
又次はそれを聞いて、頷いた。
「そういう話やな」
「え？　知っとるのかいな」
「話は聞いた」淡々としている。「新九郎とかいう牢人者やろ」
「うん」
「結構な人や。珍しい人や」
「……」
「せやけど、私は違うのや、珍しくも、偉くもないねん」
算盤をぱちぱちと弾いて、「人の世話をする身分やない。さ、どないする、借りるか」
「あ、ああ……なんぼや」

「利息は十ノ二、期限は三日」
十分の二である。つまり二割というのだ。
「た、高い……ま、しょないけんど」
「それで、担保は」
「タンポ？」
「何があるね」
そないもんあるはずはないやないか。そないもんがあるくらいなら、何も頭下げて頼みに来やへんわいな。
権平は、むっとしたが、ここで腹を立ててはこれまでのことが水の泡になる。第一、女のからだしか頭にないのだ。どこまでも卑屈になれる。
「何もあらへん」
「そら、どむならん」
「いや、その代りちゅうたら、何やけど、利息を十ノ三出すよってに」
「あかん」
「十ノ四」
「あかん」
「ほなら、十ノ五」
執こい。又次は呆れた。権平の女体への執着は全く異常だ。
とうとう折れた。このときだけ又次の表情が弛んでいる。
「そない言うのやったら、担保は要らん」

「ほんまか！」
「ほんまや」
だが、むろん、その代償は貰う。
「おぬし、足が速そうだ」
「うむ、まあな」又次が何を言いだすのかと、権平は怪しみながら、「足が速いよってに……どないすればええのかいな」
「担保代りだ、一丁走って貰おか」
「へ？」
「ちょいと、神宮へ行ってな、持って来て貰いたいものがあるのや」
又次は、懐紙をのべて、さらさらと絵図を書いた。算盤も字もうまいが、絵も達者だ。
権平は感心した。利れる男の上に、こないになんでもできれば面白いやろな、と思った。自分の特技といえば、すばしっこいだけだ。盗みが巧みだといって自慢にならない。
「ええか」と、又次は冷静に事務的な顔で「ここが五十鈴川、これが橋。これが神宮の境内や。入るのは、ここらがええ、浅瀬だし、森に小径がついている」
「なんや、泥棒にゆくようなものや」
「早くいえば、そうだ」

伊勢の神宮へひとっ走りして、何かを持って来い、という。これは泥棒にちがいなかった。権平が呆れたのは、この又次のような男の口から、それが出たことである。
もともと権平にしてみれば、盗みは日常のことである。乱世は盗みや殺しに罪悪感を伴わせない。生きるため必要だった。治世にあっては、道徳と法律が、これを許さないが、強い者が勝ちという時代には、道徳も法律も勝者によってねじまげられてしまう。
そうしたなかで、力のない者、土地を持たぬ者、頭の悪い者は、盗みでもしなければ生きてゆけない。
少なくとも、良心とは関係なかった。殺人にすら、良心が作用しない。ものの哀れや涙は、個人的な感情の度合いの強弱でしかないのである。
「何を盗んでくればええのかいな」
権平は、奥眼をしばたたいた。これは美味いものを前にしたときの、舌舐めずりにも似ている。
「この林の中や」と、又次はその部分に、黒点をつけた。
「このあたりに……牛のかたちをした大きな石がある」
「はあん」
「その牛石の陰に文宮が埋めてある。その文宮の中に、包みがある。革包みや」
「それを持ってくるのかいな」
「そうだ」又次は、もう一度見ろ、と言った。絵図面である。「見たか」
「ああ」
「おぼえたか」仄明りのもとだ。そういわれると心もとない。権平はまた見た。「この浅瀬を渉って、林の中を、こう行って、一町ばかりで、このへんに瘤のある大榎、それから、こっちにゆくと、椎の木で……」
「杉木立の中だから、すぐわかるよってにな」
念をおすと、又次は絵図面をとって、燭の火にかざした。めらめらと、炎があがって、うす紙は燃えはじめた。
証拠を残さないためか。なるほど、これくらい頭がまわらないと、上手な世渡りは出来ないだろう。
ところが、又次の頭のめぐりはそれだけではなかったのである。
絵図面の記憶を頼りに、権平が神宮の境内に侵入して、牛石から文宮を掘りだしたあと、中の革包みをとりだして、さらに驚かされたのである。
これほど、厳重に秘匿してあるからには、さぞ莫大な金銀が入っているだろう。
（そいつを頂戴して、ハイさようならや）と、胸算用していたのだ。
ところが、手にとってみて、がっかり。あまりに予想と違いすぎた。
「なんや、これは……」
金銀どころか、青銭でもない。

皮革は厚いし、御丁寧に、二重三重に、油紙や布で包んであるのだ。その上、紙縒で合わせ目を結んである。

だけではない。紙縒はほどくことが出来ないように、結んだところを潰して何やら書いてあるのである。

むろん、紙縒だから、切ろうと思えば小指でもできるが、二度と結べない。これなら、中味は誰にものぞかれる心配はない。

又次が、安心して、権平にとりにやったのも、そのせいだった。むりに切って、中をのぞいても、直接持って逃げる金目のものではないらしい。やはり、指示通りに持ち帰ってお福の揚げ代を借りるほうがいい。

(なんや、これなら盗みとは違うやないか)

ともあれ、持って帰るしかない。

浅瀬は、あの河原から、かなり離れたところだったが、篝火の炎と、ざわめきは、むろん目に入った。

権平は遠くの木立の中から、その様子を眺めた。

遠かったので、そして、まわりに人垣があったので、河原口の中から、首だけ出している宇部は見えなかったが、何か異常なことだということは、察しがついた。

(君子危うきに近寄らずや、さ、行こ)

もう、お福の肌が目の前にちらちらした。色呆けだと思うがしかたがない。

あんな味のよい女など、そうザラにいるものではなかった。

あれだけ血を絞りだすような快楽に浸りきっていただけに、やはり、足が重い。飛ぶように走っているつもりでも、やはり日ごろより遅い。

そのせいだろうか、権平は、ふと、誰かに尾行されているような気がした。

(跟けられている?)

ぎょっとした。尾行されているという意識には怯えがある。

が、夜になれ、夜目も利く権平だったが、その気持は、あまり、いいものではなかった。

かれは、屋並みを利用して、ふりかえって見た。下弦の月が空にある。さっきまで曇っていたのが、月が出てきたのは、幸いだった。尾行者にとっては都合が悪い。

あるいは、その動揺が、夜気を透して、伝わったのかもしれない。

(誰だ?)夜の底を透し見た。

が、動くものはない。権平は刃物を持っていないのが悔まれた。とっくにお福の揚げ代になっていたのだ。

(——気イ弱くなると、自分の足音にまで、ビクビクするのかいな)

どうやら、気のせい、と思って権平は歩きだした。急に空腹を感じた。

ところが気のせいではなかったのである。

月光の下に出てきた男がある。小兵である。凝っと権平の立ち去ったあとに佇んでいたが、ふいと身をかがめて耳を地面にあてた。

もう足音は消えている。尋常の耳には、遠くの足音は聞えない。が、この男には聞えるらしく、かすかに頭を動かしているのは、何やら合点している様子。

忍びに長けた者は、一町先の木ノ葉の落ちる音を聞き分けるという。この男にも、それほどの聴力があるのか。

すっくと、身を起すや、風のように走りだした。

権平の行った道ではない。裏道へ入った。が、方角は同じだ。車でゆけば、遠廻りでも早く着けるように、風に乗った忍者の走りは、足音に気をくばるよりも、別の道を行った方がいい。

この男の装束は、同じく筒袖軽衫袴に見えても、色合い、袖の広さ、頭巾のかぶりようも、違う。銭屋を襲った連中とは違うようである。

それにしても——

どこから権平を尾行してきたのか。何故か。権平が神宮の森から掘り出した品物が目当てなのか。

それから遊女屋へ戻ってくるまでに権平は何度か、背後をふりかえった。

もう、影は見えなかった。別の道を迂回してくるのだとは気がつかない。

うつぼ屋に戻ってくると、

「おまえさまかえ」やり手が嫌な顔をした。「また来たのかえ」

「阿呆言いな。またやない」

「何しに来なはった」

「阿呆、もどって来たのや、ちょいと、その他出しただけや」

「あかん」

やり手は、戸を立てようとする。暖簾はもうはずしてあり戸が立っている。この時代の女遊びは昼と宵がほとんどだ。夜の大退けはしたがって早かった。

「あんた、おんな屋でようけ遊んでいるくせに、きまりを知らんのかいな」

「きまり言うても」

「おんな屋はな、途中でも一ぺん出たら、それまでだアね」

やり手は黒い口をあけて、せせら笑うと鼻先でぴしゃりと閉めてしまった。

しかたがない。昨日のことがあるから強いことは言えないのだ。

裏へまわった。裏は柴垣になっている。柴垣の外には、竹の鹿柴がある。笹竹などを切ったやつを乱雑に積み上げてあるのだ。

これは犬除けと称しているが、犬はつけたりで、侵入、脱出除け。忍び返しの役目をする。塀の上のガラスの破片や有刺鉄線と同じことだ。

竹の小枝は、始末に悪い。全身が傷つくし、着物にひっかけたら破れる。その上、人間の体重がかかると音を立てる。その音のために、見つかったのだ。

お福を連れ出そうとしたときはまずかった。音を立てることよりも、その竹の小枝がからだに突き刺さり傷つく方が心配だったから、夜具をかけて、その上を渡ろうとした。夜具だけなら音がしなかったが二人の体重が乗ったからたまらない。ばりばりと音がした。竹の小枝は折れるし、ひどい目にあったのだ。

それくらいだから、一寸、外から入るのは難しい。だが、失敗にこりて、頭をはたらかした。近くの工事場から、丸木のままの樹を引きずってくると、これを柴垣にわたした。少し軋んだがかまわない。権平はその上を伝わった。

又次のところにゆくと、

「おおきに。ほなら、これが揚げ代や」

多少は色をつけてくれるかと思ったが、きっちりと半日分である。まあ、これでも感謝しなければならない。

「では、借りまっせ」

「返すことを忘れたらあかんで」

そうは言ったが、又次はべつに借用証文を書かせるほどの手間はとらない。

権平が、ほたほたして、隣室へもどってゆくと、又次は例の包みをひらいた。

紙縒はむろん、断ち切ったのである。中から帳面が出て来た。又次はぺらぺらとめくって、また算盤をはじく。その帳面の裏表紙に、一葉の紙がはさんである。ひらいてみた。そちらの方が大事だったらしい。

「なんや、それ」

と、女が首をもたげた。

「いや、さしたる仔細のもんやない」

「へえ、熊野はんのアレやないの」

「知っているのか」

「一目でわかるよ」

熊野はんとは、この伊勢志摩から南に隣接した紀州の熊野神社だ。

「熊野牛王やろ」

「誓詞だ」

「御大層なもんやね。誓文したら、もし違えたら、血イ吐いて死ぬちゅうやないの」

「そうや……」

(だから、これは財産や)

と、又次は北叟笑んだ。

だが、この誓詞をひらいているとき、コトリ、と音がし

たのである。

それは、女が首をもたげて、嗄れた声を出したので、まぎれてしまったが、天井で聞えたようであった。

さて、それだけ確かめると、又次は、また丁寧にしまった。そして、女の夜具の中へ入った。

「これで安心や」

「安心て、あれは、何さ」

「お前が知らんでもよろし」

「でも、気になるよ」

「うるさいやつやな。あれはな、神人の宇部と、なかまが書いた誓詞や」

「まあ、なかまだって？」

「ほうや、ちょっとこみ入った話やがな。ちょっと面白い儲けになる」

「どうしたのえ、これは」

「そこまで聞かんとよろし。さあたんと愉しもうではないか」

燭の灯が、なぜか揺らりとゆれて、ふっと消えた。

風が入るはずがない。

隙間はなかった。燭の灯が揺れたのは、又次が煽ったからでもない。

なのに、灯が、ふっと消えたのだ。恰も、又次が女を抱くのに、都合よく、消灯したかのようであった。

又次は、さして、気にもせず、女体に入っていったが、

「ねえ……」と、女は鼻声で、「いつ、逃げるのえ」

「夜が明けぬうちにな」

「それなら早く……」

「黙っちょれ、せっかくの気分が削がれるがな」

「でも……」

女は、金の方が気になっている。又次の性格は、金銀の感触よりも、帳面上で、収支合っていれば、それでいい。女は現実的だった。

又次は女体を抱きしめて、

「ええ肌や」

「う、う……お前さまも」

その交情のあいだに、天井板がソロソロと動いていた。隅の天井板である。ぽかりと穴があく。部屋の中も闇だし、又次や女には見えない。

この天井の穴から、するりと黒い影がおりてきた。宙にぶら下った、と思うと、ひらりと舞いおりる。音もない。塵が舞いおちるよりも軽い。その影は、まっすぐに、枕元へ行った。あの包みを摑んだ。

二人は夢中なのだ。その妖美な姿態にも、この忍びの影は、何の興味も動かないようであった。包みを摑むと、またもや天井の穴へ——するりと吸いこまれるように消えている。

そして、ずれた天井板はまたゆるやかに、元通りになった。

又次は女の肌の中に没している。白い肌が蛇のようにくねくねと動き、ときどき耐えきれぬようにうち顫えた。

間歇的な声を弄らせて、女は身をのけぞらせ、又次の頭をつかんで唇を貪るかと思うと、おのれの乳房に押しつけて、下肢をからめる。

「あ、もっと、あ……死ぬ……」

ひぃィと、女は笛を吹くように悲鳴をあげた。

〈殺してやろうか〉

どこかで、声がした。

又次には、聞えた。

女が〝死ぬ〟というときは忘我の境だ。もう、自分が何を言っているのか、どんなことをしているのかわからなくなっている。

女の恍惚は、咫尺を弁じない。耳も聞えない。自分が言っていることすら聞えないし、認識もないのだから人の声など聞えるはずもない。

死ぬ、殺して！　絶頂感の中で叫んだ言葉に対して、これは返事だった。

〈殺してやろうか〉

嘲りを含んだ声である。

「……?!」

又次は、女体から離れた。

〈誰かいる?!〉

隣室からの声かと思ったが、それにしては、はっきりと聞えた。

〈誰が？〉

又次の頭の廻転はいつになく鈍っていた。女体にとろけた直後なのだ。まだ濡れている。ありあう布で、素早く拭いながら、又次は刀を摑もうとした。

ふふふ……と、闇は忍びやかに笑った。

〈よせ、いまさら、遅い〉

明らかに、こちらを見ている。どこにその眼があるのか。こちらからは何も見えないのだ。

「おいッ……きさま、何処に」

又次は焦立った。

相手はこちらの一挙手一投足を見ていて、こちらからはまるっきり影もつかめないとは、何という腹立たしさだろう。それも、こちらは、遊女を抱いたばかり——この痴態を見られていたのか。

かっとなった。下帯だけはした。が、着物を着ているひまはない。

燭台をひきよせて、火をつけようとしたが、こんなときにかぎってなかなかつかないのだ。燧石が湿っているように、火花が出ない。漸く出たと思ったら付木がない。そこら中探して、小さな炎を燃やした。付木の青い炎を、燭台の灯芯にうつす間も、手がぶるぶる顫えている。

にくい相手は、それも皮肉な眼で眺めているのだ。

〈いまさら、灯をともしても、詮ないが〉

「誰だ！」

〈名乗っても知らんがの〉

小莫迦にしたように、また低い笑いが洩れた。

灯が点ると、部屋の中は、さっきのままのたたずまいを見せた。

少しの変りもない——

いや、違った。

「あっ、帳面が！」

無い。忽然と消えていた。せっかく権平を使嗾して、神宮の牛石の下から掘り出させた秘密のものである。

「えっ、帳面……どうしたのかえ」

女は、漸く、正気にかえって、寝ぼけたような声をだした。

「ない、奪られた」

「そんな、いまさっきまで……」

「うぬ！　帳面を！」

それに影の声が追加してくれたのである。

〈誓詞も、だ〉

まるで愚弄されている。女は、脅えて、身を悚めた。

「あれえ、あの声は」

どこに居るのか、どこから聞えてくるのかわからない。

忍びのワザには、〝木霊返し〟なるものがある。木霊が返ってくるように、遠く離れた方から、声がくる。

身を置いているところと違うのである。声は別の方から聞えてくる。声の使いわけ、息の出しかたで一人で二人と思わせることが出来る。

その巧みなワザにあしらわれると忍びノ者という存在が、人智を超えた〝魔性〟に見えてくるのである。

忍びの巧者は、このワザを駆使して、一人で三人の声を用い、惑乱せしめることがあるという。

だから、あの怪しの影が、天井から出てきて、天井裏に隠れたことを知らぬ又次には、全く、どこに居るのか、見当もつかないのだ。

〈ふふふふ、探すだけ無駄だ〉

と、影の声は陰気な声で笑い、

〈誓詞は預っておくでの〉

「かえせ」

〈いずれ、用が済んだら、な〉

「うむ……誰だ、一体」

〈いずれ、わかる〉

天井に居るとは思えなかった。

床下にいるように聞え、又次が床下に刀を突き立てよう

とすると声は壁の向うから聞えた。
「ちっ、うぬ……なんのために、そないことを」
敵対できないと知って、又次は愚痴が出た。
〈おぬしと、同じじゃわい〉
「なに?!」
〈儲けのためであろ〉
見抜いているのだ。
〈誓詞の名前は、おぬしではないわな〉
「……」
〈起請した方も、される方も〉
「……」
〈すりゃ、この誓詞をおぬしが隠していることは、つまりは、二人を威して儲けるためではないかいの〉
「くそ!」
〈おぬしが儲けるより、おれの方が一枚上、悪いが、こっちが儲けさせて貰うで〉
その忍者が、権平のあとを尾行して来たものとは知らぬ。忽然として、入って来て、帳面と誓詞を盗んだ。その事実は、又次を混乱させた。
自分がすぐれていると思いこんでいる者は、一つ蹴躓くと、かえって駄目になる。
又次がそれだった。算勘の道に明るいという自認はその他のことにも、衆にすぐれているという自負を生みだしていた。神宮に仕える身分の低い者として、小莫迦にされながら、しかし、(おれはいまに偉くなる)という思いが強烈だった。大分限者(大金持ちのこと)になってみせる。
そのためには、いまが雌伏のときだと思った。だから、神人宇部の召使いのような立場に置かれても黙々と、目的に向って、ひとり、算盤をはじいていた。
もともと、又次には〝大宮司になろう〟などという気持はない。
宗教の欺瞞性に気がついていた。
神というものを信じなかったのではなく、〝神社〟という伝統的存在と、それにまつわる形式が人々を支配する力——それを怖れた。
神は人々の心にすむ。形式を借りることはなかった。況や、神頼みしたい弱い人を食い者にして寄附を強要したり、神示をふりまわして、庶人を脅迫する力、というものを目のあたり見て、
(まともな人間のすることじゃない)と、思った。(商売の方が、まだ罪が軽い)
かれが神宮からくすねた金はどうせ、庶人から神威をかさにきて、マキあげたもの。
(神人どもが、私財を増やし、妾を飼ったり酒を喰ったりするかねだ)
かれが腕一ぱい、銀銭を抱え出してもどうということはない。
又次は自分の計画にむかって、着々と、歩んできた。宇部に何といわれても、莫迦にされても、痛くもかゆくもなかった。
資本が出来さえすれば、堺にもどって、大きな商いが出来る。明国との交易が出来るように、船をあがない、大海に乗り出す。堺にかぎらない。周防の山口でも、筑前の博多でも、異国との交易をしている。
又次の夢は大きくふくらんでいたのである。奇怪な忍者の行為は、この夢に水をかけるものだった。
「おい!」
相手が、手強く、とても歯が立たないと悟ると、又次は戦法を変えた。そのへんのところは、早い。若いだけに、変り身が早い。
「おぬし……」
と、影へ呼びかけた。
「誓詞をどうする気だ。儲けるというのならば、二人でやったほうがいい」
返事がなかった。
「おい!」
〈……〉
「どこにいる」
〈——ここにいる〉
「どこだ?」
〈ここだ〉
依然として、忍者は、居場所を明かさない。ここといっても、その声は、下から聞えたり、かと思うと、金屏風のうしろから聞えるような気がする。
焦々してきた。こちらが、妥協案を出しているのに、相手は平気で突っぱねているのだ。
「おい、二人でやろう、といっているのだ」
〈……〉
「その方がいい。おぬしが、誓詞をふりまわしたところで」
〈なんだ〉
「まあ、あんまり、うまくゆくまい」
〈ゆくわい〉
「第一、その誓詞は、どういう意味のものか知っているのか」
ふふふふと、陰気な笑いが、風のように揺れて、
〈知っているから、貰うた〉
盗んだとは言わぬ。又次は、また、ひるんだ。
そのひるみを突くように、忍びの声は、
〈二人でやるとは、虫がいいわの〉
「なんだと!」
〈いくらか、お裾分けして下されと折り入っての願いなら、

聞いてやってもええ〉
又次はぎりぎりと歯がみしたが、どうにもならぬ。
その又次の落胆を見おろしたように、
〈どうじゃい、返事がないなら、おりゃ、去ぬぞ〉
「ま、待て。そ、それなら、そのようにしてくれ」
屈辱に耐えながら、言ったとき、
「又次さん、お居でかえ」
女の声が、板戸の外でした。
ふいだったので、又次は、息を呑んだ。
「だ、誰だ！」
「又次さんに、お客さ」女の声は、面倒くさそうに、「呆れたね、おんな屋に、いまごろ訪ねてくる、阿呆がいるから」
「客？　……」これにも驚いた。「客など、おれに？　おれに逢いにか」
「あいな。用があるだと」
「誰だ」
「牛飼いの田茂次さ……」
田茂次なら知っている。やはり神宮の使用人である。
「いまごろ、どうしたのだ」
「へえ、宇部が……」
と、田茂次の声がした。
「宇部？」

又次は眉をひそめた。こんな夜中に、宇部が何を言っていたのか。
（ひょっとすると……）あのことか。
忍者が奪った誓詞。神宮の森の中に隠してあったあの誓詞を、権平に掘り出させたことを、（悟られたのか？）そうだとすると、いよいよ、又次は、こうして、女の肌を抱いてはいられない。
（逃げなければ）
しかし一応、事情を聞いてからのことだ。若いが、糞度胸はすわっている。
又次は、女を見た。ちゃんと帯をしめろと、けわしい視線に、女は頬をふくらました。
（なんてえ夜だろ、へんな奴が来たり、へんな男に、忍びこまれたり……ああ、いやだいやだ）
そんな女の気持など、まるきり又次は無視して、
「田茂次、いいから入ってくれ」
「へえ」そろそろと、板戸をあけて、あの男が入ってきた。
「社家町の方に行ったんですがねえ、お留守だったで」
「そんなことはいい」ちらっと、焦立ちの眉をひそめて、
「――何の用だ」
「へえ」
田茂次は、じろじろと、無躾に、女の方を見ている。
「おい、宇部さんが、何か」

「へえ、河原でな」
「河原？」
又次は、あのリンチのことは知らない。況や、宇部が、逆に河原に埋められたことを知らぬ。
「呼んで来てくれと」
「おれを？」
「へえ、そないわけや」
田茂次は、頬をなで、にやりとし、あわてて鼻の下をこすった。
田茂次の頭では、ことの次第を説明するのは骨だった。難しい。
「宇部さんがよ、埋まっているんでな」
「なんだって？」
「石の中にいるがな」
ますますわからない。
「とにかくや、来ておくんなはれ」
「河原に」
「そやないと、宇部さんが死ぬでな」
宇部が死ぬ。死んだ方がいいやつだが、それでは、又次が困る。
もう少し生きていて貰わないと儲けがフイになる。
「どうしたというのだ」
田茂次の話が判然しないだけにこれは行くしかなかった。

五十鈴川の河原にゆくと、えんえんと篝火が燃え、いまは息も絶え絶えに、宇部があえいでいた。
「た、助けてくれ」
「どうなさった」
「どうもくそもない、早よ、掘り起してくれ」
「はあ……」
又次がとまどったのは、まわりにいる連中が、田茂次をはじめ、手をつかねていることだった。
膝を抱えたり、腹這いになったり、まるで野良の一休みという恰好で、この哀れな男を見守っているだけだ。手を出そうとしない。
又次はみんなを見まわした。
「お前らは、何をしているのや」
あいまいな笑いで、男たちは、又次を見上げ、えへへと、顔をそむけたり、目を伏せた。
「見てますのや」
「見ている？　なぜ、助けない」
また、黙りこんだ。牛のように鈍重で、はっきり意志を表わさない連中なのである。
宇部の悲鳴だけが、初冬の虫のように消えも入らんばかりだった。
ふしぎなのは、お丹の態度であった。

銭屋を襲われたというのに、それほど衝撃を受けた様子もなかった。
「新九郎さまのおかげで、どうやら助かりましたえ」
あらためて、みんなに酒をふるまったり、お丹は、にこにこしながら、
「やっぱり、あたしの目は高い」と、自慢した。「新九郎さまなら、たとえ盗賊ども何百人来ようとも」
「そうはまいらぬ」
「いいえ、御謙遜。あたしの目に狂いはない」
「しかし、おかしいな」
と、新九郎には不審が残っている。
「なにが？」
「いや……」
はっきりとは口に出して言えないのである。お丹が度胸がいい、と言ってしまえばそれだけのことだが、どうも、釈然としない。
その不審を、お丹は素早く見てとったようである。
「言ったじゃないかえ」
「……」
「銭屋は、あたしのお金じゃないのさ」
「……」
「だから」
「盗まれてもかまわぬのか？」
「そういうわけじゃないけど、しかたがないでしょ」
「しかたがない？」
「ええ、今夜は新九郎さまが、お出でだったから、ええようなものの、いつも、誰もいないから」
これだけの金銀銭を置いていて誰もいないというのがおかしい。
お丹は、薬種屋の方に、新九郎を用心棒として雇ったのである。薬種屋の方は、金目の貴重薬があるといっても、銭屋の金庫からすれば、随分違う。
この矛盾にも、お丹は気がつかないような顔をしているのが、いぶかしかった。
だが、その点を問いつめると、
「あら、あたしの見世じゃないか」
と、言うだろう。
もともと、お丹はそういう気質には違いないし、新九郎を誘惑するために、用心棒の口を示したのだから、不審とばかりはいえないのである。
（だが……どうもおかしい）
納得できない。
「銭屋のことを聞こう。お前の金ではないとすると、誰のだ？」
「それは言えません」
にこりとして、お丹は、首をふった。

「聞きたいところじゃ」
「いやよ」
「いやでも聞きたい」
「腕ずくでも？」
にこりとする。面白そうに。焦らしているのだ。お丹のような女は、強い男が好きだ。自分が勝気なだけに、そんな自分を圧伏するような男にひかれるのだ。
「じゃア、腕ずくで吐かせたら」
「いいか」
新九郎は、むずと、お丹の手をつかんだ。
新九郎に腕をつかまれたとき、さすがに、びくっとしたが、お丹は艶然と、流し目に、見上げて、
「さあ、どうなさるのえ？」
「どうするかな、裸にするかな」
「いやよ、そんなのは」お丹は身をくねらせて、「いっそ、抱いて」
「馬鹿な」
「あら、抱いて下さいな、そしてうんといじめて」
「……」
「そしたら、白状する」
お丹のそれが目的だったのだ。新九郎に、ぞっこん惚れているお丹である。お丹のように、色も白く肉づきのいい女はこの時代では、極上の美人に属するのだが、その上に店を持っていて小金もある。目から鼻へ抜けるような才女ぶりも捨てたものではない。それだけに、狙う男も多い。
ところが、こういう才女というのは、自分に自信がありすぎるから、男に惚れられても、一向に嬉しくない。
かえって、冷たく突っぱねるような男に、心が動くのだ。
新九郎がそれだった。
女には飽きたという顔をしている。女に飽きたというより、かれが胸に抱いている希みが、女の肌に恋々としておれないということであろう。
何かが、新九郎を追いたてる。それは何かわからない。本人にもわからない。強いてあげれば、健康な体軀と、かれの半生の結果であろうか。名をなすところまでいっていない壮年の知性が、かれを凝っとさせない。いたたまれないものが、常に、かれを揺すっていた。
（こうしてはおれない）
何かが呼んでいる。
それは、もう一人の新九郎の声に違いなかった。
その新九郎を駈りたてるものが、そこらの男たちのように、金や女に惑溺させないのであろう。男らしいかれの態度が、しかし女には魅力的だったのだ。
皮肉なものだ。人生は得てしてそういうものかもしれない。女を欲しない新九郎に、お丹は、ますます惹かれている。

「――ねえ、いじめて下さいな」と、もう、お丹の眼は潤み、肌は、うっすらと汗ばんでさえいた。「いじめて……ね、白状しますよ」

呆れたように新九郎は、大道寺たちを見た。

「こいつめ……どうだ、おぬしたち、いじめてみるか。男にいじめられたがっているのだから」

「いや！」憤然と、お丹はかぶりを振った。「新九郎さまでなきゃ、いや」

「……」

「お前らには、一言も口をきかないよ。お丹の口は固いんだからね」

大道寺太郎たちは、顔を見合わした。

（いまいましい女だ）誰の顔も、そう言っていた。（新九郎だけが、男だと思っていやがる）

三人とも、男である証拠を見せたいが、新九郎には、かないっこないのだから、せいぜい、さばけた顔をするしかない。

「兄貴、往生するのだな」

と、大道寺太郎が言った。

「そうじゃ、このへんが、年貢の納めどきらしい」

荒木兵庫も、足の指のマタの垢をこそぎながら言った。

「ま、たんと可愛がってやるがええわさ」

山中才四郎は、涎が出そうな顔をした。

「おれたち三人分をな……」

「うるさい奴らだ」

こうなると、その手しかない。もともと嫌いではない。男ならだれでも、お丹を抱きたい。ただ新九郎には、ほかに考えることがあっただけだ。その手が一番ということになれば、そうするしかない。

「よかろう」新九郎は大きく頷いた。「おぬしたちは、はずして貰おうか」

「へえ」と、三人は顔を見合わして、「隣の部屋にいるさ」

「声が聞える」と、新九郎は、お丹を見た。「こいつらに小遣いをやってくれ」

「え、お銭かえ」ちょっと、鼻白んだが、もうお丹の肌はうずいている。「さあ、あげるよ、鼻っ欠け女でも買いに行っといで」

小粒銀を渡して、手を振った。

三人は、それだけ貰うと、ほたほたして、出ていった。

「やれやれ、邪魔者がいなくなったよ」

お丹はからだ中に色香を湛えて、新九郎ににじり寄った。

「戸閉りはしたか」

「ああ、大丈夫」

と、いう言葉も、語尾がとろとろに濡れてくる。

「ねえ、新九郎さま、夜の具はこちらよ」

寝所へ誘うお丹は、もう色情狂のようであった。

そのからだを、新九郎はひょいと抱きあげた。

「美い女だぞ、お丹」

「うれしい、新九郎さま、あたしもう……」

濡れていた。あまりにも濡れすぎていた。新九郎の太い指がそこをまさぐると、女の襞は生きもののように動いて、その指を吸いこもうとした。指が入ってゆくと、もうお丹は男のものを容れたように、狂いはじめていた。

「ねえ、はやく……」

「白状したらどうだ。え？」

新九郎の指は太い。半生を何をしてきたのか。乱世を生きてゆくには、生半可のことでは難しい。生きるためには、他を殺す。野獣の生存競争にひとしい時代であった。そこを逞しく生き抜いてきた男である。半生の来し方を、誰も知らない。

新九郎の指が動くと、もうお丹は、はげしいあえぎで、豊かな乳房をうねらせた。

「早く、ねえ、早く……」

新九郎は、指を二本にした。女はひきつるような声をあげた。馴れた指である。一指は奥へ入り、一指は肉襞を嬲る。もう、女の呼吸は、止るかと思われるほどはげしくなっていた。

「まだ、隠しておく気か」

「言うわ、だから、もっと……」お丹の表情は、だらしなく弛み、熱い息が洩れて、「もっと、ね、……あたし、あたしの……」

「銭屋の金さ」

「あたしのは、少し、ほんの少しよ……」

「……」

「神宮の……宮司が」

「宮司だって？」

「禰宜や、みんなが、金を出して……」

「なるほど、わかった」

そうか。そういうことだったのか。

神領ではあるが、諸国の旅人も多くくる。御神示を売り物にしている以上、直せつ的な、金貸しは表立ってできない。それで、お丹にやらせているのだろう。

「お前は、たんに使用人というわけか、なるほどな」

そうだろう、金貸しするには大金を動かさなくてはならない。

「よくわかった。それで、まあ盗賊に入られても、実際には損じゃないというわけか」

「ねえ、新九郎さま……」

お丹は快感がからだをゆるやかに浸してひろがってゆくのに、身をまかせて、うっとりとなっているのだ。

「あ、抜かないで」

新九郎が手を抜こうとするのをつと、締めた。括約筋が

生き物のようであった。自在に、お丹の情感のままに動く。
お丹の肌は、意外なほど、その反応もよく荒れていなかった。その口吻ほどには、男を知らないのではないか。男に溺れるのを拒んで、ここまで見世をやってきたのではなかろうか。
話を聞いてしまったからには、しかし、新九郎は、もうそれ以上女体を弄ぶ気はない。
(指が楽しんだな)
新九郎は、抜くよりも、逆に、つと、奥をさぐって、
「いいか?」
「いい、いい……」
指だけで、これくらい燃えるのだから、ほんもののからだを得れば、もっといい。
その期待で、お丹は白い肌を火照らせた。が、新九郎の指は、もう飽きていた。
そのことが嫌いというのではない。男なら、誰でも好きだ。女の肌も悪くはない。もしも、お丹が強情に、まだ口を閉していたなら新九郎は、からだを合わせてしまったろう。
耐えるには、お丹は、新九郎の逞しいからだに惹かれすぎていた。
かわいた年増女のからだのほうが、〝指二本で〟口をひらいてしまったのだ。

(銭屋の金は、宮司や禰宜のもの)
それとわかって、新九郎は納得した。もう納得すれば、それ以上、お丹とうじゃじゃけている閑はない。
「わかった」
と、指をひいた。
「いや!」
泣きそうな声をあげて、お丹はすがりついてきた。
「帰さない」と、指をつかまえて、「このまま、帰るなんて」
「愉しんだではないか」
「あれ、まだ、はじめたばかりじゃないか」
「そうでもあるまい、よがり声を出していたぞ」
「帰さない」
お丹の情感は、いつになく盛り上っていたのだ。
何年ぶりだろう。これだけの思いをするのは。男ぎらいの顔をしていたのも、店を狙うつまらない男が多かったからだ。こんな新九郎のような男は、二人とはいない。
指だけでも、こんなに快感を得たのに、ほんものを容れたらどんなにいいだろう。それを思うだけでも、もう、じっとりと濡れてくるのだ。
「ねえ、薄情なことしないで」
「おれはそう冷たい男ではないぞ」
「ね、ね、可哀想と思って」

お丹は、新九郎の指にむしゃぶりついた。
指である。
それが自分の快感を導いてくれたと思うと、もう、その匂いすら、うれしい。指は濡れていた。
お丹は、口に含んだ。指を貪りしゃぶって、上眼づかいに新九郎を見、身をくねらした。
その乳房が息づいている。女の唇と舌が指を温かくくるみ、新九郎も、おだやかではなくなったが、
「よせよせ、またの機会に楽しもう」
さっと、その手と顔をよけて立ち上っている。
「またの機会だ、な」
「いや!」と、裸身をくねらして、「そんなに冷たくしたら、そこらの男とみんな……ええ、あの三人としてやるから」
「そいつは、お丹の不幸になるぜ」
「待って、まだ話すことがあるのよ」
「なに?」
新九郎は片膝立てたまま、ふりかえった。
「まだ話すことがあると?」
「ええ……」お丹は裸身をこすりつけてきた。「ただではいやですよ」
「……」
「あたしを、一刻の間、可愛がってくれると約束したら」
どうしてもお丹は、新九郎の逞しいおとこが欲しいらしい。
こうやって小出しにされると、しかし、新九郎の方でも腹が立ってくる。
惚れられたのは嬉しくないこともないが、あまりにも、お丹の方が駈け引きを用いるので、いい加減じりじりしてくる。
「結構だ」
新九郎は、とうとう振りきった。いまさら、それではもう一ぺんというふうには、態度を軟化させたくない。
「その話は、とっておくがいい」
新九郎は急に、小笛のことが気になってきた。お丹の濃厚な色香にへきえきした反動だろうか。
あの清純な少女のことが強く思い出されて、
(一人きりにしておいては)
と、気にかかった。
新九郎は、さっさと支度して、外へ出た。
もう、お丹は追って来なかった。
「ちくしょう……」
そう口走っていたが、これは、もう、新九郎への愛情のせいではなく、火照った熟れ肌の始末に困ってのものだったのである。
お丹は、夜具の上に豊満なからだを投げると、その手が、

おのれの乳房を抱いてもだえていたが、もうたまらずに、下腹部へ下っていった。
「ああ、ほしい……」
そのうつつの眼に、ふうっと、灯がゆらいで消えた。闇が部屋を包み、お丹の白い肌が闇の底でうごめいていたが、一箇の影が、するすると近づいた。
〈おらではどうや〉
闇の中でそう言う者があった。
「……」
〈抱いてやろ、新九郎と思え〉
するすると影は寄ってきた。
屏風の陰からである。いつの間に、そこに潜んでいたのか。
影は、ひとり悶えているお丹の豊満な肌に近よると、下肢をとらえた。
まだ、お丹は気がつかないようであった。その昂奮と闇は、この不埒な侵入者を、意識させなかった。
下肢を両手で押しひらくと、影は顔をよせて、
〈――前からな、欲しかった〉
と、あえいだ。
〈お丹〉
お丹はうつつのうちに、その声を、聞いたことがある、と思った。

〈どこかで、どこかで……誰だったかしら?〉
「新九郎さま?」
その声に、陰気な声が反撥した。
〈おらじゃい〉
「え?!」
愕然となった。はじめて、疑惑を感じたのである。
お丹は、さめた。体をちぢめた。その瞬間、影は、またするすると、闇の底を、風が逃げるように屏風の陰に隠れている。
「だれ!!」
お丹は手に触れた掻巻であわてて、胸を蔽い、身をずらしながら、
「だれ! そこにいるのは」
ふふふふ、と陰々たる含み笑いが洩れてきて、
〈これをな、見せに来た〉
と、言った。
言下に、ぼうっと、燭がまた火を点した。
その仄明りに、屏風が浮びあがり、屏風の上部に帖りつけたものが、お丹の眼に映じた。
「あっ……」
はじめは何だと思った。が、そこに書かれたものを見、自分の字を見たとき、お丹は、ぎょっとなった。このとき、ほんとうに醒めたといえる。

「あ、それは……」
〈熊野牛王の誓詞や〉
と、屏風の陰の声は言った。
〈ある女からある男へ渡した誓詞や〉
信じられなかった。宇部が持っているはずであった。同じものを、お丹も持っている。はじめ、それを、自分の隠してあるものを盗まれたのかと思ったのだが、よく見ると違った。これはお丹から宇部へ渡したものなのだ。
〈――なんと書いてンのかいな、へへっ、盗賊のことやね〉
盗賊。さっき、銭屋を襲った盗賊のことであった。
〈銭屋を襲って金銀をすっかり頂く。そのあとで、ちゃっと山分けにしようというわけや〉
「……」
〈宮司や禰宜どもが知ったら、何ちゅうかいな〉
「……」
〈お丹のかねやないでなあ、上手に誤魔化すつもりじゃったのやなあ……あいにくじゃ。おらの手に入った〉
風のせいか。唾でつけていただけか、誓詞は、はらりと屏風の面からはずれて、落ちた。
あっと、お丹は手をのばした。
拾おうとする前に、その誓詞はするすると、床の上を滑って、屏風の陰へ入ってしまった。

「あ、それは……」
お丹が這い寄ったとき、ぐっと、手くびを握られた。強い力で、ずるずると引き寄せられた。
「あ、何をするの」
〈男と女のすることじゃ〉
お丹は無防備だった。からだだけでなく、心もそうだ。平常心を欠いていた。情念にとらわれていたところなのである。
相手を〝誰〟とあやしむより先に、〝男〟であることが彼女の抵抗力をなくしていた。
灯が、また消えた。お丹は抱き締められた。男の手は、荒々しく、恥部に触れた。
そのときである。どんどん戸を叩く者があったのは。
「開けてくれい、おれだ」「お丹どの、おれだあ」「開けてくれえ」
一人ではない。三人はいる。男は、舌打ちした。せっかくのところに邪魔が入ったのである。
闇の中で、男は荒々しく、お丹の乳房に顔をうずめ、乳首を吸った。千切られるかと思うほどはげしい吸い方であった。
どん、どん、まだ叩いている。
「おれだ、才四だ」「兵庫だ」「太郎だ、お丹……」
太郎と聞いたとき、影は顔をあげた。

「あけてくれぇ、あっちは駄目じゃった」「もう、余った女は居らんとよ」「入れてくれ、お丹、銭はかえすぞ」

とんだ邪魔が入った。影は、乳首を吸っただけが、儲けもののように、するすると、姿を消した。

むろん、誓詞も持ち去っている。

お丹は呆然としていたが、あわてて、着物をまとうと、土間へおりていった。戸を開けると大道寺太郎とあの二人が、眠そうな顔をして立っていた。

「まあ、どうして？……」お丹は胸あきを気にしながら、

「いまごろになって」

「そう言うな、何せ、女どもがすっかり売り切れじゃ」

「一人も余っちょらんのじゃよ、察してくれい」

しかたがなかった。お丹は三人を中へ入れながら、（どうして今夜は、こんなに、どまぐれるのかしら）と、思った。何もかもうまくゆかない。

宇部と組んで、銭屋が襲われたていに見せかけ、山分けにするつもりでいたのも、やり損うし、その上、へんなやつに証拠は握られるし、役に立ちそうもない、この三人が、また舞戻ってくるし、肝腎の新九郎には身をかわされてしまうし、なんだか、急に、運が悪くなったような感じだった。

海女の肌

（夜が短ければ……）

新九郎は、小笛に惹かれる心に言い聞かしている。

小笛の初々しいからだを蹂躙したい欲望も、ある程度はおさえることが出来る。その自信は、中年の男の分別であろう。

若いころのように、女がただ珍しく、夢中で貪った時代とは違う。数えたこともないが、何人もの女を識った男の余裕であった。

小笛は待っていた。寝もやらずに待っていた。

「心配でな、戻ってきた」

新九郎が言うと、小笛ははね起きてすがりついてきた。

「あたしも、眠れませなんだ」

「小笛！」

思わず、抱きあげている。その唇を吸おうとして、新九郎は辛うじて、おのれをおさえた。

唇を吸えば、そのまま、止め難くその欲望が牙を剝くことを、自身よく知っていた。煩ずりすることにとどめた。

それも、なぜか、うしろめたい。お丹を抱いたからか。肉の交りはしなかったが、あそこまでいった以上、清潔とはいえない。まだお丹の濃艶な移り香が、肌にしみついているような気がする。

「さあ、もう寝むがよい」と、新九郎は小笛を放して言った。「明日になればいいことがあるぞ」

「明日になれば？」

「そうだ、明日、な」

小笛は、うれしそうに微笑んで頷いた。

その言葉に期待したのではない。そういう優しい言葉をかけてくれる新九郎の心根が、うれしかったのだ。孤屋の一人寝の淋しさを思いやって、戻ってきてくれたのだ。親のもとを離れて、世間の冷たさを知っている小笛が欲していたのは、そんな温かい心であった、新九郎に見守られて、小笛は静かな眠りに落ちている。

（明日……）

戻ってくるまでの間に、新九郎が考えたことであった。

いまの新九郎を拘束するものは何もない。金もなく地位もなく、一介の牢人者にすぎない。ただ夢だけが胸にあふれている。着々と、その夢に向って進んでゆくのだ。

（あまり寄り道をする時間はない、だが……）

この小笛と親しくなったことが新九郎に、責任を感じさせていた。

このまま別れてしまっても、どうということはない。責任を感じることは何もないのである。理屈以外のものが、動いていた。人間だけにある感情だろうか。

新九郎は実りのなかった半生で、はじめて心の通えるものを見出したような喜びをおぼえていた。瓦礫の中をさまよったあとに、玉を見出した喜びといおうか。荒野に咲いた小さな花の息吹きだった。

「親のところへ帰るがいい」いまの新九郎にしてやれることはそれくらいだった。「志摩だと言ったな」

「はい、安乗というところ」

「よくは知らんが、あまり遠くはないな、伊勢辺りだな」

「はい」

「近くに渡鹿野という島があるだろう」

「はい」

なぜか恥しそうに答えている。

新九郎は気がついた。その渡鹿野というところは、遊び女が多いので知られている。男たちは漁に出て、留守の女たちが、旅人を客にとるともいわれている。

また、なぜか、そこは昔から、遊び女が多く、それは志摩の海賊たちが、諸国の女を拐かして来て、客をとらせたとか。あるいはまた、人買船が、諸国から、美女を買い集

めて来て、売りにくるとか。
そのどれがほんとうで、どれが不確実なのか、知らない。ともあれ、客をとる女が多いことは事実として、男たちがよく話していたので新九郎も耳にしていたのである。
それと気がついて、（いけなんだな、かような話）打ち切った。
「おれがついていってやるゆえ、安心せい」
「はい、有難うございます。でも……」
と、小笛にしてみれば、そこまで迷惑をかけていいものかと思っていたのである。
「どうもな、そなたの叔母という女」
「はい」
「薬種屋のお丹な」
「……」
「あんまり、よくないな。そなたを任せられん」
小笛自身、そう感じていた。だから、黙って目を伏せた。
「やはり、そなたは、親元に帰ったがよい。送ってゆく」
「でも、遠うございます」
「なに、すぐだ。せいぜい、五里くらいだというではないか。なんでも、神宮の裏山越して街道を南へ下れば、磯部というところへ出る」
「はい」
「それから東の方に的矢湾があって、岬の先が、安乗だと」
どこで聞いてきたのか、そこまで知っていれば、道に迷うことはない。
「な、近いではないか。半日でゆける。山路でも、楽に一日でゆけるわさ」
お丹に貰った銭がある。路銀にしても足りる。
宇治の町で朝食を食い、餅を昼食用に買った。小笛の旅支度に、笠と、着物。白衣に緋の袴では、やはりまずいのだ。
新九郎と小笛がそんな支度を整えていると、
「あ、兄貴、どこへ行くのじゃ」
あの三人に見つけられた。
「やあ、悪いところで」
三人とも揃っている。
「どうしたのだ、用心棒は」
「あかん、要らんと吐かしよる」と、兵庫がいきまいて、
「あの好色女め、わしらを男と見んでな」
「そうじゃ、男は、新九郎どの一人だと」
「わしらは、男でなくて……」
「なんだ」
「まあ、ただの人間か。人間には違いねいわな。お丹には男とは見えんとよ」
三人はじろじろと、小笛を見た。

小笛の清潔さと、お丹の艶めかしさが、まるで牡丹と野菊かひなげしの違いのようで、それが新九郎という男と並べて考えると、奇異な取り合わせだったのである。
三人は顔を見合わせて、何か揶揄したい気持が動きながら、しかし、相手が生娘だし、温和しい感じが、気さくに卑猥な冗談にひきこめなかった。
第一、新九郎が恐い。うっかり変なことを言ったら、首を捻じ切られそうであった。
「――名前ぐらい……」
と、恐る恐る才四郎が小笛のことに触れた。ちらちら眺めながら、
「よいだろう、こちら……その、兄貴の……」
しかたがない。ここで三人に見つかったのが失敗だった。こういう連れには近よらせたくなかったが、止むを得ない。
「小笛だ」と、新九郎は引き合わした。「お前らとは、性が合うまい。畑が違うからな」
ちえっと、舌打ちした奴がいる。あわてて、横をむいた。
「小笛を送って、志摩にゆく」
「へえ、そいつは、また、御親切なことで」
嫌味を言ったが、新九郎はぎろりと睨んだだけで、
「お前らは、銭屋の用心棒をしているのが、性に合っているだろう」
「そいつが、駄目なんで、断わられたので」と、兵庫は、いまいましそうに、薬種屋の方を振りかえった。「こうなりゃ、しかたがない、兄貴にくっついてゆく」
「おいおい、それは断わるぞ、何も、お前らに護衛して貰わなくともいいのだ」
「へへエ、だが、志摩へゆく道は強盗が多いそうや」
「威かしか。そうだ、お前らは、河原にゆけ」
新九郎は、宇部のことを思いだした。
「河原に？」
「あの宇部の監視だ。改悛の情があるようなら、許してやれ」
「……」
「治らぬようなら、ぶっ喰わすなりなんなり、痛い目を見せてやれ、ああいうやつは、領民の膏血をしぼって、反省しないからな。死ぬような目にあわねば、真人間にならん」
「殺してもいいか」
荒木兵庫は、獰猛な目を光らした。
「殺りたければ、やれ。おれはとにかく、志摩への二人旅だ」
三人の中で、才四郎はどちらかというと軟派らしい。無頼という点では三人とも変らないが、兵庫は気性が激しい。過去にどんなことをしてきたか、乱世は、すべてを混沌の彼方に追いやってしまっているが、

（殺る！）

と、言ったとき、兵庫の表情には、一種の快感が横切っている。残忍な血が騒ぎ立てたのか。

新九郎たちを見送って、五十鈴河原へ向うとき、兵庫はもうやたらと昂奮していた。

「あの宇部の野郎、どう料理してくれべいか、まず、どじょう髭をひっ千切って、それから首を……」

だが、河原に行ってみると、その宇部の姿はもうなかった。

昨夜の篝火のあとや、鹿の肉の骨や、焚火のあとが散らばって汚れたままになっているだけで誰もいない。

「逃げた！」

と兵庫はいきまいた。

「誰かが助け出したのじゃろ」大道寺太郎は無精髭の顎をなでながら、「あんな奴でも、一人くらいは、手を助けてくれる奴がいたわけだ」

「くそ！　惜しいことをした」

「ははは、まあ、いいさ、あんな奴のどじょう髭をひっこ抜いても、しようがない」

「神宮に押しかけるか」と、兵庫はまだ残念らしく、「このままでは、済まされん。キマリをつけぬとな。神宮の森を焼き払ってくれべいか」

「執こいのう、おぬし」

「まず社家町の家だ」

そんな兵庫を、才四郎は、にやにや笑って見ているだけだった。

一ぺん言いだしたら、聞く男ではない。それが間違っていることがわかっても、途中でやめない。狂い猪のような兵庫であった。

そのころ——

当の宇部は、社家町の家で、褥に横たわって、うんうん唸っていた。

又次に助けられて、漸く戻って来たのである。ここには、年上の女房や子供が七、八人。ほかに爺婆もいて、大家族であった。

（やれやれ、こない奴でも、みんなにしてみれば、なくてはならん親父どの、というわけか）

又次は、いままでの怨みが、尻すぼまりに、萎えしぼんでゆくのを感じた。

吝嗇で、横暴で、狡猾で、冷酷で、好色で、吝や好色なのはいいとして、ほかの性格や行動は許せない。

憎んできた奴だが、いまにも死にそうに、ひくひくしていて、子供たちが、心配そうな顔を寄せ集めているのを見ると、又次は、憎しみの壁がもろくも崩れてゆくのをおぼえるのだ。

（あかんなァ、こないことでは、大商人になれへんわ）

もっと、逞しく、図太くならなければ、と思った。

又次は宇部の耳に口を寄せて、

「お前さまの命は、今日限りや」

と言った。

「な、なんじゃと！」宇部は、かっと目を剝いた。「いま、なんというた?!」

相手が昂奮しているときは、ふしぎに冷めるのが、この又次の性質である。

蒼白い面が、水のように冴えて、うすい唇が、微笑を湛えている。唇の笑いと、しかし眸の冷たさは、異質のものだった。顔が上下にべつべつの人間から出来ているのではないかと思われるほどだった。

「怒鳴ったらあかん」と、又次はさとした。「お前さまの損やな」

「う、ううむ、又次、きさま」

「よしなされ」と、また又次は囁いた。「みんなが心配するで」

態度がもの静かだし、口辺に柔らかな微笑を湛えているのだから、妻子も子供たちも、又次が恫喝しているのがわからない。

「銭屋の一件や」凝っと目を見て、又次は言った。「銭屋を襲わせたことや……」

「……」

「証拠はあがっとるで。お丹と組んで、山分けするつもり……」

「し、知らん」

「誓詞をな、手に入れた」それで決定的であった。「熊野牛王の起請文……嘘を吐いたら血へどを吐いて狂い死ぬんやで」

「……」

明らかに、狼狽と恐怖が宇部をとらえた。

又次がこんな手段に出たのは、あの得体の知れぬ奴に、誓詞を奪われたからだった。愚図々々していたら、そやつが何かの行動に出る。その動きがない前に、又次は一歩先んじただけのものを得ねばならない。

（こっちが先に唾つけたんや、そう易々と宝の横奪りされて、たまるかいな）

どうせ、あれをとったのは、お丹と宇部から、絞りあげようという魂胆にちがいない。

「大宮司に知れたら、どないなるやろ?」じわじわと、又次は責めた。「お前さまはええがな、どうせ河原で死に損ったのや。せやけど家族が泣っきょるでェ」

「……」

「嬶どの、御子たち、爺婆どの、みんなに泣きを見せるくらいなら……」

「それくらいなら?」

「わいの口封じに、チクとわけてくれたらええ」
にこにこしながら、又次は言った。
「な、なんやて！　お前に」
「沢山やのうてええがな。ちょびッとで、ええ」
「……」
「三が一でええ」
「な、なんや、三の一も?!」
「安いもんや、な。さ、ちょこっと一筆、書いてんか」
又次は矢立を抜き出した。懐紙をひろげ、筆に墨を含ませた。
巧言令色とは、又次のような男を言うのだろう。
あわてず騒がず、巧弁を弄していつしか、相手を自分のペースに巻きこんでしまう。
もともと宇部が大それたことを考えたのも、多勢の家族のことを考えてやったのだろうが、又次は巧みに、脅かして、とうとうお丹にあてて、手紙を書かせてしまった。
簡単なものである。
——又次の申す通り、銀子をお渡し被下度……
又次がその足で、銭屋に行ったのはいうまでもない。
（善は急げ、だ）
何が善なものか。宇部が、誓詞の行方に気がつかないうちのことだ。
又次はツイていた。丁度、お丹は、宇部のところに使いを出したばかりだったのである。入れ違いになった。
怪しの影に脅やかされるし、新九郎にはフラれるし、すっかり意気消沈してしまった。
あの計画が世間に洩れたら、この土地に居られなくなる。
かなり図々しいお丹だが、この計画の挫折には、衝撃を受けている。早く、宇部と相談してあの誓詞をなんとかしなければならないと思っていたのだ。
そこへ、又次が来たのである。
宇部からの書状を読み下して、お丹は、美しい眉をひそめた。
「銀子を？」
「左様」
と、又次は端正な面を、きわめて、冷たく保っている。かりそめにも、微笑など洩らさない。
「金宮の三が一を、揃えて下され」
「さ、三が一を！」
仰天した。
お丹が目を丸くしたのへ、
「急ぎますぞ」
時が時だ。お丹は、なまじ頭がまわる。
（この男も、さては昨夜の）
と、思った。
むろん、狭い町だから、お丹も又次を知っている。その端正な容姿に、ちょっと心が動いたことがある。が、金持ち女の通弊で、又次のような男に惚れたら、結局損だと思い返した。又次のような端正な顔をした男は常識的に、計算高くて心が冷たい。
だいたい、色男に金と力がないのは太古以来の原則だし、惚れた女の方が損をする。
男に対しては、充分、警戒の念を怠らないお丹は、色男よりも、強い男に惚れるほうが、寝間でも楽しいし、金を貢がなくても済む、と経験上、信じこんでいたのだ。
「さ、急いで貰おう」
しかたがない。宇部の方が脅されているとすれば、出さねばならない。
お丹は渋々、金庫をあけた。れいの隠し扉である。
銀子を出して数えた。三分の一をとられるとなるとあとの分け前はどうなるか。
銀は重い。その重みが、そのまま、又次には、希望の証しのように思えた。
「これだけあれば、大きな商いが出来るぞ」
女の前借も払った。
「堺へ突っ走るのや」
「道中は、どっちの道を」
と、女はけだるそうに言った。遊び女をしていた女だ。足に自信がなくなっているのか。
「まかせとき」と、又次は胸を叩いて、「歩かせるようなことはせえへんで」
二人は浜辺にやってきた。夜明けの海上に、三十石ばかりの船が錨をおろしていた。
「あれへ乗るのかえ」
「ほうや。堺まで。すぐやね」
「でも、誰が漕ぐの、お前さんと二人でかえ」
「なあに、水子がいるわな。銀さえありゃ、誰でも働くわさ」
浜辺で網をつくろっている漁師に頼んで小舟を出して貰うと、船に近寄った。
〝宇治丸〟
と、はっきり読める。
「おうい、おうい」
又次は近くになると、船上へ呼びかけて、
「神宮の者だ、誰かいるか」
すぐに返事があった。
まだ寝呆けた声で、水子が出てきた。
「誰じゃい」
「おれだ、又次だ」
「おう、お前さまか、何用じゃあ」
「急な用だ、梯子をおろしてくれい」

縄梯子がガラガラと落ちてきた。
又次は案外、身軽く、これを伝わって上った。あとから、菊代が、あがってくる。
そのときには水子たちは、次々に起きてきて、三人になっていた。女があがってくることに、海の男たちは不審を感じたようである。
「あれえ、あの女……」
文句を言いたげにするのへ、
「連れだ」
と、うるさげに言い捨てた。
女というだけではない。それが船乗りたちには、よく知っている遊女だけに、眉をひそめた。その男たちを黙らせるには、かねの力しかない。
又次はそのことをよく知っている。何も言わせずに、どさりと銀の包みを置いた。
「宮司の用でな、堺へゆく」
「へえ、堺へ？」
「これを見ろ」
夥しい銀子に、まず水子たちは眼を奪われた。
「買い付ける品物があってな。急ぎだ。すぐ、出してくれ」
「すぐちゅうても……なあ」と、水子たちは顔を見合わして「船頭の弥助どんを呼んで来なくちゃあな」
「そのひまはない。急ぎだというのがわからんのけ」
愚図々々していられない。どうせ非合法だ。うまく水子たちを丸めこんで、船を出させようというのだ。
船頭が来ては、嘘がばれる。それに、誓詞が手元にないことが、お丹や宇部に知られたら、かれらも黙ってはいない。銭屋を強盗に襲撃させて、あとで山分けにしようという計画は、お丹と宇部との間で、とり交した誓詞だけが証拠だから、これがないと、二人で口裏を合わしてしまえば信憑性がなくなる。
「船頭を呼ぶひまはない」
又次は言い放った。
「誰か船頭の代りをつとめる者はないか」
「……」
「船頭の代りをつとめれば、五人前の賃銀を払うぞ」
これで充分だった。古参の連中が、申し出た。水子はぜんぶで六人いる。船はすぐに、錨をあげ、帆をあげた。
銀の力は恐ろしい。みんな、又次の持っている銀子で一ぺんに信じこんでしまった。
宇治丸が走りだしてすぐに、浜辺から、小舟が追ってきた。
これは、怒ったお丹の命令で追ってきた者たちであった。
又次が誓詞を持っていないくせに、宇部を脅した。うまうまと、銀を持ち逃げされて、お丹は、地団駄踏んでいる

のであろう。
「おーい、その船に又次が、乗っているじゃろう、おーい、その船待っちょれ」
その喚き声も、潮風に吹き払われる。
宇治丸は、白波を蹴立てて、走ってゆく。
神宮の船は、この伊勢では、地方に跋扈する群雄たちも、なるべく手を出さないようにしている。
神社や仏寺が、神人、僧兵などによって武装され、一つの豪族大名と大差ない、武力集団であるのは事実だったが、やはり、その勢力背景にある信仰が根強いものであって、神仏のタタリを信じる者の多い時代では、その効果がある。
鳥羽を遠くに見ながら、船は走った。
鳥羽には海城がある。錦城と呼ばれる海城で、大手門が北方、つまり海の方を向いている。
これは、あくまでも、海上領域を睨んでいるのだ。
以前、ここは伊勢神宮の神領だったが、いまでは、大井監物という大名が支配していた。答志郡泊浦というのが正確な地名で、そこから、
〝泊どの〟
と、呼ばれていた。
神宮の船だけは、無事に通過できる。
他の船は、関銭をとられるのである。
白帆に神に丸を大きく書き、へさきには御幣がひらひらしている宇治丸は、見張りの小舟も手をふって通してくれた。
「さて、ここはよいが、志摩に入ると、面倒になる」
又次は考えた。
伊勢のうちはいいが、志摩の海までは、神宮の威力も及ばなくなる。大王崎をまわってしまえば、全く、伊勢神宮など、洟もひっかけられない。
熊野神社の勢力が強くなるのである。
「手を揃えんといかんな」
水子六人では心もとない。
屈強の者五、六人は要る。多少の関銭を払うのはかまわないが、船から積荷、人命まで奪われてはたまらない。
乱世なのだ。法律がない。力が正義であり、法律であった。生きるためには、絶対強いことが、必要な時代。弱い者は生存を拒否される時代。神も仏も、強者の力に屈服してしまい、その弥栄を寿ぐ時代である。
神領から遠く離れてしまえば、もう追手もかからない。
又次が恐れていたのは、お丹と宇部から銀子を奪ったことの報復ではなく、水子たちをあざむいてこの宇治丸を勝手に解纜させたことだった。
その追手がかかりさえしなければ、あとは、巧弁と銀の力でどうにでもなる、と思った。
「まず、水や薪と兵糧を仕込まんといかんな」

「へえ、それと酒と」
船頭役をひきうけたのは、海坊主という異名のある行蔵という男だった。鉢のひらいた頭を、いつも剃っている。仏とは関係ない。癇性なのであろう。剃っていないと気持が悪いという。
「ほして、泳ぐときに、髪があると邪魔になるでの」
「ふむ、そない話は聞いたことないな」
「頭がつるつるしていた方が、波がよう切れるんにゃな」
そう信じて疑わない。
船に乗ったら船頭まかせだから、当らず触らずにしておく。とにかく、堺まで、運んでくれればいいのだ。
鎧崎、鯨崎の沖をまわって、菅崎から的矢湾に入ってきたのは、翌日の朝、まだ暗いうちだった。
薪水の手配をさせる一方、又次は、用人棒を雇うために、上陸した。
「あたしも行く」
菊代が、すがってきた。
「あかん。遊びにゆくのやないで」
「行きたい」
女一人では、船に取り残されるのが、心配なのであろう。荒くれた船乗りたちの中に一人残っているのは心細いにちがいない。
「ま、しょうのない奴や」
又次はあきらめて、菊代を連れて、船をおりた。いうまでもなく、銀の入った包みは手にしている。
「ちょっと、この辺で待っといてんか」
又次は、菊代を残したまま、勝手知ったような足どりで、すたすたとどこかへ行ってしまった。
(あたしを捨ててゆくのじゃないかしら)
ひがむ心は、ああいう商売をしていたら、しかたがない。
ひなびた漁村であった。入江になっているので、波は静かだし、浜には網が干してあったり、蓆(むしろ)をひろげて、割(さ)かれた魚が並んでいたりした。
金蠅がぶんぶん飛んでいる。
(どこへ行ったのかしら)
すぐにもどる、と、又次は言った。このあたりに知り人があるはずはなかった。
だが、船を捨てるはずはないのだし、したがって、自分を捨てるはずもない。そう思うと、僅かに、安心できた。
菊代はぶらぶら、その辺を歩きながら、漁師が魚を選りわけたり、舵を修理したりするのを見ていた。
浜辺に火を焚いて、海女たちが休んでいた。
半裸の女たちであった。短い腰のもの一つで、黒髪をばっさり垂らしている。
海中へもぐるときは、磯まげというのか、髪をひっつめにして根元を布切でくくっているが、陸へ上ると、濡れたのを乾かすので解いて、ばっさりとするのであろう。
なんとなく、菊代はそっちへ近づいた。
海女たちは、みんないい肌のいろをしていた。
四季変らずに、あわびとりしたり、ヤスで魚を刺したりするのであろう、若い娘も中年の女も、老婆もいたが、みんな元気そうであった。
化粧したことのない顔だが、健康さが、はちきれんばかりに、明るく、美しさを見せていた。
陽焼けしているせいか、歯の白さがきわだっていた。
笑うと一せいに白い歯並びが見え菊代は、自分の肌が恥しいようであった。
「どこから来なさったね」
と、中年の女がふり仰いで言った。
「――ええ、宇治から」
「へえ、あわびでも食べなさらんかい」
「ええ、おおきに」
菊代はうれしくなって、しゃがみこんだ。
あわびや、さざえや、串刺しの魚などが、炎にさらされている。海女たちは、酒を飲んでいる。まるで、水を飲むように、ぐいぐい飲んでいるのが、ひどく健康なものに見えたのである。
「ええ、着物だわな」海女の一人が、はちきれそうな乳房をあらわに立ち上ると、「ちょっと触らせてや」と、手を延ばしてきた。
年中はだか虫の海女から見れば菊代のような、日陰の花は、なんとなく、異質なものに見える。
顔色も冴えない。健康そのものの海女たちは、若い娘はむろん、中年の女たちも、目鼻立ちはともかく、はちきれそうな生気にあふれている。女体がぴちぴちしているだけでも、男の性欲に反応する。
(ふん、あたしの男はそうじゃないさ)と、腹の中で、菊代は反撥した。(これでも一ト晩と、ひとり寝したことアないんだ、こんな肌がいいっていう男衆の方が多いのさ)
こう思っても、やはり、目の前に、ぴんとはりきったみごとな乳房や、腰やふとももなど見ては、菊代は、やはり圧倒されてしまう。
「いい小袖だね」と、ほかの女も、裾にさわった。「こんな小袖を着りゃ、誰だってちょっとはマシに見えるわな」
げらげらと、女たちは笑った。
「ああたまらね」
と、若い女が、濡れたからだのまま、菊代の袖をつかんだり、さすったりして、
「あたいは、いっそ、このひとを抱きたいよ」
女のくせに、菊代に抱きついてきた。
小袖に焚きこめた香が、海の女をも、味な気分にするの

だろう。宇治の女郎たちは、香はいいものを使っている。たいてい、神宮から持ち出されたもので、朝廷や、豪族などから、寄進された名香を切りとってきたりする。

神人の客にしてみれば、そうやって、少しでもモテたいと希うのだろう。

いまも、だから、菊代のからだからは沈香のいい香りがする。

もっとも、魚臭いこのへんに一日いたら、いかな名香でも、消えてしまうにちがいないのだが。

「好きだよ、好きだよ」

若い女は、顔をこすりつけ、剃え菊代の胸に手をさし入れて、乳房をぎゅっとつかんだ。

強い力だった。男でも、こんな乱暴はしない。

菊代は悲鳴をあげた。

「あれ、いやだ」

だが、海女たちは、げらげらと笑い崩れて、おかしさのあまり転げまわっている女もいる。短い腰のものの裾から、内股の奥まで見えそうだが、平気だった。

「あれ、いやだったら、誰か助けて」

そんな菊代の狼狽も、面白い観物なのだろう。ほかの女たちも、立ってきて、

「どれ、どない肌かねえ」「生っ白い、ぶよぶよだろうさ」

帯に手をかけてくる。素早く解かれてしまった。小袖が肩からすべった。

健康な女たちだ。裸で暮しているのだから、健康そのものだ。笑い声も大きいし、疲れを知らない。食べるも飲むも、立つのも饒舌るのも、大仰で、騒がしい。

乳房をぶるんぶるんさせて、女たちは、菊代にしがみついてきたのである。げらげら笑いながら、口うるさく饒舌りまくりながら、菊代の帯をひき千切らんばかりにほどき、小袖をむしりとる。

「やめて、そんなこと」

菊代は暴れたが、逞しい裸の女たちにはかなわない。

女たちは、菊代の白い肌にさわり、乳房をつかみ、唇を寄せてきた。

まるで男たちのような荒っぽさだ。

「なんちゅ、白い肌だけ」「へえ、滑っこいことよう、一ト晩抱かしてけれェ」「おら、舐めさせてや」

寄ってたかって、けもののように、貪婪な欲望をむきだしにしてきた。

それ以上のことは、何もないのだろう。この浜の海女たちにしてみれば、見かけない色小袖の女が来たことで、興味を感じただけのことだ。

ただ、欲望を制御することに馴れていない。天衣無縫の海の女たちなのだ。

「おい、何をしている」

又次が近づいてきた。

「あれ、又さん、助けて」

ほっとしたように菊代は、大きな声で、

「助けてよう」

「おい、みんな、よせ」

ひき放そうとしたが、こりこりした肌は、女と思うと間違いそうに硬い。

むしろ、又次の方が優さ男なのだ。女たちは、それと知ると、にたっと笑った。又次のような美い男も、またこのあたりでは少ない。

「お前さま、この女の亭主かえ」

「まあ、そうだ」

「いい男」

「……」

「ねえ、どこから来なさったのかえ」

「宇治だ。そんなことはどうでもいい、小袖をかえしてやれ」

男だから、さすがに、海女たちも、それ以上、執こいことはしなかったが、今度は、又次のほうへ、色気の垂れんばかりの眼を集めてきた。

(これはいかん、こない女どもにつかまっていては)

又次は、内心狼狽しながら、菊代が小袖を着終るのを待っていたが、

(ほうや、この女たちなら、知っとるやろ)

と、思いついた。

「ちょっと聞くけどな、このへんに腕の立つ侍はおらんかいな」

「腕の立つ？　……」

「雇いたいのや、銭はたんと出す」

と、銀子の入った袋を見せた。

海女たちは顔を見合わした。

「強い男だって？」

又次の要求が場違いのように、海女たちは呆れたように、大仰に驚き、眼を丸くしたが、

「この浜の男なら、みんな強いよう」

「ほうや、弱い男には磯仕事なんど出来やせぬわいな」

がやがやと話しはじめたが、そのうちに、一人が、

「あれはどうやろ」と、いい、片手を顔にあてた。左目をふさいだのである。

「あ、片目かえ」「強いわな。強すぎるでよ」「片目も強いけどもよ、入道さんも強いでエ」「強いのがええのや、過ぎるのもええ」「おら、過ぎるほど、男を抱いたことはないがの」「一ぺん、やってみたいがの」「おら、色の白い男を抱きたい」「おらも」女たちは、又次を見た。舐めるような、粘っこい視線である。

貪婪なまでの好色の息吹きだった。女たちばかり集っていると、男のそれと同じように、卑猥な話になるのか。
どのからだも、女の熱気で、むんむんしている。潮風と酒の生気に浸り、さんさんたる南国的な太陽を浴びて、志摩の女たちは、あふれる精力をもてあましているように見えた。
又次が銀子の入った袋を担いで、その女に案内されていったのは、同じ浜辺だが、少しはずれたあたり、いまにも倒れそうなあばら家だった。
漁村の家は潮風にいためつけられるから、いたみが早い。それにしても、この家は酷い。柱が傾き、屋根のこけらは半ばふっ飛んで、やっと重石が押えている。
家全体が傾いて、いまにも倒れそうに見える。押えの重石が屋根にあるから、まるで、その石の重みで傾いているかのようにも見える。
「ここやね」
案内してきた海女は、その戸口までいって、中をのぞいた。戸口には、帯がぶら下っているだけであった。家の中は暗い。
外の明るい陽光に馴れた眼は、急に家の中をのぞくと、瞳孔がとまどって、何も見えない。
「入道さん」と、女は呼んだ。
返事はなかった。
「おや、入道さんは、居やはらへんのか」
「入道というと？」
「へえ、坊さん」
「……」
「生臭坊主や」
あははっと、乳房を揺すって海女は、男のように笑った。
「おもろい坊さんや、いつも、おらたちのところへ来てよ、股ぐらさのぞきこんだりするで」
それが少しも嫌ではなさそうな話しぶりなのだ。
ここら辺では、この短い腰巻を〝磯ナカネ〟という。海女たちが、中腰で仕事をしていると、背後から来て、ふいに、磯ナカネの中に坊主頭を突っこんだりする。
「あの頭で、くりくりやられるとそら、なんとも言えん好え気持やねえ」
海女は、思いだしたように、おおらかな笑い声をあげた。
その入道頭は、しかし家の中には見えなかった。
女がいた。万年蒲団が敷かれていると思ったらむくむくと動いた。
「う、うっ……うっ……」
呻き声だ。
又次と海女の声が聞えたからであろう。
病人か？　と思った。が、入ってみると、蒲団の下に、女が縛られていたのである。

猿轡を噛まされて、もがいていた。
「どないした」
「あ、このひと、お咲さんや」
全裸なのだ。二十歳は過ぎている。豊満なからだを、両手と両脚縛られて、猿轡を噛まされもがいていた。
（毛の濃い女だな）
と、又次は思った。
同情するよりも、先にそう思った。若いはちきれそうな肉体が哀れを催さなかった。
手足の縄をほどいてやると、女は夢中で猿轡をひきはずして、
「あいつ」と、喚いた。「殺してやる」
土間におりて、鎌をつかんだ。そのまま、走り出そうとするのだ。
「あれ、お咲さん、どこへ」
海女はあわてて抱きとめた。半狂乱になっている女は、何しろ素っ裸なのだ。いかに明るい志摩の浜辺といっても、海女が半裸だといっても、全裸の女体が走りまわるには、人目がありすぎる。
「放して！」
「阿呆なことを、磯ナカネくらいつけなよ」
「いいんだ、ちくしょう、あいつ羅切してやるのや」
羅切とは男のものを切りとることである。
よほど、お咲は腹に据えかねたらしい。
髪をふり乱しながら、鎌をふりまわしているお咲を、又次は呆れたように見ていた。
「あいつ、あたしのおかねをとってよ、渡鹿野へ行きよってん」
又次は外へ出た。海女は何といって女をなだめたのか、やっと一人で出てきた。女の泣き声をうしろ耳にして、又次は歩きだしている。
「何というやつや、その入道は」
「玄海いうたよ」
「玄海？　坊主か」
「高野聖やね、諸国行脚の阿呆ダラ経やね」
何でもいい、あんな悪どいことをする男なら、役に立つ。そう思って、又次は渡鹿野へ行くことにした。
「玄海和尚といえばわかるのやな」
「へえ、大入道という方がええ」
「玄海入道か」
渡鹿野は島である。漁師に頼んで、島へ渡ることにした。
「大丈夫かしらん」と、菊代は、急いで着たので、小袖が着崩れたのを気にしながら、「おなご屋に行ったら、お前さま、妙な女に……」
「阿呆吐かせ、用心棒を雇いに来たのやで。なんで、こないところの女に気ィ移すかいな」

「でも、お前さまを見れば、このへんの女、みんな、ニタニタして寄ってくるやないかえ、あたし、案じられてならぬわえ」
「ははは、いまから左様なことを言うていると……」
島は近よったときから、もう、女の匂いに満ちていた。浜辺に並んだ家に、女の小袖姿が、ちらちらする。干してある着物も、派手な色合いで、赤い腰のものなど、これ見よがしだった。
開放的な島だし、ことにこの季節だ。女たちは裸になりたいところだが、肌を切り売りするには、やはり、着物をまとっていないと、高くは売れない。
妙なものだが、そこはやはり売り物なのである。夏ものの涼しげな薄い着物を自堕落に着た女たち。帯は緋や赤の綾織りで、端に房がついているのが、派手だった。
いうまでもなく、白昼から、客を招いているのである。
「玄海入道を探している」
と、又次は、近くの女郎屋に入っていった。
「あれ、あの坊さん」女たちは顔を見合わして、けらけらと笑った。「あの、すけべい坊主なら、そこらにいるよ」
「そこらといっても」
「一軒一軒アタって御覧な」
女郎屋が何軒あるかわからない。一軒一軒、聞いてまわっていたら日が暮れてしまう。
又次は途方にくれた。
強い男を雇うために来たのだから、必ずしも玄海でなくてもいい。
ほんとうなら五、六人は必要なのだ。だが、見ず知らずの土地で、人を雇うにはどうしたらいいか。こうなれば、一人か二人でもいい。
だが、二、三軒まわるうちに、思いがけないことが起った。
「――玄海坊主、ああ知ってるよ」
と、何軒目かの女がいった。
「さっき、向いの家に入るのを見たよ」
「どの家だ」
「あの、花菱」
ダラリと柿色の長暖簾が下っていて、花菱紋様が白く浮きだしている。
「うちにも来たんじゃけど、女がたりないで、あっちにいったのさ」
「たりない？」
「ふふふふ、一人や二人じゃあかんのや」
「……」
「あの生臭坊主、女が三人やないとおもろうないちゅて」
「一度に、三人もか」
「ええ、三人裸にしてさ、そいで鶯の谷渡り……やない、天狗の鼻洗い、だとさ」
とんだ生臭坊主である。お咲を縛りあげて、ふんだくった金で、女郎屋に来て、そんな遊びをしているのか。なるほど、お咲ならずとも、鎌をふりまわしたくなるだろう。
「ふむ、おもしろいやつだな。それで、三人力だとか」
「三人力か五人力か知らんけど、なんや、強そうな男やね、大きなからだして」
その玄海入道は、いましも花菱で、乱痴気騒ぎをくり展げていた。飲んで踊って、女たちを、唇を舐めたり、乳房をつかむかと思うと、臍を見せろ、と追いかけまわして、
「さあ、みんな裸になるのや」と喚いている。
どんな過去があるかわからない、ずく入である。
「さ、早よ、みんな脱げや。脱いだり脱いだり、人間本来、裸なり、裸で生れて来たんじゃぞ」
きゃァきゃァと女たちははしゃいで、逃れようとする。それを押えつけてひき剝ぐ。そうした道程を愉しんでいるのだ。
女の一人が隣室へ逃れるように転げこむのを追って、玄海も飛びこんでゆく。何しろ、巨きな図体なのだ。
げらげら笑いながら、捕えようとする。酔っていたし、ほかのものは目に入らない。
むろん、その部屋には客がいた。客は、女を抱いていた。そこへ闖入したのだ。
この男が、少し変っていたのは普通なら、はね起きて、怒鳴りつけるか、騒ぎ立てるかするのに、じろりと、片目で見上げただけで悠々と、女のからだを愉しんでいることだった。
玄海は、見ないような顔はしていたが、ちらりと見た。素知らぬ顔なので、くみし易しと思ったのか、ふざけをやめようとはしない。
「へへへ、天狗の鼻洗い、こころみてくれるぞな、すりゃ、どない女でも、うへうへ、はァはァ、よがり泣くぞな」
「いやだよ、ひとの部屋じゃないか、放しておくれな」
その間に、隻眼の男は、ことを終えた。
女体から身を起す。女が、用意の布と小盥の湯で、客の股間を綺麗にする。
その始末も、急がせもせず、ちゃんとやらせたのである。女のほうは、何しろ、すぐわきで騒いでいるのだから、落着かない。
隻眼の男は帯をしめなおして立ち上ると、
「お寅、さっきから、野良犬が入りこんでいるようだな」
「え？　ええ……ほんに、はた迷惑だよう」
「始末するしかあるまい」
隻眼の男は、袴を穿いた。それから、玄海入道の頭を蹴った。
「おい、ずく入、死にたいか」

玄海の頭の鉢は大きい。その頭を蹴られたのだ。
「なんじゃい、何をさらす」
「何をさらすとは、うぬのこと」
「なんじゃと、拙僧を、誰だと心得る」
玄海は身を起した。広い肩幅、厚い胸、腕など、常人の二倍はある。その腕に力瘤が盛り上った。
「死にたいのは、うぬか」
玄海はぬっと立ち上った。
隻眼がぎらりと光った。
「死ね」
身をひねった一瞬、ばちりと、鍔音がした。
目撃した敵娼(あいかた)は、
「なんもしらん、ぴかっと、雷さまが光ったような気がしただけで」
抜き討ちだった。玄海の首が二尺もはねた。凄まじい噴血を、一歩ひいて、隻眼が眺めた。
「莫迦なずく入だ」
冷笑を浮べただけである。
まるで、蚊を一匹叩きつぶしたくらいにしかその表情は思っていない。
「血の掃除賃だ」
どさりと丁銀を投げて、隻眼は部屋を出た。
見世の上り框に腰をおろしていた男が、ふり仰いで、

「おぬしか？」と、言った。
又次である。
「――何だ」
又次は、あとの言葉を呑みこんだ。
（片眼の強い男とはおぬしか？）
と、聞こうとしたのである。
女たちが、一隅でふるえている。一瞬の殺人に、まるで悪夢を見ているような感じだった。
恐怖で口もきけないのは、この隻眼の兵衛という男が、日ごろは静かだが、一度、怒ると何をしでかすかわからない無気味なところがあるのを、知っていたからである。
「――兵衛というのか」
「おぬしは」
「又次。荒川又次、又次郎と呼んでくれ」
「おれは在竹(ありたけ)と申す」
在竹兵衛。
相手が名乗ったから、名乗りかえしたまでである。
それだけで、武士の礼は済んだという顔で、出ようとした。
「待て、話がある」
「話？」兵衛は唇を歪げた。「話なら、外で聞こう」
「……」
「おれは、血の臭いは好かぬ」
自分が斬ったことを忘れたかのように平然として言う兵衛だった。
（凄いやつだ）
この男なら、役に立つ。あわてて、又次はあとを追った。
その姿を見て、外で待っていた菊代が走り寄ったが、又次は一顧もせずに、兵衛に追いすがった。
「――雇う？　おれをか」
話を聞いたあとで兵衛は鼻で笑った。
「人に雇われるようなおれではないぞ」
「いや、それほどのおぬしゆえ、雇いたいのや」
ふん、とまた兵衛は冷笑した。
又次の生っ白い顔が、どう見ても、それほどの人柄に見えなかった。
浜辺には、チョロ舟などが上っている。そのかげへ来て、又次はあたりを見廻し、どさりと、銀子の袋を置いた。
「ここに、銀がある」
「……」
「これ、ぜんぶ、そうだ」
「……」
兵衛は、隻眼でちらりと見た。動じる気色もない。
（これほどの大金に、心を動かさんのけ？）
あてがはずれた。たいてい、これだけ見れば、目の色が変るはずだ。
又次自身がそうだ。だから、人も動く、と思った。乱れた世の中では、頼りになるものはない。金銀銭だけが、衣食住を与えてくれる。
官位も所詮、金で買うのだし、家来たちも、金で雇う。多勢の家来がいれば、弱い奴の土地や家や財宝を奪って、おのれのものにできる。
きわめて単純な仕組みになっている。第一、金銀がなければ、戦さしようにも、具足や馬や、刀槍や、兵糧が手に入らない。これだけの銀があれば、少なくとも家来の二百人三百人は雇える。
やろうと思えば、野伏集団もできる。それをしないのは、荒川又次郎に、太名になりたい意欲がないからだ。
かれの目的は商人なのだ。天下一の大商人になりたい。そのための資本金。大神宮で雌伏している間に、あれこれ工作して、くすねたものであり、宇部とお丹を威して巻き上げたものだ。
大商人にはなれる自信があるが、大名にはなれそうもない。人間にはそれぞれの天分がある。まるきり何もないやつは、とほうもない夢を抱くものだが、先が見え、おのれを識る者は、おのれの可能性だけを着実に追求してゆく。
又次がそれだった。商人になるため、和泉の堺へ帰る。大金を持っているし護衛の用心棒を雇わねばならない。
銀子の入った袋だけでは、在竹兵衛が顔色も変えないと見ると、やむなく、又次は袋の紐を解き、中に手を突っこ

んで、丁銀をざくりとつかみ出した。
「どうだ」
しかし、これにも、ふん、と鼻で嗤っただけである。
「要らんのか」
「――それを、ぜんぶくれるのか」
こう言ったとき、はじめて隻眼に光が点じられた。
「そ、そら無茶や」
「そうだろう、はっきり申せ。おれを幾らで雇うつもりだ」
この男が、そう言ったのは、やはり幾らかでも、丁銀を見せたことの効果があったらしい。

新九郎と小笛はこうしたことが渡鹿野で起っているとは知らず、船に乗っていた。
神宮の裏山、逢坂峠を越えて磯部に出て的矢湾のつづきである伊雅ノ浦へ着いたのが、夕刻だった。
小笛が足を痛めたので、宿をとり、朝になって、船便を探したのだった。むろん、道はあるが、船で行けるものなら、その方が楽だった。
穴川という漁村である。
客を乗せるためだけの船などないが、海産物を運んでくる。
それをつかまえて、頼んだ。積荷の間に坐ると、小笛は

済まない、と何度も詫びた。
「こんなところまで、来て頂いて」
船に乗れば、もう安心だからと言ったのだが、新九郎は、そのままでは突き放すような気がして、どうしても安乗まで、一緒にゆくといって乗り込んだのである。
「また、それを申す。こんど左様なことを申したら、ここへほうりこんでしまうぞ」
愉快そうに笑う新九郎の顔に南国の陽が当っている。
明媚な風光であり、目に愉しい景色だった。伊雅ノ浦は、まるで、瓢箪の底のようで、口がすぼまっている。両岸がせまった水路の先に、的矢湾があり、大洋に出る。
せまい水路を東に向って進むのだが、まるで迷路のようにまがりくねっていて、先方の見通しがきかないのが、川を進んでゆくようであった。
「どれくらいかかるのだ」
「ええ、安乗までは、半日……」
風のあるなしでは、違ってくる。ひき潮を利用するときは速いが、その逆だと、風向きがよくなければならない。
船頭は、櫓を使っていた。帆に風が鳴っている。が、南の風を利用して東に走るというのは、難しいらしく、船頭たちは苦心して操っているのだった。
やがて、水路を抜けたと見えてやや広いところへ出た。
ここからさらに鳥居崎をまわってゆくと、間もなく、目の前に渡鹿野島があらわれるのである。
もうここまでくれば、安乗は、近い。
「――あの、新九郎さま」
思いあまったように、小笛は言った。
「あたくしの家は、せっかく送って頂いて、申し訳ないのですけれど、むさ苦しいところですから」
そんなことを心配していたのか。
小さな胸に、余分な苦労をかけたようであった。
「ははは、案じるな。そなたの家から、礼銀を貰おうなどとは思わぬさ」
宇治での様子では、両親のことも話したくないようであった。
というのは、逢って貰いたくないのだろう。新九郎は、そんな思いに気づかぬように磊落に言った。
「ここに寄るらしいな。そうだ、あとは一本道なら心配ない。おれは、ここで降りるぞ」
小笛は渡鹿野島に上陸したくない様子だった。
そのとき気がつかなかったのだ。
なぜ、上陸したくなかったのか。小笛のように、まだ十三、四の年齢でも、生活の苦しみがあるのだろう。乱世は庶民の生活に非情な試練を齎すのである。
小笛が、身の上を多く語りたがらないのは、話せば、両親や一族の恥になるからにちがいなかった。

それをおして聞くほど、新九郎は情け知らずではない。
こうした時代だ。生きとし生ける者が、なにがしの苦しみを負っているのだ。
苦しみや悲しみを負って歩かなければならないのが、この世なのだ。殊に、業火に灼かれる戦国という時代は、苦しみの涯の希望まで打ち砕いてしまう。
せめての希望をもとめて弱い人々は、宗教へ走る。が、その宗教もまた、自ら堕して、おのれを肥やし、権力に狂奔している。救いは、どこにもなかった。
(この戦火が熄まぬかぎりはな……)
新九郎は思う。
(誰か、強大な力を持った者の出現によるしか、地上から、飢えと殺戮の地獄を一掃することはできない)
地獄の炎を消すには、なまなかの雨では、できぬ。地上を水びたしにするほどの豪雨が降らなければ。
(力だ)
すぐれた力しか、それはなし得ない。
各地の豪族大名たちが、その本来の国司たる政治能力を失ったところに、戦火が熄まぬ原因があった。
(時代は変ってゆく。いつまでも足利将軍の安逸を貪るやりかたでは駄目なのだ)
どうして、人々はそこに気がつかないのか。
私利私欲を貪る群雄たちは、戦さをすることが愉しみな

ように、闘争に月日をおくっている。
そこには、破壊のみがあり、建設がなかった。人間の営みに於ける破壊は、建設のためのものではなければならないのではないか。
（誰かがやらねば……）
新九郎は、そう考えると、腹の底から、力が湧き上り、五体に漲るのを感じるのだった。
（誰かがというより、おれがやらねばならぬ）
自らの足元から、なおしていくしかない。
小笛が、船に残ろうとするのを新九郎はひきとめた。
「何か事情があるのだな」
「はい……」
「ここは、そなたの郷里に近い」
「……」
「たとえ、いやなことは避けようとしても、また、蒸しかえされるだろう。そなたが安乗にいるかぎりな」
新九郎の言っていることが、小笛には理解されてきた。顔が蒼くなっていくのが、ありありとわかった。
「嫌なことは避けようとしても、向うから追いかけてくる」と、新九郎は言った。「避けようと思うとき、すでに、それは負けていることになる」
「……」
「負け犬は、どこまでいっても、負け犬だ。いっそ、こちらから向っていくしかない」
新九郎の自信にあふれた姿は、小笛にも曙光を感じさせたが、
「でも、駄目なんです……」
「駄目などということがあるものか、ぶつかってみることだ」
「……」
「ぶつかってみた上でのことだ。できるかできないか、保証はない。が、やらねば、一生、そこから逃れられないのだ」
「ええ」
新九郎の言わんとするところは充分にわかっている。その力も信じたい。が、何よりも、弱い心が、それを避けようとするのだ。
殆ど、引きずられたかたちで、小笛も上陸していた。
「聞こう」浜辺の日かげに腰をおろして、新九郎は言った。「決心したのだろう、その決心がくじけぬうちに、ぶつかるのだ」
「はい……」
「さア、おれの顔を見て」と、新九郎は小笛の手をとった。「顔をあげるのだ。そして、はっきりと、目を……おれの目を見るのだ」
「はい……」

明るい目である。新九郎の大きな眼玉に、小笛自身の姿がうつっている。
「な、そなたの生きてゆくうえにおれの力でできることなら、してやりたい」
「……」
「そなたは、おれの心の中に在る。さ、自信を持つのだ」
力強い男の言葉である。小笛は漸く、口をひらいた。
小笛の家は、ここから近い安乗にあるのは前述の通りだが、実の母が死んでから、後妻を貰った。それが、飲んだくれの渡り女郎で、どうにも性が悪い。
父はすっかり若い後妻にかまけて、仕事もせず、借金がたまるばかりで、とうとう、小笛を、渡鹿野の女郎に売ることに相談が決ってしまった。
小笛は、この渡鹿野島の女郎屋、〈鹿ノ家〉に連れてこられるとき、身一つ、逃げて、宇治の叔母お丹を頼ったのだった。
そうした過去があるから、あの神宮の巫女になってからでも、凝っと、宇部の横暴などに耐えていたのである。
「なるほど。すると」新九郎は頷いた。大したことではない、と言った。「その鹿ノ家に借銀がある、というのだな」
「はい」
「そなたのからだが、質になっているというわけか」
新九郎は立ち上った。
「行こう」
「え?!」
「その見世さ。話をつけにな」
〈鹿ノ家〉はすぐにわかった。この島の女郎屋のなかでは、もっとも大きな見世だった。
「主に逢いたい」
と、新九郎は、小笛を伴って入っていった。
前にも述べたように、このころの遊び女たちは、白昼から肌を売っている。
「あれ、お客じゃないの」じろじろ小笛を見て、「美い玉だね」
と、羨ましそうに言った。まるで新九郎が、小笛を売りに来たようだ。そんなふうに受けとったのかもしれない。
主人というのは、六十年配の小作りの男だった。女郎屋の亭主という感じはしない。病身らしく、話の合い間にごぼごぼ咳をしたり、何やら薬草の煎汁みたいなものを飲んでいた。
この男は、はじめから、新九郎の体軀に威圧されたように、落着かない眼で、きょときょとしている。
「借銀があるそうだな」
と、新九郎は、小笛の両親のことに言及して言った。小笛はうしろで、黙って坐っている。
「この娘のからだを質にして、貸銀をしたのは、おぬし

か」
「へえ……いえ、それは、あの、貸すには貸しましたがの」
奥歯にもののはさまったような言い方だった。
「なんだ。はっきり言って貰おう、宇治からわざわざやって来たのだ」
「へえ、実は……あの銀は、わしのものじゃないので」
ある方から借りた銀を貸しつける。娘なり若い女房なりを、身がら不拘束のまま質物にする。これだと、とりっぱぐれがない。したがって、元の銀子は、自分のものではない。損をするのは、その御方であって、自分ではない。だから、阿漕な真似はしたことがない、というのだ。
新九郎の壮軀に圧倒されて、専ら、鋭鋒を避けようとしているのであろう。
「わかった。だが、おぬしの方もそれによって儲けているわけだ」
「いえいえ、そら、もうちょっぴりで」
「悪いやつだな」
「いえいえ、そうせねば、お前さま、銀子を返してくれませぬわい」
「それァ、そうだ。ところで、そやつの名を聞こう」
「……」
「誰だ、そやつは。その大分限者は」
亭主は黙りこみ、また煎汁を飲んだ。
「おい、借銀を払わにゃならんのであろう、されば、そやつに直接かけあうぞ」
資本家の名前を、なかなか洩らそうとしなかったのは、〈鹿ノ家〉の主人としても当然かもしれない。その資本家あっての儲けだからだ。
小笛の場合はやり損っても、あとの儲けはある。こういう男はどんなに汚ないやり方をしても、資本家は大事にするのだろう。
だが、新九郎の逞しいからだと恐れを知らぬ面構えに負けてしまった。
「玄海」
と、洩らしてしまったのである。
「玄海の家へ行こう」
安乗の浜へ行って玄海にかけ合おうと、外へ出たばかりのところに、あの騒ぎが伝わってきたのである。
「玄海さんが……」「玄海さんが斬られたよ」
女たちが見世から飛びだし、客までが、帯ひろ裸で走り出てくる。
「なに、玄海が」
新九郎は小笛と顔を見合わせた。
花菱の前は、多勢の男女が群れて騒いでいた。
それをかきわけて入って見ると大入道の首が、こちらをむいていた。血まみれ首である。ぎょろり大きな眼玉が、恐怖も不安もなく、怒りとそして狼狽をあらわにして、こちらを睨んでいる。
その四肢はもう動きをやめていたが、大きなからだの切り口からどくどく血をあふれさせていた。早くも銀蠅が嗅ぎつけてきて、数匹、ぶんぶん唸っている。
新九郎は首の切り口を一瞥すると、
「ふむ」と、頷いた。「なかなかに使うな」
だいたい切り口を見ればわかるのだ。的確であった。下手なやつが斬ると、余勢で肩先を削ったり、顎を残したりする。
切り難い猪首を、これほどあざやかに斬っているのは、並大抵ではない。
「――この首が、小笛を苦しめたのだな」
新九郎はふりかえった。
そこには、もう小笛はいなかった。
殆ど一瞥もしなかったようである。戸外へ出て、胸をおさえ、肩で息をついていた。突然のことに動顚している。
その一方、長い間の重荷がおりたという気持も否めなかった。
新九郎は出てくると、小笛をふいに抱き上げて、
「ははは、これで済んだな」空を見上げて、大きく笑いを噴きあげた。「天は小笛を見捨て給わずだ。悪人の末路はああいうものだ。ははは」
小笛の眼の中で、青い空と白い雲が、嘗て見たこともないほど美しく見え、それは涙でぼやけてきた。
「もうこれで、小笛は大手をふって歩けるわけだ」
「――おかげさまで」
「安乗といったな、帰ろう。こんなところにいてもしかたがない」
「はい……」
これで借銀も帳消しになる。貸した本人がいなければ問題はないわけだ。もっとも、借銀証文はどうなっているか。そこまで新九郎は考えない。自分がさっぱりしているから、他人のことも、善意に考えてしまう。
「さあ、故里へ帰るがいい、両親も、安心するだろう」
「ええ……」
家のことを思うと小笛の眉は曇るのだった。
「ははは、もっと嬉しそうな顔をするがいい、なあに、心配なことはないさ」
元気づけて歩きだした。
この磯で、このとき新九郎と又次たちは顔を合わしている。
荒川又次郎と在竹兵衛の二人である。
「あっ」
と言ったのは又次で、

「小笛?!」
「まあ、又次さん」
二人とも顔を見合わしたまま、呆然としていた。
まるで、白昼夢を見たようであった。
小笛は巫女だし、又次は雑掌に毛の生えたような帳付け。同じ大神宮につとめていたのだから、よく知っている。
二人とも若いのに、そして、年ごろからいえば、何かありそうなのだが、そうした感情にかられることがなかったのは、小笛の性格と、又次の目的意識の故であろう。
小笛には、嘘で固められた巫女という身がいやだったし、宇部などに狙われて、つくづく神宮にいることがいやになっていた。
又次の方は銭儲けのことばかり考えているから、恋心など抱くひまがない。宇治の女を買った方が早い。あと腐れがなくて、さっぱりしている。僅かの銭で済むものを素人と関係したばかりに、身をあやまった若者を多勢知っている。
(おれは、あんな阿呆やない)
そう思っている又次は、かりそめにも巫女を想ったり、手をつけたりしたことはない。
その割り切り方は、かえって巫女の中に怨む者さえいたくらいだ。又次の、男にしては色白の端正な顔やすらりとしたからだつきに魅せられた巫女もいる。
それを冷笑しているような又次だったのである。
ともあれ、その二人が、志摩の渡鹿野で、ばったり顔を合わしたのだから、
「こら、吃驚したで」と、又次はおどけて、「小笛やな。ほんま」
「ええ、あたし。又次さんは、またどうして?」
「ちょっとな、考えがあってのことやねん。ほで、こちらさまは?」
新九郎の壮軀に目をつけた。
又次に聞かれて、小笛はちょっと迷った。言っていいものかどうか、ためらったのである。
それと察して、新九郎は自ら名乗っている。
「伊勢新九郎長氏と申す。小笛の知り合いか」
「ええ、ま、そのようなわけですねん。あ、申し遅れました、てまえは荒川又次、いや又次郎と申す」
「そっちは?」
「今度、てまえが雇うことになった、在竹……」
「待て」と、隻眼がじろりと見て、「まだ雇われるとは言うておらん」
「そないこと……」
「扶持が折り合いがつかんで雇うもくそもあるものか」
ぶっきら棒に言うと、ぎらりと刀を抜いた。手拭いで、血のりの滓を拭いだしたのである。

傍に誰が居ようと構わぬ。そんなさめた横顔だった。饒舌るのも、相手に話す、というよりは、呟くようなもの言いである。独り言のように聞える。こういう男は、相手の思惑など無視している。
他人が何を、どう思おうと知ったことではないのだ。自分が納得しさえすればいいのだから、ぼそぼそと言うのも、自分に言い聞かせているのであろう。
(変った奴だ)
新九郎は興味を持った。
「唾をかけるがいい」と、かれは口をだした。「唾をかけると血滓がよく拭えるぞ」
返事はなかった。が、在竹兵衛は、ぺっぺっと唾を刀身に吐いて拭った。
この時代、刀は、人を斬るためのものだ。
後の世の泰平の時代になって、名刀を神聖視する風潮が生れたがその必要性が、よりよく斬れることをモットーとして鍛えられ、研ぎ上げられた日本刀は、人を斬る道具としての骨頂を尊ばれたのである。
兵法に禅を結びつけて、高尚らしく云々しはじめるのも、所詮は、泰平の産物。人を斬るための刀は、よく肉を削ぎ、骨を断つことが存在価値なのだ。
後世から称う戦国時代も、まだはじまったばかりであった。兵法(剣法)とは、斬人剣であり、その使い方も〝戦場にて、斬りおぼえにおぼえ〟るのがいいとされた時代なのである。竹刀(撓え)など発明されたのも、ずっと後年のことだ。
隻眼に見て拭えたのか、さして丁寧に拭いもせず、ぱちりと納めた。
「拭いをよくかけぬと、赤錆びるぞ」
「なんの」と、はじめてのように在竹兵衛は片頬を歪げて、うすく笑った。「錆びるほど、おのれの国綱は遊んでいないさ」
新九郎は、小笛を伴って船へ乗った。安乗へ向ったのだが、このとき又次は新九郎へも雇いの手を伸ばしている。
「幾らで、おれを雇うつもりか知らんが、値段は申さぬほうがよかろう」
と、隻眼の兵衛とは異なる答えがかえってきた。
「値段やねえちゅうと……」
「何処まで行く?」
「泉州やねん。和泉堺まで」
「それみろ。おれは泉州などには用がない」
「用があっても無うとも、雇いたい。なんぼなら行ってくれる」
「なんぼでも嫌だ。おれは、気の向かぬところには足を向けぬ」
又次は残念そうに舌打ちした。

見るからに強そうな新九郎を、用心棒に雇えないのは、残念であった。この隻眼の在竹兵衛なら、銀子しだいで話がつく。が、この男一人では、いかに強くても、海賊が十人二十人でかかってきては、とても斬り払えまい。

（あと二、三人は……）

少なくとも、それだけはいる。

新九郎と小笛が、船着き場へ去ってゆくのを残念げに見送ったものだ。

新九郎は小笛を連れて、安乗へ行った。

安乗の漁師町に着くと、

「まあ、小笛ちゃん」

乳房をぶるんぶるんさせて、磯ナカネ（短い腰巻）一つの海女たちが駈けよってきた。

「まあ、お前、幽霊じゃないかえ、ほんまに小笛……」

「ほんに、きれいになってよう。以前は、うちらと同じ海女衆やったによう」

「色も白うなって、可愛らしゅなって、まあ、小笛ちゃんや」

そんな素朴な女たちに包まれて小笛はもう涙ぐんでいる。

「おせいさんに、ゆきちゃん、ちえちゃん、みんな達者ねえ」

「ああさ、こんなところにいれば達者さね。ほら、おせいさんが、ウツボ（海鰻）に食まれてさ、大騒ぎしたくらいさね」

そのおせいの手は、獰猛な海鰻の歯のあとを見せて、手がササラ（箒）のようになっている。

海女たちは、四人五人と集ってきたが、そんなひとしきりの交歓が済むと、

「これから、家へ行くのかえ」

「ええ、お父っあんやお母さんに逢わないと」

「でも、いまは、あかんで……」

と海女たちは顔を見合わした。

すっかり、除け者にされていた新九郎にも、その様子が、異様に感じられたのである。

「なぜ？」小笛も不審に思った。「ねえ、なぜ、あかんの？」

「それがなあ」と、おせいは、他の女たちと顔を見合わせて、「ちょっと一口で言えんがのう」

「言えんのう」

ほかの女たちも、口を噤んでしまった。

何を隠しているのか。海女たちは、四季、磯ナカネひとつで海へくぐって、鮑をとったり、荒布や天草を採ったり、よく働く。

このあたり、志摩の女たちは働き者ぞろいだ。

したがって、

「亭主一人ぐらいよう養わん者は、女の値打ちが無え」

と、口々に言う。

それだけの自負を持っているのだから、気性はさっぱりしているし、男勝りだ。

その女たちが、意地悪で口を噤むはずがない。小笛の境遇もみんな知っているし、小笛は、この村にいるころから、みんなに可愛がられていた。

口を噤むからには、小笛を哀しませたくないという、思いやりがみんなにあったからだ。

「お咲さんが……」と、一人が口をすべらせた。

ほかの海女が、あわてて小突いた。

「いけないよ」

「だって……隠してもおけないじゃないか」

「でも……」

それが、小笛の喜ぶようなことだったら、みんな、われ先にと饒舌ったろう。

小笛の顔色が変るのがわかった。

お咲――

小笛のそれが継母だと新九郎が知ったのは、話の途中である。

お咲というのは、あの玄海入道の関係だということを、むろん、新九郎は知らない。

「実はねえ、あのお咲さんは……やっぱり止そうよ、こんなこと言うのは悪いから」

話しはじめて、途中で止められては、気持が悪い。

「いいんです」

と、小笛は、かぶりをふった。

お咲のことは、はじめから失望している。その継母との仲がうまくいかなくて、宇治に行った小笛だったのである。だから、いまさら、お咲がどんなことをしたからといって、驚くことはない。お咲が、しかし、浮気をしていることは、はじめから、わかっていた。

その浮気の相手が、普通の者だったら、しかし、大したことはない。

「――あの玄海さんじゃねえ」

「ねえ、よりによって……」

「でも、一度、あの和尚さんに抱かれたら、忘れられないんだとさア」

「ほんとう。でも……」

誰もが玄海入道には、うんざりしていたのである。

「――玄海さんなら」

と、小笛は言った。

「さっき、誰かに」

「そうだ。斬られたらしいぞ」

新九郎も言った。

「渡鹿野島でな」

海女たちは顔を見合わせ、へえと、頷きあった。中には、

ほっとした者もいるようだ。
継母の浮気などというのは、その子にしてみれば、ことに娘には、都合が悪い。
その浮気の相手である玄海入道が斬られたとあれば、いうなれば面倒なことが片付いたわけで、娘にしてみれば嬉しいはずなのであった。
海女たちは、お咲が玄海入道に入れあげていたことを知っている。
「とにかく、さっぱりしたわけだな」
と、新九郎が気をひき立てるように言った。
「そなたの両親に逢おう」
「でも……」
「よいよい、事情が変ったわけだから」
玄海入道の死が、必ずしもお咲の境遇を変化させるとはかぎらない。
が、それほど、評判になっているとすれば、玄海が生きているならまだしも、死んだとなれば、おめおめと、この安乗には居住できまい。
それを考えたのだ。
お咲は、家にいなかった。父親だけが、ひとり淋しくしていた。
小笛の姿を見ると、顔をほころばして、立ち上ろうとしたが、よろよろと、膝をついた。
小笛が、小さな叫びをあげて駈けよるのを見て、新九郎は微笑すると、外へ出た。
海女たちが近寄って来た。
「お名前を聞かせて」
と、海女たちは、新九郎のような男には、文句なく、惹かれるのだ。
「おれの名か」と、新九郎は笑って、「伊勢ノ新九郎長氏じゃ」
「まあ、いいお名前」
「伊勢ノ新九郎さま」
女たちは、小笛に遠慮していたが、しまいには、手をだして触ったりする。
すぐに小笛が呼びに来た。眼が真っ赤だった。やはり久しぶりの再会に嬉し泣きしたのであろう。
「お父っあんがお礼を言いたいって」
「よせよせ、御礼など、おれはそなたが倖せになればそれでいいのだ」
小笛は新九郎のことをどう伝えたのか、父親はただ涙を流して何度も何度も頭を下げる。
上手口の言えない、善人らしかった。小笛の性質の善さも、この父ゆずりなのだろう。
小笛と父は、泊ってゆくように、しきりと引き止めたが、新九郎は、振りきるようにして、船へ乗った。

いつまでも滞留することは、余分な心配をかけることになる。
渡鹿野島へふたたび渡って来た新九郎は、ここで大道寺太郎らに逢ったのである。
大道寺太郎らは、一足違いにこの渡鹿野へやってきたのだった。
新九郎と小笛らしい男女が、安乗への船に乗ったと聞いて、あとを追ってきたのだ。
渡鹿野へ上ったのも、同じ理由である。
この牢人者三人の姿は、やはり目立った。
乱世を逞しく生き抜いている連中の風貌に、又次が目を止めぬはずはなかった。
宇治でも、何度か見かけていたのだ。言葉をかわしたことはない。が、三人つるんで歩いていると、どうしても目立った。
又次のような男には、かれらの無頼の行状とは、融け合えぬものがある。
〝無頼の牢人者〟が漂わしている雰囲気もそうだが、早い話、不潔だという感じだった。
蓬髪といい、垢じみた着物といい、酒浸り、女狂い、その上、
〈盗人猫か、狂気犬のような……〉
目つきで、横行している。それが気に食わなかった。
だいたい、金儲けに自信のある者は、たとえそれが、非合法でも、狂犬にはならない。人間、真っ正直でも食えないとなると、狂犬じみてくるものだ。
そういう生活を、又次は軽蔑している。
自分は、
(頭で世渡りする)
と自惚れている。
才能に自信があるからだ。したがって、大道寺太郎らの行動は、かれから見れば愚かでしかない。
一つ間違えばいのちが無くなるような行動は、すべてを銭で割り切れると考えている者には、愚かすぎるのである。
御禁制の鹿の肉を喰ったり、自ら危険に入ってゆくのを、愚かと思うだけ、世渡りの上手下手を意識している。
牢人の行動には、上手も下手もない。刀槍をもって乱世を生きる人間には、銭勘定をしている連中の方が、わからない。男が男として生きるには、闘いしかないと思っている。その違いであった。
宇部が、
「不逞の牢人狩り」
をするからと、又次にも手伝うよう命じたとき、口実をかまえて参加しなかった。
三人の牢人に対しての感情は何もない。
(阿呆らしい)と、思っただけだ。(こっちがけがしても

阿呆らし）

それだけの理由である。血を見るのも好きではない。だから、堺までの航海に、牢人者を雇おうとしているのも、自分と銀子を守るだけで、そのためには、かれらに命を賭けさせるのも平気だった。

大道寺太郎に、荒木兵庫、山中才四郎――この三人の名前は知っていた。

河原で石子責めに逢って殺される寸前、助かった、ということも知っていた。

その三人の姿を、志摩の渡鹿野で見かけた又次が、（渡り舟）と、思ったのは当然だった。

「卒爾ながら」

と、又次は声をかけた。

遊女屋の柿いろの長暖簾が風に揺れている路すじである。

「大道寺どのだな」

「――うむ……おぬしは」

三人は顔を見合わせ、それから、妙にうすっぺらな色男の顔を見た。

「てまえは　荒川又次郎」

「ふむ、名ははじめて聞くが、その顔、見おぼえがある」

と、兵庫が、まじまじと見て、「宇治で見たぞ」

「ははは、てまえも、お見かけしていた」

「そうか、やはりな……どうもおなご屋のあたりで見かけた記憶があるが」

「奇遇だな、こりゃ奇遇」

大道寺太郎は、面白そうに高笑いした。

「何が奇遇なものか」と、長い顎をなでながら、皮肉な調子で、山中才四郎が言った。「あっちも、女の町、ここも女の町。ちっと泥臭い、いやさ、磯臭いだけの違いで、同じ、女ご屋の並びということは、お互いにすけべいというだけのことだ」

「ははは、奇遇さ。好色のほどが同じくらいの奴が、逢うということがそれよ。ははは、ひょっとすると」

「同じ女の肌で、色兄弟かもしれんな」と、兵庫も、笑った。

この強そうで、単純なところも、用心棒には、申し分ないのである。

又次からすれば、あまり、頭の良いやつは、用心棒におさまらない。

謀叛をおこされては、（飼犬に手を噛まれるということもあるからな）そのことも用心しなければならぬ。

「ともかく、お近づき願いたい。そこに、酒を売る店がある。あそこで一杯やろうやないか」

「酒か、うむ」と、聞いて、太郎は目を細めた。

「おぬしが、おごるか」と、兵庫が意地きたないことを聞く。「おぬしのおごりなら、飲んでもよい」

才四郎は、気のなさそうな顔をした。そのくせ、咽喉仏は、ごくりと動いているのである。

「ははは、てまえが誘ったのだ、てまえが勘定は持つ」

と、又次は、この三人なら、隻眼の在竹兵衛と合わせて四人。まずまず、どうにかなる。

（あの伊勢新九郎といったな、あの仁が入れば鬼に金棒なのだが）

と、それだけを残念に感じながら、女郎屋街のはずれにある酒亭に入っていった。

黒潮の道

前金でくれ、と、兵庫は言った。太郎も才四郎も同じ気持である。

あとで貰う金はアテにならない。又次が誤魔化すおそれがあるというのではなく、時代がそうなのだ。たとえ、払う意志があったとしても、又次のいのちにもしものことがあったら、それまでなのだ。

「半金やな」と、又次は言った。「男と男の約束や、半金が先、仕事が済んで後半分」

理屈だ。そう言われては、三人も押せない。

「いいとも、ままいいさ」

どうせ、ここの女を抱くだけの金と酒代だけだった。

三人はそれぞれ好みの女に登楼（のぼ）った。

「やれやれ、これで四人揃ったぞ。まあ、これでどうにかなる」

隻眼の兵衛も大海老という見世に登楼っている。

ほっと一息ついた又次は、菊代を振りかえって、
「さあ、ゆっくり飲むとするか、差しでな」
「もうあたしは飲めないよ」
「そんなに飲んだのか」
「そやかて、お前さまは、商売の話ばかり」と、菊代はふくれっ面で、「ちっとも、あたしのことは考えもしないで」
「そないことないわい。さ、もう一杯ついでくれ」
酒亭の裏部屋である。銀子の入った袋をわきへ置いて、又次は、酒を呷った。
これで伊勢、志摩ともお別れだと思うと、多少の感慨がないでもない。
かれらが、遊ぶ間——半刻ばかり、一眠りしようと思った。
酒はいつもより、廻りが早かった。あとで、思い合わせると、何か混ぜられていたのかもしれない。
薬種屋のお丹に頼めば、そういう薬草をわけて貰うことも可能だったのではないか。
兵衛に呼ばれて、熟睡からさめたとき、菊代の姿がなかった。そして、銀子の袋もなくなっていた。
「あ、あいつ！」思わず叫んでいる。「くそっ……」
多くを言わなかった。舌打ちしただけであった。
「どうした」
「いや……なんでもない」

又次はそう言いながら、舌打ちした。いのちから二番目の銀子の袋をそっくり持ってゆかれたとすればそんな舌打ちくらいでは済まないはずだった。
兵衛は多くものを言わない。その狼狽ぶりをじろりと見たが、それ以上は言わず、
「船に行くか」
「うむ……ちょっと待ってくれ。ほかにも来るやつがいる」そう言い、又次は、また舌打ちした。「やっぱり、ろくな女やないわ」
（——どうせ、ああいう商売の女や、やりそうなことや）
又次は肚裡の中で笑った。
堺へ連れてゆけば、役に立つと思ったが、人の寝込みに銀子の袋を盗むくらいの女なら、あとから何をするかわからない。
かえって、性質が分明してよかったようなものだ。
（大難が小難だ）
又次は用心ぶかい。慎重だった。とられてもいいようにしていたのである。
かれが慮ったのは、菊代の手癖ではない。見知らぬ土地へ大金を持って来ては、どういう目にあうかしれない。
あれは見せ金だった。牢人者たちを雇う分だけの丁銀粒銀を小袋に別わけにして入れてきた。
ちょっとした手品である。大袋に手を突っ込んで、小袋

から丁銀をつかみだしたのである。
ほんものの大金の方は、安乗の浜辺で隠してきた。上陸して間もなく、菊代を待たせて、又次がどこかへ姿を消したのは、この工作のためだったのである。
大道寺らが来て安乗へ向おうとするとき、ふたたび新九郎と逢ったのだ。
「おっ、こりゃ兄貴」
「こんなところに居らっしゃったか」
三人は吃驚した。
「どうしたのだ、おぬしらも」
と、新九郎には意外だったが、三人は、あとを追ってきたのだから、
「やっぱり天の配剤じゃわい」
「逢えるようになっていたのじゃな」
「左様とも、切っても切れぬ縁じゃで」
この奇遇に喜んだのは又次だ。
「こなたらは、お知り合いか」
「知り合いどころかよ」
「そうとも、われらの兄貴じゃわ」
「それは好都合。なんとか口添え願いたい」
又次は抜け目がない。早速勧誘にかかった。
新九郎とて、別段、アテがあるわけではない。
ただ、堺へ行くというのは、気が進まないだけの話だった。
「おれは、どだい、商人（あきゅうど）は性に合わぬ」
「いや、こなたに商人になれと由すのではない。わしを護ってくれればよいのじゃ」
「その用心棒がな、気が進まんのだ」
新九郎がうんといわねば、大道寺ら三人も、気が変ってくる。
又次はあわてた。
「おぬしには、特別に出す」と、お丹と同じようなことを言いだした。「な、それゆえ、まげて聞きとどけてくれまいか」
「銀子を持っているのか」
「ここにはないが……安乗にあるゆえ」
その隠した銀の袋が、実は、掘り出されていたのである。
計算した通りに事が運ばないのが人生である。
にせの銀子の袋で、菊代の盗癖を発見できたのはいいが、肝腎の本物の方が紛失していたのだ。
安乗に上陸したとき、又次は急いで、銀子を埋めた。
ありあう布でくるんで、山椒の根方に埋めた。
そのあたりは、どういうわけか山椒の木が多かった。これは後に聞いたのだが、海中へもぐると、山椒ジラシといって、クラゲの一種に刺されることが多い。
その、いわば、虫除けに、山椒の葉を揉みつぶして、肌

にすりこんだり、小枝を髪に刺して潜る。
どこまで効くかは疑問だが、昔からの習慣で、そのためにも沢山植えてあるのらしい。
それはともかく、漁師の小屋のわきを裏へ入ったところ、近づいたとたん又次は、
「あ、やられた」と、叫んでいた。
一目でわかった。見おぼえのある木の根元が掘られていて、むざんな砂穴を見せていた。
「しまった！　誰が……」
あわてて、あたりを見廻したのは、掘り出したやつが、そのあたりに居るのではないか、と思ったのだ。
どうしてわかったのか。かれが埋めているところを見られたのではないか。
とすると、いまごろ、その辺にまごまごしているはずはない。又次は、穴のところにいって見た。砂に触った。まだ湿りがある。穴を掘って、さしたる時間を経ていない。
「畜生め、誰が盗みよったか」
狼狽が、正確な判断をさまたげた。少し冷静に考えてみれば、人為的なものではないことがわかったはずである。
「ほら、何か無くなったのか」
新九郎は穴を見た。
「犬のようだな」
「え？」
「犬が掘ったあとだ」
あっ、と又次は気がついた。なるほど、犬の足、爪のあとだ。
「ほうや、犬や」
「……」
「犬が盗みよったんか」
その犬が、なんと、小笛の家に飼われていたものだったのである。
飼犬というより、野良犬が迷いこんできて、いつの間にか棲みついたというふうだった。
小笛は、はじめその犬が、包みを咥えてきたので何かと思った。あけて見て吃驚した。
「まあ、おまえ、どこから、こんな大金を持ってきたの」
これほどの大金は、このあたりでは、誰も見た者はあるまい。父親も気が遠くなるほどの驚きで、
「これは、大変なことじゃ、早よう持ち主を探して返さにゃの」
と、言っているところへ、新九郎たちがやってきた。
すぐ近くに小笛の家がある。野良犬のこともわかるかもしれないと思って、新九郎はやってきたのである。
「あ、あの犬だ」又次が目ざとく見つけた。「あいつに違いない」
雑種の黒犬が、こちらを見た。

又次が走り寄るとぱっと飛び離れて、干網の傍から、こちらを見ている。
銀子の包みは、咥えていないから、又次は蒼くなった。
「くそっ、この盗人犬め、どこへやった」
いきまいて、刀を抜こうとする。
「よせよせ、犬にそんなことを言っても無駄だ。犬と女の扱いには馴れていないな」
と、新九郎は笑って、
「クロ、来い、来い」
人間でも動物でも、警戒心があると、近寄らない。新九郎は偉躯であるが、優しく呼ばれて、犬は尻尾を振った。
「ははは、見ろ、ともだちだと思っている。来い、クロ、こっちへ来い」
また尻尾を振った。
新九郎の方へは行きたいが、又次や、隻眼の兵衛の眼が恐いのか、黒犬は、尻尾を振りながらためらっている様子だ。
そこへ、小笛が出てきた。
「まあ、新九郎さま」
その手の包みを見ると、あっ、と、又次は叫んだ。
「やい、おれのものやで」
飛びついてゆこうとして、
「小笛かいな。お前の家か、ここは」
銀子の包みに顔色を変えた又次に小笛は驚いて、
「これは又次さんの物なの」
「そ、そうとも、わいが埋めとったのや、山椒の下にな。あの黒犬めが咥え出したんやろ」
「ええ、野良犬だけど、よくうちへ来ていたんです。あたしもお父もびっくりして」
「まあいい、戻ったのならいいわな」
又次は中味をあらためた。こういうところは執こい。
「よさぬか、又次、小笛が盗むわけはない、好意を感謝したらどうだ」
「そやかて、一応……念は入れんとな」
「小笛に対して無礼だぞ」
新九郎は、淡白な気性だから、又次のそういうところが、気に食わぬ。
「しかし、大金だの」
「……」
「その大金は、どこで手に入れたか」
「どうでもいいわい」
「そうはいかん。第一、その銀子が、おぬしのものかどうか、わからぬ」
新九郎がこういうことを言いだすのは珍しい。
又次は、その端正な顔を歪めて、
「わいのもんやから、わいのもんや」

「ふん。誰が証明する？」
「誰がといって……」
銀子は瞞し盗って来たものだ。証明しろといわれて、又次は、はたと困った。
「それ見ろ、おぬしのものだという証拠はない」
ほかに何も入れていなかったのが、失敗だった。
人手から人手にわたった丁銀だ。切り遣いに削りとったものもある。ゆずり葉銀と称われたものもある。
当時は金貨というものは殆どない。金の場合は、粒金か、金塊、金板、あるいは砂金だ。日常の通用貨幣には銀か、あとは青銅。明国から齎された銅銭などが通用していた。
この銀貨ばかりでない。もともと貨幣に印などつけるものではないから、
「証拠を」
といわれても当惑するだけだ。
「そら無理や」
「何が無理だ」と、新九郎はなぜか、詰めよって、「おぬしのものだという証拠がない以上、これは、そのクロのものだな」
黒犬が咥えて来たから黒犬のものだと断定されて、又次は蒼くなった。が、また赤くなった。
朱を浴びたように、真っ赤になった。なまじ、色が白いから、その赤くなる速度も早い。

「そ、そんな、犬が、犬が、第一、犬が銭を持つものか、犬は骨でも咥えているのが……」
「そうだな、そうすりゃ、これは銀貨に見えるが、骨かもしれん、何の骨かな」
新九郎は、しげしげと見入っている。
「わ、わいのものや！」
いつもの又次なら、もっと、上手なことが言える。説得力もあるつもりだ。が、新九郎の出方が、あまりにも堂々として、又次だけがキリキリ舞いをさせられている。その自覚が、さらに、又次を、しどろもどろにしてしまうのだ。
「どうすりゃいいかな。神意に聞くか」
……と、新九郎は小笛をふりかえった。
「あかん、そらあかん」
又次はさらにあわてた。
神意や神示などということになっては、いかに神仏を信じないと号している又次でも、やはり神宮にいただけに、これは否定したくなる。
「神示が恐いとは、やはり、おぬしのものではないのであろう」
「いや、わいのものや」
「はて、クロが持ち主かどうか、決めるのに難しいな。やはり、神の決裁によるしかないな」
「いやだというのに」

「クガダチはどうだ」
探湯、あるいは盟神探湯とも書く。
これは上代に於ける裁判法だ。
事の正邪を判じるため、神明に誓って熱湯を探らしめ、傷つかざる方が正しいとした。
後世、この方法は誓湯または湯立、湯起請などとも言われて、上下とも、よく行われていた。それだけ法律が信じられなかったのだ。
この場合、〝神〟というものの判断に任せるといっても、結局は体力の勝った者が勝つわけだが、法律がなければ強い者が勝つ、強い者が正義とされるのは、洋の東西を問わず、中世までの常識であった。
「く、くがだち……」
又次はまた蒼くなった。
「そうだ、熱湯を沸かして、手を突っこむ」
「……」
「片一方が悲鳴をあげるまでだ、手の皮が溶け、肉が溶け、骨が溶けて……」
「やめてけれ」
又次は、唇を顫わして、
「その黒犬の手、いやさ前脚が溶けるのは、かまへんが、わいの手が溶けたら、銭を摑むこともできへんで」
「そうだな」

新九郎は平然としている。
「ではやめるか」
「ああ、クガダチはあかん」
「そうすると、あとは、博奕しかない」
「なんやて！」
「博奕さ。一天地六、賽ノ目が、正邪を決めてくれるわさ」
「ば、ばくちを、あの犬とするのか」
「そうだ」
「阿呆な！　犬がばくちをしてたまるかいな」
「そうでもないぞ。おれは京にいるころ、人間が牛の尻の穴から入って、口から出るのを見た」
「あ、阿呆かいな」
「全くだ。おれも阿呆になったかと思ったよ」と新九郎は、呵々と笑って「あれは、幻術とやら申して、人の目を一時的にだます、つまりは目クラマシというやつであったが、しかし、本物も見たぞ。犬がな、銭を勘定する。たとえば、百文というと二十文のさしを五本持ってくる。六文というと、青銭を六枚持ってくる」
「そら、化けもン犬や」
「そういう犬もいるということさ、どうだこのクロと、勝負するか」
意外だったのは、いままで黙って、冷たい片目でなりゆ

きを見まもっていた兵衛が、
「おもしろいな」と、呟くように言ったことだ。「犬と人間のつるんだのを見たことがあるが」
「……」
「犬と人間の博奕ははじめてだ。やるがいい」
「ひ、兵衛、おぬし」
「賽コロなら、ここにある」
ぽんとほうった。牛骨か、魚骨か、三箇の賽が、ころころと又次の前へ転がった。
「やるがいい、ガックリだのいかさま賽ではない。あらためてみろ」
ガックリというのは、あらかじめ賽の中をくりぬいて、一方に鉛を詰め、丁目なら丁目だけが出るようにこしらえたものだ。
兵衛の態度や言葉では、博奕にも通暁しているらしい。
「これか……」又次はとりあげて、掌で転がした。
「やってもいい。が、犬と博奕など、どないするのや」
又次が乗り気になったと見ると、新九郎は、ちらりとはずした。
「阿呆なことを申す。犬と博奕ができるか」
「お、おぬし、いま……」
「そんな犬もいる、というのだ。一般的な話ではないわい」
「……」
「この犬が、博奕ができる面かどうか、よく見ろ」
「そ、そらそうや」
と、まるっきり、又次は振りまわされている。
「犬は小笛のところに、その包みを持ってきた」
と、新九郎は謎でも解くような口ぶりで言う。
「したがって、博奕をするとすれば、小笛だ」
「あら、あたし……」小笛はあわてた。そんなこともない。「博奕だなんて」
「したことがないのか」
「ええ、鮑とりや何か、おともだちと、競ったことはあるけど」
「ははは、鮑とりはよかったな、又次とやら、鮑とりで、小笛と争ってみるか」
「あ、阿呆な、阿呆言いな、わいがそないこと、出来るはずはないやないか」
「そうだな、やっぱり賽コロ博奕だな」
と、新九郎は、話をこういうふうに持ってくるのが、予定のロジックだったらしい。
「では、小笛が、誰か代人を立てればいいわけだ」
「……」
「小笛、博奕には、誰を代人に立てる。誰でもいいのだぞ。そなたのおやじ殿でも、その兵衛でも、太郎、才四郎、兵

庫……」
「いいえ、新九郎さま」きっぱりと小笛は言った。「新九郎さま、あたしの代りに、なされて」
「そうか、引き受けよう」あっさりと頷いた新九郎、「又次、賽を振れ」
と、促した。
あれよあれよというまに、博奕をする羽目になってしまっている。
あとから考えてみると、うまく新九郎の術に乗せられていたわけだが、そのときは、せっかく年月かけて手に入れた大金を失うかどうかで、又次は動顚していた。
「いいとも、誰でもいい」と、いきまいて、「この金は、わいのものゆえ、わいの勝ちになるのは、わかりきったこと」
大見得を切った。
「小笛、軒先を借りるぞ」
このあたりの漁師の家は粗末である。上部に板を打ちつけたものを軒下へ倒して、そのまま縁台にして、蓆を敷き、魚のひらいたのが干してある。
この蓆をそっくり、砂の上におろして、この板部が、即席の盆茣蓙というわけだ。
「さあやれ、又次」
「よっしゃ。三つ賽か、一つ賽か」
当時、賽コロ博奕もいろいろな方法でやっていた。
後世はすっかり二つ賽が当り前になってしまったが、当時は好きなようにやっている。一つ賽で単純な丁半を決めるのが多く、三つ賽の合計数で争うのもあった。
これは多人数で順位を決めたり三つ退き十八取り、といって、ダイスのようなやり方をしたらしい。
隻眼の兵衛はよほど博奕に通暁しているのか。
「二つ賽でゆこう」と、新九郎は提案した。「二つ賽の丁半、一番勝負じゃ」
「よいとも」ぽんと又次は残り一つを兵衛に投げ戻して、
「ほなら、湯呑など貸してんか」
「あの、どのような」
「どないもンでもええ、底深のならなんでもええ」
小笛が、ふちの欠けた湯呑を持ってくると、又次はぽんと二箇の賽をほうりこんで、
「ええか」からからっと拝み振りに動かして、ぱっと伏せた。「これでええか、半！」
又次の顔は真っ赤になっている。
「阿呆め、半とはなんだ」
「わいは、奇数が好きやよってに、半！　半ノ目や」
「阿呆、壺振りが先に、好きな目をいうやつがあるか」
「そない言うても、おぬしが半目に賭けたら、わいは……丁目に賭けるのは好かんで」

新九郎は呆れた。こやつ、博奕を知らなすぎる。
「壺振りは、先に申してはいかんシキタリじゃ」
「そらどないして」
「いかさまということがある。いかさま賽を壺振りが使えば思うままではないか」
なるほど、言われてみれば気がつく。
「ほなら、どないしたらええ」
「第三者が壺を振るべきだ」
気のなさそうな顔をしていた兵衛が、「わしが振ろう」と、言うて出た。
兵衛は、湯呑をひよい摑んだ、と二箇の賽を軽く掬い取った。
ふっと、板の上を撫でただけのように見えたが、二箇の賽は、まるで、唯々として命令に従う忠実な家来のように、磁石に吸いとられる錨のように、その中に入ってしまっている。
見ていた者一同、新九郎をはじめとして唖然としたのである。
（よく使うな……）
新九郎も、これほどの賽コロ使い、壺振りワザを見たことがない。
その顔へ、にやりと笑いかけた兵衛は、
「よいか」
片手でからからと振り転がして、ぱっと、宙へ投げあげた。
くるくるっと、湯呑は宙でまわった。
二箇の賽は、遠心力でその湯呑の底へひたと吸いついたままだ。さながら、賽が失われたように見えた。
「……」
唖然とした眼の前でひょいと、受けとめると、ぱっと伏せた。伏せると同時に、隻眼が又次を見た。
新九郎が、丁半を叫ぼうとする寸前である。
又次に先に言わせたのだ。
「半や！」
待っていたように、又次は言った。それを期待しての目線だったのである。
「丁！」
と、新九郎は、言わざるを得ない。
「勝負！」
すかさず、兵衛は、湯呑をあけた。みんなの目が集中する。
賽の目は二と六で八。
「二六の丁！」
兵衛はにやりと片笑いした。
げえっと、又次は両眼が飛び出るように瞠目し、
「そ、そないことが……」

「丁だ。二四六まる丁、丁目と丁目の丁目だ。こりゃ、よくせき、おぬしは、ツイていない」
「そ、それでは、銀子は……」
「新九郎どののものだナ」
「そら、酷い！」
「何を吐ざく」
と、新九郎よりも、兵衛が、ぎょろりと眼を剝いて、
「又次、きさま、この賽をいかさまだと思うのか」
「いや、そないつもりやないけどな……」
兵衛は、賽コロを素早くしまって、
「賽ノ目は、神のお告げ、仏の教え、そう思え」
なぜ、隻眼の兵衛がそう突っ放したのかわからない。
兵衛は又次に雇われたくなくなったのかもしれない。又次は算勘の道に明るい男だが、多くを、指導統率する人柄ではない。うす手の美男子という点にも、それが言える。
「さて、この銀は、小笛のものになったわけだな」
新九郎は、銀子の包みをつかんで、小笛を振りかえった。
「小笛、それ、そなたのものだ」
新九郎が、銀子の包みを小笛のほうに押しやるのを、又次は情けない顔で見守って、
「おかしなこっちゃ……」
気抜けしたように、べたりと、砂の上に腰をつけてしまった。まるで、腰が抜けたようなものだ。
「どうした、又次」
「へえ……あんまりや」
「何が、あんまりだ」
「それ、わいの金や、せっかく、お丹を瞞して……」
うっかり洩らしてしまった。
もう、手元から飛び去ってしまったと思うと、これ以上、隠していてもしかたがないと思ったのか。
「お丹と宇部を、せっかく瞞してやったのに、元の木阿弥や……」
人目がなければ、手放しで泣きかねない落胆ぶりだった。
新九郎は、これを聞き咎めて、
「ほう、面白そうな話だな、お丹と宇部とは」
二人の名前が出てきては、万更無縁とも思えない。
「お丹なら、よく知っているぞ」
「え!!」
「この三人たちもだ」
「え、それは……」と、又次は三人を見上げて、「みんな、知り人か」
太郎や才四郎も一様に頷いた。
「知らいでか、銭をもろうた」「酒も。ははは、色っぽい女よ」「色っぽいが、吝い……新九郎兄きには惚れていたがの」
いよいよ、これは関係がある。

「ふうん、そない仲か」
と、歎息した。
「こら、余分なことを申すな。ことわっておくが、おれはお丹とは深い仲ではない」
「そら……どないでもかまへん、どうせ、もう、わいのもんやないからな」
「お丹と宇部のかねとは、面白い、それを巻き上げたとは、おぬし、なかなかの腕前だ」
新九郎は、思いだした。
先夜のことである。盗賊が入る前、隠し金庫を見せてもらった。あの中に、かなりの金銀があった。この銀がその一部かと思うと、何か因縁を感じた。
「どうやって、盗んだ？」
「ぬ、盗んだと！　わいはそないことせえへん」
「あ、そうか、済まぬ。瞞しとったと申したな、つまりは」
「頭や」
「そういうわけか」新九郎、あらためて又次の端正な顔を見て、「頭がいいわけか」
「そなやね」
「頭がよすぎても、命とりになるぞ」
「……」
「ところで、そのお丹をどうやって瞞した？　あの女は、尋常なことでは、瞞される女ではあるまい。色仕掛か？」
「いや」
「ほう、おぬしほどの顔すがたで、色仕掛ではないとすると、大したものだ」
「頭や」又次はうれしそうに言った。「頭で稼いだのや」
安手の美男だが、本人はそんな容姿よりも、自らの才能のほうを信じている。
新九郎が、
（見どころがあるやつ）
と、思ったのは、その点である。
男が容色を売り、あるいは利用するのは、羞ずべきものだが他の才能があれば、それが補佐するのは、しかたがない。
「お丹と宇部を瞞したのは、頭がいいな」
「へえ、その才覚も、これでおしまいや」
「ははは、しょげることはないぞ」
新九郎は、あらためて小笛に向うと、
「小笛、その銀子は、どうする気だな」
「どうするって……あたし」
妙な工合で、与えられてしまった大金だ。望みもしないのに、新九郎から押しつけられたようなもので、手にしたまま、呆然としていた。
「あたし、これ……貰えませぬ」

「遠慮するな、そなたの代人たるおれが、博奕で勝った。つまりはそなたのもの」
「でも、あたし、困ります」
「困るのは、大金すぎるからか」
「ええ……」
「それなら、小金にせい」
新九郎は受けとると、無造作に一つかみ、ゆずり葉銀子つかみだして、
「それ、これだけ納めよ」
「まあ、こんなに」
「多くはない。せいぜい、四、五年食えるくらいさ」
「……」
「では、残りはどうするかな」
と、新九郎は、又次を見た。
又次が哀願するような眼をむけたが、小笛は、
「新九郎さまのいいように、使って下さいまし」と、言った。
それで決った。
「よかろう、おれが貰うとしよう。それでいいな、又次」
「……」
「お前に聞いているのだぞ、又次。苦情があれば、男らしく申せ。男は言いたいことを我慢しているとからだに悪い」
「はあ……しょうがない」
「あきらめるか。賽コロ博奕に不満があれば、ほかの手もある」
「……」
「鶏を蹴合わせるか、牛の角突きやらせるか。それとも、組打ちやるか、刀を合わせるもよいが、槍でも弓でもよいぞ」
こう出られては、又次は、もうただ諦めるしかない。
「もはや、言うことはありませぬわ」
「ははは、くよくよするな。おれが手に入ったならば、おぬしらのものになったも同じだ」
この言葉が、大道寺らや兵衛の耳をそばだてたのである。
才四郎も兵庫も、はっとしたようである。
「兄き、それは、どういう意味だえ」
「われらの銀と同じというのは」
小銀を貰って用心棒になろうとした三人である。たしかに、その言葉は、聞き捨てにできなかった。
「言うた通りだわさ」新九郎は、おおらかに笑って、「この銀は、おれと、おぬしらのためになるように使おう、と言ったのだ」
「へっ?!」
「ははは、何を驚く。おれ一人で蔵いこむと思ったか」
みんなを見廻して、「おぬしらばかりではない、おれにし

ても、浪々の身ではしかたがあるまい」
「そりゃそうだが」
「ひと旗あげようではないか。われら六人じゃ、六人が力を合わせれば、かなりに思いきったことができる」
「……」
「一城を屠り、一国を乗っとることも夢ではないぞ」
「この六人でかいな」
と、又次は手を振った。
「あかん」
「何があかん？」
「たったの六人で、何が出来るものかいな。せいぜい、押込み、斬り剝ぎをするくらいが関の山やねん」
「阿呆なことを申すな。斬り剝ぎ強盗するくらいなら、一人で出来るわい。六人が力を合わせれば、六十人、百人の働きもする」
そう言われても、五人の侍たちには自信がない。
この時代だ。誰しも一国一城の主になれるものなら、なりたい。武士である以上、当然の希いである。が、それには、器量がいる。衆にぬきんでた器量がなくてはならぬ。兵法、体力、智謀、それに何よりも人徳。それらが偉大な統率力となって大量を動かし、一城を屠り、一国を征覇できる。
「ようせんなあ、そない、大それたこと」
やっぱり、商いの方が間違いない、と又次は思った。だがその商いをする金は、すでに新九郎の手に渡っているのだ。
「なあ、新九郎どの」
「よせ、おぬしの言うことはわかっている。商売の方が、分がよいというのであろう」
「ほうや」
「たしかに、それも一理ある。が、よく考えてみろ、この時代だ。商いをやって、金を貯めても、ひとたび兵燹があれば、それまでだ」
「そないことない、壺に入れて、土の中に埋めておけば」
「唐人みたいなことを吐かすな。見世は焼かれ、おぬしは斬られ、家族は路頭に迷うぞ」
「……」
「どうせ、この世は、修羅だ。地獄の業火をおさめるのは、力でしかない、力がすべてじゃ」
新九郎の言葉には説得力がある。
かなりに磊落で、おおらかな感じなのだが、どんな話でも、新九郎の口をかりると、言葉がそのまま、生き物となって、相手を魅了するかのようであった。
「自信というものは、おのれの心一つで湧いてくるものだ」
「……」

「やれる、と思えばやれる」
そうは言っても、五人には、とてもそこまで考えられないようだった。
「そうは思わぬか」
「思えへん」
と、一番執拗に反対するのは又次だった。又次が、もっとも気が弱いのか。算勘の道に明るいだけあって、神経も細く、武張ったことは生来、嫌いなのであろう。
（うまく使えば役に立つ）
新九郎はそう見ている。
人にはそれぞれ利点があるものだ。才能といってよい。それは、本人が自覚しない場合もあるし、過剰に認識していることもある。その用い方ひとつで、世に出ることが出来る。自覚のない場合は伯楽が引き出してやることが必要なのだ。
「おれの目に狂いはない」と、力強く新九郎は言った。
「おれは、これまで、多くの人間を見てきた、おぬしらよりも一日の長がある」
「……」
「おれが役に立つ、と見込んだ奴でものにならなかった者は一人もいない」
新九郎の言葉は自信に満ちていた。
壮軀だし、覇気に満ちていたので、ちょっと見た目には、二十代後半ぐらいにしか見えないが、すでに新九郎は中年であった。
その言葉に、あらためて五人は新九郎を見た。
「新九郎兄き、いったい年齢は」
と、聞きかけた才四郎は、あわてて、やめた。
「年齢など、どうでもいいわな」
「そうじゃとも、二十歳で、爺くさいやつもいる。五十歳で、一刻に三人女をコナすやつもいる」
太郎と兵庫は口々に言った。
「おれは、これまで、来しかたのことを口にしたことはない。誰もおれの素姓を知らぬ」
新九郎の持つ魅力の一つは、その素姓不明なところにあった。
人間は一から十までわかっていては面白くない。未知の部分に、興趣がある。新九郎、敢て神秘的に隠していたわけではない。口数が少なかっただけだ。
「おれは先祖を尋ぬれば、伊勢平氏の出じゃ。されば、伊勢ノ新九郎を名乗っているのだが、若幼のころのあれこれを話しても詮ない。冗々しい話は、おぬしらも興あるまい。ただ、おれは先年まで、京にいた」
「京に？」
京にいた、と新九郎は言った。

これまで、素姓については洩らしたことがない。
牢人たちは、お互いが、過去や素姓については、話したがらない。
この時、まだ武門の血統系譜は、重きをなしていた。
藤原一門を頂点とする貴族政治から、武家政治に権勢が移っても、その武門そのものが、やはり貴族豪族の門閥であることを必要とした。
堂上衆が、五摂家を絶対とするように、武門では源平藤橘でなければ、人の上には立てなかった。
武家の誰もが、ずっと後の幕末に至るまで、この四氏のいずれかの系統であることを名乗っているし、まるっきりの浮浪児上りの秀吉はそれで苦労した。
下積みのうちは、証拠もなしに勝手に、源氏だ平家だと称っていても通るが、天下人となると、やはり、難しい。
五位くらいだと誤魔化せても、三位以上、右大臣左大臣と昇ると、素姓の詮索がきびしくなる。
だいたい天皇の袖のかげ、後光のかげで、徒食している堂上衆などは、人のアラさがしで、貢物要求ばかりしている連中だ。
陰湿で執拗で、腹黒い。秀吉は、金力と権力にあかして、この四氏のいずれかの系統になろうとしたが、失敗し、豊臣などという姓を下賜された。
これとて、家康流にいうのなら、豊かな臣であり、臣は豊なりということで、皮肉屋の堂上衆が、袖で半面を隠して、ほほほと、嗤っている声が聞える。
江戸時代の初期に、盛んに、にせ系図屋が出来たのも、その間の消息を物語る。
余談にわたるが、現代でも、盗品などをそれと知っていて買う連中を、〝故買屋〟と称う。
ケイズカイ、と読む。
系図買い、である。由緒ある家柄の者が、戦さに敗れ、落ちぶれて牢人したりしたのを、その系図を買う。
むろん、高く転売するためだがその非合法性が、故買屋をも意味するようになってきたわけである。
閑話休題——
それほど、武士たちは、武門ということを重視した。いつの時代でも門閥はものをいう。
戦国時代は、そういう肩書や血統など度外視された時代だと称うのは、もう少し後の時代のことである。
それでも、斎藤道三などが、一介の油行商人からのし上るには美濃の名家、土岐、斎藤などの名を継称しなければならなかった。
世間というものが、その名家名流にこだわるのだ。
源平藤橘の系統のいずれかに属していないと、武士として、人の上に立つ存在とは認められないのである。
伊勢新九郎が平氏だというのはどこまで真正かは判然しない。
新九郎は、べつに平氏の系譜を誇るつもりではなかったろう。
ただ、かれの所信と抱負を説明するのに、一応、素姓を明らかにしておくべきだと思っただけのことだろう。
「京というと、室町御所かえ」と、兵庫が、驚きをあらわにして、「将軍家に仕えていたのか」
「うむ、将軍ではないが、足利家だ……」
足利将軍八代義政の弟である義視に仕えていた。
六代将軍義教が実父であり、義政は次子、義視は四子である。
義政の妻が、有名な日野富子であり、夫婦には子供がいなかった。
ために、義視を継嗣にしようとした。義視は坊主になっていたのだが、還俗させられたのである。
ところが、人生は皮肉なものでそのあとで、子供が生れた。これが義尚。
義政にしてみれば、やはり実子が可愛くてならない。ために、一ぺん養子にしておきながら、自分の都合で義視を斥けんとした。これには富子の意志が強く働いているが、そのことを述べていると主題から外れる。
まことに勝手なものだ。義視は怒った。怒らなければどうかしている。
こうした将軍家の内訌と、管領守護ら権臣の勢力争いが錯綜していて詳細に説けば徒らに紙幅を増すだけなので省略するが、要するに、下剋上が日常化したところから必然的な結果としての権力の奪い合い。
これが争乱を引き起した所謂応仁ノ乱である。
京を焼く火は、前後十一年間、燃え熾り、京の大半は灰燼に帰した。
政治の中枢である京がこの有様では、世の中が乱れるのは当り前だ。
〝力が正義〟
の時代が来たのである。
弱肉強食、法律が死ねば、道徳は雲散霧消し、理非曲直もただ、人に勝る力と智恵の争いで、小さくは、腕力が、大きくは軍勢を動員する権力が恣にふるわれ、神も仏もない時代が来たわけだ。
義視は破れて一時、伊勢に逃げたが、そのとき、新九郎は扈従して来た。
そして義視が、ふたたび京へ還った。
義政が東西両軍の和を計り、したがって義視とも和睦の機運が盛り上ってきたからである。
「それがしは御免蒙る」
と、京へ戻ることを、新九郎は肯じなかった。

「もはや、京の争いは、ほとほと愛想が尽きましてござる」
権勢をもとめて、おのれを偽り、アテにならぬ堂上衆たちの間を泳ぐのが嫌になったのだ。
「いつも浪々する方が気楽でよいゆえ」
と、思いきりよく、義視と縁を切った新九郎だった。
「――左様な次第ゆえ、おれは今は見る通りの浪々の身だが、望みはある」
「どんな望みだ」
と、大道寺太郎が乗りだした。
「天下を盗る」
一瞬、かれらは息を呑んだ。
「天下を盗る」
もう一度、新九郎は繰り返した。
かれらは顔を見合わした。隻眼の在竹兵衛だけは、蒼い横顔をむけて気もなさそうに、海を見ていた。
「むろん、今日明日というわけにはまいらぬ。何事も、はじめは一だ。一が二になり三になる。雪達磨と同じよ、まず、家を興し、一城の主となり、一国を得、近隣を侵して、版図を拡げる」
新九郎の言葉は、一介の牢人が口にするものではない。にもかかわらず、それは信頼を寄せるにふさわしい重みを持っていた。

「なるほどな」
「やはり、新九郎兄きじゃ」
「おりゃ、おぬしについてゆく」
三人は口々に言った。
又次だけは、猜疑の目を落着きなく瞬かせていたが、
「話だけ聞けばいいようだがな、ちと、変や」
「何が変だ」
と、太郎が吼えた。
「おぬしは黙ってんか。なア、新九郎どの。将軍家嗣子になったほどの義視どのが申次衆とか、そこまでの地位を捨てたはおかしい」
「……」
「天下を狙うといっても、それほどの地位なれば、そっちのほうが早いやないか」
「いや、そうではない。争いの渦中にあっては、なすべきこともなせぬのだわさ」
今度は又次が黙った。
「目的を遂げるには、わきから、攻略の手を進めるのがもっともよい。つまり、地方で大をなし、精強の兵をもって京へ攻め上る」
「おう！」
「ま、待ってんか。もう一つ聞くが、それほどの地位にあったおぬしが家来一人もいないとは面妖やないか」

「なに、ろくな者がおらんだゆえ、縁を切った」
「……」
「いまは、違う。家来はおらんがともだちがいる。な、大道寺太郎、荒木兵庫、山中才四郎……」
すると、そっぽをむいていた兵衛が、
「在竹兵衛」
ぶすっと言った。
又次は、あわてた。自分だけが取り残されたような気がした。
「待ってくれ、荒川又次郎も忘れんといてや」
「よかろう」と、新九郎は微笑した。「われら、同胞となるか」
「おう！」
「盟友となるか。よし、されば、誓いを立てようぞ」
六人は砂浜に円座を作った。
「小笛、さっきの湯呑を洗って来い」
言われた通りにすると、新九郎は小柄を抜いて、ぶすりと左腕に突き刺した。
タラタラと鮮烈な血潮がしたたった。
それを湯呑で受けると、新九郎は、
「さ、入れろ」
と、次へまわした。
又次は受けとった。
手が顫えている。なんだか、よく考えないうちに、雰囲気に巻きこまれてしまって、こんな立場になってしまったのだ。
新九郎の真似をすればいいのか、と、小柄を抜いて、左腕をまくりあげたが、腕の太さが違う。
新九郎の方は、倍ほどもある。まるで木の根のような逞しさだ。色も浅黒い。
それに比べて、又次の腕は、細いし、色が白い。なんとも貧弱なものだ。本人は並のつもりだが、男の中でもひときわ上背のある、鍛えぬかれた男と並んでは、ワリを食う。
いや、腕の太さ比べをしているのではない。新九郎が腕を刺して血を流してもケロリとしているのが、いかにも、その逞しい腕にふさわしい。
が、蒼白い又次の腕は、小柄をぶすりとやられたら、女のような悲鳴をあげそうだった。
「さあ、早くせい、何をしている」
三人目の荒木兵庫が叫えた。
「うん……」
「何をためらっている。それでも、おぬし武士か」
こう言われては、又次も、腹を据えねばならぬ。
「やるぞ」
かけ声ださねばならないだけ、弱い。
小柄を左腕へ――突いた。が、痛みで思わず、加減した

から、僅か突いただけだ。
チロチロと、情けないほどの紅絹糸をひいて、滴った。
「ちえっ、吝々するな。血なんか水を飲めば、なんぼでもできるものだぞ」
と、大道寺太郎が揶揄した。
吝と思われるほうが、まだいい。どうせ、算盤勘定しか頭にない又次だから、吝嗇の誹りには平気なものだ。
だが、山中才四郎は辛辣だった。
「おいおい、猫のひっかき傷ではみんなと血が交らんではないか」
「うむ、しかし……」
「もうチョイ、ぐっと刺すのじゃ手伝ってやろうかね」
愚図々々していると、手を出しかねない。たまったものではない。こんな調子でやられたのでは、小柄が突き抜けるほどに、力をこめられるかもしれない。
「い、要らんこっちゃ。わいが自分でやる」
あわてて、小柄をつかむ。僅かだったので、腕に突っ立っていない。
「早くしろ、男なら、な」
ぼそりと兵衛が言った。
又次は眼をつぶり、ぐいと突き刺した。左腕が激痛でしびれ、どっと血が噴きだした。
血盟——
六人の血が、どろりと湯呑の底にたまっている。強烈な夏日を受けて、ぎらぎら重い光を放っていた。
皮肉なことに、
「又次の血が一番多かったな」
と、新九郎は笑った。
浅すぎ、深すぎたのだ。新九郎はじめ、他の者はまるで、こうしたことに馴れているかのように、適当な深さに小柄を刺して、血を出した。
こんなことに適当ということもないようだが、おのれの出血の度合いだ。
血が止らぬようでは困るし、あとにひびくようでは、心得がなさすぎる。もっとも、そんな意味では、又次の荒川又次郎は、武士としての心得は少ないといえる。
（うぬらとは人間が違うわい）
又次は、痛みをこらえながら思った。はっきりと、口に出して毒吐けないのが、いまいましい。
「まアよい。これで、六人の血はまざった」湯呑をかかげて、新九郎はみんなを見まわすと、「これを呑めば、お互いの血がおのれのものとなり、義兄弟の縁を結ぶことになる」
「それはわかった」と、兵庫が口をはさんで、「だが、血をまじえても、神の前に誓わぬでもよいのか、このあたり、神社も見えぬが」

「要らぬ」新九郎は突っぱねた。「神も仏もないこの世じゃ」
「……」
「伊勢の大神宮とて、あのざまではないか。神人とて、神を利用しているだけのこと。神人社家の卑劣さを思え、神はかたちの上のものではないぞ」
「……」
「神は、おのれと思え」
ずばりと言う新九郎である。五人は固唾をのんだ。
小笛も少し離れて、浜辺に坐っていた。浜木綿の自生したあたりである。新九郎の凛々たる声は、自信に満ち、それこそ神の声のように聞えた。
「おのれ正しく、正しきゆえに、行う。ここに神があり、おのれがある。この余に何が要ろう。信念を持って進めばよいのじゃ。堂々と進む先に、道は自ずとひらける」
「……」
「異見あれば、聞くぞ」
「……」
「申せ」
新九郎は、五人の顔を順々に見まわした。誰も、一言も発しない。
が、その面はひきしまり眼は希望と意欲に輝いていた。
「よいな。おれに従ってくるか」
「おう！」
五人の期せずして放った唱和が餌を探して歩いていた鶏を驚かした。
「されば、血盟の盃じゃ」
新九郎、ためらいなく、湯呑に口をつけて啜った。
お互いの血をまぜて、啜りあう。
血を呑んだから、血管に入るわけはないが、その当時は、信じる者が多かった。
起請文などでも、熊野権現の誓詞にしたためて神前に供えると、それを破った場合は、血反吐をはいて悶死すると信じられた。
信じる者が多かったからこそ、起請文としての存在があったのだ。血を啜りあった以上、義兄弟の約を結んだことになる。
「よし、これでよい」
新九郎は、みんなが呑んだのをたしかめると、撥止ッと岩に叩きつけて割った。
「これで、われらは尽未来、義によって結ばれたぞ」
「おう」
「裏切り者は許さぬ」新九郎はそれから、愉快げに破顔した。「さて、これからどうするかだ」
「その銀子、どないに使う？」と、又次は、そっちが気になっている。

「われらがひとかどの武士になる資本じゃ」
「……」
「おぬしらに、なにか役立てる目的があるか」
みんな、こう聞かれて、顔を見合わした。
「べつに……左様な頭がないでなあ」
と、太郎が言った。
「左様さ、酒と女のほかは、あまり考えたことがない」
これは山中才四郎だった。
「城とり国とりなぞ、夢にも見たことがないわ」兵庫は、まだ呆れたように、「新九郎兄き、おぬし、本気で思っているのか」
「本気じゃ」と、強い意志を示して、ぎょろりと、眼をむいた。「同じさむらいながら、一郡一国を領する者と、足軽下郎の身とは、あまりに世界がちがいすぎる」
「……」
「なろうことなら、天下を狙おう。ならずとも、五国十国を領するほどの者になろう。おれが夢よ」
「左様な夢なら、わいも見たい」と、又次が頬を紅潮させて、「そらおもしろいな。六十余州のどれほどを斬り従えるか、こりゃ、またとない博奕や」
「博奕なら、おれにまかせろ」と、隻眼の兵衛が、ぽつんと言った。「これはしたが、賽コロとは違うぞ、男の仕事じゃ、新九郎兄きの器量なら、やれよう」
「そう思うか」にこりとして新九郎は、坐りなおした。
「どうだ、おれにまかせるか」
「おう！」
「おれには、前から計画があった。高所へ昇るには、まず足がかりが必要じゃ。羽もないやつが、高みに飛ぼうとすれば失敗する。まず足場をこしらえた上で……」
「して、そのところは」
大道寺太郎が膝を乗り出した。
新九郎は腰をあげた。黙って歩きだした。
砂浜を少しゆくと、小高い岩場がある。新九郎は岩の上へのぼってゆく。
岬に近い、そこは的矢湾の湾口にあたり、左手には、長く延びた砂浜と、湾の中に浮んでいる渡鹿野島が見えた。
新九郎は東北の方を眺めた。
渺々たる海原には、白帆が幾つか浮び、このあたりでトッペと称する大型の網船が動いていた。
新九郎が眺めているのは、それではない。
あくまでも明るい空であり、きらきらと陽が輝いている海である。水平線は蒸気で霞っている。
新九郎は、その水平線のかなたを遠望しているのだった。
「新九郎兄き、どこを見ているのじゃい」
「海女の裸か……、磯ナカネが脱げた女でもいるのかいな」

「阿呆めら、目を見ろ、ずっと向うじゃ、兄きの目線は、空の中じゃ」
雲のかなた。けむった水平線のあたり、新九郎は何かを見ていた。
「この海のかなた、駿河のくにがある」呻くように、新九郎は言った。「東海地方じゃ」
「……」
「三河、遠江、駿河、そして伊豆……土地は肥沃にして、気候は温暖、人情は厚く、兵馬精強、よいくにじゃ」
「……」
「あのくには、今川氏が支配しておる。守護大名として、代々今川が領主だが、大国すぎるようじゃ」
「すぎる？　すぎるのはおかしいな」と、兵庫が疑問をはさんだ。「大国なりゃ近隣から侵されることはない。狙われることもない」
「と、思うであろうな」
「誰だとて、そう思うわな。弱小の国は、餌食にされる。大国なら、さむらいも多い、財力もあり、馬を養い、刀槍を選び、具足をなんぼうにも購える」
「一応はな」新九郎は頷いた。「たしかに、そうだ。世間はそう思う」
「……」
「上下とも左様に思う。そこに安心がある。安心の存するところ、腐敗がはじまっている」
「というと？」
「巨木じゃ、今川は巨木じゃ、駿河は大国じゃ、だが、その大木はすでに老年、中味は虚になっている」
「……」
「空洞になっているのじゃ。見かけは立派でも、ぐらついている」
新九郎の言葉には、おのれの目を信じる者の強さがあった。
みんなも水平線を眺めた。
艱々たるかなたにかれらの大志を受け入れる大地が横たわっているのか。
新九郎が言ったところの、
〝今川氏は大樹なれども、すでに内部は腐れている〟
という意味について、少し書いておきたい。
もともと今川氏は足利将軍家から出ている。
忠臣蔵で有名な吉良上野介の祖である吉良氏も、足利氏であり、家格は今川氏よりも高かった。
後世、江戸時代に高家として、故実典礼の文官たる地位にあったのは、この系譜と無縁ではない。
徳川幕府は、名家名流を好遇している。幕府体制を重からしめようとする意図にあったわけだが、由来、武辺の出であるだけに、足利尊氏以来、武門とはいっても貴族化し

た十五代の室町政治に範をもとめたのである。
したがって、吉良氏が重用された。
そうした背景が、忠臣蔵で、吉良氏の、
〝高慢〟
を云々された所以だ。
吉良氏にしてみれば、エリートたる身の、高慢は当然だし、浅野などは、野武士上りの大名の裔で、いなか小名という侮蔑があったのも、当然だろう。
貴族社会の作法を識る者は、作法を知らない者は、野蛮人としか見えないらしい。
その鼻祖は足利義氏（正四位下武蔵陸奥守）である。
義氏は足利の祖たる義康の孫に当り、初代将軍たる尊氏も、その裔だから、血がつながってはいるが、このころのことはあまり定かではない。
一応、定説となっているところで書くと、義氏には長氏、泰氏、義継と三子があり、長氏の子が、満氏と国氏で、この満氏が、吉良氏の祖となり、国氏が、今川氏の祖となった。
尊氏の方は、泰氏から出ている。泰氏――頼氏――家時――貞氏、それから尊（高）氏である。
したがって、尊氏の方からすれば、吉良氏と今川氏は、おろそかに出来ない。
義氏は承久ノ役後に、三河の守護職に任ぜられて幡豆郡

庄吉良西条に住したが満氏の代に吉良氏を称するようになった。
一方、今川氏の祖たる国氏も、はじめ吉良に住んだ。吉良の今川である。
したがって今川氏の称はここから出た。
二人の父の長氏は、義氏のあとを襲って三河の守護となってやはり西条に住していたが、次男の国氏を駿河の主とした。
この国氏から数えて、八代目が現在の駿河の太守義忠である。
こういう系図を見れば、いかにも親族としてのつながりを感じるが、いかに血縁であったにしても、国司、守護が大名として領土野心を持つ以上、争いはなくならない。
応仁ノ乱は前述したように、将軍の継嗣問題と、権臣の野望がからんでのことだ。当然、地方大名たちにも、召集がかけられてくる。
こういう乱世の様相は、後世の関ヶ原や大坂ノ役などの場合と大して変らない。
それぞれのつながりから、
「当方に与力されたい」
という使者が飛ぶ。
将軍と、将軍養子の双方から頼みがくる。
それぞれ、思惑にしたがって、大名らは京にのぼる。あるいは、敵を攻める。
応仁ノ乱が、ただ洛中洛外を焼くだけでなく、地方へ飛び火し日本全土を乱麻の如くにしたのはこのためである。
吉良足利氏は足利義尚に与力し、今川足利は、将軍義政の招きに応じた。
今川治郎大輔義忠は大軍を率いて、京へのぼったが、義忠自身の力よりも、その大軍がものをいった。
足利将軍家には、不文律があった。
将軍に継嗣がない場合は、吉良足利家よりこれをもとめ、さらに吉良家にない場合は、今川家よりもとめる。
このしきたりは、後代に至るに及び、無視されてしまった。
つまり将軍家の系累が増えすぎたからである。
だが、今川家では、それを後生大事にしている。
こんどの乱でも、かれがいそいそと京へのぼったのには、多分にその思惑があった。
ここで、将軍義政に忠勤をはげんでおけば、そして、駿河に今川ありとの実績をつくっておけば、あの約束が生きてくる、というわけだ。
くりかえすようだが、徳川氏が御三家（紀州、尾張、水戸）を、そして御三卿（田安、清水、一ツ橋）を継嗣のために特別関係の家門として置いたのも、それに習ったわけだ。

義政と義尚の争いは、結局、和睦するのだが、地方での類焼はそう簡単にはいかない。
もともと、大名小名は、遠交近攻策で、版図を拡げることしか考えていない。
したがって、名目があってはじめた以上、この際に、
「併呑すべし」
ということになる。
力の強いやつにとっては、いい口実だ。
吉良氏と今川氏では、今川氏の方が、はるかに強かった。
それに、両者とも、内紛があるのは、例に洩れないが、吉良の方は、それがまだおさまっていなかった。
挙国一致にならない。今川氏もやはり、継嗣問題で内紛したが、どうやら納まっていた。
それが幸いしている。
この今川の内紛は、伊勢新九郎とも大いに関係があるので後に述べるが、ともかく、今川氏は、吉良を攻略して、京へ上り、京からの下向にも、吉良を圧えて三河をも掌握してしまっていた。
吉良氏やその類縁の豪族たちは、野にひそみゲリラになった。このことも、義忠の運命に作用する。
今川氏のことに言及すると、長くなるが、これらのことは大事なので書いておきたい。
伊勢新九郎が、大志を立て、東海に足を踏み入れるにつ

いても、この地方に於ける今川氏の勢力のありようと、深いかかわりがあるのだ。

前述したように、国氏以来今川氏は、駿河の太守であって、遠江三河は、本家の方の領国だ。

これが逆なら、まだ、話は通るが、下剋上の時代を実践したように、今川治部大輔義忠が、三河を掌握したことが、後に大患となった。

――細川殿（勝元）申サレケルハ、京ノ合戦ニハ此方ニ志ヲ通ズル人々間々候ヘバ、君ノ御警固モ安心致シ候ベシ、此程ハ毎度味方勝色ニ候ヘバ万事思置事ナシ、只東海道ノ人々三河遠江ヨリ、ヤヤモスレバ武衛義康ニ屈シテセメ上リ候ヘバ、御分国ニ御下向アリテ、アレラヲ退治アリテ……遠江三河ノ住人武衛ニ心ヲヨセシトモガラ数百人、今川殿ヘ降参シケル……

と、今川記にある。

三河の守護は以前は一色氏であった。だいたい南北朝の末から永享のころまで。嘉吉・文安以来、応仁ノ乱ごろまで細川氏が守護になっていた。

もっとも、中世は、かなり乱れていて、一色、細川と相並んで守護職だったこともある。

常道としては、めったにないことだが、重複しているふしもある。

細川氏の三河守護のはじめは、細川弥三郎元義が三河守に任じられた延文四年以後ということで、守護職の居館は、宝飯郡国府にあった。

この守護職は、最初のうちこそ、任地に行ったが、国司と同じで、だんだん横着をきめるやつが多く、肩書と収入だけで、任地の実務は、家来に任せるやつが増えてきた。

これが、〝守護代〟である。

これは任地にいて、実際政治をとっているうちに、段々と、勢力が出来てくる。

領民たちと接触が多く、実状を知るから、信望を得る者もいる。

人徳がなくて、収益をおのれのものにし、権力だけを作りあげる者もいる。

こうして、主人たる守護職を、ないがしろにして、蟠踞し、名実ともに、その土地をおのれのものにしてしまう者が出てきた。

これが下剋上だ。

主人がしっかりしていればこんな野心は起きないのだが、名前ばかりで、実力がともなわないと、実力者が、主人を凌駕する。

また領民たちも、そちらに従った方がよくなる。

坂東ざむらいは、〝主人あって、主人に主人あるを知らず〟と謂い、それをむしろ誇りにした。

つまり、実力時代に入るのである。

下剋上――

それは、世襲の貴族政治もしくは、名流たるゆえの〝座〟にあぐらをかいて、安逸を貪っている者にとっては、恐怖のひびきがある。

が、貧窮にあえぎ、光明なきこの世で、

（男に生れたからには！）

おのれの力のかぎり、いのちのかぎり、伸びる芽を伸ばそうとする者にとっては、

〝希望〟

の星であった。

貴族政治は、人民という多数の奉仕者の上に立って、悠悠閑々たる人生を楽しむ、少数の者に都合のよい制度であった。

本朝では、大和の豪族による大和朝廷がそれを布いた。

奈良朝、平安朝とつづき、藤原氏による、天皇を頭に頂く、動くともない政治形態が出来上ったのである。

この少数エリートの政治は、常に、地方に叛乱を起さしめた。民衆からの収奪しか考えない政治が、いずれ、崩壊を招くことは自明の理であった。

はじめは貴族のガードにすぎなかった侍――さぶろう者――が、やがては、その武力によって、安逸の貴族たちを凌駕し、権力を掌握してゆくのは、当然の過程であり、武門政治は必然だったのである。

貴族たちの優雅な生活は、民衆の膏血をしぼった上に存在していた。

民衆が疑問と不満の果てに、烽火をあげるのは歴史の当然であり武門政治は、その武力による横暴と殺戮を指弾されることになるのだが、少なくとも、下層からの多数民衆の欲求の一つであったことに違いはない。

そして、乱麻の世にとって、それしか、道がなかったのも事実である。

中世、宗教界にも、多くの人材は輩出している。だが、民衆の一部を救済したが、所詮、精神の慰撫にとどまった。仏教の無常観と来世への希求は、現世での現実的な倖せを棄てたところから、はじまっている。

現世での生甲斐をもとめる男たちは、

（力の世なれば）

と、血をもとめて、戦いの中に飛びこんでいった。

力とは、必ずしも膂力を意味しない。刀槍のワザも腕力も、智謀もそれが衆にすぐれていれば、ぬきんでることができる。

下剋上とは、自然の摂理ともいえた。強い者が勝つのだ。太古にあっては、強いことが、主たる資格だった。

密林に於ける猛獣たちの争いには理屈はない。そこには、生存の本能だけがあった。生存の本能が、その巧拙、その強弱が、すべてに優先した。

政治のない人間の世界も、またその動物たちに還ったにひとしい。

人間が動物になるとき——そこには生存の欲求だけが剝きだされる。

食欲も、色欲も、剝きだしにされて、おのれの欲するところに進み、邪魔者は牙にかけ、爪でひき裂く。それが、政治を失った世界の様相だった。

人間の集団の公約数的規範が、政治の基盤であれば、とにかく平和が保たれる。たとえ、それがにせの平和であっても、生存本能からの殺戮は免れ得る。

だが、政治が失われたとき、人間は、生きねばならぬ必然から、他を食うことで、生存を許されることになる。

あまりにも、人間が多すぎたのだ。

六十余州にあふれた人々は、強い者だけが残る、乱世を迎えねばならなかった。

武門の擡頭は、そういう意味でも、時代の欲求だった。

この欲求にしたがって、このせまく、小さな島国は、山も野も血で塗り代えられた。応仁ノ乱によって一変したのである。

「もはや末世じゃ」

仏僧はなげいた。

だが、裸百貫（と、当時は称った）の身で、のし上ることが出来る世の中は、ある意味で希望に満ちている。

既成の社会規範によって、乞食の子は乞食であることを強いられるよりは、

（機会があれば）

ひとかどの者になれる。

浮浪児であっても、一城の主になれる。一国を思うさまに支配できる。好きなものを食い、酒も飲めれば女も抱ける。好きなだけ、女を抱ける。

ひもじい思いをせずに、寒さ暑さに、苦しまぬだけの屋根囲いがありさえすれば、と希うのは、初めのうちだけだ。

その食物が手に入り、まがりなりにも、家に住めれば、衣服に欲が出、食物に好き嫌いが生じる。

女もそうだ。女でありさえすればいい、美醜は問わぬのも当初だけで、同じことなら、美い女がよくなる。

家も、家族も、家来も、土地も、しだいに欲求は増大してくる。

権勢と名誉と不老長寿が、所詮は人間の目的として彼岸にある。

この人間の性（さが）は、乱世の劫火のごとく、熄むをしらなかった。

応仁ノ乱は、貴族武門から、庶民武門への転換期として、生ずべくして生じたのである。

下剋上という言葉は、もはやこの時代の当然の行為として、非難の埒外に置かれることで、市民権を得た。

国司——管領——守護職——守護代……

このタテの制度も、神の審判は、強弱に委ねられたのである。下剋上が乱世の代名詞であるのはそのためだ。

この修羅の世の中で、駿河の今川氏が、遠江三河に勢力を張るようになったのは、ただに名門と機運による。

今川治部大輔義忠は、豪勇の大将ではない。

名門の裔に生れて、都合よく、大国を領し、気候のよい駿河では士気精強のゆえ、近隣から侵されることがなかったし、将軍の信任もあり、遠交近攻策がうまくいっていたにすぎない。

屢々内紛もあったが、どうにか、勢力が保たれて来た。

応仁年中に、三河の守護であった細川成之の守護代東条近江守国氏なる者が、叛乱を起したので、将軍の命令で討伐したりしている。

将軍というものは、義政など、直接の軍隊というものを持たないから、結局、地方長官に合力を頼むというかたちをとる。

それが、地方長官をのさばらせることになるわけで、かたちの上では中央集権でも、実際の力はなくなっていた。

こうして、今川義忠は、当時、駿河を拠点として、三河、遠江をも勢力下に置いていたのだ。

ところが、そのようなかたちで圧えているだけだから、少しでも圧えの手が弛むと、叛乱を起す。

義忠には、それだけ舐められる弱さもあったのだろう。

その上、名分として、遠江三河は、かれの権勢下に甘んじる必要はなかった。

名分というのは、実際の力を伴わないにもかかわらず、実力が伴えばこれに加味されることによって、権威が発揮される性質のものである。

したがって、駿遠参の空を、今川の勢力は蔽ってはいたが、内部では、不平不満がみなぎっている。

義忠は、

「遠州と三河の守護に」

という気持があった。

これは当然の欲望だ。

法律は常に、時代の後から走ってくるものだが、乱世の肩書もまたそうであった。

まず、前述したような下剋上によって、主君を討ち、勢力をひろげ、その勢力にふさわしい、財力を得る。

その一部をさいて、朝廷へ進貢し、肩書を貰うよう運動する。

洋の東西を問わず、位官を欲して、運動する者が多かったのは、そのまま、それが人間の歴史をなしているのだが、この場合の狙いは猟官運動ではない。

名声のためだ。世間は虚名であれ、肩書に眩惑されるものである。現代でもそれは変らない。

元大臣、前大臣の肩書があれば選挙に有利だというのも、それを物語っている。人間を観るには、世の中はいそがしすぎるのだ。つい、手っ取り早く、肩書を信用してしまう。

遠江、三河まで、おのれの勢力下にあるという現実は、

「わしが、遠参の守護であって不思議ではない」

と、思いこむ。今川義忠の、その考えは、至極、当然のことであった。

（遠江のくにと三河のくにの守護を兼ねれば、東海三国の大守となる）

ただの守護ではなく、祖先の栄光を甦らせることになる。守護大名が希むところは、管領たる地位である。

が、管領は、ただ勢力があるからといって、なれるものではなかった。

足利政権下の管領のことに触れると、煩雑になるので、ここでは簡単に述べておきたい。

関東管領が置かれたのは、関東より東北のつまり、奥州への圧えのためであったが、その勢力が伸長して、いつしか足利幕府の政治権力に拮抗するほどのものになって、公方（くぼう）——つまり将軍と呼ばれるほどになるに及び、その執事が管領を称するようになっていた。

したがって、関東管領は、細川や畠山、斯波の三管領とはまた意味が違っていたのだ。

この時代、漸く、管領制も乱れて、三家以外も、勢力さえあれば、望めるような機運が出来上っていた。

後のことになるが、大内義興なども、

〃大内管領〃

を称したこともあるくらいだから、この時代、東海の守護大名たる今川義忠が、野心の炎を燃やしたのは、当然すぎるほどの、武将の心情だったろう。

当時、関東には、二人の公方、二人の管領が存在している。

おかしな話なのだが、これには複雑な理由がある。

それは後段で述べる。ともあれ二人の関東公方が存在したことが、今川家にも、そして、伊勢新九郎にも、大きな意味を持ってくる。

今川義忠は、足利家の流れではあるが、あくまでも将軍家の直流ではない。そこに名門としての限度があった。

人間は、よほどの聡明さがないかぎり、おのれの立場というものと、その可能性を冷静に見きわめることは難しい。

調子に乗ったときは、特に冷静を欠く。おのれの力に無限のひろがりを錯覚する。

義忠は、いささか、あせりすぎたようであった。

野心があれば、野心にふさわしい、狡智な手をつかうべきであった。まず、民心の慰撫を行い、完全に、掌握した上で、その方向に進むべきだったろう。

人間はしたがって、勢いに乗っているときの方が難しい。

どこでおのれを止めるかによって、その領国を完璧ならしめることが出来る。凡庸ノ者の考えるべきことだった。

惜しむらくは義忠にはその器量がなかった。

義忠の死は、それからほどなくやってきた。

伊勢新九郎は、駿遠参、東海三国の形態を語った上で、つけ加えた。

「おれが見たところ、治部大輔義忠は、さしたる器量人ではない。それゆえ、おれの妹をくれてやった」

「え、妹御を？」

はじめて聞く話であった。みんな眼を丸くした。

「うむ。治部大輔が京へまいったときだ。くだくだしく話しても詮ないゆえ、省くが、おれの妹に歌をよこした」

「ほう、公卿ぶりじゃナ」「想い文かいの？」

にやりと才四郎が顎をなでる。

「それで妹は、いま義忠の側室になっている」

「……」

「子もある。男児じゃ」

「それは！　大したものじゃ」

何が大したものか。

荒川又次郎はけげんな顔で、

「新九郎兄き、おぬし、さっき妙なことを言いよってん」

「何が妙だ」

「せやかて、さしたる器量人やない、そない言うたやないか」

「そうだ」

「つまり、義忠が阿呆ちゅうことやないか」

「いや、阿呆ではないが、あまり聡明ではないということだ」

「せやから、面妖や、そない男になんで、妹御を」

「そない男だからさ」

「へえ？」

「わからぬか。わからぬば、考えろ」

新九郎は突っぱねて、

「つまり、今川家の当主義忠の子はおれの甥というわけなのだ」

「すると、次の今川家の当主に、兄きの甥っ子が」

「さ、そういうふうにまいるかどうか」

「というと」

「ほかにもな、狙うて居るやつがいる……」

先代の代に紛争があった。

継嗣争いである。

義忠の父の範忠のときだ。その父範政は長子範忠をさしおいて、末子の範頼（小鹿）を立てようとした。

老人になってからの子ほど可愛いものはない。千代松丸と称った範頼に継がせようとした。

それを範忠は、忠臣たちや一族の協力を得て、将軍義教

魔風

を動かし、今川家を継いだ。
範頼は小鹿家を継いで、すでに死んでいるが、その子新九郎範満が、
（本来なら、おれのおやじが今川家の当主、つまり、おれも、当主になるべきところだったのだ）
という不満を持っていた。
少し話が入りこむようだが母方の方もただの女ではない。範忠の母は扇谷上杉氏定の女で範頼の母は上杉政憲の女。この両上杉が前述した二人公方の管領家だから、内紛が起らない方がおかしい。
ともあれ、こうして今川家では、内部抗争の底流が、隠微に流れていたわけである。

「日ノ出だ！」
誰かが叫んだ。
船が的矢湾を出て、かなり経ていた。暁闇の海上を涼しく潮風が吹き、鳶が黒い影を舞わしていた。鳶の影は、東天紅の明るみの中で、生々と舞い、夜明けを促すかのように、時々、笛のような声で甲板の眠りをさました。
うつらうつらしていた者も、ふと醒めて、
「着いたか、もはや」
などと、とぼけた声で言い、海上を見渡すのだ。
左手に鳥羽の山かげが紫紺色にうずくまっていて、寝ぼけた眼には、東海の陸影に見えたのであろうか。
「阿呆、まだ鳥羽じゃ」大道寺太郎が、これも眠げな声で、
「潮水で面を洗え」
「なに、まだ着かねば、もう一ト眠りするだけよ」
と、山中才四郎は、刀を抱いてごろりと横になる。

荒木兵庫は、帆柱にもたれて、酒を飲んでいたようだが、そのままのかたちで、いつか鼾をかいていた。
苫をかぶった兵衛は、船出のときから、眠っているようだった。
「博奕をやらんか」
兵庫が誘っても、
「おれは博奕はきらいだ」
と、突っぱねて、苫をひっかぶった。
兵衛が博奕ぎらいとは、あまりに意外すぎた。
あの三つ賽ころを常に持っていることといい、小笛の家で見せた神技のような壺振りといい、博奕ぎらいどころか。
「なんじゃ、……やつ……」
「ははは、兵庫、おぬし嫌われたのよ」と、太郎が腹を揺すって笑った。「さぞ、イカサマ面に見えたのじゃろ」
「おれがイカサマを？」
「イカサマ面ということさ。真正はそうでなくてもな。たとえば、この才四郎など、どう見ても、イカサマ面ではない」
「というと」
「真正はイカサマじゃがな。ははははは」
「ちえっ、てめえだけが、まっとう面をするねい」
そんな話も子守唄のように聞いているのか、兵衛は、すぐと眠ったようだ。
どんなところでも眠れるのか。痩せぎすの、無気味な眼つきだが、神経が太いのか。仮寝に馴れているのか。なんとも得体が知れないのである。
船が答志島を左舷に見るころ、東天紅は、いよいよ明るく、赤みを増し、真っ黒な鰯雲を東天に泳がせながら、しだいに、輝いてきた。
朝焼けの真紅は、さながら夜明けを阻むかのように、揺曳する雲の黒みを灼くように、ますます紅く、ますます、光を増してき、突然、かっと、頭頂をのぞかせた。
御来光だった。
ぎらぎらと波が光る。金波銀波の強烈な輝きである。
「幸先いい門出だぞ」新九郎は旭光に目を細めた。「われら六人の前途を照し出すものだ」
「陽はまた沈むもんや、珍しいことあらへん」荒川又次郎には日ノ出も現実的にしか見えない。「それより、わいの銀が生きるか死ぬか、それがわからんよってに」
「けちけちするな。どうせ男の勝負だ。男は毎日が博奕ではないか」
「そらそうや」又次郎の心配は、一つではないらしい。
「せやけど、この船は鳥羽へ寄りすぎとるやないか」
「心配するな」
「へさきを東北へ向けんと……」
宇治丸の船頭や水夫には、神宮の急用で、堺へ行くとい

い解纜させたのだ。
東海地方へ向けるというのは、冒険すぎた。
「おれたちがいる。案じることはない」
新九郎はそう言ったが、船頭たちの気性を考えると、安心できなかった。
かれらは、ただ雇われているだけではない。
もともと氏子なのだ。神宮への信仰があるかないかは別として、代々、神宮と密接な関係で生きてきている。
あきらかに神宮の船を乗っ取ったことに加担したと悟れば、尋常では済まない。
「なあに、こうなれば、向うへ着くまでのことだ」
と、新九郎はこともなげにいう。
「あとはいらん。返せばいい。乗っ取ろうというのではないのだ」
「せやけど……」
「せやけどなことがあるか。ただちょいと乗せて貰うだけのことではないか。銭を払えばよい」
「なんぼ？」
「なんぼか知らん。船賃だ、船頭に聞け」
新九郎に言わせれば、なんでも明快に割り切ってしまうが、又次郎の心配症では、
（そない簡単にゆくやろか）
何しろ海の男たちだ。一すじ縄でゆく連中ではない。志摩鳥羽の漁師といえば、気の荒いことで聞えている。
新九郎はじめ六人の荒武者がいても、容易に動くとも思えない。
はじめ、志摩の安乗で乗りこんだときでも、
「北へむけろ」
と、言うと船頭たちは顔色を変えた。
「和泉へ急用でゆくのじゃろ」
「それが、変った」
変更なら、神宮からのお達し書を見たい、と、言いだしたのである。
二見ヶ浦では、急ぎだ急ぎだ、と言って誤魔化して船出したのだが、用心棒雇いなどで手間取っているうちに、相手も怪しく感じてきたらしい。
もともと非合法なのだ。ちょっとでも破綻があると、計画はすべて無に帰す。
「――和泉にゆく急用ちゅうのも嘘じゃったんか」船頭たちは、口々に喚きだしたのだ。「わしらをだまくらかしたか」
「和泉へ逃げだすとこじゃったんさの」
「そうじゃろ、どうも怪しい思いよったけども、うん、よう嘘ばっかり吹きよったんさァ」
「鳥羽ン船乗りは、そんな甘ちょろ手に乗らへんわい」
「破れ船と口車には乗らへんわい」

てこでも動かぬ感じだった。
大道寺太郎などは、腕まくりして、わざと鍔音立てたりした。腕ずくでも船を出させようというのだ。
ところが、船頭たちも、ひるまない。それぞれ、脇差やマサカリを握りしめる。積荷を上げ下しする手鉤をふりあげるやつもいる。
「まあ、そうとがることはない」
と、新九郎は双方をなだめた。
ここで斬り合っても、お互い負傷者を出すだけで得はない。
「おぬしらに損はかけぬ」
「だまされて、大損じゃわい」
「日当は払ってやる。それに、このまま、和泉まで行っていたら、それこそ損をする。往復十日も二十日もかかるではないか」
「……」
「遠州なら、ひとまたぎだ」
それもそうだ、と頷く者もいた。
遠州、参州なら、風向きさえよければ、二日とかからずに戻れる。三河の渥美半島の突端の島かげは、鳥羽から望める近さだ。よしんば、遠江までであっても、和泉などより、よっぽど近い。
船頭たちは納得したようだった。額をよせあって、相談していたが、渋々承知したものの、
「その代り、酒代ははずんで下されや」
と、睨んだ。
「よいとも。さあ出してくれ」
新九郎は丁銀をつかみ出して見せた。
「払うものは払うぞ」
こうやって船出したのだが、又次郎が、安心できなかったのは、船が段々と鳥羽へ近づいてゆくように見えたからだ。
志摩の的矢湾から東海地方へゆくとすれば、北上するのはしかたがない。
風向き、潮の加減、帆走の技術など又次郎にはわからないから、
（こら、ひょっとすると……）
船頭たちが悪企みして、鳥羽湾へ入るのではないかと思った。
安乗を出てから、相差、鎧崎、石鏡と過ぎて、内陸寄りに行く。右手にタイノ島、神島を見て、菅島の白崎、それから谷志島だ。大ツグミ、小ツグミの島々が迫ってくる。
又次郎が、はっとしたのは、船頭が突然何やら叫んだからである。
船頭の声は大きい。海風の中でかき消されぬように、大声を出しつけているので、声帯が、自ずと太くなるのであ

ろう。
又次郎が、はっとしたのは、
「とり舵ィ一杯！」
そう叫んだように思ったからである。
留意していたので、船乗り特有のがらがら声が、聞きとれたのかもしれない。
聞き誤りではなかった。
「とり舵じゃァ！」
また叫んだ。叫ぶや、ぱっと駈けだした。
水夫たちが一せいに、帆を動かし、ぐぐっと、大きく宇治丸は傾いた。
急激な方向転換であった。左舷がのめりこむように傾き、ざざっと波を切った。
寝ていた兵衛のからだが、ごろごろっと、転がり、兵庫も倒れた。
又次郎はあっと思ったので、そこらのものにしがみついている。
「どうした！」
「大波かァ」
大道寺太郎は立ち上りかけて、ぐらぐらっと揺れた。
船頭たちは脇差に手をかけ、
「そこらの浜へ突っこめやい。船が毀れてもかまへんぞ」
本性をあらわした感じだった。

あの相談は、こちらの申し出を納得したのではなく、このたくらみだったのだ。
表面、従うと見せて、船を北上させる。鳥羽湾が近くなったら、隙を見て湾内に入れてしまう。
どうせこのあたりは、御神領と関係が深いから、かれらにとってはホームグラウンドである。どっちに転んでも、まず、ヨソ者である六人侍が負けだ。
それに、海の男たちだ。飛びこんでしまえば、いくら、武辺者が揃っていても、どうするすべもない。
島へ近づいての一挙は、その成算があってのことだった。
「うぬ！　計ったな」
さすがに、新九郎は、そこまで読んではいなかった。
大きく揺れ動き、疾走する船の甲板を新九郎は走った。
「うぬら、斬るぞ」
そう言うしか、圧えようはない。
船の上のことだ。まるっきり、ほどこすすべがなかった。
新九郎は舳の方にいたのである。
船頭のところまでは、かなり離れていた。かれが駈ける前に、兵衛が身を起している。
傾斜した甲板を転がった兵衛は、したたかに舷側にぶつかった。その痛みが、かっと激昂させた。
はね起きるや、たたッと船頭のところへ、
「許さぬ！」

一言。言下に抜き討った。
船頭の方がからだは大きい。身をひねって大マサカリを振りかぶろうとした。
マサカリの重さは、叩きつけるときには効果があるが、斬撃の速度では、不利であった。兵衛の手練の刃は、次の瞬間、血を噴いていた。
大マサカリを振りあげたその右肩から、腕を、すっぽりと斬り放していたのである。
在竹兵衛の手練であった。
マサカリを握ったままの腕が音を立てて落ち、それから仁王立ちの船頭が、船の震動に耐えられぬように、ばったり倒れた。
兵衛は、血刀を拭いおさめると黙って、もとのところへもどった。
水夫たちは、仰天した。あまりにも鮮やかな抜き討ちに、声を失った。
その機をつかんで、新九郎は声をかけている。
「舵だ、おも舵、おも舵だぞ」
舵とりは、あわてて、言われた通りにした。謀叛の企みも兵衛の一刀で、粉砕されてしまった。
もう少しで、岩礁に激突しそうなところまで近寄っていたのだ。
〽伊勢の神崎、岡崎の鎧、波切大王がなけりゃよい……
とうたわれたくらい鳥羽志摩には岩礁地帯が多い。船乗りの舵の腕も、したがって巧みだった。
ぐぐーっと、大きく、こんどは右へ傾いた。あやうく、座礁をまぬかれた宇治丸は、ギギッと帆桁を軋らせて方向を変え、北東へ漸く進路を向けた。
舵の方向なら、素人にもわかるが、風向きに対しての帆の操作は難しい。
「ちゃんと船賃は払うというのだ。下手な小細工をするな」
のんびり寝転んでいられない。太郎や才四郎らも、舵取り帆綱引きなどを監視することにした。
「泳ぎがまるっきりだからな、こんなところで船をひっくりかえされたら、うろ屑にされてしまうわい」
「一蓮托生だわな。船がひっくりかえったときは、塩水をひっかぶる前に、斬る」
こうなったら、なんでもいいから一番近い三河の渥美半島の突端にでも、着岸する方がいい。
ところが、風の工合いが、どうも船は東北より東よりに流れてゆく。
「大丈夫か、おい、段々陸地が遠くなるようじゃ」
気のせいか、陸影が遠ざかってくる。
「へい、風向きが、どうも……」
しきりと帆の向きを変えようとしているのだが、それも、

素人目には何やらわざとらしい。
しかし、あれほど晴れていた空が、おかしくなってきていたのである。風が強くなっている。西風が出てきて、伊勢の空は黒雲が湧いていた。
陽は頭上でまだ照っているのだ。東南を見れば美しい空であり、ふりかえると、異様に灰色の雲が湧き、それはむくむくと、しだいに盛り上り、広がってきて、黒みを帯び、みるみる半天を蔽った。
その雲行きとともに西風が強くなり、船は東へ突っ走ってゆく。
「こりゃいかん、帆をおろせ」
新九郎は怒鳴った。
このままだと、大洋の真っ只中へ流されてゆきそうであった。
「帆をおろせ」
新九郎の命令に、水夫たちが帆綱へとりついた。
が、西風がはげしく、帆はいっぱいに孕んでいる。綱は濡れて固くしまっていた。
「早くしろ」
「へえ、なかなか、解けないので」
「急げ」
船はどんどん突っ走ってゆく。舵とりが必死になって、抑えているが、風の力にはかなわない。

「ええい、斬れ斬るんだ」
新九郎の手からマサカリが風を切って飛んだ。
ぶっすりと帆綱を斬り放す。帆ははげしい音をたてて、落ちてきた。
船は反動で、大きく揺れ、あやうく転覆しそうになった。
西風に吹きまくられて、東進していたのが、舵とりが必死に向きを変えようとしていたから、ぐーんと舳を、天に向けてがっくり傾いた。
ざざーっと、波をかぶって、才四郎は足を掬われた。
「わあっ、助けてくれーっ」
ずるずると、さらわれそうになって、漸く舷にしがみつく。
「みんな、しっかりしろ、波にさらわれるなよ」
新九郎は、叱咤しながら、舵の傍へ近よった。
風に逆らって舵を抑えるのだ。一人や二人の力では、とても抑えきれない。大道寺太郎が加わった。帆をおろしたことで、どうやら風にさらわれることはなくなったが、あとは潮の流れに乗ることだった。
このままだとうまくいって伊豆の方へ持って行かれてしまう。
「死んでも舵を離すな」
やっと、みんなが寄ってきた。舵をおさえ、太綱でしばりつける。北へ舳を向けることだ。

せめて幸いだったのは、日中であることだった。これで、夜陰なら、方向がまるきりわからなかったろう。
東海地方の陸影が望めるだけ、かれらには運がついていた。ただ、こう流されては、三河か遠江か駿河かわからない。この三国であることには違いないようであった。目的は駿河なのだからとにかく、辿りつけばいい。
雲が濃く、空を蔽って、まるで夕方のように黄昏れているのだが、まだ午前中のはずであった。この暴風は、どれくらいつづくものか。
西の空は依然として暗く、恐れていた雨が海上を暗く閉して襲って来た。
「雨がくるぞ」新九郎は、乗組みの一人一人を確かめた。
「みんな、からだを縛りつけろ。いざというときのために、そこらの板切れを傍へ」
そういう間に、サーッと、灰色の幕は波浪と呼応するかのように迫ってきた。
もしも大船に乗っていたら、その風が呼んだ雨の襲来は、壮観といえるものだったろう。
西の空に浮いた黒雲が、ぐんぐん翼をひろげて頭上を蔽い、灰色の雨の層が、たちまちに視界を閉して、あの海いちめんに水平線を隠して迫ってきた。
果しない巨大な紗の幕を幾重にも垂らしてくるような雨の様相であった。

「雨になるぞ」
新九郎の叫びで、みんなが気をとりなおす前に、水面にはげしいしぶきを立て、ザッーと雨脚は宇治丸を襲ってきた。
大粒の雨であった。篠を突くようなという形容があるが、文字通り、土砂降りだった。
頭や顔に当ると痛い、眼が潰されるかと思われるほどの強烈さで、叩きつけてくる。
波浪が高くなった。まるで、風雨に呼応したように。宇治丸は大波に揺すぶられ、弄れた。
高々と波の上に押し上げられたかと思うと、波の谷間に、叩きのめされるように、落される。
宇治丸は、いまにも転覆しそうになり、木の葉のように翻弄されていた。
「おおい、みんな、大丈夫かァ」
一間離れているだけで、顔かたちも見えない豪雨なのだ。目もあけられない雨脚だった。
前後左右もわからない。お互いに何やら叫んでいるのも、声も判然とは聞きとれないのである。
もう無我夢中だった。
目の前を、誰かが悲鳴をあげてすべるのが見えた。船が大きく傾いたときだ。
「あっ！」

新九郎は手を伸ばした。すがりついてきた。
一瞬、ぐらっと揺れた。足を掬われた。まるで、何か大きなもので掬われた感じだったが、強い波だったのである。
新九郎のからだは宙に飛んだ。
目の前に深い波の谷間が見えた。まるで、崖の上から逆巻く波間をのぞいたような感じだった。
（ほうりだされたのだ）
思った次の瞬間、新九郎は牙を剝いた波間にもんどり打っていた。がぶりと水を飲んだ。
水練には自信があったが、こんな激浪を乗りきった経験がない。
（死ぬか……）
ちらっと不安が脳裏を掠めた。
恐怖はなかった。絶対に死なぬという信念が、新九郎にはある。
（大志を持った者は死なぬ）
その志をとげるまでは、天は見捨てぬ。
見捨てられるのは、その者が今生にあって、用を為さぬ存在となったときなのだ。
（おれは、死なぬ）
新九郎は必死に、水を掻いた。水を蹴って、浮び上った。
その顔に雨は執拗に叩きつけてくる。
「おおい、誰かいるか」
一緒にほうり出されたのは誰だったろう。太郎か兵庫か。
雨にかき消されるように、宇治丸はどんどん遠ざかってゆく。新九郎は必死に抜き手を切ったが、激浪はほしいままに、両者をひき離してしまう。数丈の高みにそそりたち、巨大な壁となって、滝津瀬のように落下する大波である。
どれほどの重さがあろう、新九郎は何度、海中へ打ち込まれたかしれぬ。顔を出して泳ぐのを、たとえば杭を大掛矢で叩きこむかのように、ざざーっと、落ちてくるのだ。
そのたびに目がつぶれ、息ができず、辛い潮水を呑まされて、気が遠くなった。
この激浪と闘っていた時間がどれほどか、見当もつかない。
時間をみる余裕などない。
雨はやまぬ。風も熄むことを知らないようであった。
激しく突き刺さるような風と雨は、いよいよ勢いを増して、水面に叩きつけてくる。いや、叩きつけるというより、蹴上げるのだ。水面はためにささくれ立ち、囂々と吼えて、牙を剝いた。
巨大な海狼が牙をむくに似ていた。その牙は、がぶりと人も船も呑みこむように、迫ってくる。
こうした際の卑小な人間は、まず恐怖で駄目になる。激浪を泳ぎ抜く自信のある者も、遠泳に慣れている者も、海狼の牙と咆吼と風雨で、絶望感が先に立つ。

絶望は、手足を萎えさせ、気力を喪わせる。
（くそ！　おれは負けぬぞ）
新九郎は死の影を払いのけた。
力のつづくかぎり、水を掻き、水を蹴る。
手も足も折れるまでやる。心ノ臓が破裂するまで、呼吸をつづけてやる。
水と風を敵と思うのだ。負けぬ。かれを死の淵へ追いやるものはすべて敵なのだ。
（負けるものか）
新九郎は闘志をふるい起した。
波の谷間に島影が見えた。雨がしだいに遠去かってゆくのか。その遠い島影に向って、新九郎は水を掻いた。
他の者がどうなったかわからない。
すでにもう、宇治丸は見えない。東へ去ってゆく雨が包みこんでいるのか。
あたりには、木片や積荷の木箱などが浮いている。人影はなかった。
「おおい、誰かいるか」
何度も呼んだが、応えるものは波の声ばかりと知るともう新九郎は、他をかえりみることをやめた。
おのれを生かすことに、全精力をそそぐことだった。
夏なのがせめて幸いだった。これが冬だったら、とっくに心ノ臓は凍えて動きを失ってしまっていたろう。
新九郎はいつの間にか、帯も袴も小袖も失っていた。
下帯一つになってしまい、ただこの闘いのなかでも、打ち刀だけは離さなかった。三尺あまりの大太刀である。下緒をしっかりと結んで背負っていたのである。
（誰かが呼んでいる……）
新九郎は夢を見ているようだった。
何の夢だったか、おぼえていない。
混沌としたなかにかれはいた。そこは雲の中のようであり、真っ暗な森の中のようであり、洞窟の中のようでもあった。そのくせちかちかと光がさしたり、洞窟ぜんたいが、ふわふわと動いたり、いったいここがどこなのか、新九郎は見当もつかない。
かれ自身、何か叫んでいたようだ。自分で何を言っているのかもわからなかった。
ただ、妙にはっきりしていることは、悶えていたのだ。しきりに手足を動かしていながら、それが鉛のように重く、自由にならなかった。
（どうしたのだ、おれは）
なぜ、そこでもがいているのかわからない。
夢の中のような気もしながら、しかし、そんな夢を見ていること自体が、わけがわからなかった。
（……）

誰かが呼んでいる。
呼んでいるような気がした。暗いなかで、その声が、まるで空洞を吹く風のように聞え、風にしてはおかしいと感じてもいたのだ。
「――もし、もし、気がつきなされたか」
「……」
呼ばれた。夢ではない。人声なのだ。新九郎は目をあけた。
かっと陽がさした。眩しい。眼が重かった。
「おお、気がついたぞ」「まあ、ほんとうに、死んでるかと思ったよ」「なんの、死ぬようなからだかいな」
顔、顔、顔……いくつもの顔が見える。老若男女、いくつもの顔がのぞきこんでいた。
その顔を見まわして、新九郎は、
(うるさいやつらだ)
と、思った。
「――どうした?」
と、問いかえした。
「どうしたとよ」
「へへっ、こりゃ驚いた」
「驚くより呆れるわな。なんとのう」
「死人が口をきいたようなもんじゃに」
死人? おれが死人か? 新九郎は、あたりを見まわした。
かれは寝ているのだ。砂が背中にあたっている。砂浜らしい。のぞきこんでいる男女は、みんな、そぼろな服装だった。漁師たちらしい。
「はて、ここは何処じゃ」
身を起そうとしたが、手足がひだるく、腰に力が入らなかった
背骨が折れたように痛い。
「おっとと、無理をしなさるなや。まだ、凝っとしていないと。誰か水を持って来ぬか」
水? と聞いて、新九郎はかすれた声で言った。
「水より、酒だ、酒がほしい」
漁師たちはげらげらと笑いだした。
「呆れたお人じゃ、水より酒かいな」
「死人が何を言い出すことかいの」
死人? 新九郎は、むっくりと首をもたげて、
「やい、おれはまだ死んではおらぬぞ」
叫ぼうとしたが、やはり、咽喉が灼けつくようで、いつもの大きな声が出ない。
「早く、酒を……」
やがて、その酒が来た。
酒といっても、濁り酒である。渇ききった咽喉に濁り酒は容易に入るものではないが、正気づくと同時に、新九郎は、ひどく空腹を感じていた。
健康な体軀だ。ごくごくと、二、三合酒瓶から飲みくだして、ふーっと、大きく息をつくと、やっと、人心地がついて来た。
空はいやになるほど晴れている。あの暴風雨が嘘のようであった。
風はまだ、磯の松の梢に囂々と鳴っていたが、その強い風のために、雨雲も吹き払われてしまったらしい。
風は、あまりにも気まぐれであった。
黒潮を怒り狂わせて、船を翻弄した上に、雨雲まで呼んだ。おのれが呼んだ雨雲を、存分に暴れさせてから、また東の洋上に、追いやっている。
馬鹿を見たのは、宇治丸と、新九郎たちである。
(やれやれ、どうやら助かったらしいな……)
海はまだ吼えていた。その声と空に唸る風の音が、新九郎にあの記憶を甦らせた。
悪夢のようだった。
あれほどの苦しみをかつて味わったことはない。ほんとうに死ぬかと思った。こうやって生きていることすら、不思議なくらいだった。
どれくらい水を飲んだろう。海水をがぶりがぶりと飲まされ、何度奈落の底へ引きおとされていったことか。
手足は萎えたように、いつもの力が出ないが、とにかく、生きている。
かなりの傷を負っていた。
宇治丸から落ちた木片や積荷などにぶつけられたのだろう。夢中だったので気がつかなかった。
指を動かしてみた。ざくりと、あちこち、傷口がひらいているが骨や筋にまでは及ぼしていないようだ。
その傷口は、海水に洗われて、ぺろりと皮肉が剝げ、白くふやけている。
「まだ、動いてはいけません」
若い女だった。
何やら黒い練膏をべっとりと傷口へつけ、縛ってくれている。
その女の細い指が、新九郎に男の欲望を甦らせた。生きる力でもあった。
(よかった……死ないで)
ほかの連中はどうなったのか、助かったかどうか。
娘の家へ連れてゆかれて、自分が、あの波浪の中から助かったのだという実感がこみあげてくると、みんなの身が案じられた。
宇治丸がそのあたりへでも打ち上げられていると、およそのこともわかったかもしれない。が、どこへ流されたのか、誰も知らない。
沖合で、宇治丸が翻弄されているのを、漁師たちが見た

という。他の乗組みの生死はわからなかった。
「なあに、助かっているだろう」
と、新九郎は、つとめて、いい方へと考えた。
「おれが助かったくらいだからな、ほかのやつも」
「さあて、あの嵐ではのう」と、村長らしい老人は、首をかしげて、「真っ昼間から、あんな妙な気まぐれ風は、はじめてでございますでな」
「……」
「この辺では、ああいう風雨をな、一刻風、といってな、一番警戒しますのじゃ。もっとも、めったにあるこっちゃないが、狂い風、とも言いますわな」
風でも雨でも、半日一日にわたるのは、普通だが、突然、晴天が曇って、あれほどの突風、豪雨をもたらしたのは珍しい。
よく、山風は避けよ、海風は逃げよ、と謂う。
山風は、はげしい時間がすぎれば、木が折れても、それだけのことだが、海ではあとの余波がある。
風や地震は、津波をかきたてる。強風がおさまって、青空が出てきても、海面の方はおさまらない。
遠方から津波がおし寄せてくるのだ。海流の現象は、その場だけのものではない。
「それにしても、よく助かったものだ。なまなかの者では、とっくに、藻屑になっているわな」
漁師たちがそう言うのだからこの突風は、よほどのものだったのだろう。
「おれのなかまは」と、新九郎は、盃を傾けながら言った。
「おれ以上に、逞しい連中よ。叩き殺しても死なぬ」
「ふええ、お前さま以上になあ」
「そうだ、おれなど、どうということはない」
その体軀には、あちこち傷が出来て、その傷の手当をしてくれた娘は、なおも、新九郎が酒を飲もうとすると、
「もう、それ以上、お酒を飲んでは、からだに障ります」
と、たしなめた。
「そういうな。おれは酒で保っているようなものだ。酒は飯の代りよ」
「いま雑炊を作って進ぜます」
囲炉裡では、さっきから、鍋がふつふつ音を立てていた。いい匂いが流れてくる。
人間というやつは勝手なものだ。
生死の間をさまよっているときは、欲も得もない。ただ、生命が助かればいいと思う。
ほかに何もいらぬ。一切がほしくない。ただ、生命だけありますように、と希うものだが、その危難を超えてしまうと、咽喉もと過ぎれば、熱さを忘れる、で、欲が出てくる。
酒を飲み、雑炊を食うと、人間らしくなってくる。

(美い女だな……)
娘の容姿が気になってきた。
それだけ新九郎が健康だということだろうが、
(優しい娘だな……)
傷の手当をしてくれた手つきや、深酒をたしなめる声やしなをつくるところに、ふっと色気を感じた。
漁師の娘にしては、色が白いし、からだつきもしなやかだ。立ったり坐ったりする腰つきが、細腰なのにくりっとした臀部に色気がある。
世話してくれる娘に対して不埒かもしれないが、男だからしかたがない。性衝動というものは、しかたがない。
ただ、抑えることができるかどうかだけである。
「おりょう」
と、呼ばれていた。
(おりょう、か、悪くない)
呼んでみたい、と思った。
が、この村でも、おりょうはぬきんでた縹緻良しなのであろう。
漁師たちが、なかなか、去ろうとせず、新九郎に何かと話しかけたり、土間に坐りこんで、出てゆこうとしないのだ。
若者たちは、おりょうの動静がやはり気になるらしい。無駄口を叩いて、女の気を引こうとしているのがわかる。
どこの村でもある情景だ。
「お侍さま、一体、どこからござらっしゃった」
「伊勢だ」
「へえ、凪ぎなら、ひとまたぎなのに、とんだ災難で」
「一体、どこへ行くおつもりで」
「うむ……東の方へな」
言葉を濁したのは、この村の様子がまだ、はっきりしないからだった。
それこそ、三河なのか遠州なのか、駿河なのか、いずれこの東海地方であることは間違いないだろうが、様子がわからないうちはうっかり答えられない。
何しろ治安のよくない時代なのだ。うっかり、
(駿府に行く)
と、答えてしまって、このあたり敵だったら、とんでもないことになる。
(駿河の太守の側室は、おれの妹だ)
とも言えないのである。
「あ、そうだ、おれの刀。海水に浸ったままでは赤鰯になる。とりあえず、真水で洗ってくれ」
「はい」と、女は涼やかな眼をむけて微笑んだ。「もうそのように洗って、よく拭いておきました」
気が利いている。言われなくても、そこまで気がまわるのは、武士の生活を知っているのだろうか。

「御覧になりますか」
おりょうは、大太刀を捧げるようにして、持ってきた。ちゃんと、神棚に乗せてあったのである。
粗末な漁師の家だから、半分は土間で、囲炉裡が切ってあり、そこら中雑然としている。うっかりそこらに置いて、がさつな連中が足蹴にしたりしてはいけないと気を遣ったのであろう。
「忝けないぞ」
新九郎はすらりと抜いてみた。
自慢の大太刀である。このころは打ち刀と称った。
大小は失ったが、この大きい奴だけは手放せない。
戦場に出た場合、具足や兜の上から叩っ斬る。殴る。薙ぎ倒す。突く——
普通の刀では、すぐに折れてしまう。そういう荒っぽい闘いに耐えるように出来ている。蛤刃と俗に称う。肉が厚い。胴田貫である。
したがって、この打ち刀をふるうのは、とても片手ではできない。
刃渡り三尺以上の、こういう打ち刀は、槍、薙刀の代用をなす。
いや、もともと、薙刀などは、剣と槍の特色を折衷して発明されたものだから、打ち刀があれば使い方ひとつで、かなりの働きをする。
（これさえあれば……）
新九郎は、ほっとした。何か安心がある。いのちを支える力強さを感じる。
刀は、海水に弄れて、かなりの時間を経ている。塩気は、もっとも悪いのだが、真水で洗ってすっかり拭いをかけてくれたようだ。
はばき元も柄の目貫のあたりも、きれいに拭われて、水気はない。
むしろ、新九郎は不審さえ感じた。これは、ただ丁寧に拭ったというだけではない。
柄をはずして、中心まで、水気を拭いとってある。こまかな配慮である。
「そなたが……」と、新九郎は、女を見た。「よく気がつくな。刀のことを知っているのか」
「はい……いいえ」
微笑しておりょうは、あいまいな表情を見せた。漁師の娘にしては、何か雰囲気が違った。
だが、それ以上、詮索するのは、この場合救助された身で不遜だった。
「忝けない、礼を言うぞ」
「いいえ、それくらい。このあたりは、始終のことだもの」
「ここは、一体、どこら辺なのだ」

「遠州ですわ」
長谷、と聞いても、新九郎には見当がつかなかった。
遠江のくにはひろい。海岸線が長い。
そのどこかであろう、遠州灘二十里という。渥美半島の海岸線は入っていまい。そのどこかにちがいない。とすると、駿河は近いのか。駿府まではどのくらいなのか。
ところが、その遠州も西のはずれという。
「三河とのくにざかいなんです」
と聞いて、落胆した。
「やれやれ、そんなに遠いのか」
「え？　どこに？」
「いや……どこでもいいさ、おれのいのちを助けてくれたところだから、極楽だ」
「まあ」
「ははは、この極楽には弁天がござる」
洒脱な新九郎の言葉に、おりょうは頬を赧らめた。
おりょうは漁師にしては、物腰が優美で、品があった。容色のすぐれたところは、鄙にはまれな女もいることで、この辺にいても不思議はあるまいが、教養や知性というようなものは、年月をかけないと身につかない。
おりょうは、しかし、そうしたものを鼻にかけるふうは見えない。
起居動作の端々に、それを感じるにすぎない。
村人たちとのふれあいにも、異和感を起させない、砕けた調子で応対しているが、身についた品のよさは、若い漁師たちのたわむれにも、上手にそらしているだけで、ことさらだって、感情をあらわさない。
若いのに、よく気がつく。十七、八であろうか。いうまでもなく、このころのその年齢は、むしろ婚期を過ぎている。
（娘……か？）
男を知ったからだには見えなかったが、処女というには、落着きがある。
一度、男を知って、懲りた、という感じだった。
この家は、村ではかなり裕福なほうらしい。
長老格の白髭の老人のほかに、頑丈づくりの五十年配の男とその妻、それから、十歳にならぬ子供たちが四人いるだけで、おりょうは、どんなつながりがあるのかよくわからない。
年齢的には、娘というところだが、夫婦の子ではないらしい。どこか遠慮したところが見える。
強いていえば、よその娘を預っているというふうだ。それも恩人か何か目上の家から。
その辺の複雑な事情は、他人が聞けるものではない。
新九郎はしかし、こんな娘と知りあえたのは、
（なんと倖せな男よな）

と、思った。

これだけ、九死に一生を得て、その上、美しい娘の世話を受けるとは、よほどついている。ところがそう鼻の下を長くしているわけにはいかない事件が起ったのである。

人生は計画通りにゆかない。当てものと褌は向うからはずれる、というが、常に不測の事態が起きる。予定通りにゆかないのが人生だと悟っていれば、絶望も大きくはない。挫折が常態なら、精神まで脆弱になることはないのである。せっかく六人が血をすすりあっての大志も、とんだきまぐれ風のために挫折してしまったが、伊勢新九郎は挫けない。

(雨の次は晴だ)

と、屈託ない。

雨や風に逆らうことはないのである。

海中へ投げ出されたから、逆らった。降りかかる火の粉は払うが、そうでない場合には、あくせくしない。

(機会はくる)

と、信じて疑わない。

(天運われに在り、だ。機会がくれば、摑んで放さぬ)

そのためにも、逆境にあるときは、あせらず、体力を養い、智慧才覚を磨く。

他日に備えるためだ。

必ず、おのれが活躍する日が来ることを信じていれば、日々が心豊かで、常住坐臥、目的への道を進める。

たとえ、寝ているときでも、飯を食っているときでも、それは大成への道程なのである。

マイナスではない。が、小人は常に不安を拭えない。そのために軽挙盲動する。

(あわててもいい結果が出たためしはない)

新九郎は、半生の経験で、はっきりとそう言いきれる。

(あわてる乞食は貰いが少ない、というやつだ)

応仁ノ大乱以来、混乱と焼土と化した京都では、連日のように暴動があった。

いわゆる土一揆や酒一揆などである。

土倉といわれる質屋を襲撃したり酒倉を打ち毀す一揆があったし、徳政の要求をかかげた一揆。

民衆の暴動である。そんな場合、先頭に立って、掠奪をはじめる連中はたいてい殺された。

用心棒に殺られる場合もあるし、うまく成功しても、あとで首謀者として処刑される。

首謀者でなくても、先に飛びこめば、首謀者と目されるのである。

暴動は、人間を狂気にする。たとえ正当な、貧や飢からの行為であっても、昂奮は気持を荒廃させ血に狂わせる。

血が血を呼ぶのだ。それは、目的を逸脱させ、人間をけ

ものにする。

そこには、人間が生存本能にしたがうための陥し穴があり、天の摂理は、また人間が動物に還ったときの淘汰の法則まで用意しているのである。

(愚かだったら生きられないのだ)

この乱世を生きぬくには、聡明でなければならなかった。そして、体力と——新九郎は体力の恢復につとめて、しばし目的を忘れようとした。

体力が恢復してくると、欲望が頭をもたげてくる。

新九郎の体軀は普通ではないかもしれない。並よりも健康体であろうが、それにしても、少々異常ではないかと自分でも思うことがある。

女がほしくてたまらなくなるのだ。

(天下に志を立てた丈夫たる者、婦女の肉体を思いわずらうなどは下の拙たるもの)

そう反省するのだが、欲望だけはしかたがない。

それも対象がないならまだしも目の前にいる。

おりょうの姿態がちらついてならぬ。

おりょうのほうで、並々ならぬ気の遣いかたをしてくれるのが、苦しいほどだった。

(いかんな、こんなふうでは)

女と遊ぶのはいいが、想い患っては男の仕事が駄目になる。

大志を抱いた身なのだ。それに志摩の女小笛のことが忘れられない。

小笛なら妻にしていいと思った。

かれの過去には、それほど想った女はいない。

多くの女が、何らかの影を投げてはいるが、生涯添い遂げようと思ったほど、深く心に食い入った女はいない。

小笛は、そんな意味では、はじめて新九郎の心をとらえたといってよかった。

(小笛を好きなのに……不思議なものだな)

他人事のように突っ放して自分の欲望を見る余裕は、やはり年齢のせいであろう。

(おりょうも抱きたい……抱きたくてたまらなくなる、どうにもならんな、これは)

寝ても起きても、どうにも始末がつかないように、からだがそれを露わにするのだ。

誰もいないときなら、いいようなものの、おりょうが傍にくると、そこを見られないようにするのが大変なのだ。

昼間はそれでもまだいい。人が来たり、陽がきらめいていれば、気がまぎれる。が、夜になって、同じ家の内に寝ていると思うと、どうにも耐えられない。

(夜這いするか)

夜這いはさして奇異でもなければ、不埒ともされない時代である。女の方でも、相手が好きであれば、身をずらし

て、男を迎える。
だが、どうにも新九郎の意馬心猿を阻むのは、
（救われたのだからな……）
と、いうことであった。
これがただ一宿を頼んだくらいなら、夜這いもしよう。何しろ九死に一生なのだ。いくらなんでもそれはできない。第一、ほかの村人たちの面子を踏みにじることになる。
（やむを得ん、ここを離れなければ）
自分の心が恐ろしかった。いつおりょうの寝床にもぐりこむかわからない。
そんなある夜、おりょうが近づいてきた。
女が枕元に来たとき、新九郎は眠りの中にいた。
匂いでさめた。いや、やはり気配か。足音が近よったからであろう。
眼がさめたとき、女の匂いが闇のなかに強く漂っていた。あるいは欲情を圧え難くなっている男だけが感じた匂いか。
おりょうは、ひそりと枕元に坐った。黙っている。闇の中に仄白く女の顔が浮いていた。おぼろなだけに幽艶な感じであった。
（何をするつもりか？）
新九郎は、眠ったふりをしている。
だますつもりではなかった。女の行動がふと不審を呼んだのである。
女は何も言わない。何もしない。ただ、坐っているだけだった。
うす目をあけて見ていると、おりょうは、胸をあえがせて、ふかい吐息をついている。こんもりと盛りあがった胸乳が感情を圧えきれないのだ。
（この女は？……）
新九郎は身を起そうとした。
すると、おりょうは、つと腰をあげた。鳥の飛び立つように、走りだした。
あまりに急な行動だったので、新九郎は声をかけることもできなかった。
開け放されたままの戸が、ギギイと、音を立てている。そこから月光が流れこんできた。蒼い月の光である。新九郎は立ち上ると、刀をつかんで、外へ出た。
女の奇嬌な行動に、眼がさめてしまった。まだ女の匂いは残っている。熟れた肌の匂いが、どこまでも新九郎の鼻についてまわる。
外へ出ると、砂浜が蒼い水底のように見えた。波はおだやかだった。潮騒もいつもより静かに思えた。漁船が疲れたように横たわっている浜辺である。その波打際に、影が見えた。
人影だ。
おりょうだろうか？　声をかけるのをためらったのは、

彼女の行動があまりに突飛だったからである。
月光は波に砕け、銀波を散らしていた。おりょうが、ふいに着物を脱ぐのが見えた。
（あっ！）
何をはじめるのか。
夏の夜とはいえ、水に入りたいほど、暑いわけではない。にもかかわらず、おりょうは、着物を脱ぎ捨てると、磯波を蹴立てて、海へ走りこんでゆく。
「待て！」
新九郎は、刀を捨て、走りながら、着物を脱いだ。
おりょうのあとを追って海中へ。一瞬、きゅっと肌がひきしまる冷たさだ。
「待て、どこへゆく」
抜き手をきって追いすがる。
「放して！」
おりょうは手をふりきろうとする。
「どうしたのだ」
「いいの、放して」
波の中であった。もう足の届かないところまで進んでいる。
おりょうはもがいて、逃れようとしている。が、もがくほど、波にまかれて溺れかける。
新九郎は、おりょうの頬にはげしい平手打ちを食わせた。
「とにかく、浜へ」
水を蹴って岸へ向って泳いだ。
おりょうをひっぱって浜辺へ着くと駈け上った。
二人はそのまま、砂浜へもつれるように倒れた。
「放して」
押えられても、おりょうは顔をふって、叫んだ。
「放して！」
女体のはげしい動きとともに、みごとな乳房が、ぶるんぶるん動いた。
男の手がそれを摑んでいる。
驚づかみにした。女は一瞬、息を呑み、眉をひそめた。痛みに耐えるように。だが、その次にきたものは、一種の恍惚の表情だった。
待ちうけていたものが、漸くきたように、女は、その恍惚感の中に浸ろうとした。
新九郎の唇が迫って吸いたてた。それを、避けようともせず、女は受けている。
女の手が背中に廻された。新九郎は下帯をしめていたが、女は全裸なのである。
砂浜の上だということも、深夜だということも、おりょうは意識にないように、男を抱きしめ、足をからめた。
おりょうは、はじめから、こうなることを予期していたのだろうか。新九郎の枕元に来たのも女の感情が命じたも

のだろうか。
おりょうの手は、思いがけない大胆さで、男の股間にのばされている。新九郎の下帯は、もう充分におとこのいのちの充実をあらわにしていた。
その手ざわりの素晴しさにも、しかし、女は、何らの言葉を洩らさなかった。
だが、男の唇を受け、その手は、充分に感情をこめている。その大きさに驚嘆し、その逞しさに畏怖し、そして、その微妙な生き物に感動していた。
その手が物語っていた。言葉のかわりに、手がもとめていた。
それを、潮風にさらしたのも、そして、自分の裡に誘い入れたのも、女の手であり、昂揚した情感のあらわれだった。
一つになると、女は、舌をからめたまま、感動の声を、はじめてあげた。
それは言葉にならず、女の呻きとなって男に歓びをつたえたのである。
女の過去は知らない。どういう過去があるか知らない。またそれを詮索する気はない。
現在に生きる者は、過去をふりかえるのは好まないのだ。だが、深夜の砂浜で見せたおりょうの激情は、新九郎の目を瞠らせるものだった。

おりょうには、何か、暗い一面があった。
快活で磊落な、さっぱりした漁師の男女とは同化し得ない、異和感があった。
その翳りが何に由来するのかはわからなかったが、新九郎の興味をひいたのである。
砂浜で裸身を合わせてからのおりょうは、官能の疼きを拒めない雌になった。
大胆にも、彼女の方から、かれに触れて、花芯に導いたのである。
そして、盛り上る情感のままに声を放って歓びを貪った。
それは貪婪といいたいほどだった。
新九郎の逞しいからだは、この女体の要求にこたえるだけのものがあった。
黒潮のうねりのように、あとからあとからと盛り上る情意が、新九郎を快楽の波で弄び、時の経つのを忘れさせた。
女は、ほとんど、ものを言わなかった。
口数の少ないおりょうではあったが、こうやって甘美な波間に漂う以上、余分なものは一切はぶいて、ひたすらにおとこを貪るのだった。
そこには、長い渇きが感じられた。
そこにあるのは、現世の歓びだけであり、その歓びにしか、生きている存在を確かめることがないかのように、女は、もとめ、さらに、もとめた。

絶頂感を何度味わったかしれない。
新九郎が一度放つあいだに、女は、五度も六度も、頂きにのぼりつめ、いまにも息がとまるかと思われるほどの、悶えを見せた。
彼女のたまぎるような叫びは、幸い、潮騒と海風がかき消してくれる。
もしも、あの家で、こうしたことになっていたら、家族たちが眼をさまさずにはいなかったろう。
それを知っていて、故意に海へ誘ったのかもしれない。
新九郎も多くの女を知っているが、これほど、静と動の明暗の変化のはげしい女は、はじめてだった。
慎みと淑やかさが、一転して激情を見せる。そこに女のいのちの炎が燃えた。
焼かれることの歓びを新九郎は知った。
どれくらい経ったろう。
二人は砂浜に横たわっている。おりょうは、裸のままであった。
月はかなり傾いていた。まるで夢の中の出来事のようであった。
潮騒と松籟の音と——
いやそれ以外の音を、新九郎は聞いたように思った。
「——馬だ、騎馬が……こちらへくるぞ」
たしかに、馬蹄のひびきだった。
一頭や二頭ではない。少なくとも四、五頭はいそうであった。
(来る!)
戞々戞々と、大地を打つ蹄の音は、新九郎にふっと戦場を思わせた。
男の血を甦らせたのである。
「これは、尋常ではないな」
おりょうを見た。
砂浜に長々と横たわった肌が、蒼い月の光の中で、人魚のように美しい。
長い黒髪がぱっとひろがってまるで、海中にゆらぐ藻のようであった。
彼女の耳には、馬蹄のひびきも、潮騒も聞えないのか。
官能の嵐が吹き過ぎて、なお余情の潮に洗われているように、その甘美さの中に浸っているのだった。
半眼に閉じた睫毛が長く、風にふるえている。うすく開いた唇は、あの激情の叫びを、いまにも洩らしそうであった。
仰向いても、崩れることを知らない乳房が、月に向って、いどんでいる。
新九郎は、その乳房に手をおいた。
「こちらに来るぞ」
「……」

「こんな夜半に、騎馬の群れとは尋常ではない」
「……」
「近くで戦さでもやっているのか」
そんな言葉にも返事をしない。
おりょうには、戦さなどは、関係がないのであろう。この余炎が、いつまでも、さめないでいてほしい。若いからだの息吹きは、そう訴えているようであった。
長い時間を耐えていたにちがいないが、女の情感は、そんなにあとを引くものか。新九郎は手をのばしてまず刀をひきよせ、それから着物をつかんだ。
刀の下緒を咥え、着物を着ているのを、女は、横たわったまま見上げている。
ひとごとのような眼で、
「もう?」と、言った。「もう、これっきり?」
「今夜は、な」
「……」
「楽しんでいることを許されないようだ。聞えないか、あの音が」
それでも、女は小袖をとろうとはしない。
砂浜は起伏があった。草の生えた丘のうねりの彼方に松林があって、そこに一筋の道が街道に通じている。
そこに騎馬の影があらわれるのは、間もなくであろう。
「早く、家に帰ったほうがいい」新九郎は女を促した。
「何が起るかわからぬ」
「いいの……」
何が起っても、何が起ろうともいまの満ち足りた歓びの火照りを消したくない。
そんな女の心にかかわりなく、騎馬武者の姿が松林からあらわれた。
騎馬武者は五、六騎。ほかに徒士の雑兵が七、八人。
松林から走り出てくると、月下に眠っている漁村を見まわして、
「どこだ、その家は」
と、大将格の男が見まわした。
鯰尾の兜を猪首にかぶったずんぐりむっくりした武者である。
「あれじゃ、網が干してあるろう、あの向うの……」
「行け」
ぴゅっと鞭を鳴らした。数頭が走りだす。
「勝又、うぬらは裏口にまわれ」
「おう」
「赤兵衛はここをふさげ。逃すまいぞ」
行動は機敏だった。騎馬と徒士がそれぞれに、配置されると、その鯰尾の兜武者は、鞭で馬の尻を打った。落松葉を蹴立てて馬が走りだす。

砂浜で見ていた新九郎は、かれらがとり囲んだのが、おりょうの家だったので、一層驚いた。
「おい、彼奴ら……何者だ」
「……」
おりょうは、ものうい顔で見やった。無言で首をふる。
殺伐な武者たちには関係がないという顔だった。
「知らぬのか、すると、おれを斬りに来たのかな」
新九郎は首をひねった。
「はて……面妖だな」
心当りはなかった。
どういう連中か見当もつかぬ。月光のもとに見る武者たちの姿はさだかではないが、雑多な感じだった。
(野伏りか?……)
この東海地方に来たのははじめてなのである。こういう手合に襲われるおぼえはない。
大分限者(大金持ち)ならば、こんな時代だから、狼が獲物の匂いを嗅ぎつけるように、襲ってくることは不思議ではない。
だが、いまの新九郎は無一文だ。あの又次郎の銀も海底に眠っているだろう。
孤剣しか財産はない。野盗に襲われるにしては、あまりに貧寒なのである。
(おれを狙うとすると……神宮の手か、いや、こんなところまでは来まいが)
伊勢神宮の神領が、三河や遠江にもあるということは聞いていた。が、そこまで執念ぶかく、つけ狙われることはない。
あとは、お丹と宇部が雇った野伏りたち。私欲を含んでいるかもしれぬ。
それにしても、新九郎だけが助かってこの地にいるということをどうして知ったろうか。
それらのことを考えても、どうしても納得いかないことだった。
武者たちは、戸を叩いて、何やら喚きだした。
「開けろ、開けろ」
「開けぬと、ぶち破って入るぞ」
そんな声が砂浜まで聞えてくる。
掛矢を担いでいる者もいた。大薙刀の石突で、がんがん板戸を打っている。
「起きろ! 訊ねることがある、起きろ」
「与右衛門、いるか、与右衛門、起きて来い」
男たちは喚いた。馬が嘶き、騒然たる連中のけんまくには、息をひそめて、中でふるえていても免れようはないとあきらめたのであろう。
「どなたじゃ、かような夜半に、一体……」
「開けろ、横地右馬介どのの使いじゃ」

「横地……」
仰天したようである。沈黙があった。その沈黙をぶち破るようにまた大薙刀の石突が板戸に音を立てた。
「開けぬか！」
「は、はい……ただいま」
与右衛門とは、当家の老人である。
白髪の痩軀鶴のごとき老人は、すでに七十古稀を過ぎている。戸を開けたのは、その倅の藤兵衛。倅といっても五十年配なのだ。
戸が開くと、どかどかっと、雑兵は雪崩れこんだ。
「あ、何をなさる」
「どけ、邪魔ひろぐとぶった斬るぞ」
槍や、刀や、抜身を閃かせて乱入したのである。同時に、裏口の戸も、蹴破られた。
「こりゃ乱暴な」
藤兵衛も屈強の男だが、こうした連中にかかっては、どうにもならぬ。
どーんと、胸を突きとばされて土間に転がった。はね起きると、妻と子供が、悲鳴をあげて、駈けよる。
雑兵らは、手に手に、松明を持っていた。その火明りと形相のものすごさに子供が悲鳴をあげる。
「やい、おりょうはどこにいる」
家の中を見まわした連中は、さしてひろくもない家だけに、さがしようもなく、藤兵衛と与右衛門に詰め寄った。
「は、はい……」
「やい、隠すな、この家におりょうが匿まわれていることは知っているのじゃ、吐け、どこだ」
「あ、あの、実は……」
「どこだ！」一人が、藤兵衛のえりがみをつかみ、刀の尖先が胸に突きつけられた。「吐かねば、ぶすりとゆくぞ、隠しだてしても、所詮は痛い目を見るだけじゃ」
「……」
「しぶといやつ。一人ずつ殺しても聞きださずにはおかぬ」
別のやつが子供の腕をつかんでひきよせた。十歳ばかりの女の子である。その悲鳴が、砂浜のおりょうにも聞えた。
「あ、お品が……」
おりょうは思わずのびあがった。
可愛がっていた女の子の悲鳴である。さすがに、愉楽のあとの余情にうつつになっていた耳にも、きり裂くように聞えたのだ。
「待て」と、新九郎は腕をつかんだ。
一糸まとわぬ裸身なのだ。
「着物を着ろ」
おりょうは、漸く我にかえった。
「奴らは何をしに来たのだ」

「……」
「子供にまで手をだすとは、不埒な奴らだが……心当りがあるか」
「――いいえ」
おりょうは否定した。
が、その心配げな顔つきは、まるっきり無関係ではないことを物語っていた。
（知っている！）
漁村にこの女が住んでいること自体が不自然だったのである。
（何かある……この女に関連したことだ）
秘密を持った女なのだ。暗い翳り――いまさっきの情熱にも、それが感じられた。抑圧された情念が堰を切ってあふれたようなものだった。
「言いたくなければ、聞かぬ」
「……」
「が、子供にけがをさせるようなことでは、黙って見ておれぬ。彼奴らから聞く」
新九郎は立ち上った。
「あ、待って」
「そなたは隠れていろ」新九郎は歩きだそうとしてふりかえった。「ちゃんと帯を締めておけ」
にやりと笑った。
与右衛門の家を捜した荒武者たちは、目あてのおりょうがいなかったので、藤兵衛をいためつけようとしていたのである。
そこへ、新九郎がのっそりと入ってきた。
「何やら騒々しいな」
恐れ気もなく見まわした。
荒武者たちはぎょっとしたように、ふりかえって、
「何者だ」
「そいつはこっちで聞きたいところだ」
新九郎の態度が、悠々たるものだったので、みんな気を抜かれた。
暴気には剛気である。もしも新九郎が抜刀して飛びこんできたら、かれらは一せいに、牙をむいて襲いかかったろう。
その熱気に水をさしたように、颯然として入っていったのだ。
「とにかく、その手を放せ」
藤兵衛の胸ぐらをつかんでいる男の肘に触れると、大の男が悲鳴をあげ、のけぞった。軽く触れただけなのである。
「うぬ、邪魔をさらすか」
勝又と呼ばれた男が斬りかかったが、これも刀は虚しく流れて、どうと倒れ、土間に転がり落ちている。
新九郎の態度は変らない。蹴倒したあと、にやりとした。

「おれを殺りに来たのではあるまい。つまらぬ腕立てしてけがをするな」

身の丈もすぐれて大きいし、これだけの荒武者と殺気の中で悠々としているのは、それだけの自信があるからであろう。

「この中の首領は誰だ、話があれば、おれが聞く」

「大きく出たな、浮浪の身で、何を申すことかい」横地右馬介は、輩下をかきわけて出てきた。「おれが大将じゃ、うぬの名は？　何と申す」

「伊勢新九郎長氏」

「ふうん、伊勢だと、聞いたこともない」

見たこともない、と、赤兵衛らがおどけた調子でつづけた。げらげらと、みんなは笑った。

あざやかな腕前を見せたといっても、所詮は一人である。恐れるにたらずと、人数を頼んで、故意に、荒々しい態度でとり囲んだ。

「見たこともないのう、月夜に浮れ出た、狸か狐か」

「うぬらは鼠か」

「なに！」

「人間なら、名があろう、名乗ったらどうだ」

と、新九郎はどっかと炉端に坐って、

「火を貸せ」

当時は囲炉裡の火明りも、灯である。貧しい家では、灯火の器具を持たないところが多かった。

囲炉裡は、暖をとり、灯りとなり、ものを煮焚きする。効用が多いから、徳川時代になっても、初期には江戸市中ですら、用いられていたものだ。

まるで血に飢えた野獣の群れの中に坐ったようなものだ。その放胆さに、大将の横地はさすがに、内心舌を巻いた。が、それを顔や言葉にはあらわさない。

「おれが横地右馬介だ。うぬはこの家のなんじゃ」

「なんでもない」

「な、なんでもない奴が、太い面をしおって」

「太い面かのう。ま、おれの面のことはよい。それより、目的を聞こう、深夜に他人の家を襲うとは何事だ」

「用があれば、家でも寺でも踏みこむぞ」

横地はどんと足踏みした。

「静かに話せ。埃りが立つ」

松明の火を移して、粗朶火を燃やしながら、じろりと見上げた新九郎は、

「牛刀をもって鶏を割くということを知っているか」

「……」

「話を聞こう」

「お、おりょうだ」

やはり、そうか。新九郎は眉根を寄せて、

「おりょうがどうした。おぬし、ふられたのか、あの女に」

「さ、左様なことではないわい！」

横地右馬介は怒鳴りつけるように叫んだ。

「おりょうは何処だ、何処にいるのだ、おりょうを出せ。この家にいることはたしかめて来たのじゃ、たばかっても……」

「耳にうるさい、喚くな」と、新九郎は眉をしかめて、

「おりょうは居ないぞ」

「なに、隠すか」

「隠すも隠さぬもないわ。見た通りだ」

「うぬ！　ここには居らんわ。どこぞに、隠したのであろう」

「なんのために？」

そこが聞きたいところだった。

「なぜ、隠さねばならん？」

新九郎が疑問を向けたのへ、はじめて右馬介は不審を感じたようであった。

「知らんのか、あのことを」

驚いたように、なかまと顔を見合わした。

勝又も赤兵衛も拍子抜けして、

「わけも知らぬに、つまらぬ腕立てをして、横地どのに楯つくとは、怖れを知らん、たわけ者じゃナ」

「ヨコ地か、タテ地か知らんが、真夜中に、他人の家へ土足であがりこむのは、許せぬぞ」

新九郎は、これだけの武者に囲まれていて、びくともしない。

囲炉裡の火が勢いよく燃えて新九郎の顔を赤く染めている。

これくらいの人数なら、大したことはない。腕前も知れている。身ごなし体格で、凡そのところはわかるのである。だが、場所がらを考えると、斬り合いはできなかった。

老人子供に飛ばっちりが及ぶ。この連中のことだ。家に放火するくらいのことは平気だから大変なことになる。

（やっつけるには、外へおびき出さねばならんな……）と、考えた。

それでも、放火しないとはかぎらない。それに、女子供を人質にされると、お手上げなのである。

ここは、荒事は損だと判じた。何しろ相手は無法者の野武士たちなのである。

「――知らんから聞いているのさ、聞きたい」

「ふむ。話せば、おりょうの居所を教えるか」

「さあ、そいつはなあ、知らんのだから、教えようはない」

「ちえっ、それでは何にもならんわい」

「でもないぞ」と、新九郎はにやりとして、「話の次第によっては思いだす、ということもある」

「こやつ！」

「いや、申し様が悪かったな、つまり、いい考えも出る、ということさ。おりょうの行く先も推測できるというものだ」
「なるほど」
「であろう。事情を知らいでは判断のしようがない」
新九郎の言葉には説得力がある。
横地右馬介は、頷いた。それから、炉端にどっかと尻を据えた。
「おりょうは明珍の血のひいた娘じゃ」
と、横地右馬介は言った。
「明珍……甲冑師のか」
「ほかに明珍などという姓があるものか」
「それもそうだな」
苦笑して新九郎は、打ち刀を膝前にひき寄せた。その大角鍔も明珍きたえの逸品である。
「明珍の娘が、何故ここにいる」
「いろいろと理由があってな。とにかく、おりょうを連れてゆかねばならん」
「その理由を聞こう」
「それも言わねばならんのか」
横地右馬介は、武辺者にありがちの、口下手らしい。訥々として話しだした。
おりょうの父が、今川家に仕えている。名前は高義と称え、天下に聞えた甲冑師だから、今川義忠の大鎧や一族重臣方の注文に応じている。
それだけ信用されている男だから、駿河に潜入するには、大いに利用できる、というのである。
(明珍高義か……)
新九郎は思いだした。
京で何度か見たこともある。御所に出入りしていたからである。
明珍という変った姓は、平安中期以降のものであった。
もともとその祖宗徳が甲冑作り天下第一の称を恣にして以来、世に周く知られ、その門下に名工が輩出した。
甲冑だけではなく、鍔にも、独自の鍛えかたをして、その方でも喧伝された。
殊に、不世出とされた宗介は出雲出身で、出雲守と称し久寿と号し、洛中九条に住んで、その鍛工の妙をうたわれたが、時の近衛天皇より、
「明珍の腕なり」
とて、明珍の号を賜って以来、一門、その名を称するに至ったのであった。
鎧の目的は剛堅を良しとする。が、身にまとうものだから、軽く動きが自由でなければならない。
その両方の特色を生かしたものがもとめられるのだ。即ち、剛堅緻密でなければならない。殊に、平安の時代では、

さらに華麗であることも必要であった。
武家の方では、勝手な条件をつけるものだが、その要求を入れて作る。
明珍とは他に類がないの謂いである。
宗介はのちに鎌倉に移ったが、以来、甲冑といえば、明珍というふうに、世評は定まっている。
この明珍第十四世義長の弟が、高義である。
洛中一条堀川に住して、足利家の御用甲冑師として腕をふるっていたのだ。
かれは、信家、義通とともに、明珍三作、と後世まで歎称される名品を作ったが、応仁ノ乱で行方知れずとなっていたが、駿河に来ていたのか。
おりょうが、高義の娘というのにも驚いたのである。
「明珍高義の娘か……ふむ」新九郎はうなずいた。「どうやら、わかったぞ。つまりおりょうを人質にとって、明珍をおどし、駿河を乗っとろうというわけだな」
それを聞くと横地右馬介はじめ、みんなげらげらと笑いだした。目的を看破されて、何やら、おかしくなったのであろう。
「その通り」と、右馬介は悪びれずに、答えた。「存外に、目はしの利く男だのう、伊勢新九郎とやら」
「目は見るためにある」
「……」
「耳は、聴くためにある」
「ふん、その目で見たか、おりょうの場所を」
今度は、新九郎が黙る番だった。
右馬介は、貧乏ゆすりした。
「おい、その目で見たか、耳で聴いたか、おりょうの居場所を教えろ、多少の銀ならくれてやろう」
じろりと新九郎は右馬介を見た。
「言いたいが……知らぬ」
「なんじゃい、ほんとうに知らんのか」
「ああ、知っていれば申すがなあ」
「しかし」と、赤兵衛が、口をはさんだ。「尻候の報告では夕景まで、ここにいたのを見かけたというぞ」
「……」
「裏の井戸端で洗いものをしていたのを見ている」
「ああ、夕方までいたさ」と、けろりとして新九郎は、うすく笑った。「おれと、チトいさかいをしてな、ぷいとおん出た」
「……」
「どこへ行ったかと、そのあたりを探していたのさ、ずっとな」
「ずっと？」
「ああ、おれは食客の身ゆえ、この家のものと喧嘩して、おれの方が出てゆくなら、話は通るが、娘の方が出ていっ

ては、大変に迷惑かけることになる。な、それゆえ、探していた」
「で、いなんだのか」
「ああ……やむなく、とぼとぼと戻ってきたところに、おぬしらが大騒ぎしていたというわけじゃ」
「ふうむ」疑わしそうな眼を見合わしている。
新九郎は涼しい顔で、
「おぬしらの話の様子では、察するところ、駿府に去んだかのう」
そうかもしれん、と右馬介らは漸く、納得したようであった。
「居らんとなりゃ、しかたがない。くそっ、運のいいやつだ」
「なに、おぬしらが、運が悪いのよ」
「ちえっ、いめいめしい」
みんな立ち上った。右馬介は具足を揺すって土間へおりると、
「またくるぞ」
と、喚いて、外へ出た。
が、一筋縄でゆく男ではなかった。馬へ乗りながら、何やら、赤兵衛ともう一人の男に囁いた。二人は闇に消えている。
馬蹄の音をひびかせて、右馬介の一行が立ち去ったのを、おりょうは砂丘の陰から見守っていた。
（ああやっと……）
むろん、おりょうは知っている。なぜ、あの連中が来たかを。
かれらは、ただ、明珍高義が義忠お気に入りの甲冑師だからというだけの理由で、おりょうをさらおうとしたのではなかった。
横地右馬介の父隼人正時定は吉良の一族であり、以前から駿河を狙っていた。
おりょうが父高義に伴われて駿河へ下向するとき、この浜名郡鷲津で、隼人正の城砦に世話になったことがある。
道中を擁して、半ば強制的に連れて来られたのだが、ここに一年ほど滞留した間に、おりょう成長のみぎりは右馬介の妻にするという話があった。
半ば戯れの調子であり、世話になっていることではあるし、何しろ地侍として勢力家だから、高義も、相槌を打っていた。
妻、といっても、妾である。おりょうは、十三になって間もなく、右馬介に手ごめにあいかけて、鷲津を逃げだした。
駿府へ走った。駿河下向のことを取り計ってくれた今川家の重臣を頼った。
ところが隼人正の方は、高義を圧えて、

「はたもの（磔刑）にかけようか牛裂きしようか」
と、威しをかけてきた。
おりょうが戻らねば、一家を惨殺するというのである。父の身を思ったおりょうは泣く泣く戻って、右馬介の側室となったのである。
このとき、今川家からは武者が護衛していって、
「明珍を招いたのは、当家である」
と、高義や家族らをひきとって駿府へ連れ去った。
おりょうは、いうなれば父や家族の犠牲になったのだが、右馬介に夜ごと愛撫されるのが、嫌でしかたがなかった。
とうとう、右馬介が輩下らと湖北へ出かけた隙に逃げだしたのだ。
真冬のことで湖面が凍った夜である。当時、浜名湖は海ではない。純然たる湖だ。部分的に厳冬には氷が張った。
おりょうがこの長谷の浜に身を隠したのは、遠江と三河との境に位置することと、与右衛門老人が今川家に昔仕えていたといい、万一の場合にはここへ身を隠すように今川家で聞いていたからであった。
横地父子の怒りは想像にあまる。
かれらにとっては、
「横地の面目をつぶされた」
ということになる。
今川家との関係は、一触即発の危ういものがあったのである。
当時の豪族同士の間は、境界なども定かではなく、したがって勢力の増減によって、版図が変り、微妙なバランスが保たれている。
おりょうの逃亡は、導火線に点火したことになった。
（どうしてわかったのかしら）
浜辺だから、人目に立たない。その安心感があったのだ。
駿府に戻らなかったのは、途中が危険だったからである。
横地の勢力は、浜名湖一円、浜名郡敷智郡から天竜川沿いに長下郡にまで及んでいた。
海岸線もかれらの勢力下にあり、船で逃げるのも難しい。かれらは、海上にも、軍船を遊弋させ、関銭をとり、海賊をはたらいていたからだ。
おりょうは姿を隠しているつもりでも、漁村には目立ちすぎる美貌だった。噂が立っていたのだ。偶然が、おりょうを助けた。
新九郎の逞しい男のからだに惹かれなかったら、かれらの魔手にとらわれている。新九郎に惹かれたことが難を免れたのだ。
その意味でも、新九郎は忘れられない男になりそうであった。
一行が去ったのを見て、おりょうは、立ち上った。家へ駈けもどろうとした。

と――

「いた！」

突然、声がした。

松林の中から、騎馬がとびだしてきた。

「おりょうだ」

馬上の男が叫んだ。

「つかまえろ」

一人ではなかったのだ。家の陰にもいた。

おりょうは、家に入ろうとした。むず、と羽交い締めにされた。

「さあ、もう逃さぬわい」

赤兵衛だった。

「小六、それ」

ずるずると引きずろうとする。

「助けて！　新九郎さまっ」

おりょうの悲鳴で、新九郎は打ち刀を摑んで走り出してきた。

「ぬ！　まだいたのか」

「あっ、きさま」

赤兵衛はふりかえりざまに抜刀した。

ひゅっと、白刃が月光を吸って流れる。

新九郎が飛びのいたとき、おりょうが、馬上にひきあげられるのが見えた。

馬上の小六にとっては、赤兵衛のことよりも、おりょうを連れもどるのが、目的だったのだ。そのまま、馬腹を蹴っている。

「あれえ、新九郎さま！　助けて、助けてえ」

その声が、長い黒髪とともに尾を引いて、遠去かった。

赤兵衛はそれを聞くとにやりとして、

「女は貰った、つまらぬ手出しはやめて、すっこんでいるがいい」

刀をふりまわして、じりじりとあとずさりするのを、

「おりょうをさらわれて、黙っておれるか」

新九郎は踏みこんだ。怒りが眼に燃えた。

もう、おりょうをさらった騎馬の姿は松林の中に消えて、馬蹄の音だけが、ひびいていた。

湖賊来る

浜名湖はいまでこそ、今切（いまぎれ）によって海とつながり、さながら入江の湾の如き形態だが、古くは湖であって、僅かに、一筋の川によってつながっているだけだった。

その川の名は浜名川と称ったようである。いまの新居の西方を流れていて遠州灘にそそいでいた。

この時代（文明年間）には、したがって東海道はつながっていたわけだ。このつながった部分は、天竜川からの漂砂によって生じた砂嘴（さし）で、いずれ断ち切られる運命にあったのであろう。

明応七年の大津波によって今切の中央部、もろい部分が陥没流失して、湖水と海がつながった。

もっとも太古は、浜名湖は陸部の低湿部分が沈降して海水が浸入して生れたものにちがいないから、その太古の姿にもどったといえるかもしれない。

明応七年といえば、五百年近く以前のことである。

当時の記録で見ると、浜名湖はこうして今切を湾口として海水の浸入を許し、浜名川は橋本入という入江となったが、ひとたび導入部が出来ると、蟻の穴も土堤を毀すように、度々の津波ごとに両岸が決壊流失して、湾口はひろがり、この橋本入の入江もなくなり、とうとう六キロにもわたる広い入口となってしまった。

江戸時代はこの渡しが東海道の難所の一つになっている。西国からの侵攻を阻む、駿府の前衛という意味に役立てられたのも事実だが、諸人は難儀した。

さて、この浜名川のほとりを馬を走らしてゆく影がある。おりょうが小六という横地輩下にさらわれた翌日のことである。

夕方、陽が沈みかけた時刻であった。

伊勢新九郎長氏であった。

孤影は落陽に灼かれる真っ赤な空を背景にして、北へと走ってゆく。

湖の色は赤く、血を流したようにぎらぎらと輝いていた。

次第に黒雲がその赤い色を侵し凄まじい形相に変えてゆく。

黒と赤に彩られた空ほど、人間の心を脅かすものはない。

表面をとりつくろった人間の心の奥底を無情にあばきたて、えぐりだしてみせるかのような、臓腑のしたたりを感じさせる。

乱世の象徴のような空であった。
新九郎は浜辺に聚落を見て入っていった。
「この村長の家はどこだ」
「喜作どのなら、あの松の木の下の家がそうですじゃ」
漁りした帰りの男はこういって、釣竿をかかげて教えてくれた。
新九郎はその村長の家の前でおりると、
「おう、喜作は達者か」
百年の知己のような顔で入っていった。
「どなたさまで」
暗い土間で網をつくろっていた老人が顔をあげた。
「やあ、喜作か」
「へえ……」
けげんそうな顔だ。はじめて見る男から、馴れ馴れしく声をかけられては、誰でも、とまどう。それに、この時勢では、見知らぬ男には心を許せないのだ。
新九郎の態度はしかし、馴れ馴れしいだけでなく、人好きのするものだった。新九郎は巨漢だが愛嬌がある。その眼に見られると、誰でも吸いこまれるような気がする。
「おれは横地の知りあいのものだ」
「へえ……」
疑わしそうな眼つきだ。
「横地右馬介の、な」
「へえ、さようで」
「横地右馬介に祝いごとがある、それでな、相談に来た」
新九郎はどっかと腰をおろして、「酒があったらくれい」
老爺の膝前に小銭を投げた。
牢人者というと、食物をねだり、財物を掠め、女たちを強姦し、あるいは子供をさらってゆく。そういう連中ばかりであった。
農民たちは、その連中に抵抗するが、そうでなければ、まるっきり無抵抗に、嵐が通り過ぎるのを待つしかない。こんなに酒を銭で買うという牢人者はいない。
横地一族の地侍たちは農民たちに対して横暴なこともあるが、少なくとも、諸国の牢人たちよりは、地元の生活を守ってくれる。農民たちは、その範囲で生きているのだった。
「へえ、まずい酒ですがの」
喜作は、瓶子を持ってきた。
むろん濁り酒である。欠け椀にそそいで、ぐっと飲むと、
「おぬしもやれい」注いでやって、「ところでな、喜作」
「へえ」
「頼みがある」
それきた、というふうに、喜作の顔が硬くなった。そういう農民の気持は、新九郎にはよくわかるのだ。
「むろん、タダでは頼まん」

「へえ……どんなことで」
「まず、これだけある。おぬしと村人にとらせる」
新九郎は、ざらりと、丁銀を革の財布からぶちまけて見せた。大金であった。与右衛門たちからかき集めてきたのだ。
かれらも貧しいが、（おりょうを助けるため）必要だったのだ。
その丁銀を見て、喜作は驚いたが、それだけあれば、村人が助かるのも事実だった。
「へえ、これだけ頂けば、みんな大喜びでございます」
「その仕事というのはな」
新九郎は一膝乗りだした。
「お祝いなのだ」
と、新九郎は言った。
「横地右馬介のところに女房がもどった。存じていよう」
「いいえ、よくは……たしか、おりょうさまとか」
「美い女じゃ」新九郎、浜辺で抱いた女の肌の柔らかさを思い出しながら、あわてて、その想いをふりきって、「それでな、その祝いじゃ」
「へえ、何ぞ、お祝いの品を」
「いや、おぬしらの舟を出して貰いたい」
「舟を、でございますか」
「みんな、舟を持っていよう」
「それは、漁をするために、へえぼろ舟ばかりでございますがな」
「その舟の上でカガリを焚いてな、鉦や太鼓ではやしてもらいたい」
「なるほど、な」
「それもじゃ、わーわーと、景気よくやってもらいたいのじゃ」
「それはもう……」
舟の数は、およそ、百艘くらいは集められるという。これだけの鳥目があれば、岬の櫛村の連中にも舟を出すよう頼んでみる。そうすれば二百艘くらいになる。
「そうかそれだけあれば、さぞ壮観だろう、わーっと、景気よくやってくれい」
「へえ、それは承知いたしましたが、それで、いつ……」
「今夜だ」
「それはチト、きつうございますなあ」
「いや、祝い事だから、日延べは出来ん、今夜、子ノ刻」
「……」
「よいか、子ノ刻だぞ」
新九郎は、その点に念を押した。
「子ノ刻に、鷲津の浜に上るのでございますか」
「いや、海上をな、ずっと、まわってくるのだ。そして、鷲津の沖合三町がほどのところまでくる」新九郎は、土間

に、小柄で図を描いて見せた。「その時刻と、点火の場所を間違えてはならん、おどかすのじゃからな」
「へえ、おどかすので」
「つまり、だ。祝い事と申すのは、あらかじめ予定してあると、面白くない」
「へえ」
「思いがけぬ贈り物こそ、うれしいものだ」
たしかにそうだと、喜作はうなずいた。
つい、いまさっきまで、こんな大金が転がりこむとは思わなかっただけに、嬉しいのだから。
「右馬介をよく知っているから申すのだ。よいな、このことは、誰にも口外してはならん、横地の者に知られたら、面白くもなんともない。突然、わーっと、景気よくやるのだ。吃驚すれば、するほど、嬉しくなる。右馬介の方からも、祝いの品々をおぬしをはじめ村方一統にくれるであろう」
「わかりやした。固く口止めしてすぐに集めますじゃ」

鷲津のあたりは、養魚場が出来たりして現在ではすっかり地形が変っているが、当時は砂浜つづきで、松林の間から湖水がのぞき、起伏した砂丘のかげに漁師の家が点在して静かな眺めであった。
湖水に臨む小高い丘の上に横地隼人正時定の屋形があった。簡単ながら望楼があり、屏には忍び返しをつけ、矢はざまを切り、石落しなども設けている。
湖水に臨んだ丘だから、いわゆる濠などはないが、水門をもうけ、そのまま、舟入り出来るようになっていた。裏側は土を掻き上げただけで、空濠のある個所もある。
丸石を乱雑に積んだだけの石垣の部分もあるが、こういう一見、荒れた感じの館は当時の城砦の特徴で、後世の白亜の城のように、きちんと区劃されていないだけに、どこから矢が飛んでくるかわからない。
忍びこめぬように罠が設けてあったり、下手に乱積みの石垣をよじのぼろうとすると、崩れ落ちたりする。
何しろ、四方が敵であり、油断も隙もならない時代だから、少しでも怪しい素振りがあると打ち殺されても文句はいえない。
新九郎がこの横地の勢力範囲に入って来たのは、亥ノ下刻（午後十一時）ごろであった。
中之郷の漁師たちの動きを見てから、馬を進めてきたのである。
（そろそろ危ないぞ……）
横地の屋形の灯が樹間にちらちらするようになったころ、新九郎は、四辺に警戒の眼をくばった。
案の定、突然、梢が音をたてた。隼の飛び立つように、ばさっと木の葉が哭いた。

新九郎の馬の鼻先を掠めて、一本の矢が飛んできた。馬は驚き、嘶いて棒立ちになった。
「誰だ、何をする」
新九郎の大喝に返事するかのように、また一本。こんどは逆の方向から、ぶつっと、三尺前の道に突っ立った。
新九郎は刀の柄に手をかける。馬首をめぐらそうとした。
と、またばさっと木の葉が騒ぎ、馬の尻尾を断ち切るように、三本目の矢が飛んできた。
「待て、何をする、だれだ……」
新九郎は闇に向って叫んだ。
その眼に、幾つかの影が樹間から滲み出るようにあらわれるのが見えた。
「――来たな」と、その影の一つが言った。「死にに来たか」
「馬鹿者が」
「地獄へ、行きたいか」
松明が二つ、近づいてきた。五六人の影を浮き上らせたが、かれらの手に弓や薙刀や掛矢が握られていた。
横地の輩下たちであった。新九郎は須臾の間に、冷静になっている。一人一人の影を見返して、にやりとした。
松明の火明りのなかで、新九郎の表情は、穏やかに見えた。
地侍たちの罵声には耳をかさず、
「出迎えか」と、軽い調子で言った。「御苦労だな、さ、案内してくれい」
地侍たちは、鼻白んだ。軽くいなされた感じであった。人間は最初が肝腎だ。この一言で、気勢を削がれただけでなく、新九郎には害意がないように見えた。
「あ、案内というて……」
「おぬしらは、横地隼人正の家人であろうが」
「左様じゃ」
一人が答えると、別の者があわてて言った。
「招かれもせずに来た者を」
「いや、隼人正はそうは申すまいぞ、右馬介もな」
「……」
「まあ、とにかく、屋形に案内せい。話はそれからだ」
かれらは顔を見合わせ、ひそひそと、相談しはじめた。
それから頭だった者が、
「赤兵衛はどうした」
突っかかるように言った。
「おりょうはどうした」
新九郎はすかさず応酬した。
「お、おりょうどのは、若殿の、寝所だわな。なあ、みんな」
「そうじゃ、そういうこと」
げらげら笑いだしたのを、

「黙れ、うぬらには主筋に当る者を左様な嘲弄してよいものか」

一喝しておいて、新九郎は、馬を進めた。

「案内せねば、右馬介のところに罷り通るぞ」

「あ、ま、待ってくれ、案内する」

かれらは狼狽して先に立った。

夜も昼も、いつどこから敵が攻めこんでくるかわからないから、四方の道を見張っていたのであろう。

横地屋形とも鷲津砦とも称われるこの館に案内された新九郎は暫く、広い板敷きの部屋で待たされた。

板敷きといっても、この時代はおおむね、板を張った床のままの部屋が普通だ。

寝るときも、たいてい蓆かうすべりを敷くくらいで、蒲団を敷かないことも珍しくなかった。

畳もあったが、これは身分のある者や、富裕な者が、必要分だけ、一帖とか二帖とか敷いて用いるというふうだったのである。

したがって、この砦くらいの主になれば、そういう物を用いるが客あしらいには、円座を奨めるくらい。

その円座もくれないのだ。

(さて、どう出るか……)

新九郎は時刻を気にしていた。喜作と示し合わせた時刻である。それまでに話をうまく運ばねばならないのだ。

思案していると、衣ずれの音が聞えてきた。

(——女?)

と、思ったとき、重く板戸が開いた。

「——新九郎どのか」

おりょうだ。声を聞いただけでわかった。新九郎は思わず膝を動かした。

手燭をかかげて、女が入ってきた。

(おりょうか?)

目を疑ったほど、その姿は薫たけて見えた。

練絹の小袖を丈長に着て五彩織りの派手な帯を前に垂らした姿は仄明りのゆらめきのなかだけに、別人かと思われるほどだった。近寄り難いものすら感じ、新九郎は唖然とした。

「——新九郎さま」

その女人は、手燭を置き、静かに坐った。

「おりょうか、いや、おりょうどのか」

「何しにお出でになりましたの」

「何しに?」

おりょうの口から、そのような言葉を聞こうとは思わなかったのである。

おりょうの顔が薫たけた感じに見えたのも、感情をころしているからだった。感情をあらわすのを慮っているのだ。

そうさせたのは、誰だ。

(右馬介か)

と思ったとき、荒い足音をひびかせて、その男が入ってきた。

「おい、牢人者」頭ごなしに、こう浴びせて、「われらの祝い事にやってきたというのか」

「ははは、そういうわけだ」

「どうだか」

胸をはだけて、だらしなく小袖を着ている。脇差を前半に差しているだけであった。昨夜のものものしい甲冑すがたと違うのは、おのれの屋形という安心感からであろう。

「祝いにしては手ぶらだの」

「……」

「何も持って来ずに、おりょうをさらってゆこうという算段であろうが、ははは、その手は食わんぞ」

「……」

「赤兵衛はどうした? きさま赤兵衛を殺ったな」

「どうかな」

「小六が申したぞ、赤兵衛を殺ったはずだとな。その証拠には、やつは戻って来ぬ」

「おりょうと引き換えさ」言うや否や、新九郎はおどりあがった。

ゆったりと胡坐をかいていたと見えたのである。その巨軀が、竹のはねるようにはね飛んだ。

おのれの屋形だし、輩下たちも多い。すっかり多寡をくくっていた右馬介は、あっと仰天して脇差を抜こうとしたが、新九郎の鉄拳が、ぐわんと、頬げたに炸裂した。この一撃で右馬介は眼がまわった。ひっくりかえったのをもう一つ、足をあげて肋骨を、踏みつけて、脇差をとりあげた。

「おりょう、逃げるのだ」

おりょうは呆然としていた。まさか新九郎が、そうした行為に出るとは思わなかっただけに、ただ、狼狽して、息もできなかった。

この鷲津の館の侍たちの人数や、武器や、そして荒くれた言動を目のあたりにしているだけに、もう二度とは逃げだせないと、諦めが先に立っていたのである。

新九郎の突然の訪問にも、(どうしたらいいかしら)と、小さな胸をいためた。

鋼と鋼のぶつかりあいは、悲惨な結果しか出ない。新九郎がいかに剛ノ者でも、この屋形では手も足も出ないのではないか。

(あたしのために……)

危険をおかして乗りこんでくるとは。

おりょうは、胸が一ぱいになったが、新九郎にこれ以上、危険はおかさせたくなかった。手出しをしなければ、新九郎は無事に帰れる。

なんとかこの場は諦めさせて、このまま、新九郎を帰し

たかったのだ。そのために見せた冷たい態度であった。それが通じたかどうか。新九郎は無謀なまでの行動に出たのである。

新九郎は右馬介の脇差をとりあげると、おりょうの膝にほうって、

「さあ、これを持て」

「でも……」

「案じるな、方策はある」

右馬介をひき起した。

「おりょうは貰ってゆく」

「うう……」

「文句はあるまいな」

胸ぐらをつかまれて、右馬介は手足をばたつかせた。一撃を頬にうけた上に、肋骨が二本ばかり踏み折られたのだ。さすがの右馬介も蒼白になっていた。

「う……き、きさま、ここを、出ることが出来るつもりか」

「ああ、おりょうを連れてな」

「うぬ！　そうはさせぬ」

「ははは、止めようとしても、駄目さ。安全なところまで、きさまに案内してもらうでの。さあ歩め」

そのときはもう、騒ぎを聞きつけて、板戸の外には、輩下がひしめいていた。荒くれ者たちである。槍や大薙刀をひきそばめ、打ち刀を抜かんばかりに、目尻をひきつらし髭を噛み、憤怒の形相で取り巻いている。

「どけ、どけ、手出しは無用だぞ。矢が一筋でも飛んでくれば、右馬介のいのちはないと思え」

えりがみをつかんで、突きたて突きたて、外へ出た。

乗って来た馬は、すでに、二三人の熊のような連中に押えられている。

「手を放せ」新九郎は吼えた。「邪魔立てしてこやつを殺られてもいいのか」

「――かまわぬ。殺るがいい」

どこかで嗄れた声が応えた。

その声は低く、静かであったが妙に自信に満ち、そして威厳があった。いままでざわめいていた連中が一斉に口をつぐんだことでも、その力強さが知れた。

新九郎は右馬介のえりがみをつかんだまま、ふりかえった。

石階（きざはし）の上に老人がいた。女たちに手燭をかかげさせ、悠然として出て来たのである。

「右馬介よ、死ぬがよい」老人は感傷も見せずに言った。

「新九郎とやら、横地一族を見損うまいぞ」

「……」

「遠州の横地一族は、そこらの野伏り輩とは違うぞよ、祖を辿れば駿府の今川に劣るものではない」

老人の声には激したところはない。誇りを持った者の声音であった。

「なるほど、名流というわけか」と、新九郎も応酬した。

「名流にしては、やり方がきたないのう」

右馬介のえりがみはつかんだままである。

「女がいやがるのを無理にひっさらってきて、それで、まともな武士のつもりか、左様なことは、野伏り輩のすることではないか」

「ふふ、女というものは、好きでも好きとは申さぬものよ」

「それとこれとは事情がちがうわい。逃げだしたことが何より証拠ではないか」

これには、老人も、ぐっと詰った。

新九郎はおりょうを奪われぬようにかばいながら、

「さあ、このけだものの檻から一刻も早く出ようぞ」

そういったとき、隙をうかがっていた右馬介が、すると、逃れた。ひそかに帯をといていたのだ。つかまれていたのはえりがみである。着物は新九郎の手に残った。裸になってばっと逃げ出したのだ。

わっとどよめく中を、「やらぬ」手の着物を投げた。

逃れようとした右馬介の頭にすぽっとかぶさる。

同時に、かれの手裡から白光が奔った。松明や篝火の明りを受けて、ぎらりと赤く光って見えた。

「殺った！」輩下たちの何人かが叫んだ。

右馬介はのけぞり、着物を頭からかぶったままの奇妙な恰好でひっくりかえっている。やはり肋骨を折られたのがこたえて、動作をにぶくしていたのだろう。

「峰打ちだ」と、新九郎は、輩下たちの恐怖を嘲笑って、

「だが、二度目は、そうはいかん。仏の顔も三度というが、新九郎は俗人ゆえな、一度きり寛大ではおらぬ」

刀を陲えると帯で首をしばった。その右馬介の醜態は、老人の怒りを買うものでしかなかった。

「死ね、右馬介、うぬが死ねば牢人も死ぬ、女も死ぬ、それでよい」

「なるほど、それが横地一族の誉れか」

新九郎は、侍たちを見まわした。

かれらは、老人の命令ならば、右馬介でも殺しかねない形相だった。

「おぬし、隼人正か」

「横地隼人正時定じゃよ。牢人」

「おれは伊勢新九郎」

「聞いた。牢人」隼人正の言葉には侮蔑がある。「ここは遠江、駿津郷じゃぞ、牢人」

「牢人々々ぬかすな」

「牢人じゃろ、じゃから、牢人というている。尺寸の土地も持たぬ流れ者ゆえ、浮浪の牢人、そやつが、要らざる口

出しをしおって」
老人は咳こんだ。
「斬れ！」と、足踏みしていった。「おれが子じゃとてかまわぬ。斬れ、所詮は不肖の伜、生きていたとて、おれがあとは継げまい」
隼人正は、かけひきを用いているのではないようであった。
さすがに新九郎も頬をひきしめた。かれら全部に襲われたら、とても、新九郎一人では、かなわない。
おりょうを助け出すどころではない。ずたずたに斬りきざまれてしまうだろう。
ざっと見わたしたところ、三、四十人はいる。ほかにも何十人いるかわからないのだ。
（こうなれば、あの手しかないな）と、案じた。
ここへ来てから、応酬する間も時間の経過を案じていたのである。
「新九郎さま」と、おりょうが喘いだ。「あたしのことは、どうぞお忘れになって」
「何を申す」
「よろしいのです。あたしだけが」
がまんすれば。その悲壮な表情が、新九郎の胸をつまらせた。
「あたしが残れば、右馬介さまも許して下さるでしょう。新九郎さまを無事に帰して下さるでしょう」
「要らざることだ」と、新九郎は、そんな女心がかえって迷惑であった。「おれは、そなたを助けに来たのだが、つまらぬ心配せずと、まかせておけい」
だが、横地の輩下たちは、大殿の隼人正が許した以上、右馬介を死なせても、二人を逃すものかという意気ごみで、手の得物を握りなおし、じりじりと包囲の輪をちぢめてきた。
（もうそろそろ時刻だな）
新九郎は空を見上げた。星を案じた。それから海上へ目をむけた。丘の上の館なので、白昼なら眺望がいいはずであった。暗い海にはまだ灯が見えない。
「隼人正、われらに手出しをすると、この砦に大事が起るがそれでもいいか」
と、新九郎はひらき直った。
「大事じゃと!!」
横地隼人正は眼をむいた。
「口から出まかせを申すまい。いまさら、何を申しても、無駄じゃ観念せい」
「ははは、観念するのは、そっちだろうな」
「なに?!」
「この屋形も、今宵かぎりということさ」新九郎の言葉は自信に満ちている。はったりではない。「かような悪党の

巣へ参るのに、おれが一人で来ると思うのか」
「……」
「おれもそこまで阿呆ではない」
と、また海上をふりかえった。
誘われて、隼人正をはじめ、輩下たちも、目をむけた。暗い海上には、漁り火一つ見えない。
「ちゃんとな、軍勢を連れてきた」
「なんと！　軍勢を……たばかりを申すな。このほうでも見張りがおるわい。人馬一匹、近よれば、すぐにもわかる」
それだけの手は打ってある。木戸も、隠し木戸がある。道という道には、ちゃんと仕掛けがしてある。
「陸地ならば、だな。海の上では、そうもいかん」新九郎は、輩下たちが、耳をかたむけはじめた気配を察した。「ひそかに駿河より軍勢が来ておる。今宵、子ノ刻を期して、この屋形を焼討ちする手はずでな」
「ま、まさか！」
「嘘と思うなら、寝ていることさ。気がついたら、焦熱地獄にいるだろうぜ」
「軍勢が、海上から？……」
「そうだ、今川家の弓組槍組、およそ五百」
げえっと、仰天の声を発した者がいる。
要害の城砦といっても、見たところ三、四十人だ。多くても、五、六十人を出まい。十倍する大軍に攻められては、とても敵対できない。
時間さえあれば、横地隼人正の勢力をもってして、数百、あるいは農民を狩り集めれば、数千の軍勢も催すことができるかもしれない。が、いま、といわれては、これだけの人数だ。逆立ちしてもかなわない。
「どうだ、隼人正、おれたちをこのまま見逃すか、一蓮托生に、亡びるか、だ」
「……」
「あたら遠江の横地一族、今宵かぎりに壊滅するか、だ」
「う……嘘だ、みんな、こやつの言にたぶらかされまいぞ」苦しげに、右馬介が叫んだ。「こやつ……口のうまいやつじゃ、ぐ、軍勢なぞ、一人も……」
「よかろう、そのつもりなら、横地も終りだ」
新九郎はまた海上を見た。暗い。真っ暗だ。さすがに不安が新九郎の胸を掠めた。
そのとき、見張り台の上から、狼狽の声が落ちてきた。
「あ、あの灯は何じゃ！」
狼狽の素っ頓狂な叫びに、みんなは瞠目した。
「あ、あそこに！」
はずれにいた男が、海上を指さした。
見よ。
黒闇々のかなたに、ぽつんと小さな火が燃え上ったと見

ると、その火はたちまち、点々と、なかまを呼び、疾風に乗じて飛火するかのように、燃えひろがりおそろしい劫火のように、海上に炎をひろげた。

それはまるで、燎原の火の拡がり燃えるかのようであった。暗い海上に一斉に燃え上った火は、湖水に映じてぎらぎらと輝き、その形相を一層凄まじいものに見せた。

だけではない。その火の中にうごめく夥しい人影が、わーっ、わーっ、と喚声をあげたのである。いままで押えてきた声を、それっ、とばかり一斉に張り上げたのだ。

さらでだに漁師たちの声は大きい。胴間声というほどだ。その連中が、思いきり叫びあげ、ふなばたを叩いて、景気を見せた。

（やった！）

新九郎はにやりとした。

意味のわからぬ叫びは、受けとり手しだいで、悪魔の叫びにも、神の声にも聞える。

地侍たちには、鯨波に聞えた。百艘か二百艘か、その灯と叫びとふなばたを叩く音が、渾然たる騒音となって湖面を圧し、城砦を揺すぶるかと思われた。

横地隼人正はじめ、地侍たちの畏怖した様子で、（効きめがあった）と、新九郎は感じた。

思った通り、五、六百の軍勢にも感じられる——湖賊来襲の図であった。

「わかったか、あの通りだ」大音声に叫んだ。「われらに手出しせねば、今夜は、このまま引き上げさせよう」

「……」

「ただし、万一ということがある。右馬介には、そこらまで案内させる」

こう駄目おしして、馬の方へ歩いてゆくのを、もう誰も止める者はいなかった。

中門をくぐって、二ノ廓へ、それから、外廓へと出てゆく新九郎とおりょうを、隼人正はじめ、地団駄踏んで見送っているだけだった。

おりょうを抱きかかえるようにして前鞍へ乗せると、右馬介は両手をしばって、これも馬へ乗せ、手綱を曳いて、城砦を出た。

だらだら坂を下って平地にくると、馬腹を蹴った。横地の勢力範囲を脱けるまでは安心ならないのである。

浜名湖へ沿って、ずっと南下し、浜名川の畔まで来てから、漸く、右馬介を放した。

「さあ戻るがいいぞ、肋骨（あばら）でも冷やすことだ」

浜名川の畔である。現在はこの川はない。今切のところが後に大津波で切れて、湖と海がつながってから、しだいに両岬が決壊浸蝕され、川までなくなってしまったのだ。

当時、この川は新居の西側を通っていた。この川を越すと、横地の勢力が弱くなる。

「この辺でいいだろう」と、新九郎は右馬介の馬を放してやったのだ。「行け、二度とおりょうのことは考えるな」

「くそ！　おぼえていろ」

新九郎はその馬の尻をびしっと一打ちして追いやった。

その馬蹄の音が遠ざかるのを聞いてから、浅瀬を渡った。昼間ここは渡っている。

「新九郎さま、あたし……」

「安心しろ、もう大丈夫だ」

「ええ、でも、これから、どこへ」

「駿府に行くか？」

渡りきって、岸へ駈けのぼろうとしたとき、葦の中から、白く水を蹴立てて駈け寄った騎馬がある。

「待て！」

左右からである。

二騎、と見た新九郎は、「走るぞ」とおりょうの耳に噛みつくように叫んで馬腹を蹴った。

ぴゅっと、右側から槍がのびた。新九郎は馬をあおりながら抜き打った。すぽっと、千段巻の下からななめに切れ、穂先がはね飛ぶ。

「うぬ！　くたばれッ」

左側からも、槍が殴りかかってきた。

「あれっ」

おりょうが馬上で身をかわしたとたん、よろけた。馬は走ってゆくのだ。新九郎の左腕が支えている。馬が堤へのぼりきったとき、さらに背後から追いすがってきた。新九郎はふりかえりざまに打ち刀を投げた。

槍を相手では、女を支えていては、これしかなかった。打ち刀は鋭い飛剣となって、追跡者の胸にぐさりと突き刺さった。

「うわっ！」

槍を空振りさせたまま余勢で数間を駈けぬけた馬の鞍から、その男はもんどりうって転げ落ちた。

新九郎は素早く馬を寄せて、槍を拾いあげた。

先に穂先を切り捨てられた男は長柄を捨てて、これは刀を水車のように振り廻しながら馬を腰で駁して襲いかかった。

二騎とも川の畔に潜伏していたのであろう。新九郎の槍は男の咽喉笛を砕いて、貫くのにさしたる手間はかからなかった。

前に述べたように、当時（文明年間）は、浜名湖は、入江ではなく、立派な湖であった。

浜名川という川で、潮の干満に影響を受けるだけだったが、のちに大津波で今切のところが決壊したのである。

新九郎は浜名川の畔で、横地右馬介を釈放したとたん二騎の襲撃をうけたが、辛うじて逃れることが出来た。

おりょうを抱いていては、武士一人前の働きもできない。何しろ、相手は剽悍な地侍たちなのだ。

ひたすら、東へ走らせた。はじめての道であったが、東海道である。

今日のわれわれのイメージにある東海道とは違う。あのように整備されるまで、まだ百五十年も待たねばならない。

道はばはせまく、至るところに難所があった。当時の道はしたがって森だとか山だとかは、遠廻りしても避けて行くようにしている。

法律もない時代だ。誰も、守ってはくれない。道は夜も昼も物騒なのであった。この細路の東海道を、星の光をたよりに、新九郎は馬を飛ばせた。

おりょうが、鞍の前壺に横坐りして、新九郎の胸にしがみついている。髪の匂いが、男の鼻腔をくすぐるのだ。

横地右馬介は、おりょうを湯浴みさせたり、髪油を与えたり、上等の香をたきこめた小袖を与えたりしたのであろう。

その髪の匂いと、柔らかい女の肌が、新九郎のからだを熱くするのだ。

(早く、どこかで……)

二人きりの歓をむさぼりたい思いだ。

壮軀は女体を蹂躙することを願っている。どこか、どこでもいい馬をとめて、草むらに、おりょうを押えこみたい思いにかられながら新九郎は、その一方で、

(少しでも、遠くへ、東へ、行かなければ)

と、思っているのだった。おりょうのために、少しでも横地の勢力範囲から遠去かる。

今川の勢力へ入ってしまえば安心だった。その気持が、ひたすら、馬を走らせるのだ。

女の気持はどうなのか。男ほどは、性の感激をもとめていないのか。

疾走する馬上で、ひしと抱きついているだけで、満足なのだろうか。

少なくとも、そこには安心するものがあった。この逞しいからだに抱きすがっていさえすれば、すべてに安心だというものが、女の腕や、息づかいに見られる。

(急ぐことはないのだ)と、新九郎は思った。(砂浜や草むらでなく、屋根のある褥の上で……そこまでいってからでいいのだ)

その目あての城の灯が闇のかなたに見えてきた。

その城は当時——曳(引)馬城と呼ばれていた。

現在の浜松である。

現在では浜松市は巨大にふくれあがって、当時の面影はさぐるに由ないが、曳馬城は、浜松城址の北東部一帯であったろう、と見る説が、史家の間でも一般化している。

古地図の中に、古城侍屋敷とか古城蔵屋敷など書きこまれたところがあり、浜松城は家康が元亀元年(この時代よりも約百年後)に岡崎城から移り、名を改め、数年後に改築したときからのものなので、そのとき城廓の繩張りを拡げた。

たいていの城が、そういうふうなかたちで改築増築されているものだが、当時も、規模が小さかったとはいえ、枢要の地であったことには変りはない。

曳馬城は、引馬、または引間の字があてられるが、これは中世にあっての曳き馬に因むと見てさしつかえあるまい。

もっとも、曳馬城がはじめて築かれた年代は確かではない。

乱世には、小さい城や砦は、そこここに築かれたり壊されたりしたもので、古戦場あとの台地など殆ど、城址といってもあやまりではない。

それが記録されるかされないかの違いだが、曳馬城の名はかなり古くから諸書に散見されるところを見ても、重要な城であったことがわかる。

あるいは、一つの勢力が奪取して、都合上、壊したものを、また新しい勢力が、築城して使用するということも、頻繁に行われた。

本朝三国志によると、大河内某これを築き、のち正長元年から文安年間に至るまで松尾某が居城していたと伝えられる。

この時代の主は小堀備中守であった。今川氏の被官であり、横地に対して勢力を張っていた。

とにかく、「曳馬の城にゆけば」と、おりょうは言った。

「父を存じ寄りの御方もいます。匿まって下さるはずです」

こんな時代だから、いつ敵に寝がえるか、わからない。手放しで信用するのは禁物だが、とにかく虎口を逃れた。

いまは、食事と寝所がほしいのである。

城といっても平山城である。城内の灯が闇の中で点滅していた。

だが、やはり、ここも近づくことが出来なかった。左手の小丘の上から数頭の騎馬が駈けおりてきたのである。

「待て、うぬら、どこへ行く」

弓に矢をつがえながら、走ってくる。馬は腰であやつり、緩急自在なのである。

「曳馬の小堀どのに頼みがあって来た」

「名乗れ」

「伊勢新九郎長氏」

「聞いたことがない名じゃな」

ここでも言われた。

「その女は？　誰だ」

「この女か、おりょうと申す」

「おりょうだと？」

「小堀どのは、存じていよう、言上してくれい」

「待ってろ」
言い捨てて、一騎が城へ駈けてゆく。
あとの連中はじろじろと二人を見ながら、「どこから来た」と、好奇心をだした。
「鷲津だ」
「え?! そうすると横地の」
「そうだ、屋形からな。この娘を助け出してきたところだ」
「ほんとうか、おい」
横地一族の猛々しさは常に感じているのだろう。吃驚して、顔を見合わせた。
「あそこの砦は、なかなかの要塞だというな。よく脱けだした」
「ちょっとな、術を用いたのさ。ところで、この時刻に小堀どのを起すのは、非礼だったようだな」
「いや、われらの殿は、朝が早いのだ、いつも、いまごろはすでに起床なされておる」
暁闇というには、少し早い。
この時刻に、起きているのか。
備中守はたしかに起きていた。起きぬけに弓を引き、槍をふりまわし、あるいは太刀を素振りする。汗をかいたからだを水浴で流す。
四十の声を聞いたばかりであった。その壮軀は戦場往来で鍛えてあるだけでなく、こういう生活が健やかにしているのであろう。沐浴をしているところに、取り次いできたのである。
「――おりょうだと? あの明珍の娘が」
記憶していた。
「如何いたしましょう」
「通せ。かような時刻に参るとは、わけがあってのことであろう。湯づけなど用意させい」
備中守は、小姓にからだを拭わせながら、八ノ字髭をひねりあげた。
湯づけは、いまの新九郎とおりょうにとっては、大した馳走だった。むろん酒も出してくれた。
備中守は豪放磊落な感じであったが、その丸い顔に、萱で切ったような細い眼は、口が笑っているときでも、凝っと冷たく光ってこちらを観察している。八ノ字髭をひねりあげるのが癖らしかった。
「ははは、おれのところにくれば、大丈夫だ。横地などに手は出させん」
おりょうは、しかし、自分が助かったことがはっきりすると、与右衛門老人の一家のことが心配になっていた。
「あたしを失った代りに、長谷へいって乱暴するのではないかしら」
「まさか、そんなことはあるまいが」とは言うものの、新

九郎も確信はもてないのである。「なんだか、気になってきたぞ、虫が知らせるか」
あのまま、右馬介が泣き寝入りするとも思えなかった。肋骨を折られても、奴のことだ。容易には諦めまい。
「ちょっと、戻ってみよう」と、新九郎は、立ち上った。
「おりょうは、ここにいるがいい。夜が明けたら、駿府へ送って貰うがよい。これから先は、まず心配あるまい」
「ああ、おれが引き受けた」と、備中守は、髭をひねって、大きく頷いた。「ここに逗留してもよいぞ、まず大船に乗った気でな」
眠気も感じなかった。新九郎は思い立つと、待てしばしがない。
「馳走になったな。長谷まで一走り戻ってくるのに、丁度腹ごなしになる」
軽い気持だった。安否を見てくれば、おりょうも安心する。それだけの気持だったが、このまま、おりょうとは、別れる羽目になろうとは思いもしないことであった。
一度来た道である。それに暁闇は走ってゆくうちに、しだいにうすれてきた。夏の夜は明けるに早い。濃い紫紺色の空が華やいだ明るみで、明けるのも惜しいほどの色合いの中を、新九郎の馬は、西へ向って走った。
爽やかな朝の冷気が、汗ばんだ肌にこころよい。
右手に浜名湖の水面が見えてきた。葦むらが揺れる畔で一息ついて、顔を洗った。
湖水は微茫のいろをのせて夜明けを迎えようとしている。水鳥が数羽、羽音をひびかして飛び立った。
この静かな浜名湖の夜明けにも凶行が演じられていたのである。
浜名川を越えて暫くゆくと、行手に黒煙が見えてきたのである。
「あれは?」
長谷の漁村のあたりではないか。新九郎は、はっとなった。
黒い煙は、むくむくと、夜明けの美しい青空を汚すように、立ちのぼっていた。松原のかなたである。
(ひょっとすると……)
不吉な思いが胸を掠めた。前方なのだ。丁度、おりょうのいた村のあたりなのだ。
執念ぶかい右馬介だ。与右衛門一家を威嚇して、おりょうと新九郎の行先を突きとめようとするにちがいなかった。
(駿府に行ったと、あきらめればよいが……)
だが、そうだとはっきりすれば、今度は、怒りにまかせて惨殺しようとするかもしれない。
あるいはその火の手か。すでにことは終っているのではないか。
新九郎は馬腹を蹴って近づいた。

「やはり……」
与右衛門の家だった。
まわりに柴や枯枝などを積んで火をかけたのだ。もうもうとして燃え上り、黒煙が空を汚し紅蓮の炎が、家居を包みこんでいる。
漁夫たちが遠巻きになって騒いでいるが、誰も手を出そうとしない。
「しまった、おおい、与右衛門はいるか、家内は無事か」
かれが来るのを待っているかもしれぬ、とちらりと、横地一門の狡智が胸を掠めたが、もう、そんなことは、慮ってはいられなかった。
新九郎が馬を乗りつけると、俄然、群集のうしろから、矢が飛んできた。
右と左から——二矢、同時である。
「うぬ！」
新九郎は抜討ちに一矢を切り落したが、次の矢を避けるために大きくからだを傾けたので、どうっと馬から転落した。
「やった！」「いまだ！」
弓を捨て、太刀を抜いた男が飛びだして来た。背負った大まさかりをふりかぶった奴は片肌脱ぎであった。
砂浜がこの二人の疾走を阻んだのは幸いであった。かたい、走るに都合のよい土だったら、新九郎は、膝を起す前に、大まさかりに頭をぶち割られていたかもしれない。
片膝起すや、先頭の奴の双脚を撫いだ。これは、飛び退いた。が、その間に新九郎は身を起している。ばねのように、はねた。新九郎の太刀が凄まじい金属音を発して、相手の刀を折った。折れた先端が宙に躍り、大まさかりの男に、たたらを踏ませたのである。
そのまま、新九郎の太刀は伸びている。顔に一太刀くれるや、片手薙ぎに、前の奴を斬った。
これは手の折れ刀を投げ捨てて脇差を抜きかけたまま、胸を一颯されて、のけぞっている。
額から鼻柱にかけての傷は浅かったが、顔であるだけに、致命的だった。大まさかりをほうりだして、横地の某は、血を握って倒れた。
二人が血を握って七転八倒しているのを見ると、
「あやつ、火つけ野郎じゃい。打ち殺せや」「よい気味じゃ、それ、やっつけろやい」
わーっと、漁師たちは、駈け寄ってきた。
何しろ、地豪だ。泣く子も黙る勢力である。いつもは棟別銭だとか、人頭銭だとか言っては、なけなしの銭を持っていかれているから、怨みは深い。
いまも、目の前で、与右衛門の家に火をかけられて、
「消すやつは斬るぞ、与右衛門と同罪だぞ」と、威かされていたところだった。

漁村だから、幸い、隣家とは大分離れている。風も大してないし、飛火の心配は少ないが、貧寒な漁村では、家を建てるということは大変なことなのだ。みんな涙を流さんばかりにして、手をつかねて、見守っていたのである。
新九郎に不意打ちをかけて、逆に斬り倒されたと見るや、これまで、押えに押えて来た怒りが沸騰して、
「それエ、ぶち殺せやい」群集心理で、駈け寄ったのだ。
男ばかりではない。女もいた。子供も、老婆も、みんなして、二人に襲いかかった。得物はない。砂をぶっかける者、石ころを拾う者、草をひき抜いて投げつける者もいる。圧制されていた者の憤りである。
「ま、待て、みんな……」
新九郎は止めようとしたが、多数だし、ここまで興奮しては止められるものではなかった。
二人の男は、まだ傷を受けただけだから、よろばいつつ、逃れようとし、刀をつかみ、大まさかりをつかんで、喚いたが、傷の痛手は、それをふりあげる力を失くしていることで知れた。
その間に、舟の櫂を持ってくる者、錆刀をつかんでくる者、芯張棒をふりまわしてくる者——子供たち、女たちは砂をつかんでの目つぶしするし、たちまち櫂や錆槍がとりまいた。そのうち、ヤスを投げた者があった。
三本錐のヤスを漸く刀が打ち払ったが、それが最後だった。がっくりと片膝つく。そこへ漁師たちは殺到した。
傷つき、力を失った者にとって、大まさかりは逆に自由も奪うことになった。これは錆槍が腰に突き刺さり、どうと倒れたところを、群集が蝗のように飛びかかっている。もう、目も鼻もない。砂や草を目鼻、耳穴、口の中、頭をおさえてぐいぐい突っこんで、打ち叩き、踏みつけ、蹴たぐり、半殺しのまま、簀巻きにした。
「ほれ、水神さまへの御供養だわい」
簀巻きにして、石を抱かせた。村と海を汚した者は、こうやって、水神さまのお怒りを鎮めるのである。
(呆れたのう、これは……)
漁師たちのすさまじさを、目のあたり見て、新九郎は、感心した。
弱い者も集団で行動することで強敵に向うことができる。誰が指揮するというのではなく、持って生れた智慧だろうか。女も子供もなかった。共同の敵への自発的な行為だった。
横地の侍二人は、半殺しにされて、まだ息があった。ひくひく胸のあたり、指先など動いていたが、漁師たちは、これを麻縄で縛りあげ、菰で簀巻きにして、浜辺を曳きずっていった。
「あいつらをどうする気だ」
「沖へ持っていって、流してやりますわい、水神さまにの、

捧げる御供物というわけで」
「……」
「こうすりゃ、横地の侍どもも、なんぼうか、悪いことをせんようになりますじゃろ」
「なるほど、悪魔調伏というわけだな」
修験者などの力を借りなくても、庶民は、それぞれ、生き方を知っている。海中へ沈めてしまえば、隼人正や右馬介にも、わからない。
「ところで、与右衛門たちはどうした？」
と、新九郎は、焼ける家を眺めながら、言った。それが気がかりだったのである。
「まさか、あの家に」
「へえ、それが……」
「焼き殺されたか?!」
「……」
「斬られたのか？」
どうせ、ここへやってきたのはあの二人ではない。大勢で来て、二人だけが残ったに違いない、と踏んだのだ。
「へえ、何しろ多勢で来ましたので、へえ……」あいまいな口吻だ。
新九郎の気持を慮っているのだろうか。
もう、ここまで火が廻れば、水をかけても役に立たない。焼け落ちるのをただ、眺めているよりしかたはなかった。
与右衛門はじめ、一家の者たちはどうなったのか。斬られたとすれば、みんな斬られたのだろうか。
「心配になったのでな」と、新九郎は言った。「戻って来たのだ」
「……」
「おりょうは、さるところへ預けた」
「へえ、そりゃよございました」
漁師たちは顔を見合わせて、心から、ほっとしたように言った。
「与右衛門の消息を知りたいのだが、教えてくれい、おれは死んでも、口は割らぬぞ」
漸く、漁師たちは、それを洩らした。夜釣りの者が、浜名川で横地の侍が苦悶しているのを見たので、また報復に来るかもしれないと察して、与右衛門たちは、朝船に乗って、沖へ出たというのである。
新九郎は、はじめて肩の荷をおろしたように、吐息をついた。
なんといっても、漁師たちには海がある。海はときに、人命を軽んじ、獰猛な牙を剝いて、水神の餌食にするが、また、修羅の地上から引き離してもくれるのだ。
与右衛門の一家が、殺戮と猛火の犠牲にならなかっただけでも、新九郎は、心が安らいだ。
だが、こちらは一安心したものの、曳馬の城にもどると、

おりょうの姿はなかった。
「おう、戻ったか」備中守は、こだわりの顔で迎えると、聞かれもしないのに、「発ったわ」
と、言った。
「おりょうが？」
「うむ。一刻も早よう駿府へ参りたいと申してさ」
「……」
「おぬし、好きだったようじゃな、あの女」さぐるような眼で備中守は見て、「いや、好きでも嫌いでも、かまわんが、とにかくな、そういうこと」
「一人、でか？」
「うむ、いや、なに、そのわしのな、心利いた者をつけてくれたゆえ、安心せい」
「……」
「道中は心配ないと思う」新九郎の不満顔に、あわてて備中守はつけ加えた。「しかたがないではないか、本人が行きたいと申したのだ。まさかおれが引き止めるわけにも、ゆかん」
「む。それはそうだが」
「おれとてもな、おぬしから預ったようなものゆえ、一応はな、引きとめたよ。おぬしのことを申したよ」
「……」
「新九郎が戻るまで待つ方がよかろう、とな」
ほんとうかどうか、その表情の裡を読もうとして、新九郎は、凝っと見た。
「ほんとうさ」と、備中守は、力説した。「嘘ではないぞよ、新九郎。おぬし、ちと、自惚れていたのではないか」
「ははは、よせ、女に惚れるひまはない。あれは、奇しき縁でな、助ける羽目になっただけゆえ」
去ったのなら、しかたがない。
新九郎は、あきらめがよい。
「では、おれも、この城にとどまるわけにもいかんな」
と、立とうとするのを、
「よいではないか、おぬしはさむらいじゃ」
「……」
「おれも、さむらい。侍同士ではないか、ゆるりとせい。急ぐこともあるまい、酒なと汲もう」
この男は、あまり好きにはなれない。豪放らしく見せているが案外、小心者で、小策をめぐらす漢のようでもある。おりょうが立ち去ったのは、新九郎が西へ奔って直後のことだという。
あとを追うのも、未練たらしいようであった。新九郎は坐り直した。
「おぬしに引き逢わせたい女がいる」
と、小堀備中守は八ノ字髭をなでながら言った。
御自慢らしい髭の触れ方に、微妙なちがいがある。その

ときの感情がもろにあらわれるようであった。威嚇したり、自慢したりするときに、髭をひねり上げる。

女のことを饒舌ったり、妙なことを思いだしたり、それから、含みのある言葉を吐くときには、髭をなでる。そのなでかたも、右手でなでるときと、左手をつかうときは違うようであった。

酒になってから、新九郎はそのことをずばりと聞いた。

「どうも気になる」

「なに！」

「おぬしの、その手だ」

「……」

「髭をなでるのは癖か。ま、癖なら癖でよいが」

「人の癖に文句をつけるな。人間なくて七癖さ」

「女のことを何やら申すときにかぎって、右の手でなでるのは何故だ」

「右の手？」

そういう指摘ははじめてだったように、首をかしげた。

「そうかな、右かな」それから、にたりと、淫らな笑いを浮べて、「右手は、それ、女のあそこをいびっているわな」

ふふふ、と思い出し笑いをした。

新九郎も女好きには違いないが、備中守のそういう態度には、不快なものを感じた。やはり、おりょうのことが心配だったせいかもしれない。

悪い想像をした。この男が巧弁かまえて、実は、おりょうをこの城中のどこかに閉じこめたのではないかということだ。

（まさか、そこまではすまいが……わからぬ）

あまり信頼出来ぬ人柄だと、新九郎は見た。

こういう男には、こちらが警戒していると見せてはならない。相手が卑猥なことを饒舌っても、不快になってはならないのだ。いかにもなかまらしく装わねば、心をひらかない。こういう気質の男にとって、もっとも嫌悪するはずであった。

「おれに逢わせたい女というのは誰だ」と、新九郎は、ざっくばらんな調子になって、「女の好みは、いささか、うるさいぞ」

「――らしいな」またにたりとした。「まあ、逢うてみろ、話はそれからじゃ」

（どんな女か？）

新九郎も興味をおぼえた。備中守が何を考えているかしらないが、その女と逢うことで、考えの奥が読みとれるかもしれぬ、と思った。

「その女に逢う前に」目を据えて新九郎は言った。「おりょうの供をしていった男の名を聞いておこう」

「おりょうの？」

とろりと、赤く濁った眼をあげて、備中守は見た。もう

忘れてしまったような顔だ。

「おい、そいつの名だ」

「あ、左様々々、藤馬だ」

「藤馬？」

「大河内藤馬。うん、奴だ。心利いた者ゆえ、まず心配はあるまいと思う、ははは。そんな心配はいいかげんに忘れろ」

「忘れるわけにはいかぬ。おぬしが信用できないからな」

しまった。新九郎が冷めていることを、相手に知られてはまずいのだ。

俄然、備中守は笑いを消した。

「おれが信用ならぬと?!」

「そうだ」と、かぶせた。こうなったら、一枚上手でゆくしかない。「信用ならぬ」

「きさま！　おりょうを、おれが匿したと申すか」

また言った。いよいよ、怪しい。そうなると、新九郎も、ここは演技をしなければならぬ。

「左様、考えてもみよ。さっきから、女に逢わせると申して、いつまでも愚図々々しているではないか、おりゃ、面白くない」

そのことか。と、備中守はほっとしたように、

「ははは、なんじゃ、そんな、ははは、いやな、おぬしの飲みっぷりがよいゆえ、酒も相当にいけると思うてな、あと一升ばかし飲んでな、ほろ酔いした上で、女をと思うたのだが」

「もう、ほろ酔いじゃわ」

「そうも見えんが、まあよい、暫く待て」

備中守は、近習をふり向いて、最前申しつけたこと、支度はよいか、と言った。

さいぜん、とはいつのことか。新九郎が戻ってからにしては、そういう言葉はいささかおかしい。

かれが与右衛門一家の安否を見にいっている間に、すでにその話がととのっているような感じを、新九郎は受けた。

そこまで、新九郎を歓待しなければならぬ理由はない。おりょうの知人というだけで、むしろ、突然、飛びこんで来たのだから、いうならば、迷惑な客のはずであった。

おりょうは美貌だから、突然でも、朱鷺なら飛びこんで来て、嫌がる者はいない。だが、一癖も二癖もある新九郎が来たことは、それも横地といささかいして来たというのだから、場合によっては、紛争の原因にもなるはずであった。

（おかしいぞ、……こやつ……）

新九郎は気をひきしめ、逆に表情を弛めた。

「この部屋じゃ」

板戸の外まで案内してくると、ぶっきら棒に侍は言った。

「ゆるりと休まれるがよい」

何か言葉には含みがある。侍の表情が尋常ではない。

揶揄と羨望とがこもっている。侍と手燭の明りが遠ざかっていった。新九郎は板戸を開けて中へ入るまで、それが何を意味しているのかわからなかったのだが、一瞥してはっとした。

板戸の内部は豪華な寝所であった。壁代が燭の柔らかい明りに浮きあがっている。帳台がある。明りは、几帳の内までは通さないがその優雅な部屋の雰囲気は、新九郎のために用意されたにしては、豪華で、もの柔らかく、女性的であった。

少なくとも新九郎には、柔らかすぎる。

一炷(いっしゅ)の香がたちのぼっている。甘く悩ましい香りなのである。

(誰かいるのか?)

女だ、と思った。

女が臥せているのではないか。几帳のうちは、灯の加減で判別し難いが、誰かいるようであった。

備中守の言葉が甦った。

(引き逢わせたい女——というのは?)

そこにいるのか。

これでは引き逢わせるというより、与えるということになる。

当時は、女性は政略の具とされる。女性蔑視というよりも、その美しさを貴重なものという考えがあったのであろう。

人質には、男女の別はないが、女性の場合、殊に眉目麗わしい場合、その存在が、別の意味を持ってくるのはしかたがない。

備中守が、何を思っているのかわからない。

が、明らかに、その帳台には、女がいる。新九郎はしかし、ここまで来て遠慮をするほど小心ではない。板戸を立ててきると中へ入った。

どっかと坐って、水を飲んだ。刀を置き、帯を解いた。

こうなれば、相手の手に乗るしかないのだ。乗ってみた上で、何かの結果を引き出す。

それが、吉と出るか凶とでるかは、運命なのだ。とつおいつ思案していたのでは、人生は先へ進まない。

裸になった。下帯一つの雄偉なからだを几帳のうちへ入れようとした。

几帳をめくった。女性の姿が、そこにあることは、予測していた。

が、中を見たとたん、新九郎は、目を疑った。

「これは?!……」

女は寝ていた。

(この女なのか?)と、新九郎は見るなり目を疑った。

(おれに引き逢わしたい女というのは)

呆れた。

安らかな寝息なのである。なまめかしいほどの寝所の雰囲気は、女の匂いをこもらせている。香の薫りが男の胸をときめかせたのに、そこに寝ていた女というのは、なんと、七、八歳ほどの少女だったのである。

燭の灯が、几帳を透して、柔らかい明りで、少女の顔を浮していた。

額のところで切り揃えた前髪といい、せいぜい肩を蔽うくらいであろう髪の長さは、枕元に乱れ箱を置く必要もない若さを、一目で見せた。

愛くるしい顔であった。この年齢の子供にしては、いささか、大人びてはいたが、少女であることに間違いない。

(この子を……)

七つか八つの少女だ。いかに愛くるしくても性欲の対象にはならない。

(備中のやつ、何を考えて、おれを……)

この部屋に案内したということは、抱け、という意味であろう。抱いてよい、というのであろうが、新九郎は、そんな気は起らなかった。

よほど女に飢えた、狂気じみた人間でないかぎり、そうした愚かで残酷なことはできない。据膳、というには、あまりにも、幼いのである。

暫く、新九郎は、少女の寝顔を見まもっていたが、黙って、几帳から出た。

すると、ぱっと、少女は眼をあけ新九郎を見た。

「おじさま……」

と、涼やかな声で呼んだ。

これには、新九郎おどろかされた。

「なんだ、そなた……起きていたのか」

「はい」

少女は微笑した。

新九郎はとまどった。鬼をもひしぐ壮漢が、少女のつぶらな瞳の前で、裸身を恥じる気持にさせられている。

瞞されたようなものだとはいえ、少女の無垢の微笑には、裸身であることが恥しい。

「そなた……誰だ、いったい」

この質問は、少女には、難しかったようである。

「あたい、すずめ」

「なに?」

「すずめ」

名前なのか? 新九郎は、ふっと、雀、と聞いた。が、すぐに、

(寿々女、と書くのであろう)

と、思いなおした。かれの教養がそう判じさせている。

「その、寿々女が、なぜ、ここにいる?」

その質問も、難しかったらしい。少女は、瞼を閉じて、

「ねむいの」と、言った。

「ね、一緒に……こわい」
少女の無邪気な願いだった。女の言葉ではない。この年ごろの少女なら、たしかに、これだけの豪勢な部屋での一人寝は耐え難いかもしれない。
その言葉に裏はない。新九郎はあきらめた。
「よしよし、寝つくまで……いや、朝までいてあげよう」
新九郎は添い寝することにした。
少女との同衾である。寿々女の方は、うれしそうに、肩をすり寄せてき、新九郎に抱きついた。巨きな男のからだは、神木にすがっているかのような安心感があるのだろう。
少女は胸のところに顔をこすりつけてき、胸毛が、いたい、と眉をひそめ、それでも離れたくないように、身を寄せてくるのだった。
少女の着ているうすものを通して、こちらの裸身に、体温が伝わってくる。胸のあたり、ほとんどふくらみはないが、髪の匂いには、成熟した女と変らない、悩ましいものがあった。
(いかんな、こんなことを考えては)
おりょうのことを考えて、気をまぎらそうとした。しかし、かえって、そそられてくる。
小笛のことを思った。するとますます、少女の肌の甘酸っぱいような匂いが、男の血を刺戟してくるのである。

あどけない表情であった。
「寝るがよい。驚かせて悪かったな」
新九郎は優しく言い、几帳から出た。
「あ、待って」
ふいに少女ははね起きた。
「行かないで！」
かん高い声で、しがみついてきたのである。
壮軀。裸身なのだ。いかに幼児とはいえ、愛くるしい少女の、衾を被て温まったからだであった。
新九郎はとまどい、ひき離そうとしたが、
「いや！　行かないで」
と、一層、強く、抱きついてきて離そうともしない。
少女は、まるで大事な宝物でも摑んだかのようであった。この年ごろの、必死の思いが、手にある。しがみつくというときは、加減しない。
あの叫びが、かん高く、こちらをたじろがせるほどのものだったし、少女の手は、このまま去られたら、孤独になるのが恐ろしい、とでもいうようなはげしさだった。
「どうした？」
「行かないで」
「しかし……」
「一緒に、寝て」
「……」

(眠ることだ)
と、新九郎は思った。眠りさえすれば、迷妄は消える。もっとも夢の中でとんでもない暴れ方をするかもしれない。夜が明ければ、淫情も消えるだろう。
だが、眠れるものではなかった。眠いのだが、別の意志が動いている。
抱いている少女が、一人前の女に思えてくる。肉づきも、髪の匂いも、肌ざわりも、男の情欲を刺戟するのは否めないのだ。
寿々女の方ではすっかり信頼しきって、身もだえしたり、呼吸を荒くしたりして、ぐいぐい、身を寄せてくる。
新九郎は、恥しながら、下腹のあたりに収拾しきれない充足をおぼえて、少女を突き放そうとするのだが、手荒にするのはしのびないし、そっとはずそうとしても、とても少女の手は離れない。そのうちに、ふと、板戸の外に人の足音を聞いたように思った。
「……？」
誰か来たようである。
足音は止った。新九郎は枕元の刀に手をのばした。緊張がつづいた。中の気配を窺っているようであった。
(斬りこんでくるか？)
この少女をあてがって、安心させた上で、瞞し討ちに斬りこんでくることも、あり得ないことではない。
横地なら知らず、この小堀備中守が、新九郎を討つ理由はわからないが、そこは乱世だ。どういう考えになったとしても不思議はない。
たとえば、おりょうをどこかへ隠してしまって、邪魔な新九郎を討つ。
あるいは、新九郎を討って、首級を横地に届ける。それだけでも、横地に対して友好のしるしになる。
乱世の大名小名は、現在、戦争をしていないからといって、安心はならないのである。より大いなる野望のために時期を案じている場合もあるし、準備をしている場合もある。
ほんとうの平和というものは、洋の東西を問わず、古今を通じて存在しない。人間は常に争っている。殺しあっている。もし、平和に見える時期があったとすればそれは平和ではなく、戦争と戦争の間の一時期というだけのことだ。横地と小堀、小堀と今川——この関係も、きわめて、あやしい。
戦火が燃えていないということは、したがって、お互いの何かの思惑のために、辛うじて、均衡を保っているということにすぎない。
(おれを狙っているのか？)
だが、首をとるつもりなら、酒食のなかに毒を混ぜておけば、ことたりるともいえる。

新九郎の畑眼は、それを見破るように思われたのか。
ともかく、戸外に人が忍び寄っているのは事実だった。
新九郎の手は刀を摑んだだけではない。
拇指は器用に鯉口を切っていた。たとえ三人五人の敵が不意打ちを仕掛けてきても、充分対応できるつもりであった。
だが——
戸外の気配は、殺気を失っている。忍び寄ったときの緊張感が、すっと解けたようであった。
(はてな?…)
どうしたのか。
また、忍びやかに足音がした。板戸の前を離れて立ち去るようであった。
(去った……彼奴! なにやつか追ってひっ捕えて)
と、思った。
立ち上ろうとしたが、寿々女の手が離さない。もしも少女の手がなかったら、新九郎は飛び出していたかもしれない。
寿々女は眠りに入りかけている。それを起すのは忍びなかった。少女の寝顔には邪気がない。
邪気に満ちたこの世の中で、まことに神々しいほどの、寝顔だった。新九郎は、心が安らぐのをおぼえた。
この美しく清らかな少女が、どうして、こんな城内に居るのか。その疑問が、胸を浸してきた。あまりにも清らかすぎたのだ。
そして、この曳馬の城主小堀備中守が、繊細な感情を持っているとも思えなかったことである。
荒々しく、血なまぐさい。この城の内部は、乱世に生きる、けものじみた男たちの体臭で満ちている。城がまえには、矢尻のあとや、火矢のあとが残っていたしそこら中に、刀の痕がついている。
女たちはいたが、城の空気は血にすさんでいた。そこら中に犬の頭が転がっていたり、下人たちが、蛇をひき裂いて食べたりしていた。
少女のつぶらな瞳とは、違いすぎているのだ。
そんなことを思っているうちに漸く、新九郎は、眠りにおちた。
眼がさめたのは、やはり足音であった。
板戸のすき間に、暁のいろが見える。足音がした。低い。やはり忍び寄ったような音であったが、新九郎の冴えた、聴覚は、それを聞き止めている。
「誰だ」
声をかけた。とたんに、板戸が開いた。
顔がのぞいた。一人ではなかった。四つ五つ——にやにやした顔であった。
「やあ、お目ざめでござるかい」

備中守の家来たちであった。
「御機嫌よろしいようで」「へっへっ、何せ、若い娘とたっぷり楽しんだあとの眠りとは」「羨ましいほどじゃ」
目ざめたばかりだった新九郎は、はっとなった。
「何を申す!」
五人の男たちは、げらげら笑いだした。
「何も申しはせぬて」「ははは、ただ羨ましいと申しただけで」「御馳走を食うたあとは、ちと照れ臭いのじゃろ」
「わしらは、まずい飯ばかり」「われらの殿は、客人には、ずいぶんと懇切ゆえ」
口々に妙なことを言っているのである。五人の顔に浮んでいる笑いには羨望と軽侮がある。してやったりという北叟笑みもある。
じろじろと、新九郎と寿々女を見ているのである。それは、意地悪い姑の眼だった。
荒くれた武士たちが、そこまでいやな眼つきになっているのは、少女の柔肌を新九郎が、弄んだと思ってのことか。第一、この暁の空気の中に、五人の眼が卑猥に光っているのはどうしたことか。
まだ眠そうに、新九郎にかじりついている寿々女の温まった肌の感触で、新九郎は、漸く、かれらの目的に気がついた。
(はかられた!)
ただ、嗤いものにしようとするだけではない。この少女を抱かせようとしたのは、何か、裏があるのではないか。
はっきりしていることは、決して、好意からではない、ということであった。
(こんな少女を!)
せめて十三、四になっているのならわかる。七つか八つか、とにかく、幼い。まともな男の、弄ぶ年齢ではない。
ともあれ、かれらが、何かを企てたとすれば、その手には乗られない。
「あいにくだな」と、新九郎は磊落に笑いながら、身を起した。「おれは、この少女には、父親のようなものだ」
「かような清らかな幼児に、何が出来るものか」
へへへっと、下卑た笑いで、五人は顔を見合わした。そして、小突きあい、口々に喚きだした。
「新九郎どのは、男ではないのか」「はてさて、男じゃと思うたがの」「男なら、手をつけぬという法はない」「左様とも、美い女じゃもの」「初モノは誰しも食いたいものよ」
「左様々々、嘘吐いても、それでは世間は通らぬぞよ」
ばかな、と、新九郎は、刀をつかんだ。
その下帯の前がふくらんでいる。寝起きだから無理もない。自分でも呆れるくらい雄偉なのである。男たちは、それを見て、さらに笑った。
「それ、見なされ、ちゃっとふといものが……」

家来たちだけではなかった。
城主の小堀備中守までがやってきたのである。
「――ほう、よかったらしいな」
唇が笑っている。八ノ字髭が動いている。
「楽しかったか」
「なにが、楽しい？」
と、新九郎は反駁した。こんな連中の罠にかかったと思うと、腹が立った。
「はっきり断わっておくが、この娘には妙な真似はせざったぞ」
「どうかな」
「こんなこどもに何が出来る。おぬしならどうか知らぬが」
「わしは女ぎらいさ、稚児がよい」
「……」
「ははは、おぬしは衆道はやらぬのじゃろ、専ら、女じゃろ。それゆえ、寿々女も女じゃ」
「馬鹿な。まだこどもではないか」
しかし、こんな奴らを相手にいくら力説しても無駄だった。
「あいにくと、おれはけだものにはなれぬ気性らしい」
「ははは、そう言っておくさ、だが、一つ部屋に臥したことは、事実じゃろが、ははは、まあよい、まあよい」
何の魂胆があってのことか。そのときは、備中守の腹黒さはわからなかったのである。
一刻も、こんなところにいるのは嫌だった。出立しようと思った。
「朝飼を摂ってゆけ」
「いらぬ」
「遠慮するな」と、備中守は執こく引きとめて、「腹べらしのまま、追い出したとあっては、曳馬城の名がすたる」
「……」
「ちゃんと、飯くらい、食うてゆけ。昼飯もつくらせる、途中でな、食べるがよい」
親切からであろうか。素直に、この男の言葉は信じられないのである。
「飯も酒もだ。な、この曳馬城のしきたりよ。客人は、大事にする」
「……」
「たとえ、一文の得にならぬ、飛びこみの客でも、だ」
「悪かったな」
「ははは、まあいいさ。とにかく、小堀備中のしきたりよ。客には、女と酒と飯を出す」
それが言いたかったのか。
女――あの少女を、女だと思っているのか。まさか、あのつぶらな瞳が、男を知っているとは思えない。第一、あんな少女のうちから、男と交えるものか。新九郎はそう言いたかった。呆れたように、備中守の顔を見つめた。
「妙なことを言うの」
「何が妙だ。寿々女のことか」
「そうだ。あの少女は、おぬしの何にあたる」
「さあな」意味あり気ににやりとしたが、「ありていを申せば、人質さ」
人質――
そうか、と新九郎も漸く、気がついた。寿々女は、人質なのか。
（道理で……）
当時、近隣との力の均衡を保つために、人質を交換していることが多い。
これは、必ずしも、弱い者が強い相手に雌伏することを意味しない。同等の力でも、平和の時を稼ぐために、お互いに人質を交換しておく。人質に就いては、指名する場合もあるし、任意に差し出す場合もある。
後の話だが、明智光秀が母親を差し出していたのが、丹波で殺された挿話はよく知られている。母親まで出したのだ。況や、信長が妹を利用し、道三が娘を政略に与え、家康が孫娘をほろぼす目的の敵に与えるなど、かれらにとっては、痛くもかゆくもなかったろう。
家康自身も幼時に今川家に預けられているのだから、大名たるもの、日常のことといってよい。
少女が、どこの城から送りこまれてきたのか、なぜか備中守は言わなかった。
それを知ったのは、小堀の領内を出る間際である。送ってきた男が洩らしている。
天竜川の岸辺まで、備中守は家来に送らせている。
「丁重にな、卒爾があってはならんぞ」
と、新九郎の目の前で念を押した。
「小堀は、客人は遇するならわしじゃ、ははは」と、髭をひねりあげて、「もっとも、せっかくの据膳を食わんやつも中にはいるが」
と、一言多い。
どうにも好きになれない性格だった。
一人は伊平という変った姓であった。伊平三五郎と名乗った。まだ若く二十代の半ばであろう。どこか軽薄な調子者で、もう一人の高畑某の方は、終始むっつりと押し黙ったままだった。
天竜川の岸辺までくる間、三五郎の方は何かと話しかけてきた。
これから何処へ行くのか、とか生国は何処なのだ、とか諸国を流浪していると、随分面白いこともあるだろうが、とか、無責任に女をモノにしたり、したい放題のことをして世渡りすれば、こんな楽しいことはあるまい、なぞと、

くだらないことを口にした。
こういう男は、新九郎、どうしても好きになれない。
あの寿々女を新九郎に抱かせようとした魂胆はどこにあるのか、それが知りたかった。
「寿々女のことだが……」と、きりだした。「あの娘、どこから来た」
「人質じゃ」
「だから、親はどこにいる」
「親か、親はよく知らん」
「……」
「が、気になるなら、どこから来たかくらいは、教えてもよい」
三五郎は、馬の背でのびあがって、見た。
天竜川が、朝の陽に光っているのが見えた。小堀の勢力の東限であろう。三五郎はにやりとした。
「知ったとて、どうなるものでもあるまいがな、寿々女は、実は駿府からだ」
「今川の！」
あっと、新九郎は驚いた。今川家からの人質だとは。
「そうさ、今川だ。驚いたようじゃな」
「今川の姫か」
「さて、どうかな。左様ではあるまいさ」
「……」
「姫をくれるほど、今川は弱くはない。格が違うわさ、こちらからは、殿の姪御がまいっておる」
「なるほどな」
どうやらわかりかけてきた。それにしても、今川家の人質をどうして、新九郎に抱かせようとしたのか。

姫小袖

同じことを経験しても、教養の差や、思考のちがいが、そのことの影響の差となってあらわれるものだ。
苦難も受けとり方しだいで、それを福に転じる場合もある。苦しみに負ける者も多い。逆に、幸福の過去が、必ずしも、未来を倖せにするともかぎらない。
人生の面白みはそこにある。
伊勢新九郎長氏が、もしも天竜川を越えて、駿府へ突っ走ってしまっていたら、後のかれの立場は大分違っていたかもしれない。
天竜川の岸で伊平や高畑と別れたかれは、渡し舟に馬を乗せて、川なかへ出たときから、
（引き返さねば……）
と、思っていた。
どうもお節介なようだが、非道を知ると、黙過することが出来なくなる。
自分でも困ったものだと思う。この年齢になるまで、一ヶ所に落着いておれないのも、あるいは、この性分のせいかもしれない。
他人のすることに、よけいな容喙（ようかい）をしなければ、出世の道は、いくらでもひらけた。が、どうにも我慢できない性分なのだ。
京にいる間でも、出頭の機会は多くあった。戦乱は器量のある者にとっては恰好の機会なのである。新九郎さえ、その気になれば、いまごろは、容易に一国一城の主になっている。そんな機会が何度もあったにもかかわらず、不正を看過することが出来ずに、自ら、無産階級の道を歩くことになっている。
（そろそろ、この癖は改めねばいかんなあ）
自分でもそう思う。
二十歳代はよかった。若さにまかせて、暴れることに、正義を信じた。が、三十歳代になると、同じことでも、考えが違ってくる。それも前半と後半では違う。
四十の声を聞くと尚更だ。不惑とは、それをいう。五十になれば、命を知る。当時五十歳は初老である。いや、解釈次第では、四十不惑も初老を意味していた。六十歳となると隠居を考えるだけだ。七十では、古来稀ということになる。すでに翁と呼ばれても不思議はない。
時代によって、年齢の受けとり方、社会の評価も違って

くるのである。
新九郎はいまだ壮漢だが、二十歳代の血気は、懐かしいものに振りかえられる。それだけ、落着いたともいえる。無謀であったことも、懐かしい。
後悔は少ない。それは、おのれにまだ未来があり、そして、その未来に対して、自信があるからにほかならなかった。
（こんどだけだ）と、新九郎は、川の上から、馬を返してゆく伊平たちの影を見送りながら思った。（最後のお節介にしておこう、寿々女の肌を備中守に蹂躙させてはならぬ……）
口の軽い伊平は、送ってくる間に、
「せっかくの据膳を食わなかったのは勿体ない。おぬしが手を出さねば、殿がつまむだけのこと」
などと言っていた。
なぜ、そんなことをするのか。
理由はない。そこに寿々女の肉体があるからだ。人質という場合、肉体を弄ばれるのも常である。
乱世にあっては、女の貞操は重んじられていない。男のために存在し、人質である以上、生殺与奪の権を握られているのは、いうまでもないことだった。したがって、弄ばれることも、当然とされる。お互いであった。
それにしても、七つか八つという少女なのだ。

（非道だ）
と、新九郎ならずとも、まともな考えを持つ者ならば思う。
（助け出さねばならぬ）
これが、ただ、少女を暫見しただけなら、新九郎も、そこまで思いきった行動にはでなかったろう。
計られたとはいえ、一つ臥床に抱きあったということが、運命の絆を感じさせる。
人間の他生の縁とは、意識するとしないとにかかわらず、袖すり合うにせよ、そこに生じた由縁への思いである。
ただ、それだけのことと思ってしまえば、それきりにちがいないが、一期一会を大事とする心を持つ者には、やはり突っ放せないのである。
新九郎は、少女の手やからだの温かみを思った。清純無垢の肌だ。あの浄らかさが、備中守の汚れ穢れた手で蹂躙されることは、我慢ならぬ。
人質を盗み出せば、あとはどうなるか。そこまで、しかし、新九郎は慮ることはなかった。
だいたい、今川家があんな、いたいけな少女を、他家へ人質にやるということも、許せない。
新九郎は、上流の方へ馬を飛ばし、浅瀬を探した。少しでも遠くへゆけば、それだけ、小堀の監視の眼を逃れられる。

浅瀬を探したが、わからなかったので、漁師を見て、頼んで馬を渡して貰った。
礼金がないので、弁当をやることにした。これは、曳馬城を出るとき、作ってくれたものである。これが役に立とうとは、些か皮肉である。
（まさか、毒は入っていまいが）と、思う。
毒殺するつもりなら、城中で充分、出来たわけなのだ。
それにしても、今川家の人質を抱かせようという備中守の魂胆に、やっと気がついたのである。
（彼奴！　おれを駿府に行かせたくないのだ！）
寿々女の肌を犯したならば、当然、今川家からは憎まれる。
それが狙いだったのではないか。
何故だ？
あっと、新九郎は馬上で膝をうった。
「そうか」
と、声に出して、合点した。
「そうか、おりょうのことだ。おりょうに何かしたのだ、そうに違いない」
駿府に行って、おりょうに新九郎が逢うと困る。新九郎を、駿府に行かせないための工作ではないか。
新九郎が入府する一足先に、
〃伊勢新九郎、曳馬の城に於て、寿々女どのに乱暴いたし云々〃と、通報しておけば、新九郎の言は何一つ取り上げられない。一言の弁解もなく追い払われよう、悪くすると、首を討たれる。
それが狙いだったのではないか。
（腹黒いやつだ）
深謀遠慮は、時代の要求ではあるが、ここまで、反間の策略をめぐらす奴とは思わなかった。
前に述べたように、人質にやる以上、おとめであれ、犯されても文句はいえないのだが、第三者の犠牲になったとすれば、話は別である。
悪しざまに申し立てれば、弁解の余地はない。
（一つ臥床に入ったのは事実だからなあ）
夜半に、戸外に忍びよった足音は様子を窺いに来たやつのだ。暁方に、五、六人で、中をのぞいたのも、謀りごとの成果を確認するためだったのだ。
その上、御丁寧に備中守まで、のぞきに来ている。いよいよ、間違いない。
（おれを悪人に仕立てて、その上で、ゆっくりと寿々女を弄ぶつもりだったのか）
それがやり損ったとすると、伊平の言っていたように、今夜にも備中守は、好色な牙をむいて襲いかかるだろう。
（とんでもないやつだ）
それに、おりょうと逢わせないための工作、いや、おり

ょうのことを駿府に告げさせないためだとすれば、どこかに隠したことも考えられる。

（女なぞきらいだなどと吐かしおって、何が、稚児好みだ、よくも、ぬけぬけと……）

鉄面皮な備中守である。あの面の皮をひっ剝がしてやりたい。

あの城の中に、おりょうは閉じこめられているのか。

その可能性は大いにあった。

酒だ、女だと、その上、弁当まで作ってくれたり、親切の度が過ぎた。

いうならば、風来坊の新九郎、一介の牢人者にそこまでしてくれるのはおかしい。

もっとも、大志を持ち、牢人を優遇して、他日に備えるというのならわかる。が、備中守の小人物ぶりからはそんなことは考えられない。それほどの器ではない。

新九郎は遠廻りして、曳馬の城へ近づいた。

むろん、はじめての土地だから、地ノ利はよくわからない。だいたいの見当をつけて、走った。ところどころで道を聞いた。陽が黄ばみはじめたころ、松木村というところに着いた。曳馬の城（いまの浜松市）まで一里あまりということであった。

浜松市の東側を流れている馬込川が、当時は城の外濠をなしていた。

新九郎は城の背面から馬上で渡河した。

夜闇にまぎれてのことである。特別に濠として深く掘ってあるわけではない。ただの川である。内濠は深いが、川はせいぜい、胸くらいまでと見えた。

小石を投げて深さを計ると、新九郎は充分の用意をして、馬を乗り入れた。

敵前渡河には通常、忍びはみ、忍びぐつ、などを用いる。馬が嘶かぬようにすることが肝要であった。

はみは、銜と書く。轡の鳴らぬよう番の箇所を絹または木綿の布片で巻くことがある。

その上、馬の舌をしばる。この結びかたに秘伝があるのだが、細紐で舌の中ほどを確実に結び、糸の余りを左右の一端にとって、銜の組違いの下へ潜らせ、その余端を口の外へ出し、鬣で留めて置くのだ。

あるいは、舌をうすい板で挟んで、その上を糸でしっかり巻く方法もある。これは竜の咀といって、秘事になっている。

忍びぐつは、馬蹄に履を打つ際、爪裏に綿を敷くなどする。急場だから、用意はない。新九郎は、忍びはみをほどこしただけであった。

渡河する場所に念を入れたのは寿々女を救出して帰る際のことを考えたからであった。

馬込川を渡ると樹陰に馬をつないだ。いざといえば、さっと手綱をひいてほどけるように仕掛けて、奥へ進んだ。

内濠を渡らねばならぬ。これはもう泳ぐしかない。新九郎は着物を脱ぐと、太刀を背負った。

静かに濠の中へすべりこんでいる。こうした際の忍びの心得などは専門家ではないが、いつの間にか、知識として身についている。

このあたり、水が豊富だから、内濠は深い。時とすると鳴子仕掛けなどがあるから、用心しなければならなかった。

漸く、石垣にとりついた。ほっと、息をつく。幸い、見張りの眼にはとまらなかったようだ。

石垣はさしたる高さではないが、勾配が急で難しい。新九郎は石垣の裾について、少しまわった。

頭上で声がした。

「おい！」

「変だぞ」

数人の雑兵たちが、草摺を鳴らして、走ってくる様子だった。

「濠を誰か渡ったようだ」

「まさか」

「いや……確かだ、用心しろ」

（見つかったか？）

新九郎は、ぴたりと平蜘蛛のように石垣の裾にはりついた。

頭上に松明が幾つも動いている。その火が濠の水に映じて、ぎらぎらと光り、火の粉が闇の中に舞い落ちてくる。

石垣といっても、さしたる高さではない。弓で射られるとそれまでだった。

新九郎は、静かに、また濠の中に身を没した。そして、水の中をくぐって行く。夏とはいえ、夜に入って、水は冷えている。からだがひきしまる冷たさだ。

石垣の裾についてまわってゆく。ときどき、頭をあげて夜気を吸い、また潜る。

何度目かに、漸く、人声が聞えなくなったあたりで、新九郎は、ふとい息をついて、石垣によじのぼろうとした。そのあたりは、石垣といっても丸石を積んだ、いわゆる乱積みで勾配もけわしい。

が、丸石だから、のぼれないことはない。その中で、一きわ大きな石に手をかけてのぼろうとしたとき、その下の石が、ぐらっと揺れた。

（はてな？……）

動く。

その石を動かしてみた。まわりに隙間がある。

上の大きな石に支えられていて重みがかからないせいであろうか、それは動かしているうちに、ぽかりと、穴があいた。

中から冷たい風が吹きあげてきた。

「これは！……」

愕然とした。抜け穴ではないか。

人一人、やっと通れるくらいの穴だが、意外だったのは、その石が、まわりに土や草が詰っていたわけではなく、近近に、人が通った形跡があったことである。

（ふむ、これは用心せんといかんぞ）

軽々に利用はできない。このまま、中へ飛び込んでいいものかどうか、ちょっと迷った。

（ええい、ままよ）出たとこ勝負だ。暗い穴の中へ入ることにした。

ここが抜け穴だとすると、城内へ通じているはずだ。

城作りには、万一の場合を慮って、たいてい抜け穴を作る。

万一ということは、落城の際の城主や家族たちの逃げ道のことである。それだとすると、この抜け穴の行き着く先は、城主の屋形ということになる。

新九郎は、身を入れると、穴の入口をもとのようにふさいだ。万一、外を見廻って、この口があいていることを発見されたなら侵入を嗅ぎつけられる。

真っ暗な道である。一筋の明りもない。鼻をつままれてもわからぬ暗黒の細道を、手さぐりで新九郎は進んだ。

どれくらい進んだろうか、突然壁にぶつかった。

（行き詰りか？）

そんなはずはない。

新九郎は、壁に触れた。板のようであった。真っ暗でわからないが、さぐってゆくと、上の方に紐らしいものがふれた。扉がついている。

（これか？）

ためしに引いてみた。

ゆるくひいたが、動かない。力をこめた。ガタッと大きな音がしたので、はっとしたが、向う側に変った様子はない。こんどは注意して強く引くと、それに応じて、するりと開いた。滑車仕掛けにでもなっているのであろう。

そこは真っ暗だった。戸外ではない。板敷きである。狭い納戸のようであった。向う側の板戸と隙間から灯が洩れていた。

その灯のところが部屋なのであろう。やはり、この道は城主の抜け穴だったのだ。偶然とはいえ、抜け穴を発見したのは幸いだった。

（ここなら、寿々女の寝所に近いだろう）

城主備中守の居間に近いはずであった。御殿の間取りはよくわからない。が、寝殿造りというのは決っているし、武家造りも、この変形なのだ。したがって、およその推測はつくが、夜のことで見通しは利かぬ。

ぽつんと燭の火が点っている部屋に出た。備中守の寝所かと思ったが、そうではないらしい。

そこは持仏堂らしく須弥壇が飾られ、灯明が点っていた。どうも信用のおけない男だが、人並みに仏を供養はするのか。普通武家屋敷の間取りから言うと、持仏堂は西の端に作る。

西というのは、西方浄土の認識からきたものだ。表門は東向きである。新九郎の記憶でも、たしか東向きだった。それで大体、いまいる位置がわかった。

すぐ隣に化粧ノ間があり、廊下をはさんで、反対側が湯殿になっている。突き当りが広い榑縁だ。その左側に御上と称する正室の部屋と上段ノ間がある。

城主の御座ノ間はずっと遠いがたしか、寿々女が与えられていた部屋は寝殿造りでいうならば、泉殿に当るような廊下つづきの離れ部屋であった。

（おりょうも、ひょっとするとこの屋形のどこぞに押し込められているかもしれない）

と、思ったが、これはまるっきり、探しようがない。まず、寿々女だ。

新九郎は御鷹部屋の傍から、庭へおりて築山をまわろうとした。

すると、どこかからか、呻き声が聞えてきた。

ものに動じない新九郎も、はっとして足をとめた。

地の底から、ひびいてくるような、鈍い呻き声である。広い庭なのだ。誰もいるはずはない。その呻き声は、はじめ、人の声とも思えなかった。墓場でその声を聞いたとしたらたいていの者は腰を抜かしてしまうにちがいない。

（奇ッ怪な……）

新九郎は、全身の神経を一点に集めた。どこから、その声は聞えてくるのか。

風の声か？　地鳴りか、あるいは野良犬か何かか。番犬を飼っている場合もある。夜になると、綱を解き放して、侵入者に備える。そういう犬は、不審の者に嚙みつき、吠えたてるように仕込んである。嚙み殺されても文句はいえないのだ。

新九郎はいざといえば抜刀できるように、背の太刀の柄に手をかけている。背負った刀の長さを考えると、狭いところでは不利なのである。裸身だったが、もう水気はかわいていた。寒さもそれほど感じないのは緊張のせいであろう。

呻き声はつづいていた。

新九郎は、その声のほうへ近よった。

そこは丁度、築山の裏側に当っていた。築山には、巨大な岩が据えてあり、それの背面下に、手斧削りの太い格子が見えた。

格子の数は七、八本で、地上から三尺ばかり口が開いているところをふさいでいた。どうやら、その中は空洞になっていて、つまり、土牢というわけらしい。いや上は巨岩

が押えているから、これは、石牢ともいえるかもしれない。中はむろん真っ暗だった。

（この中に？……）

呻きは、そこから聞えてくるのだ。

新九郎は、あたりに気をつけながら、中をのぞいた。何も見えない。呻き声だけが聞えてくるのである。

（おりょうが、ここに）

と、思ったが、すぐに打ち消した。

その呻き声は、どうやら、女のものではない。男が中に閉じこめられているらしい。

しかし、これが牢だとすると、見張りがいるのではないか。あたりに注意を払ったが、それらしい気配はない。もっともこれだけ、頑丈な牢なら、見張りの必要はないかもしれぬ。時間で見廻りにくるくらいであろう。

「おい……」中をのぞいて、新九郎は言った。「誰か、いるのか？」

すると、呻きがやんだ。沈黙が来た。と、喜悦の声が、かえってきた。

「お、おぬしか、伊勢新九郎どのやな、助けてくれい」

突然、名を呼ばれて、新九郎は驚いた。

闇の声である。姿も見えぬ。どんな奴かもわからぬ。あの呻きは、苦悶のそれだったはずである。新九郎の顔を見て、喜びをあげたのだ。

「――誰だ、おぬし」新九郎は、なおも用心をしながら、「おれを知っているとは」

「助けてくれい」

「誰なのだ？」

姿は見えぬ。顔も見えぬ。わずかに、暗い中にうごめいている人影らしいものが見えるだけなのだ。

外は星あかりだけ。こちらは、まるっきりわからないのに、向うがわかるというのは、どういうことなのか。

第一、この土牢の中にとらわれているとは、誰なのか。もとより、心当りはない。

「――備中守の家来か」

「阿呆なことを」吐き出すような呟きであった。「――捕まったのや」

「……」

「なかなかに、狡いやつや、備中はな」

「……」

「あないに、コス狡いヤツとは思わざったのが、おれの失敗じゃて」

むしろ、諦めきったような調子であった。

「運の尽きかと思うていたが、お前さまに逢うたのが、運の尽きぬ証拠じゃで」

「――まだ、助けるとは申しておらんぞ」

「いんにゃ、助けてくれるわ」と、一人ぎめしているのだ。

「こやつが、人助けの押売りか」

「お前さまの人柄だわさ、伊勢新九郎が、かかる場を見捨てるはずもないものな」

「そう勝手にきめてもろうても困るぞ。おれとて、多用の身じゃ」

「多用だろうと、人の苦しみを見捨てゆけぬ御仁じゃものな。それ、伊勢でな、ずいぶんと、人助けをしたじゃろ」

あっ、と思った。伊勢のことを知っているのか。

「――五十鈴の河原でな、まず巫女を助けた。それから、牢人者三人の生埋めをな、助けた」

「……」

「そうそう、それだけではない。女郎屋で女を連れ出そうとした阿呆を助けた」

呆れた。新九郎自身が忘れていたことまで知っている。

唖然として、返事も出来ないでいると、

「もっとある」と、闇の声は言った。「もぐさ屋のお丹もな……」

そうか。やっとわかった。新九郎は、眼をかっと瞠いて、影を見つめた。

「わかった、伊賀ノ者であろう、伊賀ノ太郎とかいう、そうであろう」

薬草などを宇治のもぐさ屋お丹のところに売りに来ていた。奇妙な風采の小男を新九郎は思いだしたのだ。子供のように背が低く、陰気な風丰の男だった。

（あの忍びノ者が？……）

忍びをし、細作、反間など、透破、乱破と呼ばれる所業なれば、危険はいつもつきもので、やり損じれば、こんな目にあう。珍しいことではないかもしれない。

誰かに飼われて、この城へ忍びこんでいたのであろう。

「――そうか、なるほどな」と、新九郎は納得したように合点して、「そうか、それなら、おれを知っているわけだ。いや、夜目が利くわけだ」

「わしらの目は、梟と同じや」ふふふ、と陰気に笑って、「さ、切りほどいてんか」

「なるほどな、助けてやってもいい」新九郎は格子に手をかけた。「だが、誰から頼まれて、この城を探っていたのだ」

「そら、言えん」

「助けてやろうというのだ、恩人にも言えぬのか」

「言えん、そら、口が裂けてもな。忍びの掟じゃわいの」

「なるほど。わかった。いい性根だ」

格子は切り込みで組んであるので、ゆらぎもしない。しかたがない。大きな鍵のついたところを、新九郎は小刀でえぐることにした。

「忍びを生業とする者が、捕われるとは、みっともないな」

「いかにも」と、太郎は悪びれない。「彼奴の方が一枚上じゃったよってに。つまりは、人を視る目がなかったわけや」

「備中がか。うむ、彼奴、なかなか悪智慧にたけた奴らしいからな」

「おぬしの目的は？」

逆に聞かれて、

「言えん」と、答えていた。「こっちもな、言えん」

「ふふふふ、しっぺ返しかいな。ところで、お前さまも忍びこんだとすると、どこからだえ」

「……」

「この城は容易に入れぬ」

「ようだな」

「まさか、抜け穴ではあるまいがな。あれを知っているはずもないが」

伊賀ノ太郎は独りごちるように言い、小首をかしげた。新九郎は思いだした。あの石が容易に動いたのは、この男が先に侵入するときに動かしたあとだったのである。

「いや、知っている。天知る地知るおのれ知る。さ、はは。さあはずれるぞ」

ぐいと、ひき抜いて、戸をあける。新九郎のからだが、やっとくぐり抜けられるほどの入口である。

中へすべりこんで近々と見て、新九郎はぎょっとした。

格子の内外で話している間、どうして、奥の方にへばりついているのかと、不審に思っていたのだが、中へ入ってみて、新九郎は眉をひそめた。

なんと、伊賀ノ太郎は、両手両足を、大の字なりに土止めの丸太に縛られていただけではなく、髪をさながら、逆立ったように、幾すじにもわけて、天井の格子に釘を打ってからみつけてある。

たまったものではない。動けば髪がひっぱられて、目が引きつるだろう。

残忍な処刑ぶりだが、これは備中守の残忍さだけではなく、

〝魔性〟

のワザを持つ忍者ゆえに、ここまで念入りにしたのであろう。

御丁寧に、頭髪は、二十も三十もにわけて、ひっかけてあるのだ。これを一々ほどいていては、とても大変なことになる。

「こいつはしかたがない。髪を切るぞ」

「うむ……止むを得ぬ、髪よりも命や」

もっとも切るといっても、根元からではない。せいぜい、総髪頭になるくらいだ。

ザクリザクリと切ると伊賀ノ太郎は、ふーっと息をついて、

「生き返った」と、言った。「恩に着る」

手足のいましめも切りほどいてから、新九郎は、寿々女の安否を聞こうと思った。

「一体、いつから、ここに」

「捕まったのは三日前や」

それなら、寿々女と新九郎の一条は、まるきり知らないわけだ。

「とにかく、逃げるがいい。おれはまだせねばならんことがある」

「恩に着る」と、また太郎は言った。「この恩は、きっと返す」

「義理固いな」

「忍びノ者は、そこらの連中とは違うで」

「よかろう、いずれ返して貰おう。ところで……やっ？」

太郎の小柄な姿は、かき消したように消えていた。

「素早い……」

新九郎は呆れたように呟いた。いかに忍者とはいえ、これほど素早いとは思わなかった。三日間土牢に呻吟していたとも思えぬ軽捷さであった。日ごろの鍛え方が違うのであろう。耐忍をむねとしている忍者なのである。

（急がねばならんぞ）

この忍者の逃亡を見廻りの者が知ったら騒ぎ立てるに違いない。そうすると、とばっちりを受ける。寿々女を連れて出るのが難しくなる。

（どうやら、また余計なことをしたようだな）

新九郎は悔んだ。

築山をまわって、馬屋の傍へくると迂回して、記憶のある建物をさがした。

漸く泉殿を見つけたとき、松明の火が、人魂のように泳いでくるのが見えた。

見廻りの者であろう。雑兵が槍をかいこみ、片手に松明をかかげて、通りかかった。新九郎は息を殺してやりすごすと、松明の火が遠ざかるのを待って泉殿へ近づいた。

愚図々々してはおれない。簀ノ子から、板戸を開けて、さっと入る。

「あっ……」

臥床はあった。几帳の中に、しかし、寿々女の姿はない。枕がぽつんと、人待ち顔に置かれているだけ。

「はて、どこに？……」

備中守にすでに寝所へ引きこまれているのか。しかし、こうした場合は、備中守の方から、寿々女のところにくるのが、普通だ。

「どこへ行ったのか？　まさか」

かれが侵入してくることを予想して、別のところへ隠したか。それなら、この臥床の様子はおかしい。

新九郎はとまどった。

そのころ——

伊賀ノ太郎の方が、寿々女を見つけていたのである。

湯殿だった。御殿の中に、湯殿は四ヶ所ある。

その一つだった。御座ノ間に近いところで、この湯殿には檜の香が強い。備中守はこの香が好きで、半年ごとくらいに、新しい檜で湯殿を作る。当時、湯殿は、おおむね、蒸し風呂だった。簀ノ子の床の下から、熱湯が湯気をふきあげ、この中で汗をかき肌をふやけさせてから、垢をかく。それから湯をあびるという方法である。

だが、備中守は、この蒸し風呂を嫌った。

「目があけられぬ。息もよう出来ぬ。へたをすると、蒸し殺されるわ」それから、こうも言った。「蒸し風呂に入っているとき、閉じこめられて、殺されたやつを、おれは知っている」

かれの伯父がこの城を持っていたが、変死した。もうその噂は人の口の端にものぼらなくなっていたが、当時、備中守が暗殺したのだと、囁く者があった。

それが事実かどうかは、もはや捜るによしないが、備中守が蒸し風呂を嫌いなのは、その辺の消息を物語るような気もする。

湯殿の中に刀架を作り、中に長巻と刀を置き、小姓には刀を捧げさせた上で、湯槽に入る。そうやっていなければ安心できないのであろう。

こんなことをすると、刀に錆が出て大変だが、したがって小姓らは、始終、刀を研いでいなければならない。

ここに、いましも、寿々女を裸にして、侍女たち三人がかりで、洗ってやっていたのである。

「さあ、脚を広げなされ、ようく洗うて進ぜますえ」

寿々女のからだは、もうほどよく温まって、ぼうっと赭らんでいる。

侍女たちは腰のもの一つ。桶に湯をくみ、一人は糸瓜(へちま)を持ち、一人は手拭いを持ち、

「そこへ、横におなりを」

寝かせておいて、糸瓜でこするのだ。

まだ、やっと八歳になったばかりの寿々女である。すべすべしたからだの、下肢のつけねも、まだ赤児のそれと同じで一毛だになく、清らかな、ほっくりとしたふくらみを見せている。

その股を引き裂くように、大きくひらくとき、侍女の手つきにはのぞき見している伊賀ノ太郎が、はっとしたくらい、かなり感情的な、荒々しい動作だった。

「よく洗いましょう、殿の仰せじゃゆえ、よく……」「念入りに」「念には念を」

と、笑いを含んで侍女たちは、寿々女の下肢のつけねをのぞきこんでいる。

糸瓜をきゅっきゅっと、動かすのも、先端がわざとそこへ当るようにしている。ただ人質だから、いじめるというだけではない。

(こんな幼いくせに、殿の御寵愛を蒙るなんて)(あたしらの方が、一人前の女なのに)(どうして、殿ももの好きなことを)

そんな思いが顔に描かれている。

手桶を持っていた女なぞは、「ここのところを、もっとよく洗うて」と言いながら、手拭いをくるくると指先にまくと、そこのところを手荒く、こすった。

「——いたい」

さすがに、寿々女は、悲鳴をあげる。

「いたくても、がまんというものをなさらねば」

「でも……」

「さ、もう少し」

また、ぐいぐいとこすった。

こんな少女に、その手の動かし方が、どんな影響をあたえるか。侍女たちは残忍な気持になっている。

憎しみすら感じているのだ。寿々女が、清純であるだけ、憎いのだ。その憎さには、備中守に寵愛されることが憎いというほかに、こんな幼いからだを、壮年の男に蹂躙されるのが、いい気味だという気持もある。

だいたい、男よりも、女のほうが残忍で冷酷なのである。

(呆れたものや)伊賀ノ太郎は、凝っと湯気ぬきの高窓からのぞき見していて、(あれれ、指を突っこもうとしているわい、よほどに、男にモテぬ女どもじゃ)

ふっと、太郎は、お丹のことを思った。

そのとき、備中守の声が板戸の外でした。

「まだか、どこをいつまで洗うている」

待ちきれなくなったのであろう、備中守の声は、かなりヒステリックになっていた。

「早ようせい、何刻かかるのじゃ。わしを、どれだけ待たせる気じゃ」

侍女たちは、その割れ鐘声にすくみ上った。

「はい、ただいま……」「ただいま、すぐに」

それを聞くと、しかし備中守は一寸、安心したようである。

「むやみに急ぐこともない」

「……」

「若い肌ゆえ、傷つけてはならぬぞ、ゆっくりと拭いてやれ」

「——はい、仰せの通りに」

「うぬらのサメ肌とは違うのじゃ、ははは」

笑い声が遠ざかった。

侍女たちは顔を見合わせて、口をとがらした。

「ひどい仰せようだこと」「サメ肌なんて、ねえ」「ほんとうに、おかめどのの肌は雪のようじゃ」「あれ、おかつど

のの肌こそほんに絖衣ではありませぬか」「あれあれ、二人とも、ほめ合うていて、あたしの肌は、何とほめて下さるかえ」「そうねえ、おとくどのの肌は、さるすべり……」「あれさ、そんなに固くはないよう」「つるつるしているとほめているのさ、ちっと黒いけれど」

侍女たちは、お互いの肌に触れたり、抱きついたり、じゃれあっている。

そのうちに湯気がもうもうとして、濃くなってきたのに三人は気がついた。

「あれ、どうしたのかしら」「これさ、そんなに焚かなくてもよいのだよ」

小窓をあけて、叫んだ。が、風呂焚きの男の姿は見えない。竈には薪が突っこんであった。

「まあ、どこへ行ったのかしら」「こんなに熱くなって、目もあけられない」

湯気だけで、居たたまれないようになっている。侍女たちは、板戸へ走った。狂ったように開けて飛びだした。

ふわっと、湯気が脱衣の間に噴きだし、侍女たちは、裸のまま転げるようにして、簀の上に倒れた。

板敷きに茸の簀が敷いてある。

「ああ、驚いた」「一体どうしたのかしらねえ、どこに行ったのかしら」「殿様に言上して、きびしいお仕置きを……」

ひと息ついたあとで、あっと気がついた。

「あの子！」「あ、寿々女どのを」

置き去りにしてきたのだ。湯気から逃れるのが精一杯だったのだ。

寿々女の名を呼びながら、湯殿にもどった。まだ湯気は濛々としていた。この中にいたら、もう窒息しているにちがいなかった。侍女たちは真っ蒼になった。

「居ない！」

「えっ、そんな、居ないはずが」

湯殿は濛々たる湯気だったが、人影が見えないほどではない。

広いといっても、畳にして、十帖ほどのものである。隠れるところはない。侍女たちは、簀ノ子を走りまわり、湯槽の中をのぞいたりした。

が、寿々女の姿はどこにも見当らなかった。

「まあ、消えてしまったのですよ」「殿にはなんと申し上げればよいのでしょう」「これでは申し上げようがありませぬ」「ただ、消えたというしか」

そうなのだ、消えてしまった。侍女たちは小袖をまとって、帯を結ぶのもそこそこに備中守のところへ行きかけて、

「あっ……」と、気がついた。「寿々女どのの小袖は」「ほんに、裸でどこへ行くはずもなし」

消えたということは、逃げたとしか思えない。が、湯殿

から飛び出したとすると、一糸まとわぬ裸ではないか。

小袖のことは気がつかなかった。脱衣の間に小袖は置いてある。女たちは、また戻った。狼狽で動顚してしまっているから、頭のめぐりが遅い。脱衣の間の衣桁には、寿々女の寝衣がかけてあったはずである。

「あ、ない！」消えた。彼女たちが裸で飛びだしてきたときは、たしかにそこにあったのである。

「まるで、まやかしのような」「ほんに恐ろしい」

女たちは、肩をすくめた。

急にこの御殿が、魔性の棲家のように思われてきて、侍女たちは抱きあって、ふるえていたが、わっと、一人が声を迸らせるとみんな、尻に火がついたように駈け出していた。

湯殿から飛び出したあと、寿々女が消え、脱衣の間から湯殿に戻った隙に、寿々女の着物が消えている。

冷静に考えれば、それが何を意味するかわかるはずだったが、恐怖に動顚した女たちに、冷静さをもとめるのは無理だったろう。

女たちの狼狽ぶりを見送って、にたりとした男がいる。

「去によった」

厩の陰である。馬が羽目板を蹴っている。臭いが強い。藪蚊が喰っていた。

寿々女が見ていると、その男は、藪蚊が頬へとまっても叩くようなことはせず、ひょいとつまんで捨てる。叩く音を憚かっているのであろうが、そのつまみかたは無造作なものだった。やはりワザなのであろう。常人の出来ることではない。

「さあ、わっちらも、行こうかいの」

伊賀ノ太郎は、寿々女を促して身を起した。

新九郎がそのことを知ったのは忍びこんだ備中守の寝所で、宿直の近習の泡を食った言葉を聞いてからである。

「なに！　逃げたと？」

備中守は、いたいけな人質を弄ぶ楽しみに、胸をときめかせながら寝酒を舐めていたところだった。

すべてを新九郎のせいにして、いいところだけをつまむ。新九郎を悪者にしておけば、今川との交際いもこれまで通り保てるのである。おりょうはいいところに飛びこんでくれたわけだ。

寿々女を新九郎が犯したことにすれば、あとはどうにでもなる。備中守は寿々女を楽しみながら今川家から怨まれないというわけである。

狡智にたけた備中守であった。

しかし、それも、「寿々女が逃げた」となると、様子が変ってくる。

備中守は立ち上った。あわてて走りだそうとしたが、前

裾を踏んでよろめいた。
「くそっ、何をしていたのだ、女どもは」
「は、はあ、それが……」
「捜せ、逃げたとしても、子供の足じゃ、どれほどもゆくまい」
備中守は刀を持たずに、走り出た。
新九郎はその姿を見送ってから部屋の中を見まわし、次の間にも踏みこんでみた。
唐櫃や鎧櫃の中もあらためたが、おりょうの姿はなかった。おりょうを閉じこめたのではないかという見方は、新九郎の疑心暗鬼だけだったようである。
新九郎は寿々女を探すことにした。逃げるといっても、幼い少女が、この厳重な城から脱出できるはずはない。そこらの茂みに隠れているところを捕まるのがおちだ。
備中守の獣欲は何をするかわからないのである。
城内には松明の火が右往左往していた。寿々女ばかりではない。新九郎も発見されたら、今度は無事には済まないのだ。
「おおい、そっちにはいないか」「二の丸の方はまだだぞ、虱つぶしに探せ」「見つけても手荒にしてはならぬぞ、大切な人質ゆえ、気をつけろ」
喚きあう声が火事場騒ぎのようであった。
新九郎はその間隙を縫って探して歩いた。
「寿々女！　寿々女！　おれだ」
声をひそめて、もの陰へ呼びかけていった。うっかりすると、城士たちに聞かれてしまう。その新九郎の背後から、ふいに腕をつかんだ者がいる。あっと新九郎は刀の柄に手をかけてふりむいた。
「わしや」と、その男は言った。
伊賀ノ太郎だった。
「おう、どこへ消えたのかと思ったぞ」
「ちょいとな」
それから顎をしゃくった。去のう、というのである。
「いや、おれは、まだやらねばならぬことがある」
「そやさかい、去のう」
太郎はにやりとした。この男が笑いを見せたのは、はじめてのようである。
「寿々女やろ」
「そのことを、どうして」
「忍びノ目やて。もはや、ちょっと連れだしたわな」
「おぬしがか」
「待たせてある。去のう」
先に立った。捜索の松明が右往左往している城内である。忍者伊賀ノ太郎は歩きながら、樹々の梢や灌木に手を伸ばした。ひょい、と触れたくらいにしか見えなかった。が、何やら巧みなワザを用いたらしい。かれらがかなり遠ざか

ったあとで、ぴしっぴしっと、梢がはじけ木の葉が散った。
「や、何事だ」
「誰かいるぞ」
松明がゆらゆらと、集まってゆく。
闇の中で北叟笑んだ太郎は、この間にすばやく中門を抜けた。太郎ひとりだと、こういう術を用いなくても、軽捷だから、犬穴をくぐり、猫わたりして塀を越えられるが、新九郎はそういうわけにはいかない。そのために、太郎は奥の手を出したのだろう。
「さ、早よう」
太郎は促した。
そこから暫くゆくと、大銀杏が見えた。何百年経たかと思われる。大樹である。地上六尺ほどのところに洞があり、奇怪な瘤が幾つも盛りあがって、気味が悪いほどだ。
こうしたものには、神が宿るといわれて恐れられている。注連縄が張ってある。夜風に御幣が揺れている。
「ここや」
太郎はひょいと飛びあがった。まことに身軽い。猫のようである。
新九郎もあとにつづいた。
「あ、寿々女」
その洞の中に寿々女の白い姿があった。あの湯殿から救いだされてここに隠されていたのである。
「この中を、降りるのや」
「ここを？」
巨大な樹なのである。五人抱えほどもあろうか。それだけに中が洞になっているが、その洞がずっと、下まで地下道につづいているというのは意外だった。
中には一条の縄梯子が下っていた。
新九郎は寿々女を抱いて、それを降りてゆく。冷たい風が吹きあげる。先に降りた太郎が、ぽっと紙燭を点すのが見えた。
暗い地下道に入った。年古りた大銀杏の洞の中である。下におりると、足が柔らかい土にふれた。冷やりと冷気が、からだを包む。
伊賀ノ太郎が点した紙燭が、ぽっと小さな火を燃やして、あたりを仄かに照らしだした。
この地下道は、さっき新九郎が抜けてきたところと違い、ただ、土の下を掘り抜いただけのものだから、土壁には、地下水が流れているし、足もとにも、水がたまっている。
寿々女は恐怖で、顔をひきしめたまま、新九郎に抱きついている。泣き声を立てないのは、新九郎への信頼感のせいであろうか。生れも育ちもいやしくないのでもあろう。
「大丈夫だ、おれがついている」
と、新九郎は寿々女に言い聞かせると、少女は、こっくりする。しがみついた手に力がこもる。

その地下道は、案外、短いものだった。
「そこが出口や」と、太郎は言った。「出口いうても、城の外ではないがな。おぬしが来たところや」
その言葉の意味が判然としたのは、地下道から、上へあがったところが、あの納戸部屋だったのである。
「ここか！」
「抜け穴のすきな城主どのや。もっとも、いつごろ掘り抜かれたかわからんが」
「万一のことを慮ってのことであろうが、よく発見したな」
「忍びノ者は、鼻が利くよってに」
太郎は、鼻をうごめかしてみせた。文字通り、鼻がうごいた。
三人は、内濠に通じる地下道に入っていったが、その前に、「ちょっと、仕残したことがあるで」と、太郎は、備中守の居間にひきかえしている。
すぐに戻った。何をしてきたかわからない。
「備中を殺ったのか」
と、暗い道で聞いたが、太郎は首を振って、
「忍びノ者は、めったに殺しはせぬわな」
「すると？……」
「ま、ええやないか」
執こく聞くな、と、いうのだ。
忍者は〝魔性のもの〟というがたしかにうす気味悪い。超人的な鍛錬をして、耐忍に耐忍をかさね、その上、夜と闇にばかり生きているうちに、人間性が変ってくる。常人のはかり知れない感情を持つことになるのだろう。何をしてきたのか、別れるまではわからなかった。
内濠へ出て、また泳いでわたった。出口の石がゆるんでいたのも、やはりこの男が出入りしたからであった。奇妙な偶然である。
「これで、借りは返したで」
別れしなに太郎は言った。寿々女を助けだしたことだ。
ところがその寿々女の袂に妙なものが入っていたのである。
太郎と別れて、馬を飛ばしてゆくうちに、寿々女の袂が重いのに気がついた。
「なんだ、石でも拾ってきたのではないか」
よく子供はそんなことをする。
鞍壺に寿々女を抱いて馬を走らせていると、袂が新九郎の腹のあたりに触れて、何やら固いものが当るのだ。
「なんだ、これは」
と、袂を掌で踊らせると、
「知らない」
寿々女は、けげんな顔をした。
手を突っこんで見た。寿々女が無心につかみ出したのはゆずり葉銀数枚である。

銀貨なのだ。
「どうしたのだ、これは……」
「知らない」
寿々女はかぶりをふった。七つ八つの少女に、貨幣の価値がわかるはずがない。それに着ているものは寝衣なのだ。
「なるほど、そうか」新九郎は合点した。「あいつの仕業だ」
「……」
「太郎だ、そうにちがいない」
ぬけ目のない伊賀ノ太郎は、どこかへちょっと姿を消した。
あのとき、備中守の手文庫からでも掠めてきたにちがいない。どれくらい盗んだのか。怨みのある備中守のかねだ。そっくり盗みとって一部を寿々女の袂に入れてよこしたに違いない。
「素早いやつだな」
新九郎は馬上で苦笑した。
これだけ寄越したのは、新九郎が無一文と見てのことか。土牢から救出されたことの礼心か。
どちらにせよ、寿々女を連れて駿府（静岡）にゆくのに、無一文では困る。どうにかなると思ったが、渡し舟を頼む金もなければ、川は越せない。幸いこの馬が案外、泳ぎ渡る術を心得ていたので、その点たすかったが、路銀がなくては、寿々女に一椀の粥も与えてやれないのである。
（伊賀の忍びノ者といえば、魔性で始末に悪いやつらと思っていたが、存外、義理を重んじるところもあるな）
忍者の恩返しなど、いささかうす気味悪い。
ともあれ、路銀にありついたことは、一安心だった。
「寿々女、腹は減っていないか」
「いいえ」
「もっとも、この時間では、もとめるわけにもゆかぬが……」
「ねむたい」
寿々女はふり仰いで言う。
愛らしいその顔に、ふっと微笑を誘われる。すんでのことに備中守の毒牙にかけられるところだったのだ。そんなことは知らぬげに、少女は湯殿から助け出されて、地下道をくぐり濠を渡り、異常な経験をして、眠りだけがほしくなったのだろう。
「よいとも、眠るがよい」
と、新九郎は優しく言った。

隠れ里

駿府とは駿河の国の府中、の称で、いまの静岡市である。
今川治部大輔義忠が守護大名として東海に名を轟かせ、遠州から三河へかけて勢力をふるっている本拠であった。
「寿々女、漸く、屋敷へ帰れるぞ、そなたの両親に逢えるな、嬉しいであろう」
「あい……でも」
「屋敷はどこだ。おぼえているかな」
寿々女はあいまいな顔で頷いた。
年端もゆかぬ娘だ。地名などもおぼえていないであろう。
駿府へ入れば、わかるにちがいない。
新九郎は気楽にかまえていたが、寿々女は駿府が近くになるにつれ、しだいに落着きを失ってきた。
岡部の村を過ぎて、宇津谷峠へかかったのは、夕暮れだった。途中、遠廻りしたためもあるが、小夜ノ中山の鎧塚のわきで午睡をとったのだ。
寿々女はすっかり新九郎を頼りきっているが、どこかに脅えが残っている。
それは曳馬の城に人質となっていたことの恐怖が、まだ残っているのかとも思ったが、途中ではあんなに潑剌としていたことを思いあわせると、不思議だった。
寿々女は父の名を、
〝小鹿〟
と、いった。
「小鹿か、聞いたような名だな、いや、姓だな、たしか、今川治部大輔の叔父や従弟が小鹿どのと聞いたが」
小鹿何というのか、姫の身にとっては、父の名はおぼえる必要はないのか、それ以上は知らなかった。むりもない。人質として家を離れてから二年になるというのだ。
それでも、山へのぼりはじめてから、ぽつんと言った。
「孫九郎……」
新九郎は自分の名を間違って呼ばれたのかと思った。
が、同じ名をくりかえして、寿々女は、父の名だと言った。
「小鹿、孫九郎というのか」
「あい」
似た名前だ。これも何かの縁かもしれぬ。
宇津谷峠は急坂であった。江戸時代の東海道とは違う。後の東海道は、北まわりになるが、当時の道は南まわりで

ある。
現在でも、細い道が残っているので、それとわかるが、この道は〝蔦の細道〟と呼ばれていた。
その昔在原業平がここを通って、

駿河なる宇津の山辺のうつつにも
ゆめにも人にあわぬなりけり

と、詠じたのはよく知られている。
歴史的に見ると、平安初期にはすでに踏みつけ路になっていたらしい。
源頼朝討伐のための平家の軍勢が、物具を鳴らし、馬を曳いてここを通ったものだ。下っては将軍足利義教なども富士遊覧に通過している。
宇津谷峠の名が、いつごろからあったのかはわからないが、一般化したのは、前記の業平の歌によってである。
以来、よほどこの地は、歌心をそそるものとみえ、有名無名を問わず歌が多い。
なぜ〔蔦の細道〕というのか、文字通りの意味に受けとっていいらしい。
周知のように伊勢物語には、
——宇津の山に至りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに蔦かづらは茂りて、物心ぼそく、すずろなるめを見る事と……
云々とある。
十六夜(いざよい)の日記にも、

つたかへでしぐれぬひまもうつつの山
涙に袖の色ぞこがるる

とある。
江戸時代になって、この道は裏街道とされた。秀吉が天正十八年の小田原攻めに、大軍を運ぶのに新道を切り拓かせたためなのだが、泰平になると風流人士は、好んでこの道に踏みわけ入ったらしい。
現代のわれわれが旧道に好奇と郷愁をおぼえるようなものであろう。
東海道名所図絵は、江戸も後期に書かれたものだが、案内記的に、〔蔦の細道〕のことはこう書かれている。
——岡部の駅より海道を一里ばかりきて、湯谷口坂の下といふ所あり、ここの鼻取地蔵堂の向なる熊野権現のやしろの側より、右の方へ入るなり……。
左へゆくのが新東海道である。
——これより道細く、いささかなる渓川あり、この流れを右に添ひ、左につれて、疋の橋五つ六つをわたる。坂路にかかれば、いよいよ道細く、山深うして、幽寂たり。ちがや、すすき、はぎ、をぎ、しの竹生ひ茂りて、ふぢかづら、つたかづら足にまとひ、薔薇、荊棘たもとを閉ぢて歩しがたく、二人の手引の者、鎌もて叢を薙ぎ刈りて次第に登るに……。

当時は本街道だったのだから、それほど道はふさがってはいなかったろう。

だが、後世と違って、通行量も大したものではなかったろうから、案外、これに近かったかもしれない。

それにしても急坂だった。少しのぼってふりかえると、平原の中に街道がゆるやかに曲って延び、岡部の村が萱葺きの屋根を集めるようにより添って夕餉の煙をたなびかせていた。

もう太陽は黄ばんで、西の山脈に落ちようとし、大井川がきらきら輝いて見えた。

「疲れたか寿々女」新九郎は馬の手綱をとって、「寿々女は軽いから、鞍に乗ってもいいぞ」

「姫は歩きます」

「馬が可哀想だからか？」

幼くして人質にやられると、甘え心というものがなくなるのかもしれない。

「あそこで休みましょ」

寿々女が指さした。巨松が数本大きく枝をひろげた下に、猫がうずくまったような巨岩が見えた。もう頂上も近いようであった。

猫石のところで寿々女を休ませると、新九郎は、水を探しにいった。

ここは頂上に近いから、谷川を探すには、下へおりなければならぬ。

（無理だな）

我慢をして、向うへ越えれば、水があるだろう。

そう思って戻ってくるとき、木ノ間に、ちらっと人影が見えた。

咄嗟に、（このあたりの者か）山菜でもとりに来ているのではないかと思った。

「これ、ちょっとものを訊ねたい」

その声は聞えたはずである。木立が深く、草が生い茂っている。ちらっとだったが、（女？）と、見えた。

腰にしびらを巻き、頭髪は桂包みしている。手に籠を持っていたようだ。いまごろ山で採れるのは何か。ともかく、この界隈の者らしい。

ところが、その女は、身を翻している。逃げだしたのである。熊笹がざわめいた。

「おい、待て、ものを訊くだけだ、おい」

よほど悪人と思われたのか。女は山路に馴れているらしく、たちまち、その姿は見えなくなってしまった。

はじめての山だし、深追いして道に迷っては困る。一人なら、どんなところでも恐れを知らない新九郎だが、お荷物がある。

八歳の女の児を、山の中に置き去りにしているのだ。新九郎は、猫石のところにもどってほっとした。

寿々女は、花を摘んで遊んでいた。

そこまで来て、意外に思ったのは、あの女は寿々女を見なかったのだろうか、ということだった。

寿々女を見ていれば、新九郎が山賊などの類いでないことがわかるはずではないか。あのように、あわてて逃げるはずはない。

それと、この場所が、逃げていった方向からも見易い位置にあることだ。

寿々女に聞いてみると、

「あ、その人、向うから見ていたよ」

と、頷いた。

知っていたのだ。なぜ、逃げたのか。

不審を感じた新九郎は、「とにかく、少し急ごう」と、言った。

「早く峠を越すことだ」

「お水がのみたい」

「我慢せい、山をおりると水がある」

「お水がほしい」

「聞きわけのない子だな」

新九郎は、恐い顔をしてみせたが、新九郎の優しさを知っているから、こたえない。にっこりしている。

新九郎は抱きあげると、可愛い唇を吸ってやった。小さな舌をさしこんでくる寿々女だった。

小さな可愛い唇であり舌であった。寿々女は、新九郎に紅唇を吸われると、うれしげに、抱きついてきた。

親が子に対すると同じ愛情の表現とうけとったのであろう。新九郎の感情もそれを出ない。

山の峠近いあたり、夕暮れ近いが、まだ陽は西の山並みにある。

父性愛という気持に近かった。寿々女の信頼もまたそういう気持に発しているらしい。舌と舌とが、からみあったり、吸い、吸われた。

「ふふふ、面白い、新九郎さま」

「のどのかわきはどうだ」

と、新九郎はなおも、鳥がついばむように、唇と唇をつけたり離したりしながら言った。

「水をのみたいか」

「たくさん……新九郎さまのお水飲んだの」

「ははは、この新九郎の水なら強い丈夫な子になるぞ」

連れ立って歩きだしてから、「寿々女の父御（ててご）はどうであったかな」

峠に立つと、東方の海が見えた。向いに横たわった山は、あとから知ったが、徳願寺山という。その左手に遠く富士がのぞめた。

明るい空のもとに、くっきりと富士の頂きは、化粧を落した顔でそびえている。この季節は、富士がもっとも、雪

化粧を剝いで素顔を見せるときであった。
右手の海は駿河湾で、その向うに富士につづく山並みが裾を長く引いている。その山が、愛鷹山と呼ばれていることも、いまの新九郎は知らなかった。
のちに――
新九郎は、その愛鷹山の麓の興国寺城の主になるのである。
運命の変転は、新九郎を、やがて一城の主にする。いまその山を望遠しながら、もとよりかれはそうしたことに気がつかない。
ただ、この峠に立って、かなたを眺めて、ふかい感動が、胸を浸していたのである。
ことに、この夕景の素晴らしさは、かれにとって幸いであった。
風景というものは、まっ昼間に眺めては、いかに展望がよくても、面白くない。陽春の白昼の、気持のいい天気だと、あいあいとして靄の中に隠されてしまう。
朝か夕景に、同じ風景でも、眼を驚かせる美しさで、くり展げられるものだ。
「いい眺めだな、寿々女」
「あい、新九郎さま」
寿々女も、新九郎の手を握りしめた。
そのとき、人声がした。下の方から、誰か上ってくるようだった。
この宇津谷峠の猫石というのは、いろいろ伝説がある。
在原業平の東下りにその飼猫が慕ってきて、石になったとか、いや、猫塚だとか、異説が多い。
旅人が通りかかると猫の鳴き声がするともいわれているが、聞いた者はない。形状が猫に似ているのが、そのほんとうのところであろう。
岡部のほうから蔦の細道をのぼると、猫石から峠まではすぐである。峠から下りにかかって、右側につりがね石がある。
旧記に、
――碧岩の下には砂長うして巌を立て、翠嶺の上に葉落ちてつちくれをつく……
などとあり、足に任するものは苔の岩根、蔦の下路、嶮難に堪えず云々とある。
相当の難所である。下りにかかるとほっとする。声が聞えてきたのは、そのときである。
(誰が？……)
もう夕暮れだ。漸く、日は西に沈み、空にはまだ水色の光が残ってはいたが、もう林の中は暗い。
急速に夜が足もとからのぼってくるようであった。
〈どこじゃ、その御方は〉
〈峠の方じゃと〉

〈いや、猫石のあたりとかの〉
〈こちらに向ったのなら、もう峠は越していようほどに……〉
ざわめきは、少なくとも、三、四人はいるらしい。
新九郎は警戒した。やはり、さっきの女が注進したのだ。
東路はここを背にせん宇津の山、という歌もあるように、ここからは東国だ。
駿府も近い。今川氏の領域としての色彩が濃くなるから、どのような見張りが置いてあるかしれない。
強大なくにでは、
〝一里目付〟
などというのを配して、隣接地点から一里ごとに監視哨を設けているところがある。
新九郎のような他国者は、用心されるのはしかたがない。警戒しながらおりてゆくと、突然目の前に、ぱっと数人の人影があらわれた。
男三人に女一人。
女は、やはり、さっきの桂包みした女である。
「おお、姫だ！」
一人が叫ぶと、ひとしく、男たちは声をあげた。
「やはり、姫じゃ」「姫、やつがれをおぼえてお出でか、三左衛門でござる」「民蔵でござりまするわ」「重兵衛をお見忘れではございますまいな」口々に喚いて駈け寄った。
唐突すぎた。寿々女は、こわいと叫んで、新九郎のうしろに隠れてしまった。
「あ、これこれ、騒ぐことはないぞ、まあ、落着け、おぬしらは、姫を存じよりの者か」
「ぞ、存じているどころか、むつきよりお世話つかまつったわい」
民蔵がむっとしたように吼えた。
「姫、この者たちを知っているか？」
新九郎は寿々女をかえりみた。
突然出て来た男たちに吃驚した寿々女だったが、男たちが名乗るのを聞き、記憶を甦らしたらしい。
「ええ、知っている」
「そうか、それなら、よい」
ほっと、新九郎も肩の荷をおろしたような気持だった。
「曳馬の城から連れ出してきたのだが、親元を捜そうと思っていたところだ。おぬしたちは駿府から来たのか」
「はあ、やはり姫でござったな。実は、この者が、山中でお見かけしたと申したので、驚いて来てみたのだが、まさかと思うた」
よかったよかった、と男たちは喜びあい、
「さ、背へお乗り下されや」
民蔵が前へうずくまった。おぶってゆこうというのだ。
寿々女は新九郎をふり仰いだ。かれがいいといわねば、

悪いような気がしたのだろう。
質子にとられている間に、寿々女はそれだけ、子供心にも思慮が出てきたのかもしれない。
新九郎は微笑して、「疲れたであろう、おぶさるがよいぞ」と、奨めた。
寿々女が嬉しそうに、民蔵の背に負われると、男たちは、喜んで急ぎはじめた。
宇津谷峠の下りであった。
「駿府まで、どれくらいある？」
へえ……と、答えたが、口の中でもごもごと言ったのが、聞きとれなかった。
なぜか、強いて聞きかえすのも悪いような気がした。この連中が、はっきりと駿府までの道のりを言わなかったのは、なぜか、それが判然としたのは、峠をおりてから、暫くたってからである。
不審を感じながらも、新九郎はあえて追求しなかった。この男三人に女一人ならば、どうということはない。いざとなっても、寿々女をさらわれぬだけの自信はある。
「民蔵に三左衛門に重兵衛か、おれは伊勢新九郎長氏、駿府に向う途中だったのだ」
「へえ、伊勢どのか」
「駿府は繁昌の街と聞いている。人間も多いことであろうな」
「へえ」
「東海の都という話だな」
「へえ、その通りで」
「今川義忠の威勢は大したものだ、道々、噂をよく聞いた。こういう大国の領民は倖せだの」
「……」
「気候もよいらしいの、東海道は米もよくとれるというではないか。米のとれるところは、人間も健やかであろう」
四人は、むっつりしたまま、おりてゆく。この四人の性格なのであろうか。それにしては、少し様子が変なのである。
「暗くなったな」
「へえ、灯りをつくりますで」
二人が杉葉を折りとって枯枝を交ぜて松明を作った。馴れている。瞬く間に手作りの松明が出来上った。杉葉だから、煙が凄いが、とにかく明りになればよい。
このあたり、大分下ってきたわけだが、まだ平地よりも高い。
宇津谷峠は、もっとも高いところで百メートル少しだから、高さとしては大したことはない。ただ、突兀としているのが急坂を多くしているのだ。
両側の山が迫った坂道を東へおりてくると、しだいにひらけてくる。川沿いの道である。

少し平地になったあたりへ出た。
「このあたり、何というところだ？」
新九郎は見まわして言った。
諸国を遍歴していると、土地の名前に関心を持つようになる。
「へえ、赤目でござる」
「赤目？」
たしか、伊賀にそういう地名があったと思った。
「赤目ノ谷と申しておりますがな」
「ほう、面白いな」
「面白いと申せば、すぐそこに、大だらというところがございますな」
と、左手を指した。
赤目ノ谷をすぎて、二軒家。二軒ということはないが、藁葺きの家が五、六軒、肩を寄せ合っている。
水の音が近づいた。清流が左手の山あいから流れつきていて、こちらの川にそそぎこむ。
大だらという部落は、その左手に、川を遡ったところだという。
「大だらとは珍しい、どんな字を書くのだ？」
「字？」
三人の男は、顔を見合わせた。字までは知らなかったらしい。
「難しい字で……」
そのとき、それまで黙っていた女が、口をだした。
「金へんの、ヤスリという字によく似た……」
ヤスリなら〝鑢〟である。ダラとは読むまい。が、よく似た字というので思い当った。
「なるほど、それなら、イロリのほうだ。ヤスリのつくりの方は心だが、これなら皿だな」
鑢という字を思い浮べた。
大鑢とは珍しい地名である。
大きな囲炉裡という地名では判じものだが、こういう山あいならタタラが出たのかもしれぬ、と思った。
出雲にタタラという所があるし、筑前にもタタラ川というのがある。いずれも、川上で鉄が採れる。精鉄するのに、フイゴが必要であり、タラもタタラも同じことである。火桶、爐の意味がある。
この駿河の国は古代から、文化が栄えていたという古墳も多く、鈗などを作ったのかもしれぬ。その由緒が、大鑢という名になって残っているのだろうと思った。
駿府にゆくには、安倍川を渡らなければならないが、男たちは、そこから暫くいって、左へ道をそれた。
「おい、どこへ行くのだ」
新九郎は眉をひそめた。
駿府へ行くには、道はまっすぐである。それを民蔵たち

は左へまがったのだ。
「誰だ」
頭上から声が降ってきた。
道の角に突兀とした丘がある。現在はここは稲荷の社が祀られているが、そのころは、ただの物見に利用されていただけである。
「おう、重兵衛じゃ、姫をお連れしたぞ」
「まことか」喜びに弾んだ返事だった。
ますます新九郎は異様に感じた。左手への道を入ってゆくと、数人の侍たちが闇の中にうずくまっていた。
「姫じゃ」「寿々姫じゃ」「おう、御無事で」わらわらと駈け寄った。
これは何としたことか。新九郎が呆然となっているのもかまわずみんなは、民蔵に背負われた寿々女を囲むようにして、どこかへ連れてゆく。
道の少し先にひとむらの林が見え、そのなかに隠れるようにして屋敷がある。
なぜ、寿々女の家臣たちが、こういうところにいるのか、それが疑問だった。
(駿府ではなかったのか)
それがまず第一の疑問なのだ。
だが、この様子は、新九郎が疑問に思うだけで、かれらは嬉々としているのだ。

とにかく、かれらのあとから跟いてゆくと、その屋敷から、老人が出てきた。
「おぬしか、伊勢新九郎とやらは」
一庵、とだけ名乗った。
もとより号である。姓名を名乗らなかったのは、この隠れ屋敷のたたずまいを瞥見するだけでおよそ、わかった。
(何かある!)秘密なのだ、ここの住居は。
山と森に囲まれたこの谷間は、たしかに隠れ屋敷としては、最適であろう。
一庵は、多くを語らなかった。新九郎の人相を見て、語る必要がないと思ったのか。
「礼を申す、心より礼を申す」と、くりかえした。「だが、このことは、暫くの間、内密に願いたいのじゃ。事情は話しとうはない。いささか勝手なようじゃが、難しいことがあっての」
この屋敷は、まわりに濠をめぐらし、土塀を高くして、一見すれば何ということはないが、実は、城がまえがなされている。
望楼などないが、中に巨木が数本そびえている。それが充分、望楼の役目をするし、さっきの見張りなどの配置も、それを物語っている。
「まことに勝手ばかり申すようだが、このまま去んで下さらぬか」

一庵は何やら小袋をさしだした。
一目で金包みとわかった。礼金のつもりであろう。新九郎はむっとした。
「これは、一体?……」
「些少でござるが、その、姫をお救い下された礼心までに」
「金か」
「ほんの少々」
「要らぬ」
「いや、金というほどのものではない。われらの志じゃ、納めて下され」
「あいにくだが受けとれぬ」
新九郎は突っぱねた。
どんな事情があるかしらぬが、それほど感謝するのなら、屋敷へ上げて、旅の疲れを癒すように心を遣ってくれるのが本当だ。
曳馬の城(現浜松市)から宇津谷の東までの長旅である。途中の危険や困難を考えたら、とても、このまま追い返すということはできない。
当時は、旅人のための旅館というものがない。いうなれば民宿である。お寺や物持ちの家などでは、そうした旅人のための空部屋がある。
身分の賤しい者は、樹下石上に臥せるのも、旅には普通のことであった。いわゆる木賃宿などが出来てくるのは後世のことだ。したがって、一宿一飯の恩などという語は、決して、やくざの用語ではない。木賃宿というものが出来る以前の話だ。
それくらい、宿るということは有難く、また必要なことなのだ。何はなくとも、旅の眠りには雨露をふせぐ宿が有難い。
質子になっていた姫を救け出してくれたのが、それほど有難いにしては、一宿どころか、一飯どころか、一服の茶も振舞わずに追い払うというのはあまりにも、その感謝の言葉とちがいすぎたのである。
もっとも、人質にやるのは、それなりの理由があるから、それを連れ戻されては、当初の目的にそぐわないことが多い。
本来的には、(余計なこと)になる。
新九郎が寿々女を連れ出してから、慮ったのは、そのことである。
新九郎としては、大名間に、どういう取引きがなっているかしらない。
そのことが今川家にとって、どれほど重大なことかもしらない。
ただ、(寿々女が哀れだ)と、思ったのだ。
まだ、八歳という幼さなのに新九郎の枕の塵を払わせよ

うとした。
新九郎が、普通の男だったら、喜んで、獣欲の犠牲にしたかもしれない。十三歳が適齢の時代だから少し大がらなら八歳でも、男の愉楽の対象になる。
事実、新九郎が手をつけたあとは、小堀備中守が、楽しむつもりだったのだ。あまりにも哀れなので、連れて脱出したのではないか。
今川家から、寿々姫を救出したことで、苦情を言われるかもしれない。
その懸念はあったのだ。
大名間で人質のやりとりをするのは政略であって、そのためのリスクとメリットの細かい計算があるはずだった。
新九郎の行為は、いわば、おせっかいであり、余計なことであろう。人情を云々していては、乱世の版図は維持し難い。そのために非情になる。
その危険を犯して救け出したのは、新九郎のやむにやまれぬ気持だったのだ。
礼金ほしさでないことは言うまでもないが、礼金を貰ってしまっては、心が無になる。
礼金はいらぬ、と突っぱねられて一庵は困惑したようである。
「左様に仰せられずと」
「お断わりする。強いて受けとれというのならば」
「……」
「その金をもって、一夜の宿を頼みたい」
「それは！」
一庵の狼狽はおかしいほどであった。
この、年の功でもゆるぎない自信を以っていそうな老人が術もなく、周章狼狽するさまが、新九郎には意外すぎたし、愉快さえ感じた。
「――雨露をしのぐだけでよい。何しろ疲れが甚だしいゆえ、是非とも願いたい」
そうまで頼みこまれては、如何に事情があれ、それでもと突っぱねることはできなかった。
一庵老人は、漸く折れた。「招じるほどのところではないが」と、いって出た。
「よろしいとも、手足を延ばすことさえできればよい」
事実、疲れている。戦さから逃れてきただけに、新九郎は、何もかも忘れて眠りたかった。
新九郎が通されたのは、その屋敷の小者部屋のようなところで、板の間に何の装飾もない、がらんとしたところだった。なるほど、これは、恩人を泊める部屋ではない。
ほかにちゃんとした部屋があるはずだったが、こういう部屋をあてがったのは、やはり、母屋に通したくない慮りがあったのであろう。
むろん、新九郎は、それを怨む気持はない。

（よほどに用心しているのだな）
と、冷静に思った。
（おれのような風来坊は、たしかに疑えば疑えるわけだ）
氏素姓の知れない人間への用心は、いくらしても、し過ぎるということがない。
この時代、他人と見れば疑うことによってしか、安全は保てないのだ。新九郎が寿々姫を救出して連れて来たということも、猜疑深い眼で見れば、裏があるのではないかと疑われかねない。
そこまで疑わずにおれない気持は、かれらの立場を物語るものでもあった。
部屋はせまく粗末な扱いだったが、その他のことでは、一応、客人としての待遇をうけた。
「膝をいたわりなされませ」
と、まず薄縁を敷いてくれた上に、藁の円座もくれた。
それから酒が出た。濁り酒である。肴には蕗の胡麻あえと焼貝が出た。馳走である。
給仕に当ったのは、あの女だ。宇津谷峠で、最初見かけた桂包みの女。
「この蕗はそなたが採ってきたものか」
と、聞くと、
「はい」頬を染めてうつむく。
桂包みで、腰にしびらを巻いた嫋びた姿のときはそう感じなかったが、小袖に着替え、髪に櫛を入れてうしろで束ねた装いには、若さが匂っている。美貌にもいろいろあるが、この娘は、まず健康さを感じる。
「よく山に山菜をとりにいくのかな」
「はい」
口数が少ない。それでも、名前を聞かれると、
「小菊です」
はっきりと答えた。歯並びが皓く綺麗だった。
「寿々女の父御は小鹿孫九郎とか聞いたが、ここには、いないのか」
「はい」
「何処にいる。駿府か？」
「よく存じませぬ」
小菊はまたうつむいた。
それでわかった。新九郎は、寿々女の父が、すでに死んでいることを知っている。道中で寿々女自身の口から聞いたのだ。
わざと聞いてみたのだが、小菊が知らないと答えたのは、口禁めされているにちがいない。それも、よほど強く言われているようであった。
寿々女の父の死まで、口に出来ないほど、一切を黙させているのは、やはり、複雑な問題があるからであろう。
酒を飲んでいる間に、入浴の支度が出来たと老爺が告げ

に来た。
「湯浴みか、それは有難い、頂こうか」
「御案内いたします」
小菊が先に立った。
湯殿も粗末である。萱葺きの屋根に板壁で、これはすいい風呂であった。
裕福な地豪なぞは蒸し風呂を作るが、その余裕がない一般では、竈で湯を沸かして、樋で屋内の湯槽にそそぎこむ。いや湯桶というべきかもしれない。下は土間で、板を二三枚並べてあるだけの賓ノ子であった。
新九郎は下帯をしたまま、湯槽に入った。下帯には小柄をさしてある。それだけの用心をしなければならぬ時代なのだ。
意外に思ったのは、小菊も、帯をといて小袖を脱いだことだった。
小菊は、ためらうことなく、小袖を脱いだ。
仄暗い湯殿ではあったが、やはり羞恥がはたらいたように、向うをむいて脱いだ。全裸になったのではない。上半身はだかになったが、腰のものはつけている。
新九郎の肌を流しはじめたが、新九郎は、目のやり場に困った。これが若い肌でなければ、そうでもないが、はちきれそうな健やかな肌だけに、平静でいるのは容易ではない。
湯を汲んだり、身を動かすたびに、豊かで、かたちよく盛り上った乳房が、ぶるんぶるん動く。
新九郎はなるべく目をそらしていたが、やはり気になった。
「小菊は、このあたりの生れか」
「いいえ」
「というと？」
「駿府です」
小鹿家にゆかりがあるのか。小菊が寿々女と当家の秘密を黙しているのは、命令に忠実なのか、自発的なものかわからない。
「さっきの話だが……」と、新九郎は、どうしてもその話を聞かずには、という顔をむけた。「寿々女の父御のことだ、ほんとうに知らぬのか」
「はい……あの」と、小さくなった。
やはり、嘘を吐いている落着かなさが、声の力をなくさせている。
「あの、実は……」
思いあまったように、話しだした。やはり口禁めされていたのだ。
「父御さまは、すでにお亡くなりになっています」
「孫九郎どのがな」
「はい、前の治部大輔範忠さまの御舎弟で、範慶と仰せられました」
「……」
「お亡くなりになる前は摂津守に……」
そこまで言いかけて、あわててからだを放したのは、足音がしたからだった。
灯が動いた。紙燭をかかげてきた老女であった。じろりと、厳しい眼が二人を見て、
「湯加減はいかがですかの」とってつけたように言った。
「ぬるいようならば、もそっと薪をくべさせては」
「いや……ほどよい熱さじゃよい加減でござるぞ」
「さようかの」なおも、じろじろ見ていたが、「遠慮なくの」と、くどく言った。「なにせ、姫の恩人じゃからの、みんな喜んでいるわいの」
老女は、もどっていった。
小菊はそれだけで脅えたように、話のつづきをしようとはせず、また無言にかえって、背を流した。
出てゆく前に素早く、新九郎の耳もとに囁いた。
「あとで、あとで……」
暫くして小菊は来た。
人間は抑圧されると、かえってその桎梏から反撥したくなるものだ。秘密を胸にしまっておくことが、苦しくなったのだろう。
新九郎の様子を見ていると、一庵が懸念するような心配なことは何もない。秘密を洩らすような人柄ではないことがわかる。
「――もし、新九郎さま」
板戸の外で声をかけた。それから、板戸を少しあけた。
「もし、小菊でございます」
「おお」
「入ってもよろしい？」
小菊は入ってくると、ぴたりと板戸を閉めた。
寝所の灯は消えている。入っては来たが、その灯を点そうとはせず、ぴたりと坐った。
闇の中だが、目が馴れてくるとおぼろに見える。夜気に甘い香がした。小菊は遅い湯をつかってきたのであろう。
若い女が深夜、忍んで来たということが、新九郎の壮軀を平静ではおかない。
（この女は、どういうつもりで？……）
どれくらい経ったろうか。小半刻も眠ったろうか。ぐっすり眠ったので、疲れがとれている。
女は凝っと坐っている。こちらが黙っていると、むこうも黙っている。
男ひとりのへやだということが小菊を、昂ぶらせるのかもしれない。ますます、かたく膝をあわせて、凝っと身をかたくしている。
なまじ、湯浴みの世話をしただけに、男のからだが、強

烈に胸に迫るのかもしれない。小菊はあえいだ。熱い息が洩れた。

そのあえぎも、吐息も、必死におしころそうとしているだけにかえって、暗いなかで、女体を身じろぎさせ、女の体臭が濃く流れでるようであった。

「――聞こう」その沈黙を破って、新九郎は言った。「話してくれ」

せめて快活にふるまうことで、小菊の情感を打ち消そうとした。寿々女を救け出したのは事実だが、ここで小菊と秘めごとを持っては、かれの好意が裏目にでる。

新九郎の言葉で小菊も、はっと我にかえった。

「あ、あの、ええ、あのお話のつづきをしようと思ってきたのです」

「話してくれ、小鹿孫九郎こと範慶、摂津守どのが、すでに殁られたということまでは聞いたが」

「はい、それで、寿々女さまは質子にやられたのでございます」

「それでとは？」よくわからない。「父御が殁ったために質子とはどういう意味だ」

小菊の話は、新九郎を驚かせるものだった。

小鹿摂津守は、現在の太守治部大輔義忠の叔父にあたる。つまり、前太守範忠の二番目の弟である。

前々代の範政には、男子が五人あった。長男範豊、次男範忠、三男範勝、四男範慶、五男範頼。

他に異説もあるが、この序列が正しく思われる。

範忠が家督するについては、いろいろ難問があった。この時代の子供には、正室の腹も妾腹もない。長幼の序も必ずしも守られていない。

が、腹は借り物とはいっても、母の血筋が重んじられたのは事実だ。

血統をひとまず別にしても、母方の信望や勢力ということは無視できない。

母方の方が、武威と財力があれば、どうしても、比重が勝るのは、今日ですら、屢々見るところである。範忠の家督には無理があった。将軍義教の口添えで家を継いだものの、しこりが残った。

それが今日に尾を引いていたのである。

範忠の母は扇谷上杉氏定の娘であり、範頼の母は上杉政憲の娘だった。この範頼、範慶、範勝は小鹿氏としての連帯があり、一つの勢力をなした。

つまり兄弟が二派に分れたわけである。

範頼の母の父政憲は関東公方の足利政知に仕えて、尚存命だった。

ここに紛糾の根が残っていたわけである。

この今川家の事情は、こみ入りすぎていて一度聞いたくらいでは、わかり難い。

関東公方のことも、複雑怪奇な中世の事情がある。前にもこのことについて少し触れたが、理解に難いであろうから、折にふれ、詳しくしてゆきたい。

この範頼（幼名余五郎）の子が新五郎範満で、義忠との間が不仲になっている。

そのことは、新九郎も耳にしていたのである。新九郎の義妹が、実はこの太守義忠の側室になっている。

新九郎が駿府を目ざして来たのも、そのためなのだが、この義妹というのも、いろいろわけがあり、新九郎はこの妹を頼ってきたのではなかった。

なるべくなら、そういうひきで仕官するというような、手段はとりたくなかった。そういう気があるならもっと早い時期にかれは駿府へ下っていたろう。

それにしても、範慶の遺児である寿々女を質子に出すというのは義忠の方に、小鹿一党を制肘する意味があってのことであろうか。

「――なぜ治部大輔はそうしたむごいことをするのか。つまり新五郎（範満）どのの擡頭を圧えるためか？」

「はい、皆さまはそのように」

小菊が言いかけたとき、足音がした。

はっと、小菊はとむねをつかれて、

「見廻りです」

すり寄って囁いた。

（見廻りが?!）

事情を聞いたので、およそわかる。

義忠にとっては、小鹿一党は身中の虫というところであるらしい。

範慶の一門は、寿々女を質子に曳馬城にやられた以上、義忠に敵対もできないので、この泉ヶ谷に潜伏していた。

（義忠という男、それほど卑劣とは思えないが）

新九郎も実は、義妹が側室になっているといっても、義忠のことはよく知らない。

京で何度か見たくらいのものだ。

（ひょっとすると、小鹿方の疑心暗鬼ではないか）

話の間に何度かそう思ったほどである。

疑心暗鬼にもせよ、かれらは駿府を離れて、こういう山ふところの谷に潜伏している以上、そうしなければならぬ立場に追いこまれていたのであろう。

警戒心が強いのもそのためだ。寿々女が、戻ったとなると、一層、夜中の警戒をきびしくしたに違いない。

曳馬の城から、（質子脱走）の報が、駿府にとどいているかもしれない。

もっとも政略的に見て、それが得かどうかは小堀備中守の判断にかかっているのだが。

見廻りの足音は近づいた。

（戸を開けられたら……）

小菊のその心配が、闇の中でもはっきりとわかった。

足音がとまった。せきばらいが聞えた。わざとそうしたらしい。新九郎の眠りをさまそうというのか。

「あけます」小菊が、新九郎の耳に囁いた。

新九郎は夜具をひらくと、小菊をひきずりこんでいる。ほとんど同時くらいに板戸が開いた。

古くて棟も下っているし、根太もゆるんでいるのであろう。速やかに開かなかったのが幸いした。がたがたと揺れた。松明のあかりが部屋の中を照らした。

「見廻りじゃ」

と、眠ったふりをする新九郎に外から声をかけている。

「変りはないか」

新九郎は、その声で眼ざめたように首をもち上げた。

「御苦労だな」皮肉もこもっている。

見廻りの目には、夜具の盛り上りも、それほど気にならなかったようである。板戸をしめて、遠去かっていった。

その足音が消えるまで、二人は凝っと息をころしていた。

「――やれやれ、冷やりとしたぞ」

新九郎は笑いながら、夜具を剝いだ。小菊は、身をちぢめて、固くなっている。

「もう大丈夫だ」

だが、小菊は起きようとしない。

見廻りの足音は去っていったのに、小菊は起きようとしないのである。

「これ、もう大丈夫だというのに」

新九郎は、女のからだに手をかけてゆすった。

そのからだが、幼女のいやいやをするように動いた。

「……」

「もう少し、このままにさせていて下さいまし」

小菊はからだをのばすと、新九郎の胸にすり寄ってきた。自然、抱くようなかたちになる。

「ねえ、もう少し……」

甘えるくちぶりに、きびしく追い出すのも非情すぎるようであった。

「うむ」

少しならいいだろう。まだ聞きたいことがある。

複雑な今川家の内訌を聞いたが、矛盾や不自然な個所も多い。

夜具をかけてやると、小菊は猫のように嬉しそうに、忍び笑いを洩らした。きちんと坐って、膝も崩さなかった最前とは別人のように媚があふれている。

新九郎は夜具の中で抱き寄せた。わざと大仰にそうすることで、幼女を慈しむように、寿々女を抱いたときと同じ気持になろうとした。

こうすれば、小菊のほうでも、春情を圧えることができるのではないか。

深夜の、暗い部屋、夜具の中で抱く若い健やかな娘である。その甘酸っぱい体臭だけでも、理性を失いそうになる。

新九郎が耐えられたのは、やはり年の功であろう。それと、かれが飢えていなかったことだ。

伊勢以来、いつも予期しないかたちで、女体と接することになっている。

下司な見方をすれば、女運がいいというのか、ついているというのか、どちらにせよ、計画的ではなく女との交りは、多く持った。

それだけに、

（今夜はいかん、ここでこの女を抱いては……）

自戒がはたらいた。

そして、いささか苦しくはあったが、こうやっていて、この女の肌を犯さずに今夜を過すことが出来るだろうか？そうせねばならぬのだと、おのれに試練を与えるような気持になった。

そう思うと、おのれの欲望の制馭が、また愉しくなる。

（出来るか？）

もはや分別のある年齢なのだ。

その分別を破るのが感情というものだとしても、新九郎には男としての大いなる目的がある。その志に向って駒を進めてゆくのに、感情に負けるようでは、その目的ははたせまい。

「さあ、つづきを聞かしてもらおうかな、小菊」

「はい……どこまで話したかしら」

小菊は、まるで、とぼけているかのように、甘い声で言った。ほんとうに忘れているようだ。仄暗いなかに、一尺と離れず、娘の唇があった。

娘の体温と体臭と、そして、その唇は男を惹きつけずにはおかない。小菊の唇は、微かなあえぎを見せている。

「……」

何か訴えたげな唇であり、瞳であった。

その言葉を圧えているのは、何であろうか。娘の羞恥か、それとも、何か阻むものがあるのか。

「――話し辛いことか」

新九郎は気を変えるようにいった。

「いいえ、そういうわけでは」

小菊は、口のうちで呟くように言ったが、心はもうそこになかったようだ。

新九郎が凝っと見つめていると眼を伏せた。闇の中なのに、新九郎には、その長い睫毛がふるえているのが見えるような気がした。闇に目が馴れてきたからであろうか。

「そなたは、字をよく知っているな」大鑓の字のことを思いだした。「女性では珍しいな、どこで学問をした？」

「学問というほどのことは、何もありませぬ。ただ……」

「……」
「それ、門前の小僧習わぬ経を読むとやら」
笑いにまぎらせるように言った。学問を鼻にかける女もいや味なものだが、小菊が饒舌りたくない様子なのも、ただの謙遜とは違うようであった。
何か事情があるのであろう。
「そなた、近所の者か」
「いいえっ」
「当家の婢女になっているにしては、気が利く、学がある。婢女には勿体ない」
これは世辞ではない。率直な疑問であった。
「まあ、それほどでは」
「いや、ほんとうだ、おれは口上手は申さぬ」
女のからだが固くなるのがわかった。その次の行為を期待しているのだ。
が、新九郎は、その言葉の次に行うであろうと思われたことは、しようとはせず、
「もともと、当家とは由縁が深いのか、そうでなくては、かかるいぶせきところで、世に隠れての奉公は辛いであろうに」
「左様なことはございませぬ」小菊は小さくかぶりをふったが新九郎が手を出そうとしないのに失望したようであった。「ねえ、新九郎さま、もしも私が……」

「何だ？」
なぜか、言いかけた言葉を、小菊はのみこんでいる。そして、哀しげに目を伏せ、そっと夜具から脱けた。
新九郎も微かな虚しさに似たものが胸を掠めるのを知った。
その小菊の挙動に不審なものを感じたのは、小用に出たときだった。
小菊が去ってから、どれくらい経っていたろう。
小半刻——三十分くらいだろうか、教えられていた厠へ行って戻ろうとすると、小菊が、小走りに出てゆくのが見えた。
見廻りの者の松明の火が遠去かっている間であった。その灯を気にしているらしく、ふりかえりながら、木ノ下闇を縫うようにしてゆくのである。
（はてな、たしかに小菊だが）
不審を感じた。跟けるともなく、あとをつけた。
小菊は四囲を見廻しながら、坂を上ってゆく。この坂は、現在は歓昌院坂と呼ばれている。
突兀たるかたちの面白い山があって、その麓を這うようにしてのぼっている。その途中まで小菊が来たとき、ばさっと、頭上の梢が音を立てた。人影が落ちてきたのである。降りてきたというべきか。
小菊は、はっとしたように、身をのけぞらしたが、すぐ

に、
「由比か」
と、目を凝らした。
「由比だ」
影は木魂のように答え、
「そなたからの牒、もう少しで、野良犬に食われるところよ」と、白い歯を見せた。「餅に文を入れて捨てておくのも考えものだぞ」
「そのことは案じていました、次よりは細竹の筒かなんぞに致しましょう」
「なるほどな、ところで、寿々女のこと……」
由比と名乗った男は声をひそめて、何やら囁いた。
万一を慮って、闇を案じているのだ。あいにくと、新九郎のところまでは聞えない。が、およそのことは推察できる。
（小菊は、細作だったのか！）
道理で、様子がおかしいと思った。ただの奉公人ではない。その教養をいいほうに解釈していたがそれだけの目的を持って潜入していたのか。
新九郎は、その秘密の会話を聞きたいと思った。
複雑な関係にある今川家の問題は一介の牢人者の新九郎の予り知るところではないが、
（寿々女のこととなれば、これは放置しておけぬ）
義妹が義忠の側室になっていることは、またべつである。もっと、寿々女の安否の方が気にかかる。いたいけな幼女が、政争の犠牲にされていることに、義憤を感じるのだ。
寿々女の愛らしさ、信頼の結びつきもある。
新九郎は、もう少し近づこうと思った。そのとき、二人は急に笑いを洩らした。
「あれ、こんなところで」
「よいではないか、濡れているかどうか、触らせろ」
「——いけない。御役目大事」
と、小菊はひらりと身を離した。
由比もそれ以上は執こく追おうとせず、
「では用心に用心せい、万一露見したらそなたの命がない」
「大丈夫でございます」
「多寡をくくるまい、ことに、その新九郎とやら申すやつ」
「ほほほほ、あの方は……」
あの方は、何だというのか。木ノ下闇にいて、新九郎はいささか憮然たる思いだった。小菊の言葉、その笑いに、何やら、蔑みに似たものを感じたのである。
（甘く見られたか？）
その見方は、どこにあるのか。
小菊を大事に扱ってやったのが甘く見られることになっ

たのか。一人の女性を、人間として扱う。人格を認めての応対である。それを、こちらの気の弱さとか手出しの出来ない小心とでも思われたとすると、これは、新九郎としても、

（宗旨を変えねばならんな）

と、思わざるを得ない。

ここで、ぱっと飛びだして、あの由比というやつを圧え、二人を曳きずってゆくのは易い。そうしようかと思ったが、それを圧えたのは、

（甘く見たのならば、それでもいい、新九郎も人悪くなって見しょうぞ）

相手が相手なら、こっちの出方もある。

なるべく、人を傷つけまいとする思いやりや、優しい心はこの乱れた世の中では、通用しないらしい。

素姓を偽っての細作としての潜入だとすると、たしかに、小菊が、寝所で見せた好意は、怪しいものだ。意図がある。新九郎への好意ではなかったのだ。

かれとのまぐわいで、心とからだをつかみ、（利用するつもりだったのではないか）と、思い当った。

たいていの男なら、あれだけ持ちかけられたら、女を抱く。不具でなければ、たいてい抱いてしまう。交接のワザが、どれほど巧みかしらないが、男をとらえるに自信があるのであろう。

（面白い）

と、新九郎は思った。それなら、それでよいのだ。こちらにも出かたがある。

（ひとつ、罠にかかってやるか）

新九郎は足早に、木ノ下闇を出た。

凝っと夜具の中で待った。少し戸を細目にあけていた。

一度、女が去ったのは、あの由比という男との、連絡のためであろう。

餅に牒を入れて外へ投げておく、何かの樹の幹にでも投げつけて貼っておくのか。そういう連絡の時刻だったからであろう。とすれば、もう一度くる。男を利用する女は、必ず女の武器である、媚を用いる。

容易に女に溺れるとは見えないだけに、小菊は、腕によりをかけて新九郎をたぶらかしにくるはずだった。

聞きおぼえのある衣ずれの音がした。

（小菊だ！）

いよいよ、来たか。相手が相手なら、こっちも執る手段がある。

（こうなったら、手加減はせぬぞ）

籠絡するつもりならば、かかったように、見せてやろう、と思った。

女は、男が、女の肌にうつつにならぬ以上、自家薬籠中のものにならないという不安がある。新九郎のような、男

らしい男は殊にそうである。

（おれをうつつにさせて、何をしようというのか？）

小菊の足は止った。板戸がゆっくりと、音をころして開けられた。女の匂いが近づいて来た。

「――新九郎さま」

むろん、眠ったふりをしているのだ。

「もし……新九郎さま」あたりを憚って、声は低いがそっと、手をさしこんできた。「ねえ、あたくしでございます、小菊……」

ねっとりと甘い声で囁きかける。

「新九郎さま……」

小菊は、こんどは積極的だった。

さし入れた手でまさぐった。新九郎の手をもとめたのではない。下腹の方へ下げてゆく。はっきりと、股間をめざしている。

女の手が、そこへ辿りつこうとしている……からだに触れるような、触れないような、微妙な動きだ。若い女の手である。

からだは充足している。張り切った壮軀は、さすがに、平静ではない。そそられているのだ。新九郎は股間に血が凝集するのをおぼえた。

硬い。

「あっ……」

小菊は小さな叫びをあげた。まさか、すでに勃起しているとは思いもしなかったのだ。

その驚きは、次の瞬間、ぐいと、手くびを握られたことで、はっと、醒めている。

「待ちかねたぞ」

新九郎は言った。

「ああ……」

抱きすくめると、新九郎は、はげしく口を吸い、右手は女の裾をかきひろげて、ずいと指をさし入れている。

指頭が草むらに触れた。

「あ、新九郎さま！」

「待っていた、さ、まいれ」

新九郎は誘った。

熱く硬いおとこのいのちが、ためらいなく、女の芯を貫いたとき、小菊は髪を乱して、新九郎にしがみついた。

情を交すことは、男と女の心が交ることを意味する。たんなる排泄ではない。

が、この場合、新九郎には、小菊の心と溶けあおうとする気持はない。

（小癪な女め、おれを籠絡するつもりか）

戦さは裏をかくほうが勝つ。新九郎の性格では、小股を掬うような真似は好まないが、相手が、その気ならば、それに対応しなければならない。

小菊は、新九郎に抱かれると、喜びを全身に漲らせて、
「う、うれしい！」
と、声を洩らした。
「し、新九郎さま！　嬉しい、嬉しい！」
「おれもだ、小菊」
「もっと、強く抱いて！」
「こうか」
「ええ、もっと、もっと」
新九郎は小菊の花弁に包まれ、あふれる情感の潮のなかで、低く呻いた。
小菊のその態度には、下心というものは感じられない。あの秘密を見なかったら、新九郎は完全に瞞されていたろう。全身でもって、心から、新九郎を愛しているような態度だった。
（どこまで嘘の上手な女か）
女というものは、ここまで、嘘をつけるものか。
もっとも、人をあざむくにはまず、味方からあざむくべしといい、さらに十のうち九まで、真実を示せ、ともいう。そのやりかたか。
そこまでしかし、巧みになれるものか。新九郎が呆れるほどだった。
小菊は、髪をふり乱し、男の背に爪をたて、狂喜したように、四肢を悶えさせた。嬉しい、とか、好い、とか、好き、とか、盛りあがる情感のままに口走って。全身を汗にまみれさせた。帯は解け、小袖は脱げ、腰のものもはずれ、全裸になっている。長いみごとな黒髪は、床を掃き白い肌がのたうち、情炎に狂うという感じであった。
新九郎のほうも、つい引き込まれそうになり、はっとなる。
小菊は、男に狎れていた。不馴れな初心さを残しながら、そのむさぼるような行為には、女のいのちの溢れるようなはげしさがある。充分に官能の喜びを知っている女の動きであり、その情炎が、必ず、どんな男でも、溶かさずにはいない自信があるようだった。
何度、放ったか。女体は、しとどになり、なおも、身を転じて、上になったりした。
そういう姿態をとるのは、狎れた女にかぎる。男が喜ぶものときめているのか。あるいは夢中になったところを見せようというのか。夢中になった裸の姿に、嘘もいつわりもないと証明するつもりか。
小菊は、のけぞるように、黒髪をふり乱して、狂おしく叫んだ。
女というものは、こうも大胆になれるものか。羞恥のヴェールを脱ぎ捨てたとき、女は男以上に、性をむさぼることに大胆になる。
新九郎が啞然とするくらい、小菊は貪婪になっていた。

（この女は……）
愉悦の高みへのぼりながら、新九郎はしかし、観察の眼をはずさない。
まるで、その行動は、そこまでしることによって、新九郎の疑惑を晴らそうとするかのようであった。
性にルーズな者に、真の悪人はいない、といわれる。その是非は別として、彼女のふるまいは、もっともおのれを剝きだすことで、その常識に乗ろうとしているかに思われた。どちらにせよ、小菊の行為は、新九郎に意外の感を抱かせたのであった。
やがての後——
精を絞り尽くしたごとくに、落ちて、小菊は、安らかな表情になった。急に、しおらしく、弱々しい女にもどって、ひっそりと身を横たえている。
「嬉しゅうございました」甘えるように、羞じるように、おどおどと、新九郎を見上げている。「こんなこと、はじめて」
「……」
「もう、死んでもいい」
「……」
「あたし、ずっと、長い間、そう思っていたんです。誰か、好きなお方と、心ゆくまで、愛しあいたい、と」
「……」
「そして、そのあとは、喜びを抱いたまま死にたい」
額に汗がうすく浮いている。拭ったあとも、尚、吹きでてくるのは、まだ余炎が残っているからであろう。小菊の眼は、なお潤んでいるのだった。
「こうして、貴方様に抱かれていると、何もかも、世間のことは忘れてしまいます」
「そうだな」
心にもないことは、新九郎には中々言えぬ。
何とも上の空の返事が出た。
（この女狐が、何をそらぞらしいことを）
そう思っているから巧みに受け答えができない。だが、相手に疑わせては、せっかく肌を交えた意味がなくなる。これは、どこまでも、調子を合わせなければならない。
「おれも、そなたと、いつまでもこうしていたいな」
ちょっと、言い難い言葉を口にした。
「まあ、ほんとうに」
「ああ、いつまでも、いつも、抱きたいときに抱けるといいが」
「うれしい！」
小菊は、唇を寄せてきた。指が胸毛にからんでいる。
その次に小菊が言いだしたのが目的だったのである。
「行きましょう、一緒に」
小菊のその言葉は、新九郎には意外だった。

「ねえ、一緒に」
「どこへ？」
「どこへでも」
女の眼は一途な思いにあふれて見えた。
どこまで巧妙な女なのであろうか。新九郎でなければ、その言葉を疑うことはない。いや、新九郎にしても、あの〝由比〟とかいうやつとの、密会を目撃していなければ、その言葉を信じたろう。
「ねえ、貴方様となら、どこまでも」
「地獄へも、か」
「はい、地獄でも」
口は重宝なものだ。その言葉を反古にするときは、姿を消しているだろうから、言いたいことが言える。
（ふむ、乗ってやろう）
新九郎は頷いた。
「よし、行こう」
「まあ、嬉しい」
「しかし、どうして、おれと行きたいのだ」
「ええ……この屋敷にいるのがいやになったのです」
「……」
「なぜって、べつに理由というほどのものはないのですけれども」女はそう言いながら、考えているのだ。「なんだか、この屋敷は、気味が悪い……そうは、お思いになりませんの」
「そうだな」
「なんとなく、気味が悪い。貴方様をお泊めするのさえ、あんなふうに、お断わりしようとして」
その言い方には、新九郎の気をそそるものがある。細作としても、この女、大したものである。
「いつ行く」
「これから」
足元から鳥の飛び立つようなあわただしさである。
「しかし、間もなく、夜が明ける。早くせぬと」
「ええ、明日でもいいのですけれど、貴方様を二晩もお泊めしないでしょうから」
あの一庵の態度は、それを裏書きしている。
（今宵だけ）
と、念を押したのだ。
「御一緒に！」
と、いう以上、ばらばらには出たくないのであろう。そう単純に思ったが、小菊の気持は、それとは違っていたのである。
支度をして出ようというときになって、
「あ、ちょっと待って」
と、いって小菊はひきかえしていったと思うと、なんと、寿々女の部屋に入っていった。

「あたしですよ」
小菊は、おどろく寿々女に囁いた。
「さ、まいりましょう」
「え？　どこへ」
「新九郎さまと御一緒よ、ね、新九郎さまと一緒だから、いいでしょ。何処へでも行くでしょう」
寿々女は何も知らない。政治のことなど、わかりようがない。
だが、面倒な立場にあることだけは、おぼろげにわかっていた。父が死んだあと、一族と称する者たちが、入れ替り立ち替り、寿々女の前にあらわれた。
伯母だとか叔父だとか、従兄だとか、いろいろ聞いても、寿々女には、よくわからない。伯父だといわれれば、そうかと思うだけのことだ。
その人々が、自分のために何かしてくれる。何をしてくれるのか、その事情は幼い寿々女には、一切わからない。
わからないといえば、何のために駿府を離れて、曳馬の城（現在の浜松城）へ質子にやられたのかもわからない。
ただ、連れてゆかれ、預けられた。それだけのことだ。
寿々女にとって、ほんとうの信頼できる者は誰だろう。誰もが、自分のために何かしてくれる、あるいは涙を流して喜び、美味いものを食べさしてくれ、からだを洗ってくれたり、いろいろにしてくれるのも、いまでは、それだけで信じていいかどうか、幼な心にも疑惑の眼で世間を眺めるようになっていた。
そのなかで、新九郎だけは、信じられる。
新九郎は、いまの寿々女には、父と同じだった。
「どこへ行くの？」
「新九郎さまが、連れていって下さるの」
小菊のその言葉だけで、素直にうなずいた。寿々女を抱くようにして小菊は新九郎のところへ戻ってきた。
「なに、寿々女も?!」
新九郎は眉をひそめた。
「はい、わけは、あとで」
寿々女を連れてゆくとなると、見つかってはならぬ。
一庵はじめ、みんなが刀をふるって襲いかかってくるだろう。
小菊の意外な行動は、新九郎にも解せなかった。こうなると、暫く小菊のするままにさせておくしかない。
その上で、何とかする。寿々女の身も、新九郎の眼がとどく範囲なら、心配はなかった。
三人は、屋敷をぬけると、泉ヶ谷から、北へ小路を入った。
急な坂である。現在では一応車が通れるようになったが、当時は林間の踏みつけ路で、坂だから歩き難い。
歓昌院坂と現在呼ばれている坂である。坂をのぼりきる

と、牧ヶ谷と呼ばれる聚落へおりてゆく。
ここから、すぐに河原になる。藁科川である。広い河原は、安倍川にそそぐ合流点に近いからであった。
「駿府へゆくのか」
「はい……」
と、小菊は頷きながら、目は誰かを探してもとめているのだ。

泉ヶ谷から駿府へ行くのなら、誰でも、宇津谷道へ出て、いわゆる東海道を東へ辿る。
したがって、歓昌院坂を北へ越えて藁科川へ出て、それから安倍川を渡るというのは、裏道ということになる。この裏道を通ることは、まず、少ない。
小菊がこの道を選んだのは、こちらには見張りがいないという理由であろう。
牧ヶ谷をぬけて藁科川へ出た小菊は、何かを探すようにきょろきょろしていた。
「どうした?」
「はい、ちょっと待って下さいまし」
その小菊の足元で、
「遅かったな」
と、嗄れた声がした。
四辺は暗い。人影はない。声は足元から起った。まるで地虫の呻きのようであった。
ぎょっとしたとき、草が盛り上がるように影が立ち上った。梢に潜んで怪鳥のように舞いおりたり、草むらから蛇のように出てきたり、得体の知れない男だった。
影はすぐ目の前に立ち上った。
「――由比かえ」
それに返事もせず、影は新九郎へ顎をしゃくった。
「こやつは」
「伊勢ノ新九郎さま。ほら、お話したではないかえ、姫をさ、曳馬の城からお連れした……」
「伊勢新九郎、ふん、どうせ偽名であろうが」
こう嘲られては、新九郎も黙っては居れない。
「おい、もう一度、申してみよ」
「……」
「偽名とはなんだ。きさまのほうでは、名乗りもせず、誹謗するとは何事だ」
「名など、どうでもよいが……由比だ」
顎をしゃくるようにして答える。
傲慢な男である。
「由比の? 何だ、名は」
「名か」嗄れた声が笑ったようである。「由比さ」
「……」
「それだけでよい。おぼえやすかろ」

「由比だけか」
「由比ノ由比だ」
人を食ったような返事だった。
「――なるほど、立派な名だ」相手が相手なら、遠慮することはない。「馬鹿の馬鹿というところか」
「なに?!」
きっとなって由比は刀の柄に手をかけたが、「まあ、よいわさ」と、鼻で笑って、「なんでもよい。さ、小菊、まいろうぞ、小粒を放すな」
小粒とは、寿々女のことか。
「待て、何処へ行く?」新九郎は、寿々女の肩に手をおいて、「一体、この子を何処へ連れてゆこうというのだ」
「あそこさ、まかせておけ」
「まかせられぬゆえ、聞いておる。あそこさとは?」
「あそこさ」
由比は川の方へ顎をしゃくった。定かではないが、川の中ほどに小島のようなものが見える。
対岸は暗い。はじめての土地ではあるし、はっきりとは見えない。由比が口から出まかせの返事としか思えなかった。
「川向うか? 向うに何の用があるというのだ」
「姫のためさ」
「だから、連れてゆく理由を問うている」
「疑り深い奴っちゃのう」
由比は、うんざりしたように小菊を見た。面倒なやつをなぜ連れてきた、と、咎める口吻だった。
小菊は、ここまで、新九郎が強硬だとは思わなかったのである。途惑いを見せて、
「もし、新九郎さま、どうぞ、おまかせ下さいまし。決して、怪しいところではありませぬ」
「おれは怪しいところでもかまわんさ」
「……」
「寿々女だけは変なところに連れてゆかれては困る」
「寿々女さまの御為になることですから」
「そいつが心配だな、小菊。世の中には、御為ごかしということがある」
由比が舌打ちした。
この男は、時々、ふっと殺気を放つ。性格が粗暴で、短慮な感じだった。
いわゆる忍びノ者ではない。職業的な忍びノ者というのは、以前伊勢で知り、また曳馬の城で偶然、助け出したことのある、あの太郎というような男であろう。あの男は、どこから見ても、忍び、そのものだった。この〝由比〟は忍び、というより、野盗崩れという感じなのである。
「新九郎とやら、おれは、腕がむずむずしてきた」と、由比は低い声で、おびやかすように言った。大きな声ではな

いだけに、一層、凄みがある。「怒らせねえでくれ、おれは、すぐ人を斬りたくなる」
「悪い病気だな」
「なに！」
「おれもその病気持ちさ」新九郎は、声のない笑いを見せて、「おれの腕は、相手がその気ならいつでも応える。いやさ刀が呻いている。おぬしの骨をぶった斬りたいとな」
「待って」小菊が間に入るようにして、「とにかく、お話は、向うへ行ってからにいたしましょう」
「向うとは、どこだ」
「あの島です」
やはり、島らしい。川のかなたかと思ったが、たしかに、小島のようだ。こんもりとした、小さな丘で、はっきりとは、わからないが、五十間（百米）四方くらいのものらしい。
川の中にぽつんと浮んでいる様子だ。
「小枯（こがら）ノ森、と呼ばれています」
小菊が言った。
岸辺に舟がもやってある。由比は先に立って舟へおりてゆくのだ。
こうなれば、その小島へ行ってみるしかない。
（小枯ノ森か……）
なかなかの雅趣のある名だ。
誰がつけた名かわからない。だが、その名の通りの森だとすると害意が潜んでいるはずはないのだが、この男は、そこへ舟を寄せようという。巣窟があるのか。
現在の藁科川は、水が少なく、大雨のあとでもなければ、河原が浸るということがないが、当時は、川幅がひろかった。
「あの小さな島に、何があるのだ？」
新九郎は警戒した。
男は鼻で笑った。
「何であろうか」
「……」
「行ってみりゃわかる」
新九郎は逆らわずに話題を変えた。
「洪水などあれば、流されてしまうであろうな」
「あの通り残っている」要らぬ心配をするな、という返事だった。「おれが聞いた範囲でも、祖父の小さいときから、在った。おれの孫のときでも在るだろうな」
「おぬし、孫があるのか」
「あるものか、餓鬼もいねえ」
「……」
「たとえばの話だ」
「ははは、そのような悪い心がけでは、子供も出来ぬうちに、首が胴から離れてしまうぞ」

「ふん、おぬしが死んだあとでな」と、由比も、口の悪さでは負けぬ。「首が飛ぶときゃ、その前に小菊の腹に餓鬼を仕込んでおくわな」
「まあ！」
と、小菊は、狼狽した。
まさか、そのような素ッ破抜きをするとは思わなかったのだ。
新九郎に反撥して、そこまで饒舌ってしまったのだが、その言葉は、これまでの小菊と由比の仲を物語ることになった。
「変なことは言わないで下さいな」と、小菊は打ち消すのに、やっきとなった。「新九郎さまが誤解するじゃありませんか」
「ふん……」
「まるで、二人の仲に何かあったみたいですよ」
「なかったみたいだな」
「失礼な！」
小菊はむきになった。
まだ新九郎とのまぐわいの余情が、肌に残っている。その思いは、甘美だった。目的があっての新九郎への接近ではあったが、やはり肌を合わせれば、燃えた。
好きな男のタイプではあったし、新九郎は、小菊の官能をたかめ、手足が痺れるほどの喜びを与えてくれたのだ。
その思いがまだ残っているところに、由比に変なことを言われては立つ瀬がない。
「あれは」とあえいで、「おまえさまが、あたしが食べ酔ったとき無理に……」
小菊の狼狽は気の毒なほどだった。
（二人の間に何かあった……）
それが、どういう性質のものか、想像がつく。
木ノ下闇での二人の密会は、陰謀のなかまであることを物語っている。
小菊は、由比との関係をあいまいにぼかしてしまおうとするのだが、由比の方は、新九郎をライバル視するかのように、敢て小菊を抱いたことを口にしてしまったのだ。
「あたしの方じゃ、怨んでいるくらいさ」と、小菊は言った。
新九郎に聞かせる言葉である。
「飲みすごしたあたしも悪いけれど、つい食べ酔って寝こんでしまったのを、無理強いに……」
「ふん、そうけえ」
「いやだというのに」
「でもなかったようだ」と、どこまでも、由比は立証しようとする。「結構、よがり声を出していたくせに、何を言うてけつかる」
「由比！」

「あいナ、へへっ、あのときの声はよ、忘れることはねいわな」

由比は櫓を操りながら、肩で笑い、効果を見るように、新九郎を振りかえった。それだけ聞けば充分であった。

新九郎は、その勝ち誇ったような顔に、侮蔑の目をむけた。

「いい加減にしたらどうだ」

「何でい」

「左様に女性をいじめるものではないぞ」

「へへへ、なあに、女ってェ奴はときどき、泣きたがるものさね」

あくまでも、言いつのるのは、小菊と新九郎の仲を怪しいと見ているのだろう。こういう男は、その道にかけては敏感なのである。

「泣いたほうが、眼玉がきれいになる。女は泣くのが好きなんでさあ。もっとも、泣くにも、いろいろあるがね、悲し泣きに嬉し泣き、ヨガリ泣き、なんてったって、こいつが一番いい」

「由比！　お黙り！」

「黙らねえな、おれが黙るときァおめえの腹にタネを仕込むときだけだ、それも、ちょっとの間さ」

由比は妙な腰つきまでしてみせる。どこまで下司にできているのか。

これが夜だから、まだいいようなものの、白昼だったら、小菊は川の中へ飛びこんでしまうしかない。

一言一言が、小菊の恥部をあばきたてるような、容赦のない言葉だった。

赧くなったり、蒼くなったり、小菊はいたたまれなかった。寿々女を抱いていたが、幼い耳をふさいでやりたい。新九郎が、その卑猥な言葉に動かされた様子もないのが、せめてもの救いだった。

藁科川の中にある小島。小枯ノ森である。せいぜい五十間四方くらいのものだが、びっしりと樹木が生え、中央が小高くなっている。誰が見ても、無人の島であった。むろん灯もなく、森閑としている。聞えるものは、周辺の波の音だけだ。

「こんなところに……」

と、新九郎は、眉をひそめた。

寿々女も怖がって、しっかりと新九郎の腰帯につかまっているのがいじらしい。

「こっちだ」

由比は顎をしゃくった。

浜から林の中へ入ってゆく。灯がなくても馴れた足どりである。道が小高くなったと思うと、また窪地へおりていった。そこに小さな社が見えた。夜気に注連飾りが揺れている。何かうらぶれて、淋しい感じである。

由比はその御社の前へくると、手も合わさずに上へ上った。

「由比どのか」

どこかで声がしたと思うと、かちっと燧石の音がして、社殿の中が明るくなった。

むろん小さな炎であるが、真っ暗闇だから、小さな炎でも、明るく感じられる。

紙燭に火が点じられたのだ。社殿の床に円座を敷いて一人の老婆が居た。紙燭はその手に握られている。

由比の影が大きく動き、異様な感じだった。

かなり年数の経った古ぼけた御社であるが、正面の棟木の、祭壇のあったとおぼしいあたりに、群青で雲形の装飾が描かれているのが見え、この社が、存外な由緒を秘めているように見られたことである。

炎が夜風で揺れるのを、老婆は袖でかこって、

「小菊どの、跟けられた様子は」

「ありませぬ」

「この御方は」

「伊勢ノ新九郎さま、寿々女どのを曳馬の城から救い出されたのです」

「……」

「今夜も、この御方のおかげで」

「入るがよい」老婆は言った。

紙燭の火が消えかけていた。由比がうずくまったと思うと、床板があげられた。中はぽかりと暗い奈落になっている。由比の姿はたちまち、消えた。中におりる梯子がある。

「この穴は……どこへ通じているのだ」

「どこにも」と、小菊は急がせるように言った。「下に部屋が出来ているのです。さお入り下さいまし」

寿々女は恐がっているのだ。どうなるかわからないが、とにかくおりてみることだ。新九郎は、寿々女を抱いて、梯子をおりていった。

ぽつんと小島の林の中に取り残されたように建っている小さな社殿である。その床下に、こういう地下室が出来ているとは、対岸の村の者ですら知るまい。

老婆は、余人の近よるのを監視しているのであろう。

床の下は思いのほか広く感じられた。ただ掘っただけではなく、板囲いしてあり、千草が敷きつめてある。

壁から突き出た腕灯台では、魚油がちろちろと燃えている。

揺れ動く灯のなかに三人の男がいた。三人とも頭巾で面を隠している。

無言で新九郎たちを迎えたのである。

むろん、脇差をさし、打ち刀を左膝わきにひきつけているし、真ん中の男は身分あるらしく、練絹の中着に直綴道

服を着て、ゆったりと構えている。
左右の二人は小具足をまとっている。三人の前には瓶子や盃があり、飲みながら、寿々女が連れてこられるのを待っていたらしい。
「ただいま、立ち戻りました」
由比は中央の男に卑屈なくらい頭を下げた。
「うむ」頭巾の中で、重い返事がして、
「……」
新九郎を咎めるような視線が動いた。
灯は淡く、頭巾からは双眼しか洩れていないので、人相はまるきりわからない。
由比は膝を進めて、
「れいのやつでござる」
言葉少なに言ったのは、すでに新九郎のことを話していたのであろう。
「酒をくれてやれ」と、その人は、顎をしゃくった。
小菊が瓶子をとりあげて、新九郎の前に盃を置いた。
「さ、仰せでございます」
と、注ごうとするが、新九郎は手を出そうとせず、
「おれは、名も知らぬやつの酒など飲みとうない」と、突っぱねた。
小菊が、ぎくりとして、その人を見た。
身分ある者に対して、不遜な態度だった。ちらと怒りが頭巾のうちに走る。わなわなと指先がふるえているのがこの人の怒りをあらわしていた。
新九郎は平気だった。むしろ、怒らせることで、その頭巾のうちを知ろうとしているようであった。
「新九郎」と、由比が口をはさんだ。「有難くお受けしろ」
「いやだな」
「なに！」
「いやだといった、乞食ではないからな。名も知らぬやつの酒など、飲めるか」
「無礼であろう。一介の牢人者がほざくことか、この御方は……」
と、洩らしそうになったのを、その人は、扇子をあげて止めた。
「知りたいか、わしの名を」
「知りたいのか、わしの名を」
その人は重ねて言った。
頭巾のうちで、声はくぐもっている。年齢の見当はつかない。が、若くはない。三十からせいぜい四十半ばであろう。
「知りたくもないが」と、するりと、新九郎は矛先をかわして、「そちらにおれの名が知られていて、こちらが知らないというのは、どうも不公平でな」
「……」

「それに、その面もだ」
「なに?!」
「頭巾をかぶって、人に逢うては、そもそも非礼ではないか」
「黙れ！」
無言でいた小具足の男が、がっと刀をつかんで喚いた。
「うぬのほうから飛び込んでまいったのだぞ」
「そうだ、他人の住居へ入ったならば、きまりにしたがえ」
と、もう一人の奴も語尾につづいて叫んだ。
「住居?」と、わざと大仰に新九郎はまわりを見まわして、
「これが人間の住居か」
「……」
「駿河では、かようなところに、人が住むのか」
「ええい、へらず口を叩きおる」
刀の柄に手をかけた右側の男を直綴の人は、扇子で圧えて、
「よい、言わせておけ」
「は」
命令には柔順なのである。
その人がかなりな身分であるらしいことがわかる。
「飲みたくないならば、飲ませるな、酒が勿体ない」
と、おのれの盃をぐいとさしだした。
しかたなく、小菊が注いだ。酒を飲もうとすれば、いやでも、頭巾を下半面剃がねばならない。そうすれば、顔が見える。新九郎は期待したが、その人は、盃が満たされると、口へ運ぼうとはせず、下へ置いた。
中々に用心深いのである。
「新九郎とやら、酒が嫌いならばこれなら、どうだ」
傍の塗営から、袋をつかみ出して、ぽんと投げた。
意外に重く、それは、干草の中にどすっと落ちた。
新九郎は拾いあげて、
「何だこれは」
「見ればわかる」蔑んだような声である。
新九郎の掌の上で、それは小さくおどった。金襴の小袋である。口は紫の紐で結ばれている。
(砂金だな……)
と、察したが、新九郎は、わざと知らぬ顔を装って、
「くれるというのか、これを」
「場合によっては、な」
「はっきりと申せ、中は何が入っている」
と、ますますそらとぼけた。
「ふふふふ、あけてみろ」
「よいのか」
袋のくちをあけた。わざと乱暴にあけたのだ。ひっくりかえした。さーっと、砂金がこぼれてしまった。

キラッと、砂金が光った。わざとぶち撒けたのだ。
魚油の灯の明りをうけて、砂金は、異様に輝き、干草の上へ落ちた。
「あ、こりゃなんと！」
いかに無骨な手つきとはいえ、口紐を解くのにことかいて、ひっくりかえすとは。
砂金である。あいにくと下は床板ではない。土を叩いて干草と藁を敷いてある。そこへ砂金をぶち撒いたのだ。あっと、由比が思わず、手を出したくらいだ。
新九郎はにやりとした。
「ほう、これは砂金ではないか」あらためて驚いたふりをして、「これほどの砂金、大したものだ、おれにもくれるというのか」
「そうじゃ、上手に掬え、勿体ないぞ」
「さて、どうしたものか」
「なに！」
「いや、おれは、かようなもの、まだ貰うとは言うていない」
「さ、砂金を！」
「金でも銀でもだ」
新九郎は、干草の上の砂金を、まるで、きたないものでも払いのけるように、ざらっと崩した。
「あ、あっ」
また由比が、咽喉をしめられるような声をあげた。豪放らしく見せているが、根は小心なのだ。由比ほどではなかったが、頭巾の三人も、同じく驚いた。
新九郎の無欲ぶりが意表をついたのである。
「金銀は人間を姑息にする」また、ざらりと撫でた。「どうもいかんな、人を裏切り、権勢をもとめ、非情になるのは、これすべて金銀のためだ」
掌が砂金を撫でるたびに、干草の間に落ちてゆく。
まるで、どぶ泥の中に沈んでゆくのを見るような気持で、由比は手を出したりひっこめたりしている。
「さて、砂金のことなぞどうでもよいが」と、新九郎は、充分に驚かした上で、正面の男を見つめた。「その頭巾は、何やら、ムサ苦しいな、外して頂けぬかな」
「無礼」
と、また右側の男が吼えた。
「なんのかのと、おかしなことばかり吐かしおる」
自分たちの思うように新九郎が動かないのが、いまいましくてならないのだろう。
正面の男は、左右の者に何やら囁いて、頷いた。それから立ち上った。もう新九郎と話をするのは馬鹿々々しいといわんばかりの態度で一瞥もくれなかった。
干草のせいかとも、最初は思ったが、歩いてゆく姿が、少しびっこをひいている。足が痛いのであろうか、そのび

っこを隠すためか、ぐんと胸を張って、尊大な態度であった。
この男が梯子を上ってしまうまで、小具足の者たちは、新九郎を牽制するような視線をむけていたのである。
異様な雰囲気だった。
小具足の侍たちは、時を計っていた。その時間とは、あの直綴の武士が川を渡ってどの方向かに姿を消してしまうまでのことであったろう。
「新九郎」と、一人が言った。「話がある」
「……」
「上へ、あがってくれ」
「上へ？　なぜだ、話なら、ここでするがいい」
ちらっと焦立ったように、なかまと目を見合わして、
「姫の耳には入れたくないことだ」
「ふうむ、そういう話なら、おれも耳をけがしたくないな」
新九郎の頑さに手を焼いたようである。もう一人の方が折れて出た。
「おぬしにとっても、悪い話ではないのだ。どうも、由比のやつが、口の聞きようも知らぬゆえ、不快であったろうが」
と、これは下手に出てきた。強い相手には強く反撥する。そういう性質だと見ぬいたのだろう。
「由比もそうだが、おぬしらもだな」と、新九郎は歯に衣着せずに、平然と言った。「どうにも気に食わぬ。第一、頭巾をしたままで、ものを言うとは何事だ。名乗りもせぬ」
「それさ、おぬしの納得いくまで打ち明ける。来てくれ」
たしか由比と小菊がひそかに逢っての会話では、新九郎を帯同することには言及していなかったはずである。
小菊が寿々女を連れだすための、新九郎はいわば用心棒にさせられていたのだ。
むろん、それと知って、新九郎は乗ったわけなのだが、裏をかいたつもりで、向うが一枚上手だったのか。新九郎の腕を期待しているような様子だったのである。
小菊がすがるような眼をむけたので、新九郎は、とにかく上にあがることにした。
あとに寿々女と小菊が残った。
新九郎があがってくると、由比と二人の男は、とり囲むようにして、どっかりと坐った。
あの見張りの老婆は、さっきと同じところに、置き物のように坐っている。
「新九郎、酒も金もいらぬというが、変ったやつだな」
由比が、打ちとけたような狎れ狎れしい口吻で言った。
まるで、いままで、いさかいしたのは、兄弟喧嘩のようなものだとでも言いたげな口吻である。

（小鹿氏）の子の範満が地位を狙っている。
義忠の子の竜王丸はまだ幼いし、万一義忠の身に何か起れば今川家は範満が継ぐかもしれない。虎視眈々と今川の権勢を掌握せんとして狙っている。
この寿々女の亡父は、範満の伯父にあたる範慶であることも前に述べたが、この複雑な家系の中で寿々女は両方から、道具にされているのだ。
「春忠さまは、今川の社稷を憂えておられる」と、平内は沈痛な顔になって言った。「御自身には、何の野心もない。なぜならば、御当代の末弟と申しても、衆に認められない出自であるからじゃ」
範忠が、鷹狩に出たとき、農家の娘に生せた子であるという。
「かえって、その自由なお立場ゆえに、思いきったことが出来る、というわけじゃ」
「……」
「御当代が雅量がないことが、一つ。小鹿一党が疑心暗鬼にかられていることが一つ、新五郎範満どのが野心を持ちなされていることが一つ……以上、三つの要因が、御当家を揺すぶっている」
おぼろげには、わかっていたことである。
今川家の内部が揺れていて、他国のうかがうところとなっているのも、そうした勢力争いのせいだ。ただ、それほど表面化していないのだが、いつでも火を噴くだけの素地が出来ている。
「――これでは今川家は、近いうちにほろびる、ほろびさせてはならぬ。それゆえに、春忠さまは、御苦慮なされているというしだいじゃ」
「なるほどな、わかった。ところでそれを一体、どうやって、収拾しようというのだ」
「さ、それゆえ、寿々女どのが、大事になる」
三介はぺろりと唇を舐めて、話をつづけた。
「まず、寿々女どのを迎えた範慶どのが一党な、これが被害意識が強すぎる……」
小菊の話もそこにあった。
泉ヶ谷の暗い屋敷である。
「したがって、寿々女どのを連れ出したと知れば、大いに案じるであろう」
「それはいうまでもないこと」
「それだけ弱身になる」
「……」
「ゆえに、此方の申し条は、聞き入れるというわけじゃ」
「つまり、おどすわけか」
「一方、御当代さまの方も、寿々女を曳馬の城へ質子にやりなされた、で、質子が逃げたとなると、遠州侍との間がうまくいかなくなる」
「……」
「これも、われらの申し条をのむというしだいじゃ」
巧妙な方法である。それだけではなかった。
範満の方へも、策をめぐらしている。
「範満どのは、御当代に対抗するには小鹿一党の力を結集せねばならぬ。されば、範慶のわすれ形見である寿々女どのをおさえた上での、この方からの条件提示を、いやでものむ、ということになる」
「――三者の手綱を、春忠どのが一手に握ることが出来るというわけだな」
「その通り」
三介は、得意そうに唇を舐めた。
「だがな、新九郎、曲解すまいぞ、これもひとえに今川の社稷のためじゃ」と、平内が念をおした。「かほどの大事を、おぬしに打ち明けたのじゃ、その心映えのほどはわかってくれたであろう、の」
「わかった」と、新九郎は頷いて、「ただし、いまの話に、嘘がなければ、だ」
「そ、それは……」
「いうまでもないこと」三介と平内は、せきこんで言った。
「嘘ではない」
「ならばよい、力を貸しもしよう」
「それじゃ、それを待っていた」

「一介の牢人者のおれでできることなら、だ」
「いや、おぬしでなければ、できぬことが多い」
「ははは、世辞を申しても駄目だぞ、おれは左様な甘口では動かされぬ」新九郎は、もう一度、念をおしている。「いいか、いまの話に、毛一筋、嘘があったら、おれは容赦せぬ」
「……」
「うぬら三人、いや四人だ、首が胴についていないことを覚悟しておけ」

今川家に乗り込むことは、すでに伊勢を発足するときからの計画であった。新九郎の脳裡には、複雑な大名家のどろどろした権勢欲の渦の中に、花が咲いたような一人の女人が描かれている。充分に熟れた肉体を持った女性であった。

東海の覇者今川の名は天下に聞えている。そこに乗り込むことで、大いに志をのべるのは乱世の男として、やり甲斐のある事であった。伊勢新九郎という漢を容れるには、小さく狭い場所ではどうにもならないのだ。かれには、大いなる自負がある。

（おれほどの漢を……世間はこの新九郎の価値を知らぬ）

器量の大きさは、広い場所、広い世界を必要とした。小物は場所が狭いほど、小才を発揮できるが、大物の志は、それにふさわしい場所でなければ、効果はうすいのだ。新九郎はおのれの半生をふりかえって、実感する。かれの年齢は、おのれを客観視し、評価するのに不足ではなかった。大器晩成という語はおのれのためにある、と思った。

有為転変の半生であり、挫折と失望のくりかえしであったが、その苦悩の年月を、逆手にとることをおぼえた。年輪とはそういうものであろう。

（明日から……おれの花が開く）

新九郎は駿河の空を睨んで、心に呟いた。

（咲かして見せる！　そのために、おれには放浪の歳月があったのだ）

川を渡れば駿府である。そこにかれを羽搏かせる広い舞台が待っている。そしてまた、忘れ難い女体があった。

北條早雲　一

昭和五十一年八月二十日　第一刷

著者　早乙女貢
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

本文印刷　理想社印刷
オフセット　共同印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Mitsugu Saotome 1976　Printed in Japan

早乙女貢

霧の海

著者初の長編ミステリ・ロマン

秋の吉備路で、クイーン・エリザベス2号の船上で、雪のシエラ・ネバダ山脈を望むアメリカの大地で、人妻の愛とそれをめぐる殺人事件は、華麗に、そして隠微に展開する……

九九〇円

文藝春秋刊